



公益財団法人 日本教育公務員弘済会
埼玉支部
since 1956

令和7年度 教育研究助成事業
(学校対象)

研究・実践成果報告集14

- 1 学校課題研究助成
- 2 環境教育支援
- 3 国際理解教育支援
- 4 キャリア教育支援
- 5 防災教育支援
- 6 ICT 活用教育支援

2026年(令和8年)3月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部

令和7年度 教育研究助成事業
(学校対象)

研究・実践成果報告集14

- 1 学校課題研究助成
- 2 環境教育支援
- 3 国際理解教育支援
- 4 キャリア教育支援
- 5 防災教育支援
- 6 ICT 活用教育支援

2026年(令和8年)3月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部



各学校の創造的・発展的な 教育研究を応援する新たな 「実践研究助成」事業の創設

公益財団法人 日本教育公務員弘済会 埼玉支部

支部長 細田 宏

現在、中央教育審議会には、次期学習指導要領の改訂に向けて「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」の諮問がされています。主な審議事項は次の4点です。

- ①質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方
- ②多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方
- ③各教科等やその目標・内容の在り方
- ④教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合うことを含む、学習指導要領の趣旨の着実な実現のための方策

複雑で予測が困難な時代の中でも子どもたち一人ひとりが変化に主体的に向き合い、多様な他者と協働しながらよりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるための力の育成が求められていることから、具体的には、デジタル技術の活用、授業時間の短縮などの工夫や子どもたちの理解度に応じた授業の実現などが想定されています。

このような中、当支部が各学校の教育研究や実践を支援しています教育研究助成事業においては、今年度も「学校課題研究助成」事業を中心に、多くの学校から申請をいただきました。本報告集には、この「学校課題研究助成」をはじめ、「環境教育」、「国際理解教育」、「キャリア教育」、「防災教育」及び「ICT活用教育」の6つの分野における優れた研究・実践の成果を、小・中・高・特別支援学校・幼稚園すべての学校種から73編を掲載いたしました。これらは学校ごとに研究の主題、ねらい、取組内容とその成果、今後の課題・まとめ等で構成されていますので、各学校が同様の研究に取り組む際に、他校の実践を基にして、さらに進んだ段階から教育実践に入り易くできるものと考えます。

さて、今年9月14日（月）、当支部は創立70周年を迎えます。創立70周年をお祝いする事業や取組について、その理念・コンセプトを「会員が喜ぶ」と決めました。そして、実施するすべての事業等を「会員が喜ぶ」こと、「笑顔になる」ことを指標として、「これまでの70年に感謝し、今を喜び、未来に繋げる」ことを目指してまいります。

創立70周年を契機として、来年度から従前の教育研究助成事業の6つの分野を一本化します。テーマの設定を自由にすることで、各学校がこれまでの事業の枠にとらわれず、創造的・発展的な教育研究を行えるよう助成の在り方を改善し、新たに「実践研究助成」事業とします。助成金額は、1校当たり20万円以内として、これまで以上に各学校における実践研究を支援してまいります。

結びに、本報告集が既刊の「報告集1～13」とともに、各学校で一層活用されより多くの教育実践に役立つことを願うとともに、記念すべき創立70周年を皆さんとともにお祝いする中で、「最終受益者は子どもたち」の理念のもと、本県教育の振興に寄与することを目的として、今後とも様々な事業を展開してまいります。

令和7年度 教育研究助成事業 (学校対象)

助成学校数等一覧

助 成 分 野	学 校 種 別	校 数
1. 学校課題研究助成	小学校	676
	中学校	326
	高等学校・特別支援学校・幼稚園等	60
	計	1062
2. 環境教育支援	小学校	325
	中学校	117
	高等学校・特別支援学校・幼稚園	17
	計	459
3. 国際理解教育支援	小学校	39
	中学校	14
	高等学校・特別支援学校・幼稚園	19
	計	72
4. キャリア教育支援	小学校	37
	中学校	65
	高等学校・特別支援学校等	21
	計	123
5. 防災教育支援	小学校	91
	中学校	64
	高等学校・特別支援学校	5
	計	160
6. ICT 活用教育支援	小学校	201
	中学校	109
	高等学校・特別支援学校・幼稚園	22
	計	332
合 計		2,208

目 次

各学校の創造的・発展的な教育研究を応援する新たな「実践研究助成」事業の創設

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部 支部長 細 田 宏……………	1
令和7年度 教育研究助成事業（学校対象）助成学校数等一覧……………	2
1 学校課題研究助成……………	5
2 環境教育支援……………	61
3 国際理解教育支援……………	97
4 キャリア教育支援……………	111
5 防災教育支援……………	125
6 ICT活用教育支援 ……………	141
令和7年度 教育研究助成事業（学校対象）募集要項……………	163

後記



公益財団法人 日本教育公務員弘済会
埼玉支部
since 1956

◆ロゴマークに込められたもの

当支部のロゴマークには、公益財団法人日本教育公務員弘済会の使命と、教育現場を支え続ける決意が込められています。令和8(2026)年度に、創立70周年を迎える私たちは、このマークのもと本県教育の未来を支え、豊かな社会を次世代へと繋いでまいります。

◆ロゴマークの“K”と“リング”が表すもの

“K”は、「弘済会」の頭文字であるとともに、私たちが追求する「公益性」と「共済性」、そして未来を担う「子どもたち」への支援を「継承」していくという姿勢を象徴しています。

“K”を包み込むリングは、「最終受益者は子どもたち」として本県教育に携わる人々が手と手を結びあう「助け合いの輪」を表現しています。

◆原案制作 埼玉県立新座総合技術高等学校 選択科目「デザイン思考」令和7年度受講生徒

1 学校課題研究助成

小学校

- 1 9年間を見通した小・中一貫カリキュラムの研究
～試行錯誤しながら、粘り強く学習に取り組む児童の育成～……………さいたま市立浦和大里小学校……6
- 2 『個別最適な学び』と『協働的な学び』を実現する研修体制の構築
～自ら学び、考え、主体性をもって行動できる児童・教師の育成～……………さいたま市立鈴谷小学校……8
- 3 基礎学力向上を目指した学習指導の充実
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～……………さいたま市立東岩槻小学校……10
- 4 MEXCBT を効果的に活用した教育課程の検証と国語科指導の工夫改善 ……………和光市立第四小学校……12
- 5 小中一貫教育（学校4・3・2制）の研究
～外国語指導・生徒指導を中心とした小・中学校の滑らかな接続～……………北本市立南小学校……14
- 6 学習指導と生徒指導を一体化させた授業づくり～福原小中授業スタンダードを活かして～……………川越市立福原小学校……16
- 7 「学び合い」の実践から生起する課題意識を大切にされた教師の力量形成 ……………飯能市立美杉台小学校……18
- 8 主体的に学び、成長につながる学校づくり……………坂戸市立片柳小学校……20
- 9 「主体的・対話的で深い学び」をめざす授業展開の工夫
～対話力を向上させ、共に学び合う授業づくりをめざして～……………秩父市立花の木小学校……22
- 10 豊かな関わりを通して、互いに育ち合う麻っ子の育成
～多角的な児童理解に基づくオーセンティックな学びの充実～……………熊谷市立大麻生小学校……24
- 11 SDGs ×総合的な学習の時間 学びの改革
～成田星宮小 ESD から 持続可能な 未来を拓く～ ……………熊谷市立成田星宮小学校……26
- 12 学力・体力の向上と豊かな心を育成する小中一貫教育の推進
～個別最適・協働的な学びを通じた、わかる喜びを共感できる授業を通して～……………八潮市立八幡小学校……28
- 13 幸せ創りを目指して、社会（世界）を変える力の育成
～教育課程特例校 新教科「栢間学」を通して～……………久喜市立栢間小学校……30
- 14 自ら考え、新しい見方・考え方を発見し、「自分でできる！」を実感できる児童の育成
～仲間と伝え合う中で、考えを深める授業の創造～……………宮代町立百間小学校……32

中学校

- 1 3G マインドセットを育む探究学習における指導方法の研究
～指導と学習と評価の一体化の観点から～……………さいたま市立大宮国際中等教育学校（前期課程）……34
- 2 不登校、いじめの未然防止、支援率・支援継続率100%を目指す学級・学年経営
～学力向上と学習環境の充実～……………川口市立西中学校……36
- 3 「信頼」と「和」に基づき、自らを考え深め、より良く学び合う子どもの育成
～メンタルヘルス研究推進校としての実践を活かして～……………草加市立花栗中学校……38
- 4 主体的・対話的で深い学びを推進し、生徒の未来につながる力の育成
～ICT 端末の効果的な活用と地域連携を軸とした教育活動の構築～ ……………上尾市立上尾中学校……40
- 5 切れ目のない小中一貫教育の推進～9年間を見据えた生徒指導の深化を目指して～ part.3 ……………川越市立芳野中学校……42
- 6 夢に向かい、互いを尊重する人権教育の推進～自他と地域のウェルビーイング向上を目指して～……………寄居町立寄居中学校……44
- 7 生徒と共に授業を創り、主体的に学ぶ姿勢を育成するための手立ての追求
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指す授業の創造～……………杉戸町立杉戸南中学校……46
- 8 生徒の人間関係能力を育て、保護者が孤立化しないための学校づくり
～不登校等の未然防止のための心の居場所づくり～……………埼玉県立伊奈学園中学校……48

高等学校

- 1 校内居場所づくりとしての「見晴らしカフェ」の取組
～地域 NPO の方々と交流しながら、ホッとできる居場所を校内に少しでも多く～……………埼玉県立ふじみ野高等学校……50
- 2 ファイナルイヤー「人数が少ないからこそできる教育活動へ挑戦」
～地域の教育力を動員した少人数生徒たちとの取組～……………埼玉県立皆野高等学校……52
- 3 農業の6次産業化～地域に愛着を持った農業経営～……………埼玉県立児玉高等学校……54

特別支援学校

- 1 特別支援学校（小学部・中学部）における性教育の理解と実践
～包括的性教育と「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」に基づいて～……………埼玉県立所沢特別支援学校……56

幼稚園

- 1 読書活動×SDGs（だれも取り残さない）～楽しむ・知る・想像する・やってみる～……………鳩山町立鳩山幼稚園……58

9年間を見通した小・中一貫カリキュラムの研究 ～試行錯誤しながら、粘り強く学習に取り組む児童の育成～

さいたま市立浦和大里小学校

校長 中野 緑

1 はじめに

本校では、昨年度より「学びの連続性を生かした真の学力の育成」の研究領域で、内谷中学校、沼影小学校の2校と連携を図りながら研修を進めているところである。施設分離型の義務教育学校となることを見据え、義務教育9年間を見通した、発達段階に応じた指導内容等を整理したカリキュラムについて3校共同で研究を進めている。

2 研究主題と身に付けさせたい力

将来の予測が困難で変化の激しい社会を難しい未来を生きる子どもたちに、主体的に関わり合い、その過程を通して一人一人が自らの可能性を最大限発揮し、よりよい社会を自ら作り出す力をはぐくむことが大切である。そこで、本校の研究主題を「内谷中学校区の9年間を見通した小・中一貫カリキュラムの研究～試行錯誤しながら、粘り強く学習に取り組む児童の育成～」とした。各教科の学習において、自己決定する機会、試行錯誤する場面を意図的に取り入れ、自分の考えを行動に移し検証する実践を積み重ねることで新しい時代に求められる資質・能力を確実に育成しようとするものである。

3 教師が主体的に学ぶ研修体制

研究を進めるにあたり、児童だけでなく、教師も「自分で決めたことを試行錯誤しながら主体的に」研修に取り組む体制を作るために、教科を1つ選び、教科サークル（国語、社会、算数、理科、生活、体育）をつくって協働的に教材研究を進めながら授業研究を行っている。

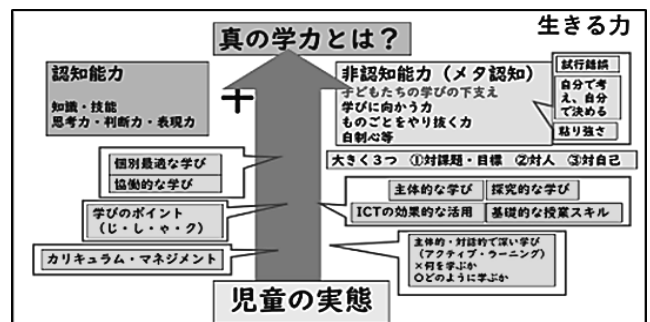
4 令和6年度の取組

最初に「真の学力」について、各サークルで話し合い、教員全体で考えを共有し、日頃から学校生活の様々な場面で、「認知能力」だけでなく、「非認知能力」を高めていくことの必要性を共有した。

その後、各教員が公開授業や研究授業を実施した。理科サークルでは、埼玉大学教育学部の小倉康教授にご指導いただいた。研究授業における児童の姿から授

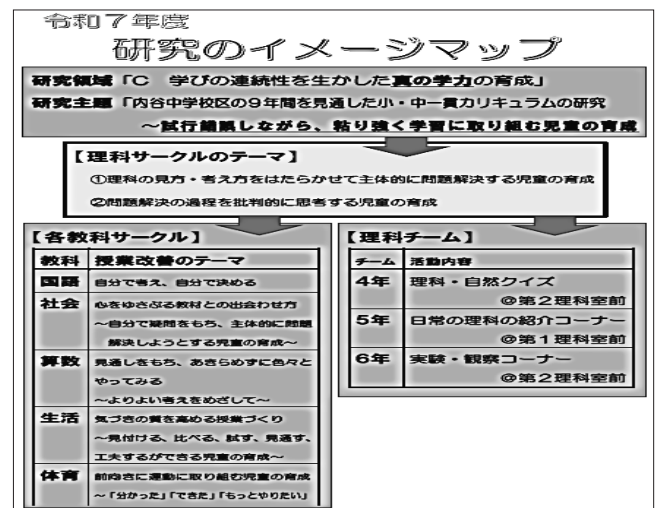
業改善の視点を示唆していただいたり、「理科における探究の過程と『試行錯誤』的試行（科学的に思いついたことを試してみるメッシング・アバウトの試行的活動と仮説検証を科学的に繰り返す論理的活動）の大切さ」についてご講演いただいたりした。

1年間の研究のまとめとして、各教科サークルの授業実践や授業改善の視点などを資料にまとめ、プレゼン大会を行った。各教科の特性だけでなく、他教科との関わりや共通点に気付くことができた。



5 令和7年度の取組

研究主題「試行錯誤しながら、粘り強く学習に取り組む児童の育成」を目指し、つけたい力を明確にしたカリマネマップを作成した。また、理科サークルの2つのテーマ「①理科の見方・考え方ははたらかせて主体的に問題解決する児童の育成」「②問題解決の過程を批判的に思考する児童の育成」と関連付けて、各教科サークルのテーマを設定した。各教員が年間3本の公開授業を行い、授業実践をもとに話し合うことを通して、つけたい力をつける授業づくりを推進している。



6 研究内容（具体的な取組）

授業実践

4年生 単元名：物のあたたり方

5年生 単元名：物のとけ方

6年生 単元名：水溶液の性質とはたらき

(1) 理科の見方・考え方をはたらかせて主体的に問題解決する児童の育成

＜4年生＞

理科の考え方である比較、関係付けを児童が働かせやすいように「閉じ込めた空気と水」の単元から空気・水・金属を比べてわかったことを掲示した。また、個々の児童が問題意識をもち、主体的に取り組むことができるように、問題を見いだす前に児童が思っている疑問を出し、議論する時間を設けることで、何を調べるのかを明確にした。



＜5年生＞

食塩の溶け方についてくわしく観察することを通して、物の溶け方について問題を見いだした。既習内容や生活経験を関係付けて考えている児童を価値付け、主体的に問題解決に取り組んだ。食塩とミョウバンを比べながら物の溶け方について問題解決をすることで食塩とミョウバンの共通点と差異点に気が付くことができた。また、単元を通して質的・実体的な見方ができるよう、現象を説明する際に粒子をイメージした図や絵を用いている児童を価値付けて全体に共有した。



＜6年生＞

「質的」な見方をはたらかせて活動できるようにするために導入で名称をふせた水溶液を提示した。考え方としては、多面的に考えることを大切にするため、既習事項を想起させる対話を教師と児童から児童間へと移行した。その積み重ねが問題解決を通して、導き出した答えを様々な面から見直し、自然の事物・現象そのものを捉え直す姿へと変容した。

(2) 問題解決の過程を批判的に思考する児童の育成

＜4年生＞

問題を見いだす前に、議論をする時間を作ることで、お互いの考えに触れ、自分の考えは正しいのか疑ったり、相手の考えの分からないところを聞いてみたりすることができるようにした。また、実験方法や実験結果を全員で共有することで本当に予想を確かめられる

のかをもう一度確認できるようにした。こうした場の設定により、児童の批判的に考える力が育つと考えた。

＜5年生＞

児童が考えた実験を安全に配慮しつつ不完全な状態でも一度自分でやってみることで、再現性・実証性・客観性のある実験をする必要性を実感させた。同一の問題から様々な実験方法を考えて比べるなど、より科学的な実験になるように検討する時間を設定することで批判的に思考しながら問題解決を行うことができた。

＜6年生＞

学習中の対話を鵜呑みにせず、自分で確かめることをやめない、粘り強い考えや自分で決める力を醸成した。

どの単元でも、自分の予想を信じて、グループ、クラスで対話する時間を設けた。これを繰り返すことで思考を整理する姿を見取り価値付けた。



7 成果と課題（○成果 ●課題）

＜4年生＞

○一人一人が目的意識をもって自分たちで問題解決することができた。

●問題を見出す前に、議論をする時間を新たに設けたため、1時間の授業の中でどのように時間配分を行うのかを考えることが大切。

＜5年生＞

○比較することで結果を正しく解釈し妥当な考察を書くことができた。

●実験技能の習熟を図り、より正確な結果を得る必要がある。児童同士の対話の中で批判的思考をはたらかせることを習慣化させたい。

＜6年生＞

○実験方法の際に、自分が確かめたい実験を選択してグループ編成を行い、活動ができるようになった。

●児童主体のように見えて教師との対話によって引張られており、児童一人ひとりが問題解決したい雰囲気になっていなかったように感じる。

8 おわりに

新しい時代に求められる資質・能力を育成するためには、9年間を見通して、丹念に指導していくことが大切である。今年度は、「理科」を中心としたカリキュラムマネジメントの視点をもって研究を深め、学ばせしさを味わう授業と学び方の指導で、児童に『真の学力』を付けていく。

『個別最適な学び』と『協働的な学び』を実現する研修体制の構築 ～自ら学び、考え、主体性をもって行動できる児童・教師の育成～

さいたま市立鈴谷小学校

校長 西谷 健 児

1 はじめに

本校は、JR埼京線「南与野」駅前に立地しており、主に住宅地が広がる旧与野地域に位置している。1971年(昭和46年)に開校し、地域に根ざした公立小学校としての歴史を持ち、今年度は開校55周年を迎え記念式典などを催している。現在は550名程の児童が通い、地域や保護者との連携を重視した教育活動が行われている。

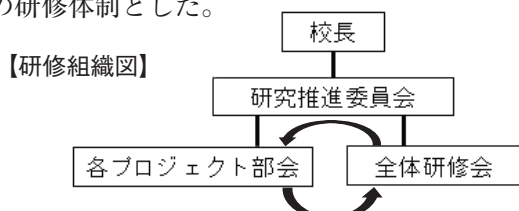
本校の学校教育目標は「かしこく たくましく 心豊かな 児童の育成」、目指す学校像は「子ども、教職員一人ひとりが自ら輝く学校」である。知・徳・体の調和を重んじ、子どもたちが自主性と協調性を育みながら、心身ともに健やかに成長することを目指している。

2 研究主題の設定

現代社会が急激に変化する中で、児童一人ひとりが自らの良さや可能性を理解し、持続可能な社会の担い手として主体的に行動する力を育むことが求められている。このような課題に対応するためには、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立を図る教育の在り方が重要であり、その実現に向けたカリキュラム・マネジメントの工夫が必要であると考え、また、それを支える教員自身も、「個別最適な研修」と「協働的な研修」を通じて資質・能力を高め、教育実践の質を向上させていくことが求められていると考え、本研究テーマを設定した。

3 研修体制の構築

本研究テーマは今年度で2年目を迎える。1年目には大幅な組織改編を行い、従来の部会、指導案検討型から、研究推進委員会で全体の方向性を確認した後は「全体研修会」と「各プロジェクト部会」を往還する形での研修体制とした。



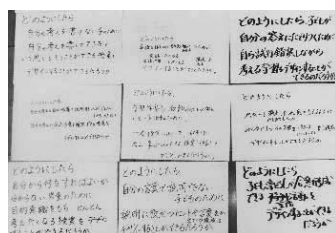
4 具体的な取組

(1) 自らの立ち位置を明確にするための

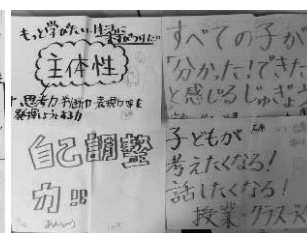
デザイン思考による課題設定

様々な経験年数、ライフスタイル、専科、興味関心をもつ教師集団の学びを形作るために、「学校課題研修のテーマ」ありきではなく、テーマを入口とした自身の課題意識を表現することを研修の第一歩とした。その際、デザイン思考による「共感」「課題定義」の手法を活用し、教師一人ひとりの課題意識を共有し、その後の各プロジェクト部会のグループ編成に生かした。

【1年目の個々の課題】



【2年目のグループの課題】



(2) 「個別最適な学び」を実現するための

「各プロジェクト部会」

従来の研修では、年間計画で定められた「研修の時間」を中心に進められているが、その運営はパート長による計画実行や研究授業者の指導案作成などの大きな負担に支えられていた。また、「1人1授業」などの取り組みが形式的に消化されがちで、タイムリーなフィードバックも得にくい状況にあり、資料作成が時間外業務を前提としている点も課題となっていた。

こうした従来型の研修観から、「研修の時間」＝「一人ひとりの経験や学びに即した授業実践の磨き合いの場」に変換するために、自身の課題意識をベースとした少人数のグループを組織し、より自身の実践に即したフィードバックを受けやすい体制とした。

グループは学年、教科、テーマなど何かしらの授業を語る共通点をもつもの同士、できる限り多様なメンバーで構成できるよう配慮した。これまで多人数の中でなかなか意見を発表しきれなかった人も少人数

のグループで研修に取り組むことで、普段、授業について語り合うことのないメンバー同士、授業実践について語り合うことができています。

(3) 「協働的な学び」を実現するための

「全体研修会」

児童に向けた授業と同様、学びを成立させるためには「協働的な学び」の使い方が重要だと考えている。この「全体研修会」では、研究テーマのもととなっている重要政策提言や学校の教育目標を実現するためのグランドデザインを読み合わせたり、各自の実践を共有しフィードバックを伝え合ったりするなどの実践を月1回程度のペースで実施している。

またただ一緒にいるだけで全員がなかなか発言できないよう空気や進め方にならないよう、「これを言っているのか悪いのか」といった雰囲気を払しょくするため、心理的安全性を担保できるようにアイスブレイクやワークショップ形式をいかした研修を進めている。

【ワークショップ型研修の光景】



(4) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を

支える ICT の活用

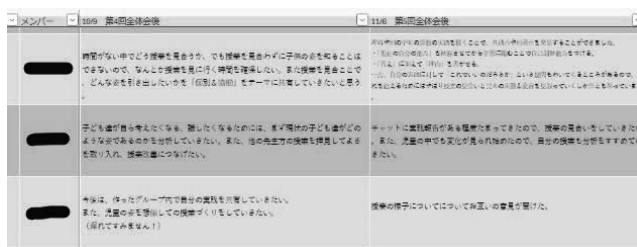
上記の研修を実施する際に重要となるのは、同期・非同期で学びをつなげる仕組みとなる。本校では1年目には Microsoft Teams の「研修チャンネル」及び「共同編集機能によるエクセルへの振り返り入力」を軸に、2年目には Microsoft OneNote 及び1年目と同様の「エクセル」を情報のハブとして研修に関する情報を発信、共有している。

特に2年目から活用している OneNote はセクション、ページという階層で情報を整理しつつ増やすことができるので、見返す上でも大変便利なものとなっている。

【OneNote による研修情報の一元化】



【エクセルの共同編集機能による研修の振り返りの共有】



5 課題と成果

本研究を2年間進めていく中で、現在直面している課題が大きく2つある。1つ目は、研修の大部分を個人に委ねることに関わるもので、研修が個人のモチベーションに大きく左右されることと自分の研修の方向性に自信がもてないというものである。2つ目は、1つ目ともかわり、個人に委ねる部分をフォローし合うためには互いに授業を見合い、それぞれの授業を他者の目で価値づけていくことが大事だと考えているが、なかなか授業を見合う機会を確保することができていない。

成果としては、研修に対するやらされ感や多忙感は大きく低減し、「自分がしたいことをする研修」に教師の意識が変わりつつあるという点が挙げられる。また、ミニ研修として各自が興味をもった内容をテーマにした自発的な学びが少しずつ生まれつつあることも成果として挙げたい。

6 今後に向けて

前項で挙げた課題に対応すべく、今後は授業の一部を見合う「プチ授業参観」を計画している。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実は一日にしてはならず、継続的に学びを積み重ねることで徐々に歯車が回り出すものと考えます。教職員が力を合わせ、より本校に合う形での持続可能な研修を築き、その成果を児童に還元できるよう今後も邁進していきたい。

基礎学力向上を目指した学習指導の充実

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～

さいたま市立東岩槻小学校

校長 川 添 倫 義

1、はじめに

東岩槻小学校は、東武鉄道アーバンパークライン（野田線）東岩槻駅周辺の開発に伴い、昭和46年4月に開校した。今年度、創立55周年を迎える歴史と伝統ある学校である。

令和7年度は、入学の喜びに満ち溢れた新1年生、進級し希望に燃えている新2～6年生、合わせて145名の子どもたちでスタートした。

今年度も引き続き、学校教育目標である「こどもたちのためにある、地域とともにある学校」を目指すとともに、研究主題である「基礎学力向上を目指した学習指導の充実」～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～の具現化に向けて、全教職員一丸となって取り組んでいる。

2、児童の実態について

本校の児童は、全国学力・学習状況調査や本市学習状況調査の結果、日頃の学習の様子から基礎学力の定着及び粘り強く学習に取り組む姿勢に課題が見られる。これらの課題を解決していくために、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組むことを研究主題として設定した。

3、研究の計画について

(1) 研究仮説について

「主体的な学び」(自律化^{*}・個別最適化^{*}された学び)に着目し、授業の改善・充実を図ることで、「対話的な学び」が促進され、児童の「深い学び」が充実し、基礎学力向上を実現することができるだろう。

「自律」：それ自体のうちに独立の目的・意義・価値を持つこと⇔他律（やらされている）

「個別最適」：1人1人に応じて、最適であること

(2) 研究の視点（領域・主題）の確認

【領域】

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的

な充実

【主題】

基礎学力向上を目指した学習指導の充実

(3) 研究主題について

《令和7年度の重点課題》との関連】

「基礎学力の向上」

- ・学習を調整して取り組む能力
- ・学習意欲
- ・粘り強さ

《令和7年度の重点課題》

「基礎学力の向上」基礎学力

学習を調整して取り組む能力、学習意欲、粘り強さ

「豊かなかかわりあいの充実」育みたい力

主体性、自己受容感の醸成、人間関係構築力

「自律して学ぶ力」を育む学習指導の充実

- ・学びのポイント「じ・し・ゃ・く」を意識した授業改善（ICTによる授業改善）
- ・主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善
- ・教育データの利活用
- ・個別最適な学びと協働的な学びの実現
- ・多様な学びの場の設定
- ・家庭と連携した基本的生活習慣
- ・家庭学習の習慣定着への取り組み

4、研究の内容・実施方法について

(1) 学校・家庭・地域が連携・協働した教育活動の推進

- ・東岩槻小・桜山中との「小・中一貫スタンダード」の継続実践を行う。
- ・「家庭学習カード」、「いきいき生活カード」の活用による家庭との連携を深める。
- ・コミュニティ・スクールを含めた地域総掛かりによる生活習慣の定着を図る。

(2) 教育データの利活用による授業改善

- ・市学習状況調査結果分析や全国学力・学習状況調

査結果分析、スクリーニングテストや授業に関するアンケートの結果分析、学びの指標に基づいた授業改善及び指導体制の改善に努める。

- ・教職員同士の参観による「授業づくりチェックシート」を活用した授業改善を行う。

(3) 基礎学力向上のための一人1台端末の効果的な活用を図る研修の推進

- ・教員の指導力向上のため、学力向上カウンセリング学校訪問や指導者招聘による講話・授業研究会実施などにより、各教科の授業の改善を図る。
- ・他校の授業研究の成果を有効活用し、教材準備等の時間削減を図ったり、校内の教職員同士で本研究に関連する内容に関して得意とすることを相互に教え合ったりする活動を通して、学校課題研修に働き方改革の視点を意識した授業改善項目を設ける。

(4) 主なスケジュール

4月・令和7年度研究計画書について

- ・アンケート（学びの指標）の実施について
- ・スクリーニングテストについて
- ・学力向上ポートフォリオについて
- ・タブレットの授業への活用についての研修（ホワイトボードの活用も含む）

6月・第1回小中合同研修会

- ・専門部会
授業研究部：スクリーニングテスト準備
ICT危機管理部：アンケート準備

7月・専門部会

- 授業研究部：スクリーニングテスト分析
ICT危機管理部：アンケート分析

8月・第2回小中合同研修会

9月・スクリーニングテスト分析結果

- ・アンケート分析結果共有
- ・全国学調の結果分析と共有

10月・管理職および教員相互授業参観に向けてのタブレットを活用した授業の準備と教材研究

12月・管理職および教員相互授業参観における授業実践の共有

1月・今年度の活動の振り返り（成果と課題）

2月・今年度の活動の成果と課題（全体共有）

- ・次年度の研修について

- ・市学調結果分析

3月・第3回小中合同研修会

- ・次年度の研修計画の共有

5、研究・実践活動の実際について

本研究では、基礎学力向上と「個別最適な学び」を実現するため、小・中一貫スタンダードを基軸に、学校・家庭・地域が連携した取り組みを推進した。「家庭学習カード」や「いきいき生活カード」を活用し、家庭との協力体制を強化した。また、コミュニティ・スクールとして地域全体で生活習慣の定着を図った。

授業改善では、学習状況調査やスクリーニングテスト、授業アンケートを活用し、データに基づいた指導方法の改善を行った。教職員間の相互参観や授業チェックシートを活用し、組織的かつ計画的に授業研究を進めた。さらに、一人一台端末の活用を促進し、ICTを活用した授業設計や業務効率化を図った。

6、取組の成果について

本取り組みにより、児童・生徒の学ぶ意欲や態度が向上し、家庭学習や生活習慣の定着が見られた。全国学力・学習状況調査やスクリーニングテストでは、一部学力向上も確認された。また、教職員間の協力体制が強化され、授業改善やICT活用への意識が高まったことが成果として挙げられる。業務効率化により教職員の負担軽減も進み、働き方改革の一環として効果を上げた。成果を測る指標として、学習状況調査や授業アンケート、「家庭学習カード」の記録を活用した。

7、今後の見通しと課題について

本年度の成果を踏まえ、更なる「深い学び」を浸透させていく上で、個別最適な学びの深化やICT活用の拡大を図る必要がある。そのためには、教材開発や教職員のスキル向上、家庭・地域との連携体制の持続可能性を高めることが課題である。次年度は、これらの課題を解消しつつ、他校との成功事例の共有や合同研修を通じて学校間の取り組みを拡大する計画である。基礎学力向上と働き方改革を両立させるモデルケースとして、さらなる発展が期待される。

MEXCBT を効果的に活用した教育課程の検証と 国語科指導の工夫改善

和光市立第四小学校

校長 渡 邊 丈 裕

1 はじめに

近年、全国及び埼玉県学力・学習状況調査の結果を活用した授業改善の取組が進む中で、CBT (Computer Based Testing: コンピュータを活用した学力調査) の導入と、その結果をもとにした児童の学力把握や学習支援の可能性が注目されている。MEXCBT は、文部科学省が提供する CBT システムを活用し、問題作成や学習支援に取り組むことができる仕組みであり、児童の学びをより個別・具体的に支援するツールとして期待されている。本市においても、調査の実施や結果の分析を通して、児童一人ひとりの学びの実態を的確に捉え、授業改善に活かす取組を各校で進めている。

2 研究主題について

本校では、令和6年度・令和7年度に、国立教育政策研究所教育課程実践検証協力校事業、和光市教育委員会の研究委嘱を受け、研究主題を「MEXCBT を効果的に活用した教育課程の検証と国語科指導の工夫改善」と設定し、学校課題研修として研究してきた。研究の視点としては「どのような CBT 問題を、授業の中でどのように位置付けると、主体的・対話的で深い学びが実現し、子どもの力が伸ばせるか」と掲げた。今までは CBT 問題を1単位時間の中の終末場面で活用することが多かったが、本校においては導入場面に位置付けていることが大きな特色である。この工夫によって、自らの学びの過程を自覚し、言葉に着目して試行錯誤し、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる児童の育成を図ってきた。

3 主な取り組み

- ① MEXCBT 問題の作成・開発
※作成・開発した問題は全国公開を原則とする。
- ② ①で作成した問題を活用した研究授業
- ③ MEXCBT 朝学習
- ④ 国立教育政策研究所作成の MEXCBT 問題の受検
(第6学年)



4 研究の構想

〈研究主題〉

MEXCBT を効果的に活用した教育課程の検証と国語科指導の工夫改善

〈目指す児童像〉

自らの学びの過程を自覚し、言葉に着目して試行錯誤し、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる児童

〈研究の視点〉

どのような CBT 問題を、授業の中でどのように位置付けると、主体的・対話的で深い学びが実現し、子どもの力が伸ばせるか

手立て①

正答から学び、誤答からも学びが広がる問題を作成する。

手立て②

導入で CBT 問題を解き、展開で対話的な学びを通してねらいに迫れるようにする。

手立て③

試行錯誤の場面を経て、自分の考えを形成できるようにする。

【MEXCBT 問題の位置付けと授業イメージ】

導入	本時の課題に迫るための MEXCBT 問題を解く。
展開	問題の中から、本時の課題につながる問いに焦点を当て、学び合いを通して深める。 MEXCBT 問題と自分自身の課題を結び付けて考え、自分の課題解決に生かす。(自分の考えを形成する)
終末	振り返りにより、自身の今日の学びを自覚し、自分の現在地を確認して次時への見通しを持つ。



1つの問いに焦点を当て、学び合いを通して深める様子



自分の考えを形成する様子

5 作成・開発した MEXCBT 問題

〈領域〉 書くこと

学年	主な学習過程	単元
3	構成の検討	わたしの町のよいところ
4	題材の設定	もしものときにそなえよう
	内容の検討	工芸品のみりよくを伝えよう
5	考えの形成、記述	あなたは、どう考える
6	考えの形成、記述	発見、日本文化のみりよく

6 具体的な取り組み

(1) 研究授業

I 令和6年度

第4学年「もしものときにそなえよう」

〈ねらい〉

相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選ぶ。

〈MEXCBT 問題の位置付けと意図〉

導入で MEXCBT を解く。一つの問いに焦点を当て、これから自分が行う学習活動のテーマについて考え、自分の考えの理由を明確にする。

対話を通して、自分の考えの理由を明確にする様子



第5学年「あなたは、どう考える」

〈ねらい〉

事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する。

〈MEXCBT 問題の位置付けと意図〉

導入で MEXCBT を解く。一つの問いに焦点を当て、反論に対する考えの書き方とその効果について考え、自分の意見文を見直す。

対話を通して、反論に対する自分の考えを見直す様子



II 令和7年度

第4学年「工芸品のみりよくを伝えよう」

〈ねらい〉

集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にする。

〈MEXCBT 問題の位置付けと意図〉

導入で MEXCBT を解く。二つの問いに焦点を当て、分類・整理の視点や伝えたいことを明確にする工夫について考え、自分が集めた情報を整理することによ

て、伝えたいことを明確にする。

MEXCBT 問題を解きながら、課題解決のポイントを考える様子



第6学年「発見、日本文化のみりよく」

〈ねらい〉

目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する。

〈MEXCBT 問題の位置付けと意図〉

導入で MEXCBT を解く。一つの問いに焦点を当て、伝えたいことが効果的に伝わる書き表し方の工夫について考え、その工夫を活用して自分の考えが伝わる文章を書く。

MEXCBT 問題から学んだことを基に、自分の課題解決に生かす様子



(2) MEXCBT 朝学習

〈ねらい〉 学習内容の定着と学力向上

〈対象学年〉 3年生～6年生(週2回 朝の10分間)

〈方法〉 児童の実態を踏まえ、研修推進委員会が問題を精選し児童に配信する。その中から児童が自分で問題を選んで取り組む、または、個に応じて担任が選んだ問題に取り組む。

MEXCBT 朝学習に取り組む様子



7 成果と課題 (○成果 ●課題)

○ MEXCBT の問題開発から行ったことにより、指導事項がより明確に意識され、児童の思考過程を具体的に想像しながら教材研究を進めることができ、国語科指導の工夫改善につながった。

○ MEXCBT の授業中での位置付けを工夫することにより、新たな MEXCBT の活用法を提案することができた。

○ 朝学習では多様な MEXCBT の問題を配信したことにより、児童自身が目的意識をもって問題を選択したり、苦手な学習に繰り返し挑戦したりすることができ、個に応じた学びの時間を確保することができた。

● 本研究により児童の学力が向上し、深い学びが確かなものになったのかどうか、全国・埼玉県学力・学習状況調査等を活用して引き続き検証していく必要がある。

小中一貫教育（学校4・3・2制）の研究

～外国語指導・生徒指導を中心とした小・中学校の滑らかな接続～

北本市立南小学校

校長 酒井 一 昭

1 はじめに

本校は、昭和42年に開校し、今年度で創立59年目を迎えた。児童数487名、通常学級17学級、特別支援学級2学級の中規模校である。学校教育目標「みんななかよくみどりの学校 かしこくげんきな南っ子」を目指し、潤いのある自然環境とあたたかい保護者・地域に支えられながら、教育活動を推進している。

本校では、平成24年度より北本市教育委員会より「小中一貫教育」の研究委嘱を受け、以来、小中連携・小中一貫教育に関する研究を、学区内小・中学校で取り組んでいる。特に、義務教育9年間で4・3・2年に区切り、特に3（小5・小6・中1）で小・中学校の滑らかな接続の研究を進めている。

さらに、今年度から埼玉県教育委員会より「英語指導方法改善事業」の研究協力校の指定を受け、小・中学校で外国語教育の研究を進めている。

2 主題設定の理由

小・中学校の接続期には、学習や生活が大きく変化することにより生じる困難や問題（いわゆる「中1ギャップ」）があることが知られている。学区内小・中学校でも、中学校進学後に学校生活になじめず、欠席がちになったり、学習に前向きに取り組めなくなったりする生徒がおり、中学校からの新規不登校者数も多い傾向にある。

本中学校区では、北本市教育委員会の研究委嘱を受けて以来、中1ギャップの軽減をはじめとする小・中学校の滑らかな接続を目指して研究を続けてきた。児童生徒の交流、教職員の相互乗り入れ授業、合同研修など、様々な手立てを講じ、一定の成果をあげてきた。

今年度は、中学校より英語科教員1名が本校へ兼務し、本校5・6学年の外国語の授業を担当するとともに、生徒指導の充実を図る取組を行っている。これを本研究の中心的な取組に据え、小・中学校の児童生徒交流や教職員の資質向上をねらった取組を積み重ねていくこととした。

義務教育9年間で目指す児童生徒像の実現、ひいては児童生徒の生きる力の育成をねらい、本研究主題を設定した。

3 具体的な取組

研究の推進にあたり、一昨年度に学区内小・中学校で一貫して目指す児童生徒像を検討した。これまでの研究成果と課題、各学校や地域の実態など、様々な視点から協議し、義務教育9年間で一貫して目指す児童生徒像を以下のとおり設定した。

「笑顔と優しさにあふれ、

自ら学びに向かう児童生徒」

この児童生徒像の実現を目指すことを小・中学校で確認し、児童の発達の段階や学校・地域の実態などに応じて教育活動を推進していくこととした。

（1）外国語指導の充実

ねらい 中学校教員等による外国語教育の充実を図り、中学校進学に向けた確かな学力の育成とともに本校教職員の指導力向上を目指す。

→自ら学びに向かう児童

中学校より英語科教員1名が本校へ兼務し、5年生（一部）及び6年生の外国語を担当している。また、市内小学校より英語専科教員1名が本校へ兼務し、5年生（一部）の外国語を担当するとともに、3・4年生の外国語活動の指導に関わっている。2名の兼務教員が本校へ勤務する日を合わせ、相互にチームティーチングや授業参観を行えるようにするなど、指導の共有や充実を図れるよう体制を整えた。



中学校からの兼務教員による外国語の授業（6年生）

本校教職員の指導力向上を目指し、中学校教員の授業研究（6学年・外国語）を実施した。中学校進学を視野に入れた規律指導や、専門性の高い授業実践を学び、各教職員が本校の児童への指導について振り返り、改善する機会とした。

（2）生徒指導の充実

ねらい 小・中学校間の教職員の兼務を活用した小学校高学年への生徒指導の充実により、児童に中学校生活への期待や安心感をもたせる。

→笑顔と優しさにあふれる児童

中学校から兼務教員1名（英語）が、教科指導以外で週1回半日、本校に勤務している。また、本校から中学校へ6学年担任3名が、交代で週1回中学校へ赴き、中学校の生徒指導の状況を見学している。

中学校からの兼務教員は、小5、小6の授業に入り、生徒指導面での支援や指導を行った。兼務教員が課題のある児童に積極的に関わり、担任とは異なるアプローチで言葉がけを行うなど、多角的な生徒指導を実践した。さらに、授業以外（休み時間、給食など）でも児童と関わることで児童理解に努めた。

小・中学校間で教員が生徒指導の視点で児童生徒等を見合う取組をとおして、本校児童の中学校入学後に予期される課題や問題などについて、中学校教員の視点でも分析し、本校教職員と共有することで、本校教職員の指導力向上にもつながった。

（3）児童生徒の交流

ねらい 小学生・下級生から中学生・上級生への憧れを相互に抱かせることにより、自尊感情・自己肯定感を育成する。

→笑顔と優しさにあふれる児童生徒

①小中合同サミット

小学校児童会と中学校生徒会が毎年夏休みに集まり、話合いや情報交換を行う機会を設けている。今年度は、一緒に取り組んでいる「YESデー」（月1回テレビやゲーム、スマホから離れ、家族との時間などを増やそうという日）、「スマイルスクール」（いじめ撲滅の取組）について、小・中学校で話し合った。

②行事等における交流

○土曜公開授業 ←ギター・マンドリン部が参加

本校の学校公開において、部活動の演奏披露の機会を設けた。全校児童が参加し、中学生の一生懸命な姿への憧れや希望をもつ機会となった。

○市内体育大会 ←陸上競技部の指導・支援

本校6学年が参加する市内体育大会の練習において、中学生が来校し、練習と一緒に取り組んだ。中学生が本校児童を指導・支援する活動をとおして、児童の前向きな気持ちの醸成につながった。

○歌声交流会 ←中3生徒の参加

音楽会に合わせ、小・中学生合同の交流会を実施した。中学生が心を1つにした合唱を聴き、本校児童も歌を披露することで、小・中学校が歌声をとおして心を通わせる機会となった。

○あいさつ運動←中1生徒の参加

本校卒業生が、児童の登校時にあいさつ運動を実施した。中学生とあいさつを交わすことで、あいさつに対する意識の高揚を図り、自分からあいさつをしようという実践力の育成につながった。



小中合同サミット



中学生の演奏披露



中学生の陸上指導



歌声交流会

4 成果と課題

○中学校からの兼務教員による外国語の指導により、児童は主体的に学びに向かうようになった。

○教員が「中学校では…」と話しながら指導・支援する機会が多くなったことにより、児童の中学校進学に対する不安や悩みの軽減になった。

○小・中学校で目指す児童生徒像を共有し、それに向かって各校が具体的な取組を行っていることで、学校間で意識のずれをなくすことができ、一体感をもって活動を推進することができた。

●不登校の課題においては、その理由の多様化・複雑化もあり、依然として多い状況が改善できない。

●学校の教職員だけでなく、保護者や地域の関わりもさらに検討し、社会総がかりでの教育活動の推進につなげたい。

学習指導と生徒指導を一体化させた授業づくり

～福原小中授業スタンダードを活かして～

川越市立福原小学校

校長 小松悦子

1 はじめに

本校は、川越市の南部に位置しており、学校の周辺に田畑や雑木林が広がっている。開校152年目を迎える長い歴史と伝統を受け継ぐ学校である。

本校では「かしこく やさしく たくましく」を学校目標として掲げ、伝統の中に流れる「友愛」の絆を大切にしたい心広く大らかな児童の育成に取り組んでいる。

2 研究主題設定の理由

本校の児童の学力は、埼玉県学力学習状況調査の結果や入間地区算数科学力テストの結果から見ても、決して高いとは言えない。また、経験年数の若い職員も多く、教え方や学ばせ方の個人差も大きい。その現状を踏まえ、昨年度まで、学びの土台作りとなる「福原 Basic8」【表1】の作成に取り組んできたところである。

そこで今年度は、「福原 Basic8」を周知徹底し、確実に定着させ、学びの土台作りを行うと共に、その土台の上に学びを積み重ねるために、各教科の1時間の授業の流れを表した福原小中授業スタンダードを活かした授業改善にも取り組んだ。教師も子供たちもキラリと輝く学習指導と生徒指導を一体化させた「わかる・できる喜びが味わえる授業」の創造が急務であると考え、本主題を設定した。

3 研究の内容

(1) 研究組織【表2】

①学習規律部

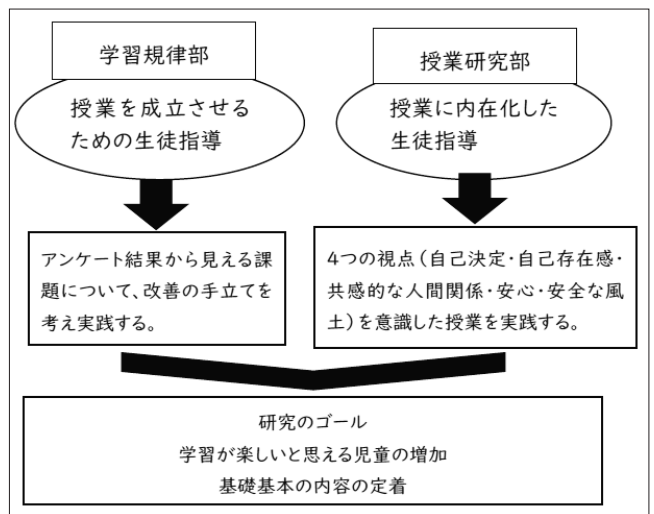
「授業を成立させるための生徒指導」についての研究を進めていく。本校には、「福原 Basic8」という「挨拶・時間・言葉遣い・清掃・落ち着いた行動・学習準備・自分の役割・環境」の8項目について、低学年・中学年・高学年の3段階に分けて目標を定めた指標がある。学習規律部では、この「福原 Basic8」を軸に、児童が落ち着いて学習に臨めるよう、学習規律を整えていくことを目指していった。

項目	学習規律部	授業研究部
あいさつ返事	自分の名前、学年、学年を伝える。 □「はい」「ええ」と返事を返す。 □目線が合うように話す。	挨拶が、相手から返す。 □相手の名前、学年を伝える。 □相手の目線を見て話す。 □教員から返すときは、返す。
時間	授業の時間、授業の時間。 □授業の時間、授業の時間。 □授業の時間、授業の時間。	授業の時間、授業の時間。 □授業の時間、授業の時間。 □授業の時間、授業の時間。
言葉遣い	丁寧な言葉遣いをする。 □丁寧な言葉遣いをする。 □丁寧な言葉遣いをする。	丁寧な言葉遣いをする。 □丁寧な言葉遣いをする。 □丁寧な言葉遣いをする。
清掃	清掃の時間、清掃の時間。 □清掃の時間、清掃の時間。 □清掃の時間、清掃の時間。	清掃の時間、清掃の時間。 □清掃の時間、清掃の時間。 □清掃の時間、清掃の時間。
落ち着いた行動	落ち着いた行動、落ち着いた行動。 □落ち着いた行動、落ち着いた行動。 □落ち着いた行動、落ち着いた行動。	落ち着いた行動、落ち着いた行動。 □落ち着いた行動、落ち着いた行動。 □落ち着いた行動、落ち着いた行動。
学習準備	学習準備の時間、学習準備の時間。 □学習準備の時間、学習準備の時間。 □学習準備の時間、学習準備の時間。	学習準備の時間、学習準備の時間。 □学習準備の時間、学習準備の時間。 □学習準備の時間、学習準備の時間。
自分の役割	自分の役割、自分の役割。 □自分の役割、自分の役割。 □自分の役割、自分の役割。	自分の役割、自分の役割。 □自分の役割、自分の役割。 □自分の役割、自分の役割。
環境	環境の時間、環境の時間。 □環境の時間、環境の時間。 □環境の時間、環境の時間。	環境の時間、環境の時間。 □環境の時間、環境の時間。 □環境の時間、環境の時間。

【表1】

②授業研究部

「授業に内在化した生徒指導」についての研究を進めた。令和4年度に改訂された生徒指導提要第2章「生徒指導と教育過程」において、「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」を意識した授業の実践が、児童の自己肯定感や自己有用感を育み、児童の発達を支えていくとされている。授業研究部では、この4つの視点を意識した授業を研究・実践していくことを目指した。



【表2】

(2) 具体的な取組

①学習規律部

児童を対象に、「福原 Basic8」の項目・目標に沿ったアンケートを行い、学年の実態を把握した。その後、各学年で見つけた課題についての改善策を考えた。

【手立て1】福原 Basic を基にした共通指導

「時間」や「落ち着いた行動」に課題がある学年は、毎年見直しをしている「福原小学校のきまり」や前述の「福原 Basic8」を基に、学年で共通理解・共通指導を行った。

【手立て2】掲示物の作成

「環境」に課題がある学年では、下駄箱や清掃用具箱などの共有物に対する意識を高めるために、整頓された状態の写真を掲示することで、視覚的支援や図った。



【手立て3】「ふわふわ言葉を集めよう」

「言葉遣い」に課題のある児童が多いため、言われて嬉しい言葉「ふわふわ言葉」を集める活動を全学年で行った。児童が、自分が他者からもらった「ふわふわ言葉」を書いたカードを模造紙に貼り、温かい言葉かけができる空気を醸成した。保護者会を実施した際に掲示することで、家庭へもこの取組について周知した。

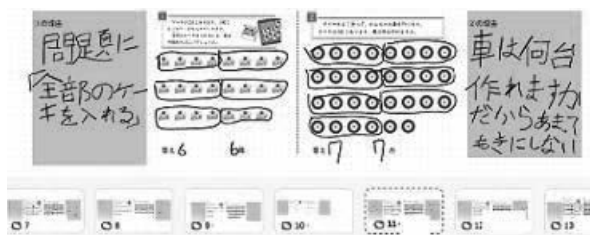


②授業研究部

4つの視点（自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安全・安心な風土の醸成）を意識した授業を実践するため、教材研究や部会で協議をした。

【手立て1】デジタルノートの活用

デザインツール「Canva」を活用し、児童一人一人が自分の考えをインターネット上に書き、それを全員で共有できるデジタルノートを活用した。デジタルノートの利点は、「視覚的支援」と「共有性」である。図を操作したり、席にしながら友達の考えを一度に見たり、ICTならではの利点があった。友達のデジタルノートを見合ったり、ある児童のデジタルノートをテレビに投影したりすることで、「自分の考えが、他者に認められた」「友達はこのように考えているのか」という経験・気付きになり、自己存在感の感受や共感的な人間関係の育成を目指した。



【手立て2】自力解決での求め方の方法の選定

算数の自力解決場面において、「図・言葉・式」のどの方法で自分の考えを表すか選択をさせたり、つまづいている児童はヒントカード・小集団を集めた話合い・デジタルノートでの途中参照などの個別支援を受けるかどうか選択をさせたりすることで、自己決定の場を提供する場面を授業の中で設定した。

4 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 学習の基盤である学習規律を整えることで、児童が落ち着いた雰囲気の中で学習に取り組むことができた。
- 学年全員で授業を計画・実践することで、ICTに苦手意識のある教員も使用する頻度が増えた。
- 今年度の研究で児童がICTの操作に慣れてきたので、今後は多様な学習方法から児童が自分の学習方法を自己決定できる授業を目指す。
- 授業研究部の手立てを、他教科でも活かしていく。

「学び合い」の実践から生起する 課題意識を大切にした教師の力量形成

飯能市立美杉台小学校

校長 西 條 誠

1 はじめに一問題の所在一

1990年代から新たな教師像のパラダイム転換により「行為の中の省察」を中心概念とする「反省的实践家」の理念が台頭してきた。その理念を支柱の一つとした児童同士の関わる人数や座席配置を重視する「学び合い（佐藤、2023）」の授業実践は、学校現場において人口に膾炙しているといえよう。それは、「成果を上げている実践の導入」ありきの授業改善モデルから「児童の学びを見取り、教師の省察的思考を機能させる」授業改善モデルを構築していこうとするものである。

一方で、児童の主体性や協働性を重んじ十分に自力解決や協働解決の時間を確保するが故に、教師が教えることや説明することに躊躇したり、児童自身が結局何を学んだのかが釈然としないまま授業が終わってしまったりする傾向に市川（2017）は危惧する。

ここに理念（教育の方向性）と現実（学校現場で起きていること）の乖離が如実に表れている。

それは、本校も例外ではない。令和6年度の学校研究の総括として、「教師が直面している課題に正対した研究プロセスを辿っていないことから、授業実践者である教師の力量形成の実感が得られない」という反省的省察と「教師の個性・多様性をいかした協働的授業実践」への期待といった「予見的省察（久我、2008）」が見出された（寺坂、2025）。そこに正対しないことには「現場の経験」を活かした校内研修（文部科学省、2025）の端緒をつかむことは極めて困難である。

2 研究目的

そこで、令和7年度は、「教師－児童」間で生起する教師の課題意識から、研究プロセスの方向性を指し示す「目指す児童像の明確化を図ること」と教師の個々の実践から脱却し「教師の個性・多様性をいかした協働的授業実践」の観点から教師の力量形成（授業力向上）の推進とその具現化を図ることを目的とした。

3 研究方法

（1）教師の課題意識の交流・共有

①「教師－児童」間で生起する当事者の課題意識から導出する「目指す児童像」

②学年内・学年間の協働的且つ教師の個性・多様性を生かす教材研究の推進

（2）学校課題研究の方向性の確立

上記の「教師の課題意識の交流・共有」に正対した研究の方向性の確立

（3）実践計画

授業（単元）構想、授業研究、リフレクションのプロセスを以下の3つの柱で計画した。このプロセスにおいて、学年が中心となり、管理職、研究推進委員長、研究主任、教科部会等が適宜協働的に関わる。

①一人1授業研究（9月～2月）

②全体研究授業・研究協議会（年3本）

③年次研修者の授業研究（7月～11月）

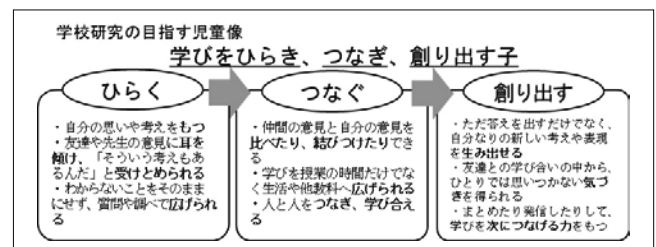
4 研究内容

（1）教師の課題意識の交流・共有

①「目指す児童像の明確化」（7/22、8/28）



学年内（クラス間）の「横軸」の協働性を意識した校内研修を2回実施した。そこでは、各学年の学級担任と副担任が捉える児童の「強み」や課題を整理し、各学年に共通するカテゴリーを抽出し、目指す児童像を「学びをひらき、つなぎ、創り出す子」と設定した（下図）。



さらには、学年内で教科や単元を絞り、一人1授業を単元という「線」でつなぎ、単元をリレー形式で授業公開していった。

②協働的且つ教師の個性・多様性（7/25、8/26）

学年間（教科毎）の「縦軸（系統性）」の教師の個性・多様性・協働性を意識した校内研修を2回実施した。

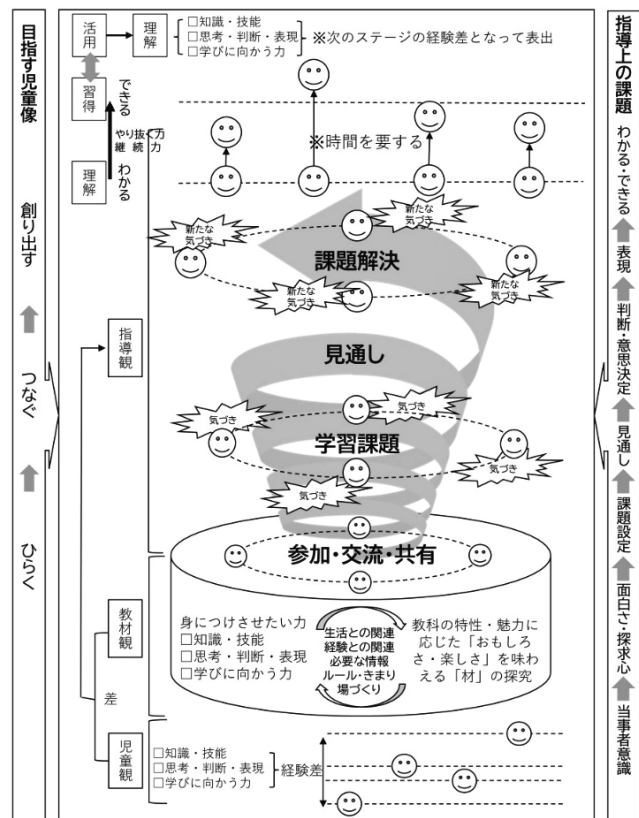


そこでは、学校課題を受け、各教科の教師の指導上の課題意識の共通項を抽出することを試みた。その内容は以下の通りである。

教師の指導上の課題意識	
<input type="checkbox"/>	当事者意識を持って必要な情報を捉えさせる
<input type="checkbox"/>	(教科・単元等の特性に応じて)わからないことがわかる面白さや探求心の向上
<input type="checkbox"/>	自ら見出す課題設定
<input type="checkbox"/>	見通し(イメージ)を持った課題解決的な活動
<input type="checkbox"/>	解決過程の判断力・意思決定力の向上
<input type="checkbox"/>	解決過程の交流・共有・深化を図る表現力
<input type="checkbox"/>	知識(わかる)・技能(できる)の定着化

(2) 学校課題研究の方向性の確立

上記の「教師の課題意識の交流・共有」に基づき、研究の内容と方向性の構造化を試みた（下図）。



目指す児童像と指導上の課題との関係図

(3) 授業実践事例（9/26）：学年内「横軸」の協働性 第2学年生活科、単元「うごくうごくわたしのおもちゃ」である。



学年内で協働性を発揮し試行錯誤しながらの取り組みである。この実践の面白さは、教師の協働性の中に一人一人の個性やこだわり



ある。互いの授業を観察し合うことによって、自身の授業を再構成し次時に向かっている。この3枚の写真は、その再構成によりソシオペタルとソシオフーガルの配置が融合した新奇性の高い場の設定である。ヨットカーを「速く」「思い通り」に動かすための探究プロセスにおいて「検証する楽しさ/創造する楽しさ」を個人と仲間の双方の学びを見事に一体化させた事例である。

5 おわりに—成果と課題—

令和6年度までの一人1授業の授業研究は個人研究・実践に偏重している傾向にあったが、令和7年度は教師の協働性を発揮した授業構想と実践により、それまで「点（個）」であったものが「線（チーム）」となりつつある。その「線」の縦軸（教科の系統性・学年間の協働性）と横軸（単元構想・実践における学年内の協働性）の交差は「面（組織）」となり運動する兆しが見えてきたところである。そこから繰り広げられる具体としての実践は、互いに力量形成（授業力向上）の実感を伴う学校課題研究として展開されたといえよう。

課題としては、学年間や学年内の教材研究や研究成果の共有、そして単元構想の充実を図るための継続性と創造性を高める研修システムのさらなる構築が望まれる。その中核を担う原動力が、実践（具体）から「何がいえるのか」、そのエキスを抽出する（抽象度を上げる）丁寧な作業である。

【主な参考・引用文献】

- 市川伸一（2017）授業からの学校改革「教えて考えさせる授業」による主体的・対話的で深い習得、図書文化、東京都。
- 久我直人（2008）教師の専門性における「反省的実践家モデル」論に関する考察（2）—教師の授業に関する思考過程の分析と教師教育の在り方に関する検討—、鳴門教育大学研究紀要、第23巻、pp.87-100。
- 佐藤学（2023）新版 学校を改革する 学びの共同体の構想と実践、岩波書店、東京都。
- 寺坂文明（2025）日本教育実践学会口頭発表資料「校内研修における教師の課題認識に関する事例的研究—児童同士の「学び合い」を重視する授業実践を通して—

主体的に学び、成長につながる学校づくり

坂戸市立片柳小学校

校長 佐藤 毅一郎

1 はじめに

本校は坂戸市の北部に位置し、校地の南側には、飯盛川、北側には越辺川が流れている。県立坂戸高等学校が道を挟んで隣接しており、いくつかの教育活動において交流している。開校45年目、各学年2学級、特別支援学級3学級の中小規模校である。学校教育目標は「よく考え 心豊かに たくましく」、めざす教師像「情熱と誇りを持ち、常に学び続ける教職員」「個人の良さを尊重し合い、高め合う教職員」の具現化に向け、教育活動を行っている。

2 児童の実態及び研究主題設定の理由

本校は、明るく素直で人懐っこい児童が多い。また、通学班、縦割り活動などから異学年の仲も良い。半面、「失敗を恐れて、自分から進んで行動できない。」「新しいものを考えて生み出すことが苦手」などの実態も見られる。学力は埼玉県学力・学習状況調査の平均正答率をやや下回っている。

児童の学力向上、豊かな心の育成を行っていくためには「主体的・対話的で深い学び」の授業実践が必要である。残念ながら教職員自身が、「主体的・対話的で深い学び」を今まで経験してきていない。

また、学校研究と言うとトップダウンでやられるものという学校研究観を多くの教職員がもっている。学校研究に対するマイナスの感情や価値観を払拭し、ポジティブなものに変換していきたいという教職員の思いから、本研究主題が生まれた。

3 学校研究体制

(1) 研究組織

研究推進委員会

(管理職、研究主任、各学年から1名の推進委員)

学校研究全体の進め方や学びづくり研修の方法について話し合ったり、実際に学びづくり研修をデザインして各学校研究チームに伝える。

学校研究チーム

4月に学校研究で1年間自分が探究していきたいテーマを出し合い、類似したテーマを持っているメン

バーでチームを作って研究していく。今年度は、4つのチームとなった。

○「学びづくり」チーム

「学びの共同体」の理念や授業デザインを学んで、実際に理念を実現する授業を作る。

○「探究的・協働的な学びづくり」チーム

各教科・領域で「探究的な学びをつくるには?」「協働的な学びをつくるには?」という問いを立てながら研究している。

○「主体的な学びづくり」チーム

「児童が主体的に学べるようにするにはどんな授業の流れや環境を作り出せるとよいのか?」「主体性をもった児童が育つ学級経営とは?」という問いを立てながら研究している。

○「児童理解」チーム

適切な指導や支援を行うために児童理解の技術を高め、個々の児童に合う指導・支援を考え、実行する。

(2) 学校研究の研修時間

○春休み(2時間×3コマ)、夏休み(1時間×4コマ)

○月曜日の通常日課で会議のない日(月1回1時間)

○月曜日の特別日課で午後研修(毎月1回3時間)

○金曜日の校内研修時間(15:00~15:45)

↑この時間は①「チーム別研究」②「学びづくり」

③「教材研究」の3つを順番に実施している。

4 研究実践

(1) 学びづくり研修



6/13(金) 第1回片柳小学びづくり研修会・研究協議

坂戸市では、「学びの共同体」の理念や方法を取り入れて市全体で「主体的・対話的で深い学び」の実現のために授業改善に取り組んでいる。本校では、各学期に1回ずつ茨城学びの会 代表 根本光子先生を1日招聘し、午前中、全学級の授業を参観し、各授業についてご指導をいただいた。また、5時間目に提案授業を全職員で参観し、研究協議を行い、その後、根本先生から「主体的・対話的で深い学び」を作り出すための「聴く・つなぐ・もどす」のポイントなどについて指導助言をいただいた。

毎週金曜日の学校研究時間には学びづくりについて研究推進委員が研修担当になって全教職員が学びづくりについて理解を深めたり、模擬授業を行ったりしている。

(2) チーム別研究

「主体的に学ぶ」教職員集団を作り出すためには、自分が学びたい、興味・関心があるテーマからチームを作り、メンバーと協力的に学びながら自分の学びを促進していくことでみんな（児童・教職員・家庭・地域）の成長につながる学校になると考えチーム別研究を取り入れている。



10/27（月）の児童理解チームのミーティング

各チームで研修の方法・ミーティングや研修会の持ち方を話し合っ決めて研究を進めている。3週間に1回金曜日の校内研修時間にチーム別研究を行った。

(3) 学校課題研究の改善

これからの教師としての役割が「学習内容を教えること」から「児童の学びを促進すること」へ比重が変わってくることを考え、児童の学びの見取り方、学ぶ場の作り方、チームビルディング、体験学習などについて軽井沢風越学園 元副校長 甲斐崎博史先生に4月と11月に1日ずつ指導を受けた。午前中は各学級で体験学習の授業を行ってもらった。午後の提案授業の研究協議では、授業者が一番得する研究協議の進め方

やチーム別研究のチームビルディングやチームの研究をチューニングする方法などを体験的に学ぶ場を作ってもらいながら、チーム別研究の効果的な運営を自分たちができるように指導していただいた。



11/10（月）プロジェクトチューニングのワーク

5 成果（☆）と課題（△）

☆やらされる学校研究からやりたい学校研究

学校研究の内容や授業者の決定などがトップダウンではなく、自分たちで何をどのように学んでいくのかを決めながら実施していくのでいつも学校研究の時間は主体的に学んでいる状態となっていた。

☆謙虚な姿勢を大切にした授業づくり

仮説検証型から仮説生成型の研究スタイルに変えたので教職員の学ぶ姿勢が「〇〇せねばならない。」という固定的な指導観から児童の声や反応、同僚のフィードバック、新しい指導法などから謙虚に学び、児童の実態に合わせた柔軟な指導観で授業をつくるようになっている。

☆同僚と学びや対話を楽しむ教職員集団

今年度は、研究授業の指導案検討の時間を模擬授業を行う時間に変えた。2学期末の放課後にもかかわらず、1月の研究授業の模擬授業に教職員の参加率が78%に及んでいた。どうやったらより「主体的・対話的で深い学び」に授業を近づけることができるかをみんなで真剣に考えていた。すばらしい同僚性が本校に育ってきていると感じている。

△学校研究時間の確保

毎週金曜日の45分間、毎月1回の月曜日の午後など研修時間は他校より多いが、チーム別研究を学校研究の中心に据えると、研究時間やチームメンバーとのミーティング時間が足りない状態である。日常業務を優先しなければならないので自主的に学ぶ習慣をそれぞれが確立することに多くの教職員が苦勞していた。今後も教職員のライフスタイルに合った学びの習慣化についても学ぶ機会を作っていく予定である。

「主体的・対話的で深い学び」をめざす授業展開の工夫 ～対話力を向上させ、共に学び合う授業づくりをめざして～

秩父市立花の木小学校

校長 門倉 稔

1 はじめに

本校は、秩父市中心部に位置し、1938年（昭和13年）「大宮第二尋常中学校」として創立し、1955年（昭和30



年）「秩父市立花の木小学校」と改称し、88年目を迎える伝統ある学校である。学区内は、日本三大曳山祭りで有名な秩父夜祭りの町会でもあり、地域や保護者の結束力も強く、学校を支える頼もしい応援団となっている。

学校教育目標に「かしこく やさしく たくましく」を掲げ、「子供のよさを認め、伸ばし、自信をもたせる」ことを経営基盤に日々、教職員がチームとなって教育を推進している。

2 研究主題設定理由

本校では、誰一人取り残さない令和の日本型教育の実現に向けて、これからの時代に求められる資質・能力を育成し、「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりを推進している。

今年度は、子供たちの可能性をさらに引き出す研究の深化を目指し、1人1台端末の活用を含む「個に応じた指導」の改善【個別最適な学び】や、児童相互が互いに学び合う「協働的な学び」の場面づくり【協働的な学び】を重点化し、それぞれが一体的に深まっていくよう、研究を進めている。ここ数年の研究の成果も相まって、各学級で自らの考えを筋道立ててわかりやすく発表したり、プレゼンテーションしたりする児童が増えてきた。また、全校の前で自分の考えや思いを表現力豊かに発表できる児童も増加傾向にある。

一方で、様々な対話を通して理解や考えを広げたり深めたりすることが課題である。

そこで、各教科及び領域の学習指導において学び合う授業を展開し、友達との対話を通して児童の思考

力・判断力・表現力を伸ばすことにより、学びの喜びを味わわせ、基礎学力の向上を図ることを目的として本主題を設定した。

3 研究仮説

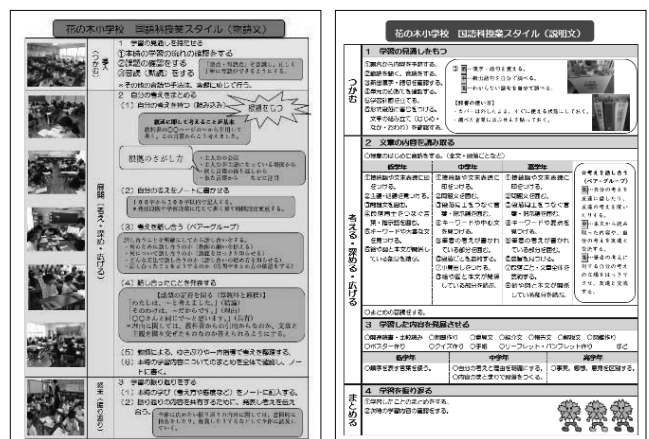
教科横断的に学び合い活動や話し合い活動を充実すれば、児童の思考力・判断力・表現力を伸ばし、基礎学力の向上と社会を生き抜く自立した力を育むことができるであろう。

4 研究内容（具体的な取組）

(1) 花小スタイル

本校の基本的な学習の進め方である「花小スタイル」をもとに、授業の進め方やノート指導等を全校で統一し、児童が安心して取り組めるようにした。

その上で、「対話力を向上させ、共に学び合う授業」をつくる具体的な考え方や手法を教職員間で学び合い共有していった。



【花小スタイル（国語編）】



【年間を通じて全校で取り組む1分間スピーチの様子】

(2) 全教職員の公開授業

全教職員が1回以上授業研究に取り組み、検証と改善を行い、全教職員の授業力向上を目指すことを企画した。

さらに、ベテラン教員や各種教科領域の専門性に長けた教員を指導者として示範授業や模擬授業、演習を実施し若手教員の指導力の育成を図った。

(3) クロームブックの利活用

ICTの効果的活用も重視し、教職員間でICT機器に対して得意・不得意があるので、負担感を少なくしながら全教職員が無理なく授業に取り入れることができるよう計画的な研修を企画した。

水曜日の朝の時間を「すいすいタイム」と称して、クロームブックを活用する時間にした。この「すいすいタイム」ではCBTを意識して、クロームブックを活用したタイピング練習やドリル学習に挑戦している。

(4) 無理のない(やらされ感のない)研修

県の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた研修プログラムや「良い授業を見つけ!広めて!学力UP事業」の動画を活用した研修や中学校区における相互の授業参観等の研修を実施した。

また、困り感や必要感から研修時間以外で随時行われる教員間の学び合いを大切にしてきた。さらに、授業実践については、低・中・高ブロックごとに研究授業を行い、指導主事訪問並びに学校支援訪問において、北部教育事務所、秩父市教育委員会と連携を図り、各指導主事から、指導・助言をしていただいた。

(5) 保護者・地域との連携

保護者、地域との連携としては、中学校の定期テストに合わせて「学力向上強化週間」を設定した。「学年×10+10」分以上で自分の目標時間を決め、「家庭学習の手引き」を活用しながら家庭学習に取り組みさせた。

また、目標達成率や一日の平均学習時間をまとめ、家庭へ配布した。クロームブックの利用に関する情報や家庭での活用ルール等についてのお知らせを家庭に配布し、学校・家庭での運用面での共通理解を図った。さらに、各種たよりやホームページ等で学校での取組を積極的に情報発信することに努めた。

(6) 子供ありきの研究協議の形態

従前「学習規律がしっかりなされていて日々の学

級経営が素晴らしい。」「授業者の板書がわかりやすい。」そんな内容が研究協議の話題になることが多かった。

しかし、今年度はあくまで児童の学習の状況、児童の実態や実際の発言やつぶやき、ノートの記述をもとに研究協議をすることにした。そうしたことで、各児童がどのような思考をたどり、どのような学習内容をどのように習得し、さらに深化統合したかが議論にあがるようになった。あくまで子供の事実を即した研究協議となり、さらなる教材研究や児童理解に至るまで中身の濃い研究協議の時間となった。

5 成果と課題(○成果 ●課題)

○作成及び運用した「花小スタイル」をもとに「対話力を向上させ、共に学び合う授業」を積み重ね、教育活動全体を通じて対話の機会を意図的・計画的に設定したことにより、教員の授業力が向上し、児童が主体的・対話的に課題解決する力が伸び、児童の学力が向上した。

●上述した成果を、単元テスト、每学期末の漢字・計算テスト、埼玉県学力・学習状況調査、全国学力・学習状況調査と紐付けて評価するとともに、日々の授業における活動時の観察や活動後の振り返りの時間、ノート指導等で児童の成長や変容を図り、その後のさらなる授業改善に生かして行く必要がある。

●各種たよりやホームページ、学校運営協議会等において説明責任を果たしたり、授業参観・懇談会で具体的な児童の姿を説明したりして、理解・協力を得ていくようにする。

6 おわりに

まだまだ、発展途上ではあるが、本研究をとおして、対話力の向上を図るのみならず、副次的な成果としてお互いに助け合ったり励まし合ったりする姿が大変多く見られるようになり子供たちの自己有用感の醸成も図られた。今後も継続して取り組んでいくことが子供たちのさらなる対話力の向上となり、学校全体の教育力の推進につながるものであると確信している。今後も、チーム花小として職員が一丸となって子供たちのための研究を邁進していく覚悟である。

豊かな関わりを通して、互いに育ち合う麻っ子の育成 ～多角的な児童理解に基づくオーセンティックな学びの充実～

熊谷市立大麻生小学校

校長 栗原敏枝

1 はじめに

本校は、明治13年、熊谷市の西部に位置する宝蔵寺に開校し、今年で145年を迎える歴史と伝統のある学校である。大変協力的な保護者、地域に支えられ、250名の子供たちは元気に、すくすく真っすぐに育っている。

学校教育目標は、「『知・徳・体』のバランスのとれた『学力』を身に付け、21世紀を豊かに生きる児童の育成」である。激動の時代を、しなやかに力強く生きていく子供たちの育成を目指し、「すべては子供たちの健やかな成長のために」を合言葉に、教職員が一丸となって、日々の教育活動に取り組んでいる。

2 研究主題設定理由

変化の著しい社会を生きていく子供たちにとって、自分で考え、様々な人々と関わり、多角的な見方を通して、より良い方向性を見いだす力をつけることは、とても重要である。本校は、3世代で暮らす家庭も多く、進学する児童の多い学区内の中学校もすぐ隣にあり、2つの職業高校、特別支援学校を校区にもつ恵まれた環境にある。その利点をいかし、多方面との豊かな関わりを通して、多角的な児童理解に基づくオーセンティックな学びを行い、児童に力をつけさせたいと考え、本主題を設定した。

3 研究仮説

本研究では、次のような研究仮説を立て、実践に取り組んだ。

【仮説1】学習内容と実生活との関連を意識したオーセンティックな授業を行えば、主体的に自分で考えたり、多角的な見方を通し、より良い方向性を見いだしたりする力を児童につけることができるだろう。

【仮説2】系統立てた学習内容や校内環境を整え、地域性をいかしたオーセンティックな学びの場を構築すれば、豊かな関わりが自然とできる児童が育つであろう。

4 研究内容（具体的な取組）

(1) 年間指導計画見直しと実践

地域をいかした視点で見た教科（総合・生活・社会・道徳など）の関連性を見直しと、連携を意識した教育活動の展開

(2) 総合的な学習の時間の詳細計画の見直し

(3) 地域施設（他校種、施設など）との連携体制構築及び協働体制の確立

(4) 地域人材バンクの作成と活用

5 活動の実際

(1) 生活科年間指導計画見直し（低学年）

生活科の学習において、学校間連携や異年齢集団との交流、地域とのかかわりをもつことができる場面を模索し、年間指導計画に位置付けた。また、他教科との関連も明記する。

(2) 幼稚園、保育園等との連携（1年生）

1年生が卒業した幼稚園、保育所の先生方を、参観日、運動会へ招待した。具体的には、校長から各園に一報入れ、その後、子供たちが各々の園へ招待状を送ったところ、たくさんの先生方に参観いただき、児童の変容を共有することができた。

【児童の招待状より】

〇〇せんせいへ

がっこうは、たのしいよ。わたしは、さんすうがすきだよ。がくどうもたのしいよ。ともだちもできたよ。また、きてね。 △△より

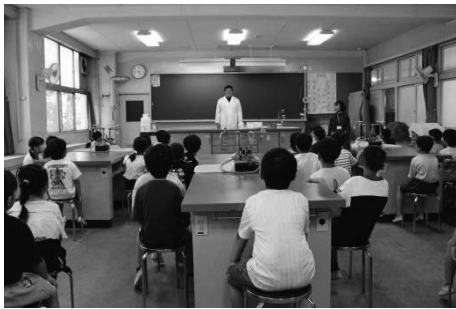
卒園児の頑張る姿を近くで見ることができ、嬉しく思います。明るい環境で伸び伸び過ごす子供たちと話をすることもでき、よい時間を過ごすことができました。（幼稚園の先生の感想）

(3) 地域施設との交流 (2年生)

生活科の町探検において、これまで行っていた地域の施設見学に加え、高等学校、中学校にも訪問し、小学校と似ているところ、違うところを学ぶことができた。

【児童のお礼の手紙より】

くまがやしょうぎょう高校のみなさんへ
お兄さんたちが手をふってくれて、ありがとうございました。たいいくかんがひろくて、びっくりしました。お兄さんやおねえさんがやさしくて、うれしかったです。



また、生活科の「明日へジャンプ」の単元で、幼稚園や保育園の先生方に質問の手紙を出したり、インタビューをしたりして、自分の成長を実感する授業を行う。

(4) 総合的な学習の時間の詳細な計画の作成

これまでの総合の活動を見直し、より探究的な活動になるよう計画を再検討した。

3年生		【単元名: 大発見! 大麻生小学校研究】	
学びのゴール		地域に誇りを持ち、自信をもって大麻生小学校と地域のことを紹介することができる。	
課題設定に向けて (共通体験等)		地域の自慢ポイントを見直す	
生まれた課題		生まれた課題	
第1ステージ: テーマ (全体の課題): 「大麻生小学校について学ぼう」	留意点		
課題の設定	○大麻生小学校について様々な視点から調べまとめる。 ○自身のテーマを決める。	児童の意見からテーマを設定する。 歴史・生き物・植物・先生、遊び、施設(教室)から選ぶ。	
情報の収集	○観察、校内のフィールドワーク、インタビューからテーマについて情報を集める。	各々でテーマを決めるが、初の総合学習であるため全員で毎時間一つのテーマについて調査する時間を取る。(45分×テーマ数)	
整理・分析	○自身のテーマについて分かったことをまとめ、発表の準備をする。(レポート用紙)	まとめ方のツール(思考ツール)を工夫させる。	
まとめ・表現	○大麻生小学校の特色について個人での調査結果における気持ちについて発表する。	自分が見たもの、感じたことを中心に発表させる。	
生まれた課題		生まれた課題	
第2ステージ: テーマ (全体の課題): 「大発見! 大麻生について詳しく探ろう」	留意点		
課題の設定	○自身の主観だけでは分からないことについて、より詳しく調べる方法を考える。	第1ステージを終えて新たに生まれた興味や疑問をもとに新たに課題を設定させる。	
情報の収集	○見守り隊の方や保護者、卒業生、高学年児童などにインタビューしてより第1ステージで選んだテーマについて、より深い情報を集める。	調査に協力いただける方とコンタクトを取っておく。インタビューや手紙などの色々な方法について触れる。 色々な情報を提供してくれた方々も貴重な人材(自慢できる人)であることを意識させる。	
整理・分析	○分かったことをまとめ、発表の準備をする。 ○大麻生自慢ポイントに因り整理する。	新聞やリーフレットなど、校内掲示できるツールから選ばせる。	
まとめ・表現	○新聞を校内に掲示したり、クラスや低学年に向けて発表したりする。	発表対象を第1ステージ(学級)から学校全体で拡大する。	
生まれた課題		生まれた課題	
第3ステージ: テーマ (全体の課題): 「大発見! 大麻生について発信しよう」	留意点		
課題の設定	○第1、2ステージで調べたことについて外部へ発信することについて課題をもつ。	誰にどのように発信する、地域のことを多くの人に知ってもらえるかを考えさせる。	
情報の収集	○発信先について熊谷市の公共施設(駅、市役所、消防署、警察署、スポーツ文化公園など)と関連付けながら考える。	社会科見学で訪問した施設にあったポスターなどを参考にしてみよう。ポスターや模造紙でまとめる。	
整理・分析	○発信したい内容をまとめる。○公民館や市役所など公共施設などに掲示してもらう依頼文やビデオレターを作成する。		
まとめ・表現	○授業参観で保護者に向けて発表する。 ○駅にスタンプラリーを設置させていただく。 ○学校周りに「大麻生自慢ポイント」を掲示し、社会に対して可視化する。	成果を発表し、地域への誇りと自信を身に付けるとともに、第4学期社会の埼玉県中他の部活動等に興味関心を広げられるようにする。	

(5) 地域の歴史を学ぶ (3年生)

地域の方に大麻生の歴史についてお話をさせていただき、そこから、全体のテーマと個々の課題を創造していく。

(6) 特別支援学校との交流 (4年生)

学区にある熊谷特別支援学校の4年生児童同士の交流を通して共生社会について学び、自分たちにできることを考えさせ実行する。

(7) 稲作体験 (5年生)

「農業応援プロジェクト」の一環として、学校の隣にある田んぼで、地域の名人の方に教えてもらいながら、田植えや稲刈りの体験を行う。収穫したお米は、学校で炊飯して食べるとともに、ありがとう集会で、お世話になった地域の方に感謝の気持ちを伝える。



(8) 進路について考える (6年生)

キャリア教育として、「自分未来史」というテーマで、中学校、高校、大学などのことを調べ、自分の進路について具体的に考えていく。

6 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 改めて地域の財産(人、もの、場所等)を見直すことができ、ふるさとへの思いが深まった。
- 地域と関わる豊かな経験を重ねたことで、豊かな表現力が身についた。
- 探究的な学びについて、教師一人一人が考え、子供によりそった活動を計画することができた。
- 本年度は、主に活動の見直しと計画の立案の年と位置付けたので、来年度以降、有意義な活動がスムーズに展開されるよう、さらに検討が必要となる。

7 おわりに

地域は学びの宝庫である。そのことを全職員で再確認し、有意義となる活動を展開することで、目指す学校像である、子供、保護者、地域が「大麻生小学校でよかった」という思いを抱くことができるよう努力していきたい。

SDGs × 総合的な学習の時間 学びの改革

～成田星宮小ESDから 持続可能な 未来を拓く～

熊谷市立成田星宮小学校

校長 須藤 康 親

1 はじめに

本校は、令和5年、旧成田小学校と旧星宮小学校が統合され、新しく成田星宮小学校として開校して3年目を迎えている。現在22学級、476名の児童がのびのび学んでいる。

予測困難な社会状況の中で、子供たちが多様な環境を柔軟に受け入れ、自分らしく生き抜いていく「世に立つ力」を学校教育目標に掲げ、「教科横断的でオーセンティックな授業」を通して、「『知』・『徳』・『体』のバランスのとれた学力」を付けるとともに、汎用的能力を育成している。

2 本研究について

令和6・7年度に、学習指導について熊谷市教育委員会の委嘱を受けた。そこで、研究主題を「SDGs × 総合的な学習の時間 学びの改革」と掲げ、総合的な学習の時間を中核とし、ESDの視点にたち、教科横断的・統合的な探究的活動をとして、児童の資質・能力を育成することにした。

本研究は、ESD（持続可能な社会の創り手を育む教育）により、児童が持続可能な未来を拓くことを目指している。具体的には、SDGs（持続可能な開発目標）について、児童が必要感をもって考え、オーセンティックな学びから現実を知ること、明るい未来を描けるようにした。本研究の肝は、「児童が自分事として実感できるしかけ」と「教師がファシリテーターとしての役割を果たす」である。

3 研究の仮説について

本研究では、総合的な学習の時間を研究対象とし、以下のような研究仮説を設定して実践に取り組んでいく。

仮説1 「探究的な学び方」を段階的に身に付けられるような指導計画モデルを構築することにより、教科横断的・統合的な学び方が充実し、児童の学力（汎用的能力）を高めることができるだろう。

仮説2 教師がESD6つの構成概念（多様性・相互性・有限性・公平性・連携性・責任性）を軸に、学びのファシリテーターとなることにより、児童が見方・考え方を働かせた深い学びができるだろう。

4 各チームの取組

研究を推進していくために、「授業研究チーム」「教材開発チーム」「SDGs環境づくりチーム」「調査・分析チーム」の4つのチームを作り、役割を分担した。

（1）授業研究チームの活動

○4つのステップによる授業モデルを構築

ステップ1：知る・気付く

・SDGsについての動画を見せ、知識をもたせた状態で「課題」や「自分たちにできること」を考えさせていく。

ステップ2：調べる・深める

・個人・グループを使い分け、調べ学習を進めさせていく。
・企業・個人事業主・行政の方々を招き、体験的な学びを実践する。

ステップ3：比べる・つなげる・深める

・友だちの発表を聞いて、自分たちが調べた内容を振り返り、改善していく。
・6つの構成概念を意識させ、「自分たちにできること」を最終テーマとする。

ステップ4：まとめる・広げる

・他学年や大人に発表する場を設定する。
・様々な学年の発表を聞くことで、新たな問いをもたせる。

※協力していただいた主な企業等

熊谷市観光協会・小林寿司・タカヒロフーズ
五家宝（きなこや・堀内製菓）・ヤマト運輸
埼玉県環境部温暖化対策課・熊谷気象台
ニチバン・コープみらい・キューピー
ユニクロ・日本赤十字社・熊谷青年会議所

○ファシリテーターとしての声かけ



(2) 教材開発チーム

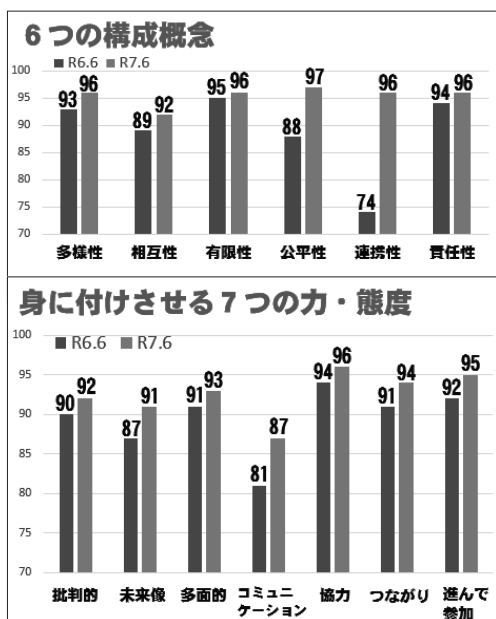
- 6つの構成概念カード
- 児童に身に付けさせる7つの力・態度カード
- SDGs17の目標カード
- 視点を明確にしたワークシート

(3) SDGs 環境づくりチーム

- SDGs17の目標・標語の掲示
- 各委員会による「SDGs キャンペーン」
 - ・熱中症予防キャンペーン
 - ・SDGs 図書キャンペーン
 - ・残菜0キャンペーン
- 「SDGs 委員会」の活動
 - ・アルミ缶・ペットボトルキャップ回収
 - ・フードドライブ
 - ・届けよう、服の力プロジェクト

(4) 調査・分析チーム

- 自作アンケートの作成・分析
- 各種学力調査の分析



【校内作成アンケート結果】(3~6年生321名)

5 SDGs フェスティバル

1月下旬に学習の集大成として、全校による発表会を実施している。3~6年生・特別支援学級は、在校生や出前授業でお世話になった企業の方などに、学習の中で気付いた課題の解決策を発表する。また、他学級や他学年の発表を聞く時間も設ける。1・2年生は、発表を聞くことに専念し、総合的な学習の時間の下地を作る。

新聞・パワーポイント・体験活動・クイズ形式など、児童が考えた様々な方法で発表する。「小学生の自分たちにできること」をキーワードに、相手へ直接伝えることで、深い学びへとつながっている。

他学級や他学年の発表を聞くときには、必ずメモをさせ、新しい問いを見つけるように指導している。発表を聞いて自分の学習を振り返るとともに、よりよい社会を創る一員であることを自覚し、実践していく態度を養っている。



6 成果と課題

○学習過程が全校統一の4つのステップであるため、学年が上がっても、戸惑うことなくスムーズに学習に入れている。「漠然と調べる」のではなく、「自分たちにできることにつながるように調べる」ことができるようになった。また、常に新たな疑問をもち、総合的な学習の時間以外でも「それってみんなができるの?」など、構成概念を自分の考えの判断材料にする児童が増えた。

○全国学力・学習状況調査でも正答率で県や全国を上回った。特に理科では、県や全国を10ポイント以上上回った。

○市の委嘱研究として、市内の先生方と学校運営協議会委員に授業公開と研究発表を行った。114名の先生方に参加していただき、熊谷市内に本校の取組を発信することができた。

○市の委嘱研究としては2年だったが、今後も持続可能な取組として継続していくことが重要となる。

学力・体力の向上と豊かな心を育成する小中一貫教育の推進

～個別最適・協働的な学びを通した、わかる喜びを共感できる授業を通して～

八潮市立八幡小学校

校長 小久江 桂 子

1 はじめに

明治6年に3つの寺を仮校舎として発足した本校は、明治37年5月1日に八和田尋常高等小学校として新たに開校し、今年で121年を迎えた。

校舎屋上に掲げた「みんな笑顔の八幡小学校」のスローガンのもと、本校の学校教育目標「学び育つ子」を目指し、16学級404名の児童が日々学んでいる。

令和7年度は、八潮市教育委員会から「八潮市小中一貫教育研究」の委嘱を受け、「学力・体力の向上と豊かな心を育成する小中一貫教育の推進」の充実を目指し、教育活動を展開してきた。特に算数科においては、「個別最適・協働的な学び」と「わかる喜び」を合言葉に児童の学力向上に向けた取組を充実させている。

2 児童の実態と研究テーマについて

算数科における児童の学力は、全国学力・学習状況調査、埼玉県学力・学習状況調査の正答率において、いずれの学年も平均値を下回っている。思考力・判断力・表現力の定着に課題があるとともに、記述式の問題を苦手としている児童も多い。学力分布には広範囲のばらつきがあり、学力の多極化と呼べる状況である。

これらの実態から、今年度の研究テーマを「個別最適・協働的な学びを通した、わかる喜びを共感できる授業」と定めた。これは、個別最適な学びを通して、学力差を問わず全児童の学習意欲を向上させること、協働的な学びを通して、児童の思考力・判断力・表現力を高めることを目的としたものである。

児童が「分かる喜び」を分かち合う瞬間を、授業において数多く生み出すことで「みんな笑顔の八幡小」の実現につなげたい。

3 研究仮説について

本研究では、算数科を研究対象として、以下2つの研究仮説を設定し、実践に取り組んでいる。

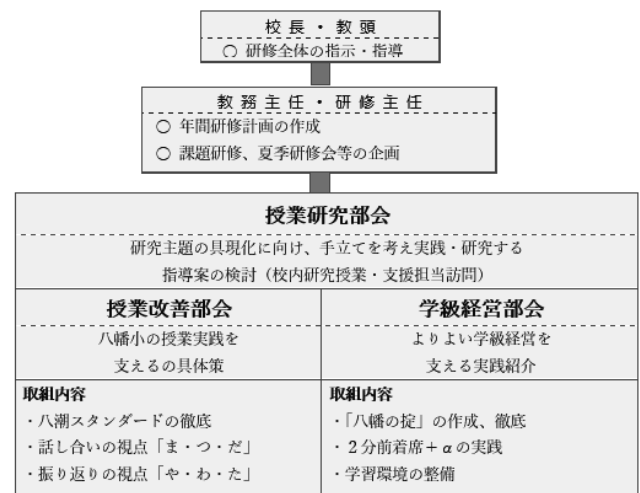
【仮説1】

児童が前向きに取り組みたくなる課題設定と、解決の見通しを持たせる指導を工夫すれば、主体的に学ぶ態度が育つだろう。

【仮説2】

友達と意見を交流し、協働的に課題を解決する指導を工夫すれば、自分の考えが深まり、思考力・表現力・判断力が身につくだろう。

4 研究組織について



5 具体的な取組

(1) 八潮スタンダードの徹底



「つかむ・見通す」→「考える」→「深める」→「まとめる」、の展開を、本校の算数科の授業モデルとして、全学級で徹底している。授業の流れが児童に身につき、学習の見通しをもつことにつながっている。

(2) 複線型授業「SHOW TIME」の指導

つかむ
見通す

① 時間も距離も違うときの速さは、どのように比べればよいだろうか。

考える

複線型授業「SHOW TIME」
児童一人ひとりが自分の興味や能力に応じて学習方法を複数の中から選び、主体的に学習を進めることができる。

深める

八幡システム下の流れ

教師と考える 個人で解決

友達と協働

SHOWTIME

1. どの線分のどの部分かを見、(線分を比べて)考える。
2. ヒントがほしい、先生からヒントをもらい、もう少し自分で考える。
3. 先生と考える。
4. 友達と協働で考える。
5. 友達にアドバイスをもらう。
6. (ま・つ・だ)のしくみで自分の考えを伝える。
7. できあがり。アドバイスが欲しい友達に伝える。(ま・つ・だのしくみで自分の考えを伝える)
8. ひびきを確認する！(ま・つ・だのしくみで自分の考えを伝える)

まとめる

② 時間も距離も違うときの速さは、1秒間あたりに走った距離や1mあたりにかかった時間を調べれば、比べることができる。

児童一人一人の興味や能力に応じて、複数の学習方法から自身に合ったものを選択し、主体的に学習を進める時間を設定している。個別最適な学習方法を選び取る活動を通して、問題を主体的に解決しようとする意欲が高まっている。

(3) 話し合いの「ま・つ・だ」の指導

①自分の考えを表現「ま・つ・だ」

自分の考えを表現しよう

ま まずは、～

つ 次に、～

た だから、～

☆自分の考えを整理
☆「ま・つ・だ」を使って友達と考える。

思考や表現を支える
話し合いの視点を絞る
話し合いの質を高める

協働的な活動を充実させる「ま・つ・だ」を合言葉に指導している。特に、「考える」「深める」場面では「ま・つ・だ」(まずは～、次に～、だから～)を基に自分の考えを整理することができ、協働的な学習において児童同士の話し合いの質が高まっている。

(4) 振り返りの「や・わ・た」の指導

②振り返りの視点「や・わ・た」

振り返りの視点「や・わ・た」

や やってみたことがうまくいったかな？

わ わかった！こんなこと

た ためしてみたいな○○さんの考え

☆今日の学習でどんな力が身についたのか、自分の考えはどうだったのか振り返る。

自分の成長
次時への意欲

振り返りの視点「や・わ・た」を作成し、学習のめあてに沿って振り返りの指導に活用している。これにより、自分や友達の考えから得た学びをメタ認知し、再構築することができ、学びの質が深まっている。

(5) 八幡の掟「2分前着席 + a」の工夫

学級規律「八幡の掟」

低学年：時間を意識し、2分前に自分からすわろう。
中学年：2分前に自分からすわり、線・日付を書き、前時のノートを読んで待とう。
高学年：2分前に自分からすわり、線・日付を書き、前時のノートを読んだり、問題を解いたりして待とう。

2分前には着席しよう
ノートに線と日付を書き、前時のノートを読んで待とう。
(自分のノートはちゃんと読んでおく)

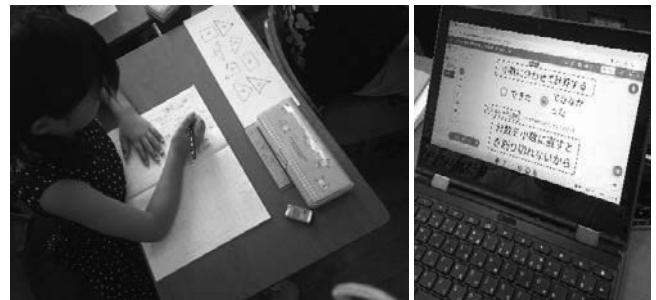
かたがた名人を自撮しよう
かたがた名人を自撮しよう
かたがた名人を自撮しよう
かたがた名人を自撮しよう

かたがた名人を自撮しよう
かたがた名人を自撮しよう
かたがた名人を自撮しよう
かたがた名人を自撮しよう

規律整い、なるほどがあふれる交流

「八幡の掟」(学習規律)を作成し、学習環境の整備を行っている。特に「2分前には着席しよう」では、次時の授業準備はもちろん、前時のノートを見直したり、算数の練習問題を解いたり具体的な姿を発達段階に応じ、全学年で取り組んできた。

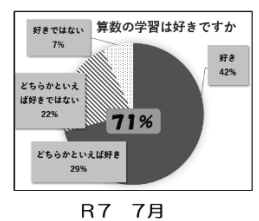
(6) 「くりかえしタイム」による習熟学習



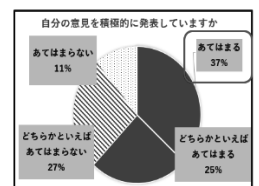
朝の学習活動である「くり返しタイム」では、取組内容を精選し、児童に確かな学力を身に付けさせている。身についた力を実感することで、自己の成長を確かめ、次の学習への意欲付けを図っている。

6 成果と課題

【成果】※学習アンケートより
○友達との協働学習や、個別最適な選択学習の実施により、児童の学習意欲が向上した。



【課題】※学習アンケートより
●「自分の意見を積極的に発表していますか」の設問には、前向きな回答が増えているもののまだ十分に高まっていない。



●学力については、次年度の全学調・県学調の結果につなげるべく今後さらなる向上が課題である。

幸せ創りを目指して、社会（世界）を変える力の育成

～教育課程特例校 新教科「栢間学」を通して～

久喜市立栢間小学校

校長 鹿見島 徹

1 はじめに

本校は、1873年に開校し、今年で創立152周年を迎える歴史と伝統のある学校である。令和7年度在籍児童数59名と市内で最も小規模な学校ではあるが、保護者、地域の方々の協力・協働体制は充実している。学校教育目標「幸せを創る力の育成」のもと、自分も幸せ、他人も幸せを、世界全部が幸せになるために教職員一丸となって取り組んでいる。

2 主題設定の理由

(1) 児童の実態

3・4年、5・6年合わせてそれぞれ16名以下で複式学級となる規模であるため、多様な人間関係が築かれにくい。兄弟姉妹のような関係で仲は良いが、知らない人や年齢の離れた人と積極的に関わろうとする意欲も機会も乏しい。また、地域の行事やイベントに参加すると答える児童や、社会や地域は自分たちの力で変えられるという社会参加の意識や社会の当事者としての意識は低い傾向がある。

(2) 教職員の危機感

前述のとおり、児童数の減少は学校の統廃合が懸念される。新たな学校に場所も名前も生まれ変わるということは、栢間という地区で生まれ育ったということが学校としては取り組みにくくなることを意味する。児童数の減少や統廃合は避けては通れないかもしれないが、今通っている子供たちに、栢間の地域で生まれたという証と誇りをぜひ持たせたい。学校がなくなってからでは取り返しがつかないという危機感を全教職員が共有している。

(3) 東京大学中邑賢龍先生の御指導

校内研修において、令和6年度に、授業改善を目指した個別最適な学び・複線型授業の取組を行った。個別最適な学びの講師として、東京大学先端科学技術研究センターでLEARNを主催するディレクターでシニアリサーチフェローの中邑賢龍先生をお呼びした。

そこでの御指導は私たちを覚醒させる目からうろこの御指導であった。「日本の教育はこのままでいいのか」「明るく・仲良く・元気のよい子の標準的な人間像を設定し近づける意味はあるのか?」「学び=受験社会」「子供のポテンシャルを潰す社会となっていない

いか」などなど、これ以外にもまだまだ考えさせられる御指導をたくさんいただき、自分たちの教育観、指導観を根底から振り返ることとなった。

(4) 次期学習指導要領を見据えて

令和6年12月25日に中央教育審議会へ「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」の諮問があった。そこには、「多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方」とあり、教育の質の向上に資する可能性を含めた、子供たちの可能性が輝く柔軟な教育課程編成の促進が言われている。学校や教員が教育課程の当事者として独自に設定し、着実に実行していくことが求められている。決まっていること、言われていることを行うのではなく、主体的に取り組んでいることが次期指導要領の方向性であることが読み取れる。

(5) 総合的な学習の時間との違い

以上のことから研究主題を「幸せ創りを目指して、社会（世界）を変える力の育成」と設定した。児童の実態、教職員の思い、中邑先生の御指導、次期学習指導要領、そして本校の教育目標を考えあわせた結果の研究主題である。しかし、ここで問題が生じた。当初、総合的な学習の時間（以下、総合）で取り組もうと考えていたが、総合の目標は「自己の生き方を考えていくための資質・能力」となっている。本校の主題は「社会（世界）を変える力」なので、自己ではなく、ある意味「他者」が対象となり、根本的なところで総合とは目的が違う。

(6) 新教科の創設の必要性

既存の教科や領域に「社会（世界）を変える力」を主題として育成するものがない以上、これは新たに作り出すしか方法がないと考え、文科省の「教育課程特例校」制度を利用することとした。ここに新教科「栢間学」がスタートすることとなった。

3 新教科「栢間学」について

(1) 教材設定の基本方針

- ・栢間地区、栢間小のオリジナルであること
 - ・内容が他の教科では置き換えられないこと
 - ・他者との協働、共創での解決が必要なこと
- 以上の3点を、考慮して教材選定にあたった。

(2) 教材と履修学年

3年：内藤正成

徳川十六神将の一人である内藤正成が陣屋を置いていた跡地に栢間小学校が建てられた。

4年：天王山塚古墳

県内有数の100mを超える前方後円墳。

5年：栢間桃梨橋

10年前に栢間小学校が名付けて世界初の工法で作られた圏央道。

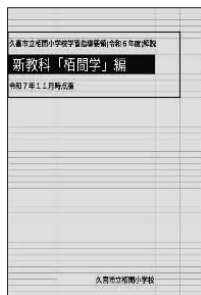
6年：量子力学

ノーベル賞候補になっている本校卒業生の古澤明先輩の専攻研究分野。

1・2年は、生活科において「栢間学」を学ぶ上で必要な素地を培うこととした。

(3) 学習指導要領の作成

新教科はあくまで教科であるので、学習指導要領を作成した。総説には新設の経緯や基本方針、評価の考え方を掲載し、目標、時数、全体計画、単元計画、評価方法、内容の取扱いなどを盛り込んだ。



【自作した学習指導要領】

(4) 各学年の目標と具体的な内容

① 3年「内藤正成」

内藤正成のことを調べ、それを地域へ広く発信し、内藤正成ファンを一人でも多く増やすようにする。

- ・陣屋跡という看板の設置をしてもらうために、教育委員会へ手紙を書く。
- ・知ってもらおうポスターやチラシを作って、近隣の店舗に貼らせてもらう。
- ・親しんでもらうようにキャラクターをデザインする。
- ・生誕500年祭を児童の企画で地域を巻き込んで行う。



【3年生作成のまさなりくん】

② 4年「天王山塚古墳」

天王山塚古墳のことを調べ、それを地域へ広く発信し、栢間王の子孫としての自覚を持ってもらう。

- ・立正大学博物館の学芸員からの説明を受ける。
- ・古墳でコーフン協会の会長まりこふんさんから古墳の魅力について聞く。
- ・榛名山と天王山塚古墳の関係について調べる。
- ・栢間王の物語をミュージカルにして上演する。

③ 5年「栢間桃梨橋」

栢間桃梨橋のことを調べ、それを地域へ広く発信し、栢間桃梨橋を中心とした街づくりに住民を巻き込んで進める。

- ・NEXCO 東日本から工法や建設の意義について聞く。
- ・流通という観点から栢間桃梨橋の日本経済での役割を考える。



【NEXCO東日本から説明を聞く】

- ・菖蒲PAでの聞き取り調査から、道の駅設置やその実現可能性について検討する。

④ 6年「量子力学」

量子力学について調べ、それを地域へ広く発信し、地域を巻き込んで古澤先輩のノーベル賞受賞を応援する。

- ・高エネルギー加速器研究機構を訪問・見学し、さらに産総研で量子コンピュータを見学する。
- ・KEK キャラバンで出前授業を実施する。
- ・具体物を用いて量子の世界を分かりやすく説明する。

(5) 栢間学の評価について

他教科と同様に観点別評価を行い、評定も通知表に明記する。以下はその評価規準の一部を紹介する。

知識・技能

- ・初対面の人でも話しかけることができる。
- ・調べたことを自分の言葉で説明することができる。

思考・判断・表現

- ・問題解決のために、面会・面談をして質問をしている。
- ・問題解決のために、話し合いや制作の場で考えを提案している。

主体的に学習に取り組む態度

- ・問題解決のために、様々な手段を用いようとしている。
- ・問題解決に失敗したり、難題を前に絶望したりしても粘り強く試行錯誤して現状打破しようとしている。

4 成果と課題

他者に対して幸せづくりを行う意識が児童の中に育ってきた。新たな知識を活用し、地域に発信していくことで社会や世界が変わっていく実感と自信を得た。教員においては既存の教科についても一度見直す結果となった。また、未知のものを教えるため、教材研究の力が確実についた。さらなる、取組の充実と児童一人一人に合った支援に取り組んでいく。

5 おわりに

まだまだ途に就いたばかりの新教科であるが、これからも継続できるよう取組の充実に努めたい。また、教育課程編成の主体者としての自覚を持ち、当事者意識を持って授業に臨む本校職員の姿勢が、他の学校の参考となることを切に願う。

自ら考え、新しい見方・考え方を発見し、 「自分でできる！」を実感できる児童の育成 ～仲間と伝え合う中で、考えを深める授業の創造～

宮代町立百間小学校

校長 竹内 知子

1 はじめに

本校は、宮代町の南部に位置し、明治6年に西光院の校舎として、進修学校という名前で開校した、今年で創立153年の伝統と歴史のある学校である。学区は広く、東武動物公園駅の近辺から、姫宮駅前の住宅地や北春日部、久喜方面まであり、多くは農村地帯で自然豊かな環境にある。本校の敷地内には、大正15年に寄贈された石製滑り台があり、令和元年に国の登録有形文化財に登録され、地域、子供たちから学校のシンボルとして親しまれている。

2 主題設定の理由

本校は、「心豊かなたくましい児童の育成」進んで学ぶ子・やさしい子・たくましい子の学校教育目標を掲げている。知・徳・体バランスの取れた児童の育成に向け、「全力投球」「心配り」を合言葉に全職員が一丸となって、「チーム百間」で教育活動に取り組んでいる。

算数科の研究では、自力解決していく過程を大切に、話し合う場を多く取り入れてきた。また、考えを伝えることに苦手意識をもたないように、発表の話型を示したり友達や教師の説明を参考にしたりすることで、説明する力をつけてきた。自分の考えを説明する力を養い、伝え合う楽しさを味わわせ、「自力解決」⇒「深める」の活動を大切にしてきた。

本年度は算数科の研究を4年次として更に研究を深め、一人一人が算数の見方・考え方を働かせながら、自力解決し、伝え合う活動を通して、多様な考えに触れることで「自分でできた！」という達成感と自信を持つ児童を育成するために本研究主題を設定した。

3 目指す児童の姿（引き出したい児童の言葉・教師の言葉）

- ・学習の楽しさや喜びを味わう姿「できた!」「わかった!」
- ・自信をもって進んで学習に取り組む姿「自分でできる!」「よしやるぞ!」
- ・互いに伝え合い、認め合い、仲間と肯定的に関わる姿「それいいね!」
- ・学んだことを生かして自力解決に取り組む姿「この考え方（方法）が使える!」

4 目指す児童にせまるための仮説・方策

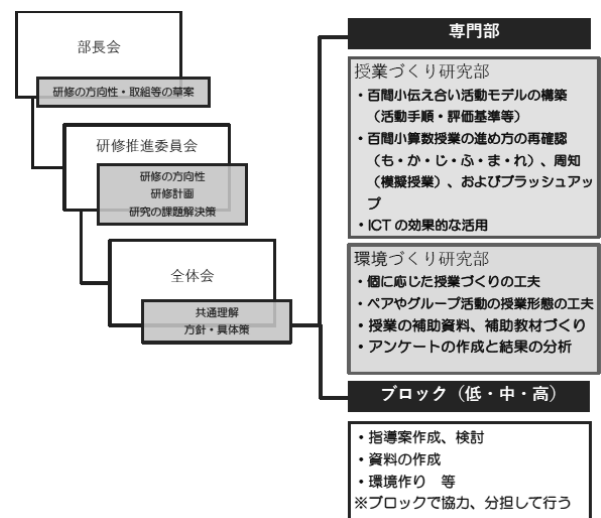
仮説1

考えを伝え合い、思考を深める授業を行えば、様々な考えに触れ、新しい見方・考え方に気づき、児童の自分でできる喜びや自信につながるであろう。

仮説2

学習効果を高める環境づくりを行えば、算数の見方・考え方を働かせながら、考えを深めることができるであろう。

5 研究組織



6 専門部の取組

(1) 授業研究部

○「百問小算数授業の進め方」の構築

- ・授業の流れがはっきりし、児童が見通しをもって授業に取り組める。
- ・「今、何をやっているか」が明確になる。
- ・板書やノートが整理され、児童が45分の授業を振り返ることができる。



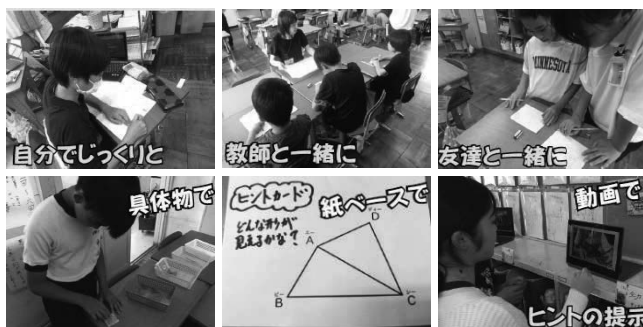
問題をつかもう

自ら考えたくなるような「問い」を投げかけ、学習の意欲を高める。



自分で考えよう (自力解決時の時間の使い方)

学ぶ場所の選択を児童自ら行わせ、学び方を学ぶ学習を進めた。



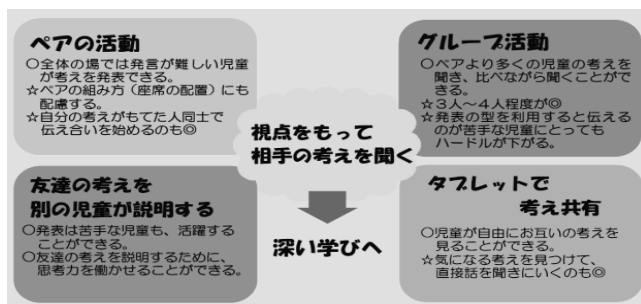
○効果的な ICT の活用

児童が思考したり、考えを表現したりする時の手助けとなるよう活用した。

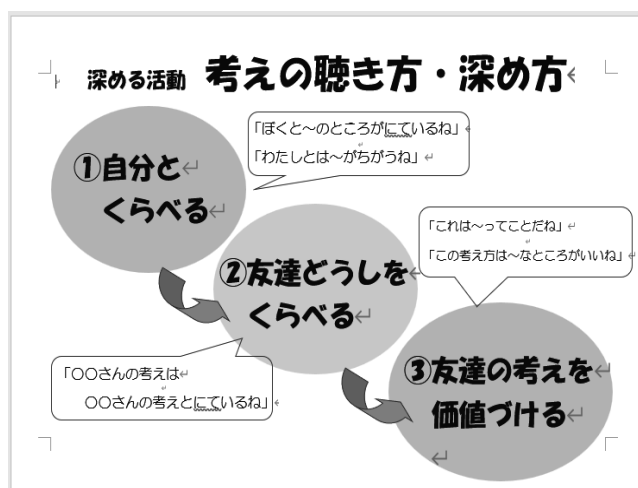


(2) 環境づくり部

○個に応じた授業づくりの工夫、ペアやグループ活動の授業形態の工夫



○深める活動での友達の考えの聴き方・深め方のモデルの作成



○算数アンケートの実施

算数の学習に対する意識を調査したものを分析・検証し、授業改善につなげている。

○ノートモデルをもとにしたノート指導の徹底

低・中・高学年ブロック別にノートモデルを提示し、学習の流れや自分の考えを分かりやすく書くことで、児童自身の学びにつなげる。



○見方、考え方を育むための補助資料・補助教材の活用

算数コーナー全クラスに設置し、既習内容の確認や活用に生かすなど、自力解決で活用する手がかりとなる環境を整備した。

7 成果と課題 (○成果 ●課題)

○全校で統一された授業の流れや継続した研究によって児童自身に学び方の定着が図られた。

○「自分でできた」実感を持たせることで、進んで対話しようとする児童が増えた。

○主体的に友達との関わりを持つことで、算数に意欲的に取り組む児童が増えた。

●学力の伸びがなかった学年がある。対話的な学習を取り入れつつ、基礎基本に立ち返り、反復練習をする必要がある。

●算数で行った研究を教科横断的に他教科へ広げていく必要がある。

3G マインドセットを育む探究学習における指導方法の研究 ～指導と学習と評価の一体化の観点から～

さいたま市立大宮国際中等教育学校（前期課程）

校長 根岸 君和

1 これまでの研究について

大宮国際中等教育学校（略称：MOIS）は、2019年度の開校以来、国際バカロレア（IB）の教育理念に基づき、「探究的な学び」を教育活動の中心に据えてきた。2024年度の研究では、「Grit・Growth・Globalのマインドセットを育む探究学習における指導方法の研究～指導と学習と評価の一体化の観点から～」を主題に掲げ、特に「指導と評価の一体化」に焦点を当てて実践と検証を行った。その成果として、全教科で探究サイクル（探究・行動・振り返り）を明確に意識した授業設計が進み、「探究の問い」の意義や「評価を学習に生かす」という視点が定着しつつあることが確認された。また、IBの「指導のアプローチ」「評価のアプローチ」の観点から自己評価を行い、MOISとしての教育の質の保証の基盤を整えることができた。

一方で、昨年度の取組を通じて、教師によって意図された「学習と評価のつながり」が、生徒の実感として十分に共有されていないといった課題も明らかになった。具体的には、授業内で形成的評価を実施しても、生徒がフィードバックをどのように活用すればよいのかを自ら考え、次の学びへと結びつける姿勢には個人差が見られたことである。このことから、今年度の研究では、「教師中心の指導改善」から「学習者中心の学びへの改善」へと焦点を移す必要があると考えた。

2 研究主題の設定

本年度の研究は、昨年度の研究成果を継承しつつ、「生徒の理解」と「生徒エージェンシー」に焦点を当て、指導・学習・評価のつながりがどのように生徒の学びに作用しているのかを明らかにすることを目的とする。学習者がフィードバックを受け取り、それを「自分の

学習を改善するための手がかり」として活用できるようにすることで、真に学習者中心の探究が成立すると考える。

3 MOISが目指す「生徒の理解とエージェンシーに基づく指導・学習・評価の一体化」

各教科主任からなる全体教科会において「指導と評価の一体化」についての議論を重ね、次の通り定義をした。

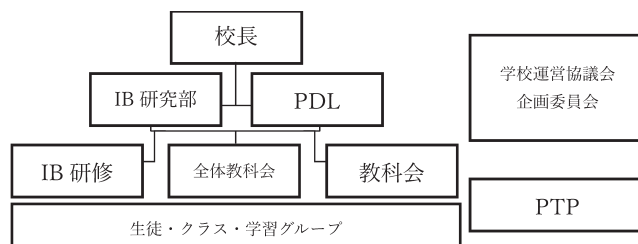
指導・学習・評価の一体化とは、教師が設計した学びの目的を、生徒自身が理解し、その理解に基づいて自らの学習を調整・改善しようとする循環的なプロセスである。

すなわち、教師は授業において生徒が「何のために学んでいるのか」を理解し、得られたフィードバックをもとに次の行動を自ら決定できるようになることをめざす。

このような「学習者中心の一体化」の実現こそが、MOISが目指す探究的学びの深化につながると思う。

4 研究及びその推進の方法

持続可能かつ効果的な研究と実践のため、下図のような校内組織により研究に取り組んだ。



月に1度行われるIB研修においては、教科に依らない学校全体での共通認識の確立や教科同士の取組内

容の共有、教職経験や MOIS での勤務年数が長い教師と短い教師相互の交流による理解の深化などに取り組んだ。全体教科会及び各教科会はそれぞれ時間割の中に隔週で設定した。全体教科会は各教科主任・IB コーディネーター・IB 研究部長・各教科によって組織され、特に教科同士の横のつながりを意識し、各教科の取組の理解や全教科に共通する事項や研究の土台となる事項（例えば「指導と評価の一体化」の定義の作成）に関する研究・協議を行った。教科会では、全体教科会での内容を踏まえ、具体的な各教科の取組について研究・協議に取り組んだ。

研究にあたっては、昨年度に引き続き「指導と評価の一体化」を研究主題としつつ、各教科が前年度の実践と成果を踏まえて研究を継続した。今年度は特に、生徒が授業や評価をどのように理解し、学びにどのように生かしているのかという視点を意識的に取り入れ、教師が生徒の理解の深まりを的確に捉えながら授業改善を図ることを重視した。

MOIS は IB ワールドスクールとして、IB プログラムの「プログラムの基準と実践要綱」を用いて自校のプログラムと実践を自己評価している。「プログラムの基準と実践要綱」は、学校と国際バカロレア機構がプログラムを実施するにあたりその品質と忠実性を保証するための基礎となる一連の原則であり、「目的」「環境」「文化」「学習」それぞれのカテゴリーについての満たすべき基準と実践の方向性や方針が示されている。「学習」カテゴリーには「一貫したカリキュラムのデザイン」「生涯学習者としての児童生徒」「指導のアプローチ」「評価のアプローチ」という四つの基準が示されており、本研究においてはそのうち「指導のアプローチ」「評価のアプローチ」に基づき各教科の取組に対する自己評価を行った。

(1) 全体方針

- ・ IB 「プログラムの基準と実践要綱」の「指導のアプローチ」「評価のアプローチ」を研究の基盤とする。
- ・ 各教科が設定したテーマをもとに、単元 (Unit) レベルでの実践・検証を行う。
- ・ 生徒の学習実感を可視化するため、生徒アンケート

調査およびフォーカスグループ・インタビューを実施する。

(2) 生徒アンケートの実施と分析

本年度は全学年を対象に、「探究学習」「フィードバック」「学習と評価のつながり」に関するアンケートを実施した。得られたデータをもとに、平均値・相関分析による傾向把握とともに、教科別の強みと課題を抽出した。これにより、生徒の学習理解の深まりや、探究活動における自己調整の度合いを客観的に分析することができた。

(3) フォーカスグループによる質的分析

アンケート結果に基づき、特に注目された項目(例:「授業活動と評価課題の関連理解」「フィードバックの活用」「自己評価の定着」など)をテーマに、生徒の実際の言葉を収集・分析し、学習意識の傾向とその背景を明らかにした。

5 公開研究発表会の実施

2025年11月21日(金)に本校で公開研究発表会を実施した。広島県立広島叡智学園中学校・高等学校の主幹教諭である古市吉洋先生を指導者として招待し、指導講評をいただいた。本発表には日本全国から100名を超える教育関係者が参観し、本校の取組を元にしながらか各教科でよりよい教育の形について協議した。

本実践が全国に波及し、指導と学習と評価の一体化に向けた研究が各校で豊かに行われていくことを期待している。



【生徒発表の様子】



【ICT を活用した授業】



【全体指導講評】



【分科会】

不登校、いじめの未然防止、支援率・支援継続率100%を目指す 学級・学年経営

～学力向上と学習環境の充実～

川口市立西中学校

校長 小 出 喜代子

1 はじめに

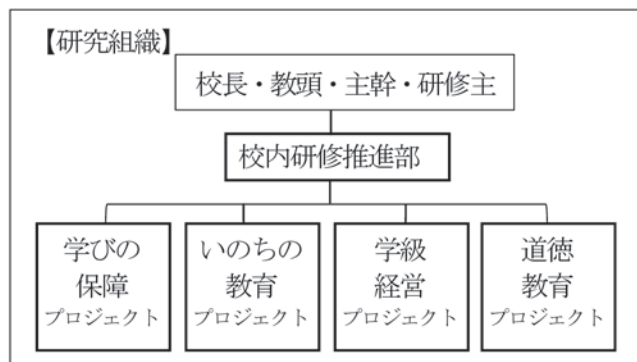
本校は川口市の西部、荒川の左岸に位置しグラウンドは河川敷にある。都市部にありながらも広々とした敷地をもつ恵まれた環境の学校である。学区は川口駅前の商業地域からマンションや住宅が混在する市の中心部である。来年度は開校80周年を迎え、長い歴史の中で地域に根ざした教育を展開してきた。全体的に生徒・保護者ともに学力に対する意識は高く、落ち着いた生活習慣のもと学習に取り組んでいる。3世代西中生という家庭もあれば、ここ数年では海外からの編入生の受け入れが急激に増え、多様な生徒が共に学ぶ環境の中で、「豊かな心と学ぶ意欲をもち、たくましく生きる生徒」の育成を目指し、知・徳・体の調和を目指した教育を推進している。

2 研究主題設定の理由

本校には特別支援学級が設置されていないため、発達に課題のある生徒が通常学級になじめず登校を渋るようになったり、外国籍の生徒の割合が増えることで、文化や考え方の違いからトラブルになったりすることが起きている。そのため個に応じた支援が必要であり「個別最適な学び」が、本校の教育の重要な柱である。そこで、「不登校、いじめの未然防止、支援率・支援継続率100%を目指す学級・学年経営 ～学力向上と学習環境の充実～」を研究主題とし、教職員全体で『誰一人取り残さない』支援体制の確立を目指すことにした。

3 実践計画

昨年度から、「不登校、いじめの未然防止、支援率・支援継続率100%を目指す学級・学年経営 ～学力向上と学習環境の充実～」をテーマに、教職員の共通理解、安心して学べる学校、学習環境の整備を行った。本年度はより具体的に研究に取り組むため、本校の課題に促した4つのプロジェクトチームをつくり、全教職員を配置した。それが、【①学びの保障 ②いのちの教育 ③学級経営 ④道徳教育】のプロジェクトチームである。

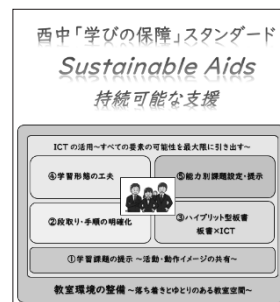


4 実践内容

① 学びの保証プロジェクト

学びの保障プロジェクトチームは、相談室登校・家庭学習支援、外国籍の生徒などの個別の支援策を検討、ユニバーサルデザインの視点による学習環境整備等に取り組んでいる。

全教員を対象に「Sustainable Aids（持続可能な支援）」の実践についてアンケートを実施。結果を可視化してポスターを作成・掲示し、支援意識の継続的な喚起、全校で一貫性のある支援を実践している。また、日本語を母語としないとし、日本語を母語としない生徒は時間割の中に日本語指導の時間を組み込み、別室で日本語の学習支援を行ったり、教室での授業では、ICT 機器による同時翻訳機能を取り入れたりした対応をしている。



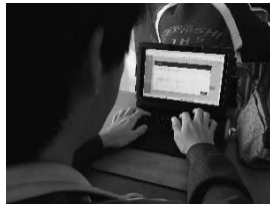
相談室には、パーテーションを設置し、人目を気にせず落ち着いた学習できる環境を整備している。



② いのちの教育プロジェクト

いのちの教育プロジェクトチームでは、命の大切さを基軸にした「こころの教育」を教科横断的に展開している。毎週水曜日にタブレットを使用し、「こころの健康観察」を行ったり、学校保健の先進校に学び、こころを落ち着かせる「呼吸法」の導入を検討したりして、生徒の心身の変化を継続的に把握できるように努めている。

また、川口市サクラ会との連携授業による「いのちの授業」を学年の実態に合わせた内容で実施するなどセルフコントロールの育成を目指した。



③ 学級経営プロジェクト

学級経営プロジェクトチームでは、各学級にいる外国籍の生徒が学級の中で生活していけるような学級集団作り、言語・文化的支援や、生徒間トラブルの未然防止のための生徒どうしの関わり方などの指導の仕方を研究している。

外国籍の生徒の学級でのコミュニケーションのツールとして、翻訳機の持ち込みを認めた。それにより以前よりも言葉の壁によるトラブルは減少している。

市内の特別活動部会の研究授業を本校の教員が行い、より良い学級経営の在り方に向けた実践を共有した。



④ 道徳教育プロジェクト

道徳教育プロジェクトチームでは、道徳教育推進教師を中心に「西中スタイル」の確立を目指し、道徳の授業だけではなく学校生活全体を通じて、生徒自身が

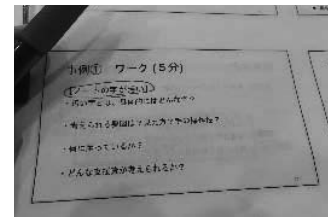
自己の生き方を考えられるように研究している。そこで全校で「西中スタイル」に沿った授業を実施し、統一感ある道徳教育を推進している。

市内の道徳教育の研究授業を本校の教員が行い、道徳教育の指導方向向上と生徒の道徳的価値を育成する授業づくりに向けた実践を共有した。



⑤ その他

小中連携による支援体制の充実を図るため、学区内の小学校と合同研修会を毎年夏季休業中に実施している。今年度は、「子どもの困り感をどう理解するか」をテーマとし、子どもたちが抱える困り感やその背景を心理的視点から理解し、支援・関わり方の工夫を検討した。グループワークを通して小中の教員が事例を共有し、発達段階を見通した支援の在り方を協議した。不登校やいじめの未然防止、早期支援につながる実践的な共通理解を深める貴重な機会となった。



5 成果と課題

4つのプロジェクトによる組織的な取組を通して、教職員間の連携と共通理解が深化し、支援体制の整備と継続性が向上した。不登校生徒の支援が途切れず行われ、登校意欲や学習習慣の維持、外国籍生徒へのICT支援の改善など、一定の成果が見られている。

一方で、プロジェクト間の情報共有や支援成果の可視化・データ化の仕組みづくりが課題として残っており、支援率・支援継続率100%の実現に向けて、運用面の改善と継続的な検証体制の構築が求められる。

6 今後の見通し

学習面・情緒面・社会性のバランスを重視し、個々の生徒が安心して学ぶ環境づくりをさらに推進していく。プロジェクト活動で得られた実践知をデータとして蓄積・分析し、次年度以降の教育活動および地域との連携に展開させ、不登校・いじめの未然防止と学力向上の両立を目指す。



「信頼」と「和」に基づき、自らを考え深め、 より良く学び合う子どもの育成 ～メンタルヘルス研究推進校としての実践を活かして～

草加市立花栗中学校

校長 諏訪 太介

1 はじめに

本校は、教育相談的な配慮を要する生徒が全体の10%を超えており、日常的に全教職員が家庭訪問や電話連絡をとるなど、丁寧な対応を行うことで学校との関係を切らずに現在に至っている。その課題の多くは、感情の表現や困り感、SOSを発信するスキルが弱く、他者との関わりにおいて、受容・許容する力が育っていないことや、集団生活そのものに抵抗がある生徒が多く、自尊感情も非常に低いことである。

本校では、令和3年度から継続的に埼玉県からの委嘱事業で「メンタルヘルス研究推進校」として研究を深めてきた。そのなかで、生徒や家庭への教職員の対応や声かけ等を見直すことから始めた。同時に、学区内の小学校との日常的な連携を強化し、多くの教員や関係機関との連携の中で、生徒一人一人に寄り添った「個別最適な」関わり方について研究実践を行っている。

2 生徒の実態について

本校では、令和6年度の不登校生徒の割合が8%であった。さらに、不登校まではいかないが、教育相談的な配慮を要する生徒は先にも述べた通り、全体の10%を超えている。特に3年生において、感情の表現や困り感、SOSを発信するスキルが弱い生徒が多く、他者との関わり合いや受容や許容する力が育っていない生徒が多い。学校全体としては、集団生活そのものに抵抗があり、その必要性を感じていない生徒の感情が内面に向かい自尊感情が低下している。また、家庭における親子関係の不和からの希死念慮や登校渋りなどの逃避行動を起こす生徒も増えてきている。令和7年度の新入生の中にも小学校時から別室で対応していた生徒がおり、入学式前から中学校の相談室や保健室、学習相談室（ステップルーム）の環境を事前に親子で見学に来た生徒も数名いた。個々の事例により多種多様な対応が求められることに変わりはない。これらの課題の解消を目指し、個別最適な支援策の検討と支援体制づくり、教職員のスキル向上を目指す。

年度が替わって新たに加わった教職員とも同じ方向を向いて対応に当たれるよう、校内研修や会議等を通

じて実践を推進してきた。

【令和6年度研究報告：生徒指導課 HP 掲載資料より】

3 成果指標について

まずは昨年度までの取組を経て、令和7年度の課題として、下記の3点があげられる。

- ①担任に負担が偏らない体制づくりと支援方法の工夫
- ②医療機関だけでなく、家庭支援機関とのさらなる連携強化
- ③不登校・長欠生徒への学習支援と社会的自立に向けた支援方法の充実と改善

これらは、研究推進時期だけでなく、今後も持続可能な取組として継続していくためには、必要不可欠な視点となった。そこで、これら3つの課題については、令和7年度に以下の対策を講じた。

- ①教室復帰を目指す生徒の対応は、時間割に対応教員を組み込むなどして、全教職員での対応を可能にした。(学習相談室の対応)
- ②迅速な情報共有と素早いレスポンスを心掛け、組織での対応を推進した。
- ③web、外部の教育機関、校内相談室、校内学習相談室等の個別最適な環境の提供とそのタイミングの見極めを各種部会でのケース会議で協議し推進した。

以上の課題に対する対策を講じたうえで、R7の成果指標を以下の2点とした。

- ①年間30日以上の不登校生徒を8%→6%に減らす
- ②対応率100%、見落とし0%

4 具体的な取組

①学校の組織的な取組について

生徒指導部会・教育相談部会が週1回実施した。部会への参加者は、校長、教頭、教務、養護教諭（1名）、さわやか相談員、SSW、SCが参加し、両部会には、学年生徒指導・教育相談担当が加わった。

生徒指導対応教諭は両部会に参加し、各会議の情報共有と対応の検討を中心となり行った。教育相談部会では、全職員から上がる気になる生徒の情報共有や月ごとの欠席日数を挙げ、対応策を練るなど不登校の継続、未然防止に細心の注意を払うことができた。

各学年からの情報提供は、配布プリントに後ほど目を通すこととし、特に気になる生徒や早急に対応が必要な生徒を中心に検討している。

また、生徒が抱える諸問題について情報共有しケース会議を実施するなど、必要に応じて医療機関や関係援助機関へつなげる手立てを検討することとしている。さらに必要に応じてSSWを活用し、不登校生徒の家庭訪問等を実施している。

②さわやか相談室・学習相談室の利用について

学級集団での生活が困難な生徒の居場所として、本校では「さわやか相談室」と「学習相談室」を開設している。この部屋を利用したい生徒は、保護者からの申し出により、部会で検討したり、管理職との面談を通したりして、一定の条件をもとに、過ごすことになっている。

「さわやか相談室」には市費の相談員が常駐しており、隔週で勤務するSCや毎週水曜日に勤務するSSWの面談を受けることも可能である。

また、「学習相談室」ではパーティションで区切られた個別ブースで各自が自学習を実施している。この部屋には、学習指導補助員が常駐するほか、全教職員が時間割で割り振られて生徒とのコミュニケーションや自学習のサポートを行っている。

これらを利用する生徒は、朝登校したら職員室に来室して、学年の職員に

- ①どの部屋で過ごすか
- ②給食時はどうするか
- ③何時間目まで過ごすか

		相談室生活ノート				
		学年 名前 ()				
		日	月	水	木	金
		(日)	(火)	(水)	(木)	(金)
登校時間						
1時間目						
2時間目						
3時間目						
4時間目						
給食						
5時間目						
6時間目						
今日支那						
残って一葉						
下校時間						
担当職員						

について、自分で報告することになっており、その報告を用紙に記入した職員が担任の机の上に伝達する形式をとっている。

さらに、写真のように毎日、自分でたてた時間割を本人が簡単に記入して帰宅時に担任に提出することになっているので、担任が本人に会えなかった時も、その日にどんな学習をして過ごしたのかがわかる仕組みとなっている。この用紙に書いて提出する取組は、昨年度に学習相談室利用者が増えて、担任や学年職員が一人一人の状況を把握することが困難であったことから、令和6年度の3学期から試験的に取り入れたものである。担任の空き時間等の関係で、相談室利用の生徒との交流が難しいときも、この用紙で担任とのやり取りを可能としたことから、担任や生徒からも好評を得ることとなった。学習相談室やさわやか相談室で過ごす生徒の中には、授業をオンラインで受けたり、時間割によって実際の授業を教室に受けに行ったりすることも自身で選択できるようになっているため、生徒のニーズに合った対応が可能となっている。

5 成果と課題

【12月8日の研究発表の様子】



【成果】

- ・自分の気持ちを発信できる生徒が増えてきた。
- ・他者との関わりにおいて、受容・許容する力が学年を追うごとに涵養されている様子が伺える。
- ・10月現在の不登校数は、前年度比1%減
- ・不登校生徒の多様なニーズに対応することで、学校にいられる時間が増えた。

【課題】

- ・個々の生徒の多様な現状に対応できる人員の確保とニーズに応じた学習支援の在り方の検討
- ・教員の入れ替わり後も持続可能な取組であるかの精選（PDCAサイクルによる見直し）
- ・教員のメンタルヘルスリテラシーに対応するスキルアップをはかること

主体的・対話的で深い学びを推進し、生徒の未来につながる力の育成 ～ ICT 端末の効果的な活用と地域連携を軸とした教育活動の構築～

上尾市立上尾中学校

校長 井浦博史

1 はじめに

本校は昭和22年創立の来年度80周年を迎える歴史と伝統が積み重ねられた学校である。校区には、上尾駅があり、また埼玉県を縦断する国道17号線が通っている。近隣には大型商業施設、運動公園、アイスアリーナ、県立武道館などがあり、車や人の往来が多い地域である。しかしながら、古くからの住宅や畑などもあり、にぎやかではあるが、古くからの宿場町といった落ち着いた風情もある。

本校教育目標は理念として「夢に向かって努力する生徒」を掲げ、「自ら学ぶ生徒」、「思いやりのある生徒」、「健康でたくましく生きる生徒」の知徳体のバランスの取れた生徒の育成を目標としている。

生徒は穏やかで全体的に落ち着いており、登校時に校門で職員があいさつをしている際も、生徒が自分から声を出してあいさつをしたり、会釈をしたりする生徒も多い。学習面に関しても落ち着いて授業を受ける姿勢が身に付いている生徒も多い。



2 研究について

(1) 研究の背景

ア 本校生徒の実態

素直で落ち着いて学校生活を送っている生徒が多い。全国学力・学習状況調査では、ほとんどの項目で平均正答率が平均値を上回っている。一方で国語の「情報の扱い方」や数学の「数学的表現を用いて説明する力」に課題が見られた。また県学力・学習状況調査から、非認知能力の伸びに課題が見られた。また、市の学力調査では、思考・判断・表現や主体的に学習に取り組む態度の観点が目標値に届かない生徒が一定数いる。

イ 求められている資質・能力

・人工知能 (AI) ・ビッグデータ

・ Internet of Things (IoT)

・ ロボティクス等の先端技術

⇒社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難な時代 VUCA の時代の到来

・ 変動性 (Volatility)

・ 不確実性 (Uncertainty)

・ 複雑性 (Complexity)

・ 曖昧性 (Ambiguity)

GIGA スクール構想のもと、児童生徒1人1台端末環境と高速大容量の通信ネットワーク環境が実現されることを最大限生かし、端末を日常的に活用するとともに、教師が対面指導と家庭や地域社会と連携した遠隔・オンライン教育とを使いこなす (ハイブリッド化) など、これまでの実践と ICT とを最適に組み合わせることで、学校教育における様々な課題を解決し、教育の質の向上につなげていくことが必要である。

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』(令和3年 中央教育審議会答申)

(2) 研究のねらい

『ICT の効果的な活用』<グローバル>

『地域と連携した教育活動』<ローカル>の2つの視点 (マクロとミクロ) から研究に取り組むこととした。

3 研究仮説

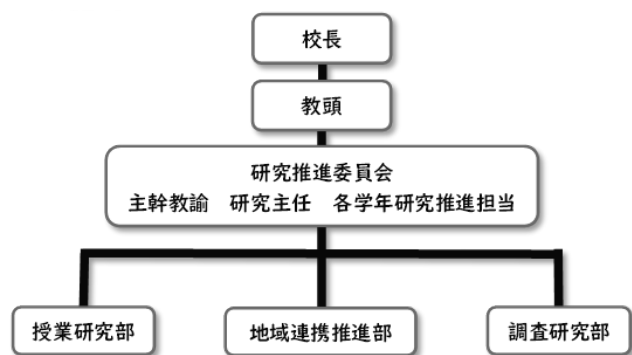
本校では、求められる資質・能力を身に付けさせるために、2つの仮説を設定し実践に取り組んだ。

○授業における話し合い活動などの『協働的な学び』の

なかで、ICT を効果的に活用することで、コミュニケーションが活性化し、より多様な視点や価値観に触れることができ、未来の諸課題の解決に必要な思考力や判断力が身に付くだろう。

- 地域と連携した教育活動を推進することにより、地域社会への理解を深め、自分と社会とのつながりを実感し、身近に起きている諸課題へ主体的に関わろうとする力が身に付くだろう。

4 研究組織



5 各研究部の取組

(1) 授業研究部

「つながる」をICTでさらに効果的に

各教科等の協働的な学びにおいて今までホワイトボードや紙媒体を取り入れていたものを、ICT活用に切り替えることでどのような利点、欠点があるのかを検証するため、授業案の意見交換やプレ授業を実施した。

○使用したICTツール

- ① Google スライド…プレゼンテーション作成の用途ではなく、Google ジャムボードに替わる方法として、生徒の意見共有のツールとして活用を試みた。
- ② スクールタクト (school Takt) …クラウド型の授業支援システム。意見共有できる。
- ③ ロイロノート…生徒の「思考力」「表現力」「学ぶ力」を育むことを目的とした授業支援プラットフォーム。今年度、本校独自に試験導入した。

(2) 地域連携推進部

「自分と世界とのつながり」を地域社会から体感

各教科等 (各教科、総合的な学習の時間、特別活動) において、地域と連携して行ってきた教育活動をまとめ、学年間、教科間で共有を図った。学校運営協議会

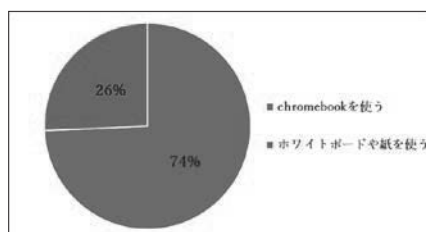
をはじめ近隣の商業施設や企業等と連携し、生徒の学習の成果を校内にとどまらず、社会に広げる取り組みを促進した。



(3) 調査研究部

ICT活用の効果を、生徒目線で分析

Google フォームを用いて生徒アンケートを実施し、研究部会で回答結果を分析



話し合い活動ではICT端末とホワイトボードや紙を使用するのは、どちらの方が話しやすいか。

○ICT端末がよい理由

- ・紙よりも速く全員の意見を確認できる
- ・同時に全員の意見を共有できる
- ・図や資料なども共有しやすい
- ・分からないことを調べながら話し合える
- ・入力の方が速く簡潔にまとめることができる。

○ホワイトボードや紙がよい理由

- ・ネット環境が悪く接続に時間がかかってしまう
- ・準備に時間がかからず、すぐに話し合える
- ・1枚に書くことでコミュニケーションがとれる
- ・タイピングが苦手で入力が間に合わない

6 研究の成果 (○) と課題 (●)

- 協働的な学びを深めることができた
- 学習内容・状況に応じたICTの活用と授業改善
- 学習を自分事として活かせる地域連携
- 教師同士の学び合いの深化
- 生徒のICT活用スキルの課題
- 学校全体のICT活用法を共有するシステム構築
- 教員が地域教材への知識をさらに深める。
- 持続可能な地域連携教育の推進
- ※二つの視点で研究を推進したことにより、学習指導の視点が広がり、充実することができた。

切れ目のない小中一貫教育の推進

～9年間を見据えた生徒指導の深化を目指して～ part.3

川越市立芳野中学校

校長 武井 理

1 はじめに

本校は、川越市の北東部、北側を入間川と接する田園地帯に位置している。昭和22年4月1日に創設され、昭和30年4月1日に市町村合併により現校名となり、令和7年度で創立79年目を迎える。芳野地区は農業地域が中心で、昔から住んでいる住民が大部分を占め、三世同居家庭が多い。しかし、近年は共働き家庭の増加や宅地造成も進んでいる。保護者の多くは本校の卒業生である。地域はまとまり意識が強く、学校に対して強い期待を寄せている。令和7年度現在の生徒数は136名である。学校教育目標は「心豊かにたくましく生きる生徒」、校訓は「自立・礼節・創造」である。令和7年度は「新たなチャレンジで成長する教員・生徒」を合言葉に学校経営を推進し、重点項目の一つとして川越市校種間連携教育事業を活用した小中連携・小中一貫教育の充実を図っている。

2 研究主題設定の理由

本研究は、これまでの2年間実施してきた小中一貫教育の取組を、生徒指導の視点を柱として、さらに深化させる「Part.3」として位置付ける。令和6年度(Part.2)の研究活動により「芳野地区小・中連携教育」の内容が学校生活に意図的、意識的に反映され、生徒指導主任による定期的な小学校訪問や情報交換を通じて、中1ギャップの解消の一助となり配慮が必要な生徒への多面的な対応や生徒指導の同一歩調が可能となった。

しかし、生徒の実態調査では「授業2分前学習」(60.7%)や「自主学習(家庭学習)」(75.6%)の取組に改善すべき課題が残された。これらの成果と課題を踏まえ、小・中学校間の連携をより一層強化し、義務教育9年間を見通した系統的な学習(「ふるさと学習」を含む)や小・中同一歩調の生徒指導を推進し、生徒指導の質的な向上と一貫性を図る。さらに、地域との連携を深め、生徒の主体的な地域への関与と郷土愛の育成を通じて、SDGs目標11「住み続けられるまちづくり」の実現を目指すため、本主題を設定した。

3 研究の手立て(研究の柱)と具体的な取組

本研究は、義務教育9年間を通じた生徒指導の一貫性の確保と質の向上を目指し、次の5つの柱に基づき、具体的な実践を推進した。

(1) 9年間を見通した学習習慣および生活習慣の系統的な定着

小・中学校間で連携し、義務教育9年間を通じて一貫した学習と規律ある生活習慣を定着させるため、具体的な指導を系統的に実践した。

【具体的な取組】

①「芳野地区小・中連携教育」に基づく重点取組の設定と改善サイクルの実施

- ・年間2回(5月、翌年1月予定)の生徒の実態調査において、生徒の実態を把握
- ・「2分前学習」「自主学習(家庭学習)」の実施率の向上を最重要課題として小・中学校間で設定
- ・達成率の高い項目(例:感謝無言清掃、正しい制服着用、授業2分前着席)は引き続き指導し、達成率100%を目指す
- ・生徒会本部や環境整美委員会などの自治的活動を充実させる

②発達段階に応じた「ふるさと学習」の計画と実践

- ・各学年の発達段階に応じて教科横断的に「ふるさと学習」につなげられる学習内容を確認・共有する。その中で、9年間を見通した学習計画を策定し、小・中でできるところから実践する
- ・地域の有識者や地域企業、行政機関等と連携し、川越市(芳野地区)の魅力と課題について考え、それらの課題については、解決策を検討し、生徒自身で解決策を発信する場を設定する

(2) 中1ギャップ未然防止のための円滑な接続と支援体制の構築

中学校入学後の環境変化に伴う不安(中1ギャップ)を未然に防止するため、人的資源を活用した円滑で継続的な接続と支援体制を構築した。

【具体的な取組】

①学年内「チーム担任制」の本格的な活用

- ・学年教職員が生徒の実態に応じて、適材適所で生徒に寄り添いきめ細やかな指導、支援を行う

②全教職員による小学校への訪問を通した多面的・多角的な実態把握

- ・生徒指導主任だけでなく他教科の教員も計画的に小学校を訪問し、授業参観や情報交換を実施

③中学校教員による小学校での「出前授業」の重点的な充実

- ・小学校6年生を対象にした「出前授業」を重点取組とし、内容を充実させる

(3) チーム学校と「自ら成長する教師」の育成

チーム学校としての同僚性を高めた組織力向上と教職員の特性を生かした成長を支援した。

【具体的な取組】

①組織的協働を促すための基本行動の徹底

- ・「報告・連絡・相談・見届け」を徹底し、密な情報共有と教職員の対応力を高める

②教職員の成長を支援する二者面談の定期的実施

- ・教職員が課題や成長目標を設定し、管理職と共有する個別面談を定期的実施

(4) SDGs と連携した地域課題解決学習の推進

地域資源とまとめ意識を活用し生徒が地域社会の持続可能性に主体的に関わる機会を創出した。

【具体的な取組】

① SDGs 目標11を明確な視点とした探究活動の展開

地域社会の課題を発見し、持続可能な解決策を考案・実践する学習を導入

②市政参画活動の実行と調整

- ・生徒が考案した地域の課題解決策を川越市長へ提案する発表会を企画し実施
- ・市長とのタウンミーティングの実現に向け、関係各所と計画・調整を進める

③地域団体との連携強化による主体的参画機会の提供

- ・学校運営協議会、PTA、地域団体との連携を強化し、地域の行事への積極的な参加と貢献を促す
- ・地域のイベントである「芳野 style2025」への積極的な参加を促す

(5) 愛校心・郷土愛を育む継続的な実践活動

生徒の愛校心と地域への貢献意識を育み、将来、地域に貢献できる人材を育成するために自治的活動及び環境整備活動を推進した。

【具体的な取組】

①継続的な環境整備活動の実施

- ・PTAの花植え・除草活動や資源回収を継続し、生

徒の主体的な参加を促す

- ・愛校心を育む清掃活動（感謝無言清掃）を継続

②生徒会主導の学校・地域貢献活動の企画と実行

- ・生徒会本部や環境整美委員会が中心となり、「小・中合同あいさつ運動」や「明鏡止水キャンペーン（清掃強化週間）」を生徒自ら企画し実施

4 成果と課題

【成果】

○令和6年度の研究活動（Part.2）により、小・中学校間で生徒指導の対応を同一歩調で進めることができ、中1ギャップの解消と多面的・多角的な児童生徒の実態把握につながった。

○令和7年度の活動（Part.3）を通して、小中連携や地域連携がさらに深まり、系統的な「ふるさと学習」の実施や生徒の地域課題への意識の向上と主体的な関わりが促進された。

○2学年でチーム担任制を導入した。複数の教員で生徒を支援し、生徒も話しやすい教員と面談等を行った。不適応を起こす生徒が減った。

【課題】

◆学習習慣の定着：「2分前学習」（82％）は、やや改善されてきたが、「自主学習（家庭学習）」（54％）の実施率向上が引き続きの課題である。

◆小中の連携体制の拡大：生徒指導主任以外の教員も無理なく小学校を訪問し、全教職員の目で接続する児童の実態把握を行う仕組みの構築が必要である。

◆地域連携のレベルアップと市政参画の実現：川越市長とのタウンミーティングの実現に向け、行政機関との具体的な計画や調整の必要がある。

◆持続可能性の確保：次年度以降の管理職や教職員の異動があった際に、今年度の取組が同じ温度感で継続できるよう、確実かつスムーズな引き継ぎ体制の構築が重要な課題である。

◆昨年度から検討を続けている芳野小・中学校の「目指す児童生徒像」について確立し、それを芳野小・中学校で具現化することが課題である。

芳野小・中学校連携教育（生活編・学習編）

夢に向かい、互いを尊重する人権教育の推進 ～自他と地域のウェルビーイング向上を目指して～

寄居町立寄居中学校

校長 岡田 久志

1 はじめに

本校は、平成元年に寄居中学校と用土中学校が合併してできた統合中学校で、今年で開校37年目となる。各学年3学級、特別支援学級4学級、全校生徒数289名の中規模校である。目指す学校像「地域を元気にする学校～探究する、尊重する、挑戦する生徒の育成～」の具現化に向けて教育活動を行っている。地域の教育資源を活用した「寄居ふるさと探究学」や地域の小学校と高等学校と連携した三校合同あいさつ運動・花植え運動などを通じて、地域とのつながりを深めている。

令和7・8年度、寄居町教育委員会から委嘱を受け、研究主題「夢に向かい、互いに尊重する人権教育の推進」に沿って研究を深め、学校の課題解決に向けて実践を積み重ねている。

2 研究主題設定理由

本校の生徒は、とても素直で前向きに物事に取り組むことができ、落ち着いた雰囲気の中で規律ある学校生活を送っている。授業においても、真面目に集中して学習に臨むことができている。しかし、複雑な家庭環境を抱えている生徒、言語理解や文化の差異に苦慮する外国籍の生徒、多様な要因を背景とした不登校傾向の生徒の増加等、不安を抱えている生徒も多くいる。

また、県学力・学習状況調査の結果から「夢や目標を持っていますか」の質問に課題があった。1・2年生では自己効力感の伸びの平均が低い傾向も見られた。自分に自信が持てず明確な目標をもてないことが一因であると考えられる。人権教育を推進し、人権意識を向上させることで、自他共に大切にすることを育てたい。

生徒一人一人が夢をもち、笑顔と思いやりがあふれる学校をつくるのが、様々な課題解決にもつながると考える。そこで、寄居町の基本理念である「夢と心をはぐくむ未来を拓く寄居の教育」の実現を目指し、学校研究課題を「夢に向かい、互いを尊重する人権教

育の推進 ～自他と地域のウェルビーイング向上を目指して～」とした。

<研究構想図>



3 研究仮説

(1) 学力向上研究部

各教科の学習において意図的に学び合い学習を取り入れ、他者と協働する経験を積み重ねることによって、自分も相手も大切にする意識を育むことができるだろう。

(2) 道徳・特活研究部

学校行事を中心として、学校外の組織や人材と協働することで、自他と地域のウェルビーイング向上につながるだろう。

(3) 家庭・地域連携研究部

P T A活動や地域との連携活動において、目標を同じくすることで、教育効果が高まり、夢に向かう礎ができるだろう。

4 研究内容(具体的な取組)

(1) 人権をテーマとした特別活動(学級活動)

生徒自らが、人権について「自分事」と捉え主体的に取り組むように、学級討議や生徒総会で人権をテーマとした活動を実施した。

- ・人権に関する生徒アンケートの実施
- ・各クラスで学級討議の実施
- ・学校教育目標「人を尊ぶ生徒」に実現に向けて各クラスで決めた取組の実践

- ・生徒会本部役員が中心となって「寄居中学校人権宣言」を作成

(2) 異学年一斉総合による探究学習

全校生徒が個人の興味・関心に沿ったテーマのゼミを選択し、年間を通して探究的な学習に取り組んでいる。学年の枠を越えて探究的に主体的・協働的に取り組むことで、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度が育まれている。

- ・ゼミごとに「生徒が創りたい寄居のまち」をテーマとした探究的な学習
- ・町内の施設等へ現地調査
- ・各ゼミによる成果発表会
- ・代表ゼミによる寄居町長への提言の実施

(3) 目指せ6万！ありがとうプロジェクト

生徒会が主体となり、全校生徒でありがとうを6万回伝える取組を実施した。回数を見える化し、学校全体が感謝の気持ちで包まれて温かい雰囲気醸成された。

「ありがとう」の回数を全校で集計しシールを貼った掲示物→



(4) 道徳授業・道徳講演会

寄居町で独自に作成した道徳教材をもとにして、各クラスで道徳授業を行った後、教材に取り上げられている方を講師として招き、講演会を実施した。「命を守る、命をつなぐ」というテーマで命の大切さや夢に向かって努力することの大切さについて学ぶことができた。同じ地域で生活をしている人の実体験から人権について学ぶことで、より身近なものとして捉え、自分事として考えることができていた。

(5) 赤ちゃんとの交流体験

乳幼児とその母親を講師として招き、乳幼児の一日の生活の様子や育て方等について学んだ。実際に乳幼児と遊んだり、乳幼児を抱っこしたりしてふれあうことを通して、命の大切さや周囲への感謝の気持ちを深めることができる貴重な体験となった。



(6) 人権週間の取組

人権問題を自分や自分の身近な人の問題として捉え、

互いに人権を尊重し合うことの大切さを認識し、他人の人権にも配慮した行動をとることができる生徒の育成を目指した。

- ・全校朝会による校長講話
- ・人権感覚育成プログラムを活用した授業
- ・全校生徒が人権標語を作成
- ・生徒会主催の人権集会の実施

(7) 卒業生から学ぶ会

本校卒業生を招き、受験や高校生活等について話してもらったり、生徒がインタビューしたりして、身近な先輩から学ぶ機会を設定した。夢や目標を持って生活することが自己効力感や人権意識の向上につながると考えている。

(8) 三校合同活動（あいさつ・花植え）

近隣の寄居城北高校、桜沢小学校と本校で異校種間の交流をしている。PTAや地域の郵便局にも協力してもらい、様々な人との関わりの中で互いのよさを認め合う場となっている。

5 成果と課題（○成果 ●課題）

- 生徒が主体となり様々な取組を行い、協働することで自他共に尊重する意識とともに自己効力感が高まった。
- 生徒自らふるさとのことについて探究し、地域と積極的に関わることで、自分の暮らす地域を知り、地域貢献しようという姿が見られた。
- 教職員が人権問題に関わる研修を通して、地域が抱える課題への理解を深め、生徒に対してより深みのある指導ができるようになった。
- 実施した内容や成果を検証し、PDCAサイクルでよりよい取組にしていく必要がある。
- 時間や費用の調整等、次年度以降も持続可能な体制を構築することが課題である。

6 おわりに

今年度は、町より2年の研究委嘱を受けて1年目の実践成果報告だった。現在の予測困難な社会において未来を切り拓いていくために、夢をもち互いを尊重して協働する力は不可欠である。自他と地域のウェルビーイングの向上を目指し、次年度に向けて更に研究を推進していく。

生徒と共に授業を創り、主体的に学ぶ姿勢を 育成するための手立ての追求

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指す授業の創造～

杉戸町立杉戸南中学校

校長 石田 茂 生

1 はじめに

本校は、旧東中学校と旧広島中学校が統廃合を行い、新設校・杉戸南中学校として、令和7年4月に開校した。初年度は、1年生4学級、2年生4学級、3年生3学級、そして特別支援学級3学級の14学級体制でスタートしている。本校では、生徒一人一人の確かな学力を育み、夢や希望を抱き、心豊かにたくましく生き抜く力の育成を図っている。また、生徒が自分の目標に向かい日々考え、努力を継続し、笑顔で生き生きと、自信をもってチャレンジしていく学校づくりを目指している。本校の基本理念である、大志を抱いて自らの人生を切り拓き、共に未来社会を創造していく人を育てたいという思いで、本校の教育目標を、「自立・共創」とした。具体目標である「自ら学ぶ生徒」「心豊かな生徒」「未来を切り拓く生徒」の実現に向け、知・徳・体のバランスのとれた生きる力の育成を目指し教育活動を進めている。

2 研究主題の設定

本校は、昨年度の埼玉県学力学習状況調査を分析したところ、勉強をする理由として、「高校、大学に進学したいから」と答える生徒が多く、「勉強することが楽しい、好きだから」と答える生徒が少なかった。そのため、日々の授業の中で生徒の学習意欲を高めるための手立てを講じる必要が考えられる。

また、昨年度の校内研修では、これからの社会に必要な資質・能力を育むため、個々の特性等に応じた「個別最適な学び」と、多様な他者との「協働的な学び」が一体的に充実した授業を追究し、各教科で自由進度学習などの実践を行った。その結果、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一手段として捉え、生徒の実態や教材に合わせて授業の形態を選択することが必要だということがわかった。

そこで、昨年度の校内研修で追究してきた「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に充実した授業の探求を進めると共に、生徒の実態や教材に合わせて授業の形態を選択できるよう研究することで、学校全体での主題の達成を目指す。また、ICTを活用し

た学習場面を位置付けた授業展開を行い、生徒が主体的に学習に取り組み、学びの魅力を実感できる授業づくりを目指す。生徒が自身の力で課題を解決し、社会の担い手となれるように、授業改善を進めていく。

3 研究の仮説

生徒の実態や教材に合わせて、一斉指導や「個別最適な学び」と「協働的な学び」、自由進度学習などの授業の形態を効果的に選択することで、生徒一人一人に応じた指導の充実と、生徒自身、そして他者の価値を認めた主体的・対話的で深い学びの実現をすることにつながっていく。また、生徒が自立し、他者と共創する力を育むことにつながる。

4 研究の視点

- ①各教科の実態に合わせて、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を目指した単元を計画し、実践を重ねる。
- ②各教科におけるICTの効果的な活用方法についての情報交換を進める。

5 研究の実践（各教科での授業改善アプローチ）

【数学科】（2年生）

右図の年度当初アンケートより本学級では数学への抵抗感を持つ生徒の割合が41%と半数近くを占めている。

また、中学校1年間で数学が苦手になった生徒が41%増加しており、算数から数学に移行するにあたり、日常の事象との結びつきがうまくいかずに、数学の学習に悩む生徒が多くいることが考えられる。

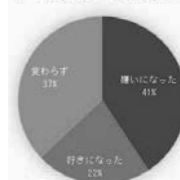
指導のポイント

- ・足並みをそろえるために本時使用する既習事項の確認
- ・授業時間内に課題解決へ向けた各個人の取り組み状況や、困り感を表現できない生徒を可視化する

数学が好き？嫌い？



中学数学を1年間学んで…



ため、「活動状況確認シート」の活用

- ・生徒が活動的かつ主体的に取り組めるよう、スモールティーチャー制度の活用

その他に、数学を好き、得意とする生徒の活動意欲を失わないために、別課題やその他の解法を導けるよう、教師側から指導・助言をしていく。

1		欠席
2	生徒名	できた！助けに行けます！
3		少し一人で頑張ってみる！
4		誰か一緒に考えよう！
5		助けてー
6		

☆「活動状況確認シート」

Teams上に共同編集ができる形のファイルを準備した。プルダウンにてその学習活動に対する意思表示を行い、一人で頑張りたいのか、協力して解決したいのか、困っているから助けてほしいのかを選択し、クラスで共有をする。なかなか手を挙げたり、声を上げて助けを求められなかったり、困っているけど意思表示ができない生徒を救うためのツールとして活用した。

【国語科】（1年生）

「個別最適な学び」の達成のために、生徒が自分のペースで学ぶ学習方法である自由進度学習に取り組んだ。

時間	学び方	学習内容・学習活動	重点	備考
1	一斉	本文を読み、物語の設定を捉える。	知・技	知識・技能
2	一斉	場面ごとの「私」の心情の変化を捉える。	思・判・表	ワークシート
3	自由進	課題を二つ提示し、どちらかの課題を選択する。	思・判・表	思考・判断・表現
		本文中の比喩表現から、その効果を考える。	思・判・表	ワークシート
④	度	「私」の「夏実」と「戸部君」に対する気持ちを考える。	思・判・表	主体的に学習に取り組む態度
		場面や描写を比べ、結び付け、その違いを捉える。	思・判・表	
5	協働	選択課題①作者になりきり、この作品の魅力を書く。	思・判・表	ワークシート
		選択課題②作者になりきり、この作品の続きを描く。	思・判・表	振り返り記述
		応用課題③題名にこめられた意味を考える。	思・判・表	
6	協働	課題で書いた文章を共有し、自分の考えを深め、広げる。	主	

☆「授業計画表」

指導のポイント

- ・単元計画を1時間目で生徒と共有し、単元全体の学習の見通しをもたせる。
- ・2時間目までは一斉学習で物語の設定や主人公の心情を確認し、物語の基本的な部分を捉えさせ、自由進度学習へとスムーズにつなげていけるよう指導する。
- ・3時間目からは大きな課題を二つ提示し、生徒にどちらかを選択させ、課題達成に向けた自由進度学習を行い、生徒自らが計画を立て、自分のペースで学習することができるようにする。
- ・生徒が主体的に学ぶことができるよう、学習に遅れのある生徒へはヒントカードを用意し、進んで

いる生徒へは応用問題（チャレンジ課題）を用意する。

- ・ミライシード「オクリンクプラス」を活用し、教師、生徒同士が自分の考えを共有することで、協働的で深い学びへとつなげる。



☆自由進度学習の授業風景①



☆自由進度学習の授業風景②

自分のペースで学習を進められ、理解度に合わせた発展的な内容にも取り組める。主体性や自己調整力が育つことが期待できる。



☆研究協議

東部教育事務所の指導の下、「未来へつながる学びを支援する訪問」授業研究会として、町内の国語担当が集まって、授業改善のための研究協議を行った。

6 成果と課題 (○…成果 ●…課題)

- 1単位時間ごとではなく、単元や題材のまとまりの中で、個人の学び（個別最適な学び）と集団での学び（協働的な学び）を、往還するように位置づけられた。
- ICTを活用し、学習の個別化や指導の個別化、そして協働的な情報共有や意見交換を促進できた。ICTは両方の学びに効果的であった。
- 「個別最適な学び」で得た知識や考えを、「協働的な学び」の場で発信し、多様な意見に触れることで生徒が自分の考えを広げたり深めたりできた。
- 学習の個性化が進む中で、指導と評価の一体化の視点に立ちつつ、個々の学びの進捗や成果を適切に把握し、評価に反映させることが難しい。
- ネットワーク環境が不安定な場合や、教員・生徒のICT活用スキルにばらつきがある。

生徒の人間関係能力を育て、保護者が孤立化しないための学校づくり ～不登校等の未然防止のための心の居場所づくり～

埼玉県立伊奈学園中学校

校長 小 泉 学

1 はじめに

本校は、平成15年4月1日に初の県立中学校として県立伊奈学園総合高等学校に併設された。埼玉県全域を学区としており、1学年80名（1学年2学級）で、現在239名が通学している。校訓に「自供創生」を掲げ、各教科・領域を通じて実践を進めている。通学に1時間以上かかる生徒が約35%いる。

2 本校の課題

本校は、入学者選抜を行っているため、保護者の教育等への関心は高いと言える。令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査においては、不登校の生徒数が1000人あたり70.4人となっているが、本校はその割合よりも高い。生徒自身が小学校の頃とは異なる周囲の仲間との比較に伴う自己肯定感の低さが原因の一つと考える。例えば、生徒は小学校のときに他者との成績の比較により優越感を得ていたが、県立中学校に入学し、「周囲が自分より勉強ができる」ということに驚き、特有のこだわりをきっかけとしてそのことを受け入れることができずに不登校に陥ってしまう。

また、保護者が中学受験の成功体験というベースをもとに、子どもの実際と理想との間の悩み、それを他の保護者等と共有しづらい環境も原因の一つと考える。いわゆる子育ての悩みをすぐに打ち明けられる大人が地域におらず、地域の中で孤立化していると想像される保護者もいる。さらに、スクールカウンセラーが週に1度カウンセリングを行うことができる環境にはあるが、日常的に生徒や保護者が相談できるような相談室はなく、相談員はいないため、生徒や保護者が悩みを打ちあけることができる時間や居場所を設けることが必須だと考えた。

3 本校で行っている手だて

(1) 生徒の人間関係力を育てる取り組み

生徒の人間関係能力を育てるために、構成的グループエンカウンター（リーダーの指示した課題をグループで行い、そのときの気持ちを率直に語り合うこと

「心と心のキャッチボール」を通して、徐々にエンカウンター体験を深めていくもの。）を特別活動の時間の一部に、プロジェクトアドベンチャー等の人間関係育成プログラムを宿泊学習等で取り入れている。また、生徒の人間関係能力の把握のために、年に一度hyper-QU（学校生活における満足度や意欲、対人関係スキルを評価する心理テスト。学生の心の状態を把握し、教育指導の指針となるもの。）を行っており、その分析方法について校内にて教員向け研修会を行っている。さらに、毎週1枚を目安に校内教員向け「教育相談だより」を発行し、生徒の人間関係能力向上のための方策等について情報提供を行っている。

(2) 保護者が孤立化しないための取り組み

併設されている高校の面談期間に合わせ、三者面談を年に2回行っている。さらに本校の教育相談部を中心に教育相談日を設定している。この日は、保護者の悩みが大きくなってしまいう前に、意図的に学校に来てもらい、悩み等を打ち明けてもらったり、子育てについて考えたりすることで、不登校等の未然防止につながると考えたからである。本稿では、ページの都合上、学校独自の取り組みである教育相談日について詳細に報告する。

4 研究内容（具体的な取組）

(1) 第1回教育相談日

実施日：令和7年4月28日（月）

内 容：教育相談主任による聞き取り

新年度が始まり、保護者がどのような悩みを抱えているのか、今までとは異なる方法で把握を行うべく、学年主任や担任ではない教育相談主任が相談相手となる日を令和7年4月28日に設けた。その日に設定したのは、5月の連休より前に保護者の生徒に対する悩みを把握しておきたかった点、教育相談担当者の授業の空きコマが連続していた日であった点からである。

当日、教育相談担当の教諭に対し、保護者の方々から子どもの悩みについて丁寧話してもらった。担当教諭は悩みを聴くことに注力した。ある生徒の保護者

は「子どものことについて、夫婦でいつも相談しているが、保護者が他県出身のため周囲に身近に話せる人がなかなかいない」との悩みを打ち明けてくださった。担当教諭は、学校でできる教育相談体制について情報提供を行った。

(2) 第2回教育相談日

実施日：令和7年9月6日（土）

内 容：埼玉県ネットアドバイザーによる講演会

第1回教育相談日において、ある第3学年生徒の保護者は子どもに持たせているスマートフォンの家庭内での使用方法についてお話していただきました。本校は遠方からの通学者が多く、防犯上の観点からスマートフォンを持たせたいと願う保護者が多い。多くの生徒がスマートフォンを持参しているため、スマートフォンの取り扱いについて内容を考えることとした。そこで、県庁青少年課による子ども安全見守り講座を活用し、埼玉県ネットアドバイザーによるご講演「かしこいネットの使い方」を行った。実施日が土曜日となっているのは、本校は併設されている県立伊奈学園総合高等学校との共催による文化祭当日としたためである。当日、ほとんどの家庭の保護者が来校し、中学校生徒の発表等を参観するため、多くの保護者参加が見込めたためである。

当日のお話をもとに、ある生徒の保護者は「子どもとスマートフォンの使い方について、どのように家庭内ルールを作ればよいのか、ヒントをもらうことができた」と振り返っていた。

(3) 第3回教育相談日

実施日：令和7年11月1日（土）

内 容：埼玉県家庭教育アドバイザーによる講演会

第2回教育相談日において、講師の方が「スマートフォンとの付き合い方については、とにかく家族同士の対話がかぎ」とお話していただきました。本校では、思春期を迎えた生徒と保護者との関係性の偏りがきっかけで様々なトラブルに発展した事案もある。例えば、親が子どものすべての事項について気になってしまったり、逆に子どもが親の支援なしに自分のことを決めることができなかつたりなど、親子関係や家族の関係性について考える講演会を企画する必要があると考えた。そこで、埼玉県教育局生涯学習推進課による埼玉県家庭教育アドバイザー派遣事業を活用し、埼玉県家庭教育アドバイザーによるご講演「聴き取り力を育て

よう～こどもの自立と親子の境界づくりのために～」を行った。実施日が土曜日となっているのは、本校は併設されている県立伊奈学園総合高等学校との共催による学校公開当日としたためである。当日、ほとんどの家庭の保護者が来校し、授業参観するため、多くの保護者参加が見込めたためである。



以下、保護者の感想を一部紹介する。

- ・子育てにおいて聴く力の重要性について日々感じていました。（親の思いや考えを子どもに押し付けてしまっているのではないかと考える時があります。）その中で、ご講演をきいて、聴くポイントや心構えについて学ぶことができました。私の考え方と小林先生の考え方が似ていたので安心しました。
- ・実体験やエピソードを交えて講演であり、深く考えることができました。貴重なお話を聞いて勉強になりました。聞き取り方、声の掛け方ひとつで、10人いればその数の受け取り方があり、ワークでは具体的に理解できました。今回のご講演のことを家庭でも実践していきたいと思います。
- ・本日の講座を受講し、改めて子どもとコミュニケーションの取り方を考え直す機会となりました。中学受験の際は、共に目標に向かってきた感覚があります。今後は、子ども自身が考え選んでいく道を後ろからサポートする側に回りたいと思います。

5 おわりに

本取り組みを通して、多くの機会を通して保護者の子育ての悩みを聞き取ることができた。保護者が孤立化しないために、保護者が足を学校に向け悩みを打ち明ける第一歩となる取り組みを今後も検討していきたい。

今後、学校評価等で成果と課題をまとめ、実施方法・実施内容が適切なものであったかを確かめていく必要がある。

教育相談の取り組みは、一過性のものでなく、計画性や継続性が問われる。また、担当者が異なっても、持続可能なものでなくてはならない。中・長期的視点から検討・改善が必要である。

校内居場所づくりとしての「見晴らしカフェ」の取組

～地域 NPO の方々と交流しながら、ホッとできる居場所を校内に少しでも多く～

埼玉県立ふじみ野高等学校

校長 関 口 正 人

1 はじめに

本校は、平成25年、地元ふじみ野市をはじめ地域の皆様の大きな期待を担って、大井高等学校と福岡高等学校を再編し、全日制普通科と県内唯一のスポーツサイエンス科を併設する高等学校として開校した。

開校以来、様々な課題を克服しながら、教育内容の充実・改善及び施設設備の拡充、整備を図るとともに、地域に根差した学校づくりに取り組んできた。

開校10周年を迎えた際に、目指す学校像を「これからの時代をたくましく生きる知・徳・体を育むとともに、仲間とともに学習にスポーツ・文化活動に全力でチャレンジし、地域に元気・感動・夢を発信する学校」と改め、地域社会の発展や地域スポーツの振興に貢献する人材を育成すべく、学習とスポーツ・文化活動を両立し、着実に成果を上げてきた。昨年度は全国高等学校総合体育大会で体操競技部が女子団体総合で10年ぶり2度目の優勝、個人総合及び個人種目で優勝、準優勝、入賞者を輩出し、水泳部が女子200m背泳ぎで個人優勝、100m背泳ぎで3位入賞をはじめ、各部活動が高いレベルで実績を残した。今年度も、体操競技部及び水泳部が全国高等学校総合体育大会で入賞者を輩出し、陸上競技部及び柔道部男女が関東大会へ連続出場するなどその躍進は継続している。

2 生徒の実態について

上述のように、スポーツ全般に強い興味・関心を持ち部活動に意欲的に取り組む生徒、また、将来を見据えて高い志を持って進路実現に取り組む生徒、仲間とともに地域における文化活動に地道に取り組む生徒が多数在籍している。

一方、義務教育段階での不登校経験者、義務教育段階での躓きによる基礎学力の定着に課題のある生徒、人間関係の構築に課題のある生徒、複雑な家庭環境を背景にしている生徒等多様な課題を抱えている生徒も一定数存在する現状がある。また、その多くが、自己肯定感が低く、クラス及び部活動等校内に安全・安心な場所を築けず、孤立傾向に陥り、進路変更のリスク

を抱えている。

本研究の推進は、本校生徒に係る課題解決の端緒となるとともに、地域に開かれた学校づくり及び地域に根差した学校づくりの推進に繋がると考え、本研究テーマを設定した。

3 研究仮説について

本研究に係る取組は前年度後期から学校主導での運営に地域NPOの皆様の協力を得て進めてきた。年度末の振り返りを踏まえて、今年度は、地域NPOの皆様も学校とともに主体的に企画運営に参画していく形式とし、以下のような研究仮説を設定して取り組んでいる。

◇研究仮説Ⅰ

地域を巻き込んで地域とともに生徒の育ちを見守っていく特色ある学校づくりを推進することで学校と地域でWIN-WINの関係性を構築できる。

◇研究仮説Ⅱ

見晴らしカフェ利用生徒の口コミ、NPO方々の人的ネットワークを活用しての小中高連携により、意欲ある受検生の本校志願増に繋げられる可能性が期待できる。

◇研究仮説Ⅲ

NPO方々の人的ネットワークにより、地域資源の利活用、地元行政機関との連携を図ることで取組の継続を担保できる。

4 運営組織について

(学校側)

- ・令和6年度……主幹教諭、司書+管理職
- ・令和7年度……教育相談委員会担当教諭2名
司書+管理職

(NPO側)

- ・地域で子ども食堂の運営や学習支援等に関わっている方々がチーム大福(旧大井町及び上福岡市が由来)を結成して令和6年度から運営に協力していた

だいている。チーム大福の皆様の主な所属は以下のとおりである。

- 特定非営利法人れでいばード
- 学び舎しつもん塾
- コミュニティ広場にこまる
- ふじみ野市地域福祉課福祉総合支援チーム
- ふじみ野市社会福祉協議会

5 具体的な取組

(1) 「ふじみ野見晴らしカフェ」の概要

本校では、令和6年9月から週1回程度のペースで、校内で一番見晴らしの良い図書館を「カフェ・スペース」として場所を提供している。カフェ開催時は、図書館での飲食は可とし、気分転換したい生徒、リラックスしたい生徒への居場所を提供している。さらに、地域の大人との交流を通して斜めの関係を構築する場づくりを進めている。今年度は、金曜日の放課後に加えて、NPOの皆様の発案で週初めの憂鬱さを解消すべく、月曜日の昼休みにも開催している。



【図書館から望むふじみ野市街】



【カフェ開催時に提供されるおやつと飲料】

(2) 「校内カフェ」の先行事例

校内カフェの実践例としては、2012年に大阪府立西成高校で始まり、現在、神奈川県、静岡県、北海道、宮城県などで行われている。もともとのコンセプトは、「図書館や教室、フリースペースなど学校内のスペース」を利用して、定期的・継続的に誰でも気軽に立ち寄れるカフェ形式の交流・相談の場づくり」である。

(3) 「ふじみ野見晴らしカフェ」の最終イメージ

本校でも、他校の実践例のように、ユースワーカーなどの支援団体スタッフ、地域の多様な人材の方々にカフェスタッフとして参画していただき、飲食や雑談することを通して生徒がほっとする時間を過ごしたり、世代を超えた交流によりを通してなにげない形で悩みや課題を斜めの関係にある大人たちに相談できる場所づくりを目指している。



【カフェスタッフとゲームに興じる生徒たち】

6 これまでの成果と課題 (○成果 ●課題)

- 地域に様々な子ども支援の活動があることを再確認するとともに、様々な人的物的支援をいただいた。
- 地元議会関係者及び地元児童福祉行政担当者の視察を通してそれぞれの方の知見に触れることができた。
- 生徒の中には一定数の「コアな来訪者」がおり、その生徒たちからは高い評価を受けている。具体的には以下のとおりである。
 - ・「色々な人と関われる!」「リフレッシュできる」
 - ・「楽しく友達とゆっくりでき、お菓子が美味しい」
 - ・「今までにないイベントで毎週楽しみにしています」
 - ・「やっている的自然と人が集まって大人数でカードゲームができるからとてもいい」

- 予算的措置 (費用負担)
- 学校生活で悩んでいる生徒、困難を抱えている生徒に重点を置いた運営実施
- 誰にとっても「安心できる場所」となる工夫
- 利用者の拡大
- 利用する生徒のマナーの在り方
- 「チーム大福」の方々との円滑連携構築のため、定期的な打合せ機会の設定
- 担当教員の負担軽減

ファイナルイヤー「人数が少ないからこそできる教育活動へ挑戦」

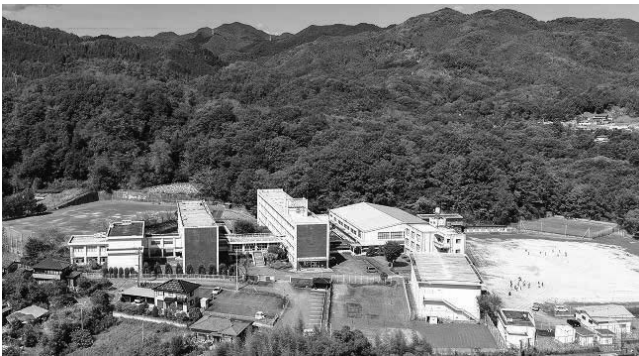
～地域の教育力を動員した少人数生徒たちとの取組～

埼玉県立皆野高等学校

校長 浅見 和 義

1 はじめに

昭和41年4月組合立埼玉県秩父東高校皆野分校（男子校）として開校した。創立60年目、一貫した商業教育に取り組んできた秩父地域唯一の高校である。昭和43年には組合立埼玉県皆野高校として独立、単独校となり、翌44年に念願の埼玉県立皆野高等学校として県立移管、男女共学校となる。地域に必要な高校として地域の力で設立、県立移管を成し遂げた高校である。



本校には、独立校となった創立3年目に初代高田校長が定めた校訓「誠実 勤勉 協力 奉仕」があり受け継がれている。この校訓の理念の下、地域の活性化に寄与し、地域社会と産業を支える人材を育成する学校として様々な教育活動を通じて地域連携・交流により、実践的な指導で生徒のキャリア意識を高め、社会の即戦力となる人材育成に取り組んできた。今年度の全校生徒は3年生のみ26名、アンカーズを名乗り後輩が入学してこない中でも少人数規模の高校である利点を活かして、教職員・保護者・卒業生・地域の方々と一体になって少人数だからこそできる教育実践へ取り組み、これまでも地域企業と連携した商品開発や地域活動、ボランティア参加等、地域に貢献する教育活動を積極的に実施してきた。この成果を礎としてファイナルイヤーへの取組にチャレンジした。

2 主題設定の理由

令和8年度、秩父高校と統合する。令和5年度入学生を最後に生徒募集が停止された。限られた人数の生徒・教職員という状況の中、学校教育の根幹である「人と人との関わり合いを通じた学び」、「生徒・教職員以外の地域の方々との連携」をテーマに学校教育活動を今まで以上に盛り上げる体制づくりを進めた。生

徒数ピーク時713名、現在26名、「この人数だけで何ができるのか」「何をするのか」から始まった。

そこで力をいただいたのがPTA・後援会をはじめ、同窓会、地域の方々。令和5年度に7年度ファイナルイヤーを見据えて、地域連携に関する基本的な姿勢・目標策定をし、職員間でビジョン共有を行って進んできた。「統合」という特殊な状況をチャンスと捉え教育活動に取り組んだ。【詳細：令和6年度 研究・実践成果報告書13 皆野高校「地域と連携した教育活動の確保・充実」へ掲載】

3 具体的な取組

最終年度、学校運営協議会などを軸に地域へ呼びかけて力を借りて進んで行く。最後まで学校を盛り上げ、活き活きとした教育活動への実現に挑戦する。

(1) おかえりなさい！皆高生8,250名～今から始まるファイナルイヤー～【4月27日(日)開催】

年度当初は入学シーズン。中学を卒業した生徒たちは高校へ入学。本校は入学式がない。ならば、ファイナルイヤーのスタートイベントとして「卒業生を呼ぼう！」在校生と卒業生との交流イベントを生徒が中心となって企画・運営。卒業生へどう周知させるのか課題。県や学校HP、町や学校のSNS、町回覧板、新聞社への掲載依頼、新聞広告への差込、市町広報誌へ掲載、新たに同窓会LINE公式アカウント作成、街へのチラシ掲示や配布など考えられることはやれるだけやった。結果500名を超える参加者で盛り上がる。「全世代集合チャレンジ」「皆高ファミリー表彰」など内容も豊富。このイベント実施の経緯には、知らなかったり、参加できなかった卒業生が次回は行きたいと思ってもらえる布石でもあった。根底に、第二弾・第三段のイベントではさらに多くの卒業生に参加してもらいたい・在校生と学校を盛り上げてもらいたい、という想いもあった。



(2) 地域連携・交流体育祭【5月30日(金)開催】

前年度の雨天体育祭を成功と考え、広いグラウンドでなく限られた空間の体育館での体育祭を実行。保護者に加えて地元小学生や同窓生、地域の方約60名も競技に参加、種目も工夫して老若男女・子供たちとも一緒になって競い合う地域交流体育祭として開催。生徒



が体育祭に参加する小学生へプレゼントとして、名前入りオリジナルスタンプを制作し競技でも使用した。

(3) アンカーズによる交通安全の取組継続【4～12月】

交通安全教育でも様々な活動へ取り組む。①4月4日春の全国交通安全運動出発式で生徒会長が交通安全宣言・交通安全パフォーマンス実施。②交通安全運動



期間中4月9日に生徒手作り交通安全お守り200個を街でドライバーへ配布。③出発式で使用

した手作りボード4月中皆野町役場に展示。④5月中は手作りボードを秩父警察署へ展示し、5月15日秩父警察署へ出向き交通安全呼び掛けと本校オリジナル交通安全シールなどを来庁者へ配布。⑤「交通安全こども自転車全国大会」二連覇の秩父第一小学校訪問、大会直前の練習見学・日本一の小学生に自転車走行挑戦。

⑥7月17日町立三沢小学校と県道で夏の交通事故防止運動「ポータークトド(法定速度)を守ろう」生徒と児童が栽培したジャガイモ(ポテト)配布・スピード出しすぎ注意の呼びかけ。⑦7月15日秩父警察署員4名来校「高校生の交通安全と非行防止」講演。⑧9月26日秋の全国交通安全運動啓発活動、



150個交通安全お守り手作りし啓発活動で配布。11年間継続の取組。⑨10月25日文化祭出展。白バイ・パトカー展示体験交通安全キャンペーン。⑩12月も実施。その他、生徒が青少年非行防止・特殊詐欺防止・青少年健全育成・防犯のまちづくり・青少年健全育成のキャンペーンで地域の方と参加し貢献活動に取り組む。

(4) 創立60周年記念式典開催日の取組【10月25日(土)】

午前10時より体育館にて式典開式。地域の協力によるアトラクション「スカイランタン」打上。創立関係者による「皆野高校誕生物語(動画10分ネット公開中)」視聴と談話など独特の式典とした。合わせて文化祭(秋桜祭)一般公開を正午から開始。26名の生徒



がPTA・後援会、同窓会、地域の力を借りて24企画を展開。夜は6時30分に校庭でスカイランタン打上。過去最高の1300人の来場者となる。

(5) その他、生徒が地域と連携しての様々な取組

羊山公園芝桜植栽(3/24)、皆野フィールドワーク(5/23)、皆野幼稚園保育実習(6/4・5)、西武文理大学と連携協定式へ参加(6/6)、参議院議員選挙の期日前投票立会人(7/12・13・19)、皆野病院介護体験(7/23・24)、川瀬まつり清掃(7/19)、大渚祭り(7/26)、三沢小とジャガイモ栽培・収穫・合同販売(～8月)、秩父音頭まつり(8/14)、ちちぶ再発見フェア(8/16)、高校生ビジネスプラン発表会(8/25・11/19)、社協歌声サロン(8/27)、夏フェス in みなとのLABO(8/31)、秩父宮杯県自転車道路競走大会(9/14)、国神小どきどきわくわくまち探検(10/3)、みんなの皆野ふれあいまつり(10/26)、金融機関で融資体験(10/30)、皆野横丁(11/2)、町内清掃クリーンキャンペーン(11/6)、皆野幼稚園社会見学来校交流(11/13)、わくわく秋まつり(11/15)、国神小持久走大会競技補助(11/19)、三沢小と連携・新商品完成S L車内販売(11/24)、みなのことどもまつり(11/29)、秩父夜祭清掃(12/2)、皆野・長瀨観光ツアー(12/13)、手作りミニ門松配布(12/26)など少ない人数で最後まで地域連携・地域貢献することができた。

4 おわりに

3月12日アンカーズ卒業式。午後には閉校舎式。卒業生への餞、校舎への感謝の会として多くの卒業生も参加できる内容を検討中である。統合が決まった後、本校に魅力を感じて入学してきた最後の卒業生たち。人数は少なくても、最後まで皆野高校が培ってきた伝統や取組を継続させ確かなエピローグをつくってくれた。皆野高校は閉じることになるが皆高卒業生はまだまだ生き続ける。来年度以降も皆高魂を存続させる取組を進めている。皆野高校の地域貢献・社会貢献の取組を、少しだけでも継続する体制を結成する。

農業の6次産業化

～地域に愛着を持った農業経営～

埼玉県立児玉高等学校

校長 植田 雅 浩

1 はじめに

本校は、普通科と農業・工業の専門学科がある県内唯一の全日制の高校である。

専門学科では、実物に即した実験・実習をとおして体系的に知識や技術を身につけることができる。

また、地域の企業や行政機関、大学等の教育機関や地元小・中学校などと幅広く連携し、地域課題の解決に向けた探究活動を行っている。

2 生徒の実態

事前アンケートで「児玉・本庄地域に愛着を感じる」と、質問したところ、「愛着を感じる」「やや愛着を感じる」と回答した割合は、約30%であった。また、「愛着を感じない」「あまり愛着を感じない」「わからない」と回答した割合は70%と高く、多くの生徒が地元出身にも関わらず、地元に関心がないことが現状である。

3 研究の目的と方法

(1) 目的

児玉地域の魅力を知り、愛着をもって、児玉地域の創生を担い地域産業を支え続ける人材を育成すること。

(2) 方法

- ①北部地域で生産が盛んな「ブタ」の活用し地域のお店とコラボして、地域とつながりをつくる。(ブタ活用班)
- ②本校の農産物を使用したオリジナル商品を開発・販売し、企画・開発・販売力を身に付ける。(商品開発班)

4 研究内容

(1) ブタ活用班



【研究計画】

4月	実態把握・研究計画	
5月	豚の導入	飼育管理
6月	連携先の検討・選定	↓
7月	連携先の打ち合わせ①	
8月		
9月	連携先の打ち合わせ②	
10月	コラボ商品の販売①(店舗)	
11月	コラボ商品の販売②(文化祭)	
12月	まとめ	
1月	発表	

【活用方法等】

活用方法・連携先は、生徒間で話し合いを行い、どのようなメニューがよいか、どこのお店と連携するかを決定させた。

決定後、生徒がお店に連絡をとり、放課後お店に伺い、詳しく話し合いを行い、詳細なメニュー等を決めた。



【連携先】

- ・無添加ラーメンドラサン(本庄市児玉町)
豚そば・台湾まぜそば・豚ステーキ丼 他
 - ・お食事処心喜(本庄市児玉町)
はくようポークの特製しょうが焼き定食
 - ・和食レストランえん(本庄市)
はくようポークの特性ハンバーグランチ
- ※はくようポーク…児玉高校で生産した豚肉愛称



(2) 商品開発班

4月に、メンバーで話し合い、児玉高校産の「ウメ」と自分たちで栽培した「ショウガ」を活用した商品化開発をすることに決定した。

4月	実態把握・研究計画	
5月	農産物（ショウガ）の栽培開始	
6月	オリジナル商品開発検討	栽培管理
7月	オリジナル商品開発検討	↓
8月	オリジナル商品の販売①	
9月	オリジナル商品開発	
10月	オリジナル商品開発	
11月	オリジナル商品の販売②	
12月	まとめ	
1月	発表	

①梅編

6月に梅の収穫を行い、長期間保存できるように「ウメのシロップ漬け」にした。

【試験販売】

8月に地域イベント「児玉だし競進社前で七夕やってみんべえ！」で、梅ジュースを販売。

そこで、同じく出店していた「だるまや菓子店」と出会い、共同で商品を開発することになった。



【共同開発商品】

- ・だまこーくずパー
- ・だまこー梅どら焼き



②ショウガ編

5月からショウガ栽培を行ったが、暑さの影響で生育があまり良くなく、収穫量が少なくなることを想定し、少量でも製造が可能なショウガを使った飲み物を作ることに決定した。



【外部講師】

いつもお世話になっている、tamatawafarmの柴山さんが、クラフトコーラの販売を行っていることを知り、そのクラフトコーラの製造方法を教わった。

【商品開発】

tamatawafarmの柴山さんに教わった、レシピをもとに、ショウガを加え、オリジナルクラフトコーラ「だまこおら」を開発した。



【販売】

ほんじょう産業フェスタ（主催本庄市）
ダマフェス（主催だまフェス実行委員会）



5 成果と課題

12月 実施前・実施後に、「児玉・本庄地域に愛着を感じるか」のアンケートを実施した。

実施後には、「愛着を感じる」・「やや愛着を感じる」と答えた割合がと答えた割合が、22%上昇し、愛着を感じる生徒が増えたことがわかる。また、「わからない」と回答した生徒が19%減少し、関心がない生徒も減少したことがわかる。しかし、まだまだ児玉・本庄地域に関心や愛着を感じない生徒もいるので、これらを減少させることが課題である。

実施前		実施後	
1 愛着を感じる	9%	1 愛着を感じる	22%
2 やや愛着を感じる	22%	2 やや愛着を感じる	31%
3 あまり愛着を感じない	16%	3 あまり愛着を感じない	13%
4 愛着を感じない	16%	4 愛着を感じない	16%
5 わからない	38%	5 わからない	19%

【生徒感想】

- ・コラボの願いに行ったときはとても緊張しました。コラボ定食を心喜さんと一緒に考えたり、試食したりして、実現したメニューは納得のできて、感謝しかありません。
- ・地域の方々にたすけられながら、完成した時はとてもうれしかった。販売した時は、多くの人が「おいしい」と言ってくださり、うれしかった。

特別支援学校（小学部・中学部）における性教育の理解と実践 ～包括的性教育と「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」に基づいて～

埼玉県立所沢特別支援学校

校長 新井 敏彦

1. はじめに

本校は、昭和55年に開校し、今年度で46年目を迎える知的障害特別支援学校である。学区は所沢市一市で、小中のみの義務教育単独校である。児童・生徒数は計193名である。

本校では、昨年度まで学校研究で自立活動をテーマに据え、3年間修養してきた。児童生徒の実態把握シートを取り入れ、全校の教員が共有して使用できる、自立活動の棚を導入した。昨年度末に、令和7年度からの学校研究のテーマを全校の教員に向けてアンケート調査したところ、「性教育」に課題があることが伺えた。よって、今年度から3年間かけて性教育について研究を進めることになった。

2. 問題と目的

近年、国際的には「性教育」から「セクシュアリティ教育」に概念が変化してきている。生殖の仕組みや二次性徴等の身体的な知識だけではなく、社会的な規範の是非、差別や暴力、性を安全に楽しむ権利等、幅広いテーマを包括的に扱う「包括的性教育」が主要となっている（渡辺，2011）。「包括的性教育」は、国連児童基金、世界保健機関等の連携のもと、国連教育科学文化機関（UNESCO）によって作成された、『国際セクシュアリティ教育ガイダンス（International technical guidance on sexuality education: an evidence-informed approach）』（2018改訂）でも触れられている。『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』は、セクシュアリティ教育を実施する必要性とその教育効果をエビデンスとともに示した国際的な指針である（万馨ら，2024）。『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』は、8つのキーコンセプトを設定しており、5～18歳以下の学習者を年齢発達に合わせたカリキュラムで、繰り返し学ぶことが求められている。

日本では、1992年に教科書を用いた文部省公認の性教育がスタートし、児童生徒の課題に応じた性教育が推進されていた（児玉，2009）。しかし、2003年の「東京都立七生養護学校性教育裁判」をきっかけに性教育バッシングが起これ、現場は知的障害児への性教育実施に躊躇するようになった（児嶋，2012）。『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』では、年齢・階層・性別・障害・性的指向等を踏まえてすべての子ども・若

者にセクシュアリティ教育を提供することを明確に求めているが（浅井ら，2017）、日本の学校教育において未だその動きは見られていない。

本校においては、性教育に関する教育課程が策定されておらず、学部によって学習の取組にもばらつきが見られる。また、他学部の現状や習熟状況について、教員間でも共通理解が図られておらず、系統性にも課題がある。学部を超えた現状把握、共通理解を図り、整えていくことが早急の課題となっている。

3. 方法

そこで、本研究では、3ヵ年計画で取り組むこととなった。計画内容は以下の通りである（表1）。

年度	内容
令和7年度(1年目)	理論の充実
令和8年度(2年目)	実践と教材の共有、年間行事計画の大枠検討・作成
令和9年度(3年目)	計画の見直し・成果物の作成

今年度は、「理論の充実」として（表2）、1学期に包括的性教育の概念説明や、日本の性教育の歴史を概要として扱った。小学部低学年・高学年・中学部の3学部を、8つの縦割りグループに分け、国際セクシュアリティ教育ガイダンスのキーコンセプトを読み解き、ジグソー法を交えた輪読会を行なった（図1・図2）。夏季休業中の研修会では、「生（性）に関する手引き」を策定し、「性教育」を教育課程に導入している他校の教諭を招聘し、他校の実践や授業の教材等に触れた。また、高等特別支援学校の教諭も招聘し、高等部を見据え、逆算して現状や課題を考えることができる機会を作った。



図1 輪読会の様子(3教室ごとに8グループに分かれ、開催)

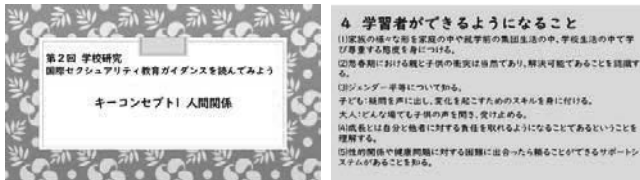


図2 輪読会で各グループがまとめたキーコンセプトの内容

表2 令和7年度計画内容

学期	内容
1学期	<ul style="list-style-type: none"> ・全校研修等で、「包括的性教育」について研修を行う ・国際セクシュアリティ教育ガイダンスの輪読 ・高等特別支援学校や他校の取り組みを知る
2・3学期	<ul style="list-style-type: none"> ・学年間で話し合い、学部ごとの現状や課題を話し合う ・学部間で各学年の現状や課題を話し合い、どの内容をどの時期に取り組むことが望ましいか整理する ・各学部で、他学部の計画を吟味する ・研究報告会で各学部の現状・課題・次年度の計画を発表

2・3学期には、学年間や学部間で話し合い、授業の実施状況や課題、国際セクシュアリティ教育ガイダンスのキーコンセプトと照らし合わせながら、これから学ぶべき内容を精査した。

4. 結果・考察

(1) 性教育の授業の実施状況について

小学部5年生は学期ごとに2回生活単元学習の授業として行っており、中学部1年生と中学部2年生はプール前の時期の保健の授業で、性に関する内容を扱っていた。その他の学年では、日常生活の中の個別指導が中心だった。児嶋ら(2011)の調査でも、知的障害児に対して「定期的に性教育を行なっている」特別支援学校は、小学部で18%、中学部で37.3%、高等部で38.4%にとどまっていることが報告されており、特別支援学校における性教育が看過されていると言わざるを得ない状況であることが示唆された。

(2) 現在学習している内容・取り組むべき内容について

2学期の学校研究で、各学部が現在学習している、取り組むべきと考えている学習分野は、以下の通りである(表3)。

表3 各学部現在学習している内容・取り組むべき内容

学部・学年	内容
小学部1年生	着替え・排泄・食事・清潔・身の安全
小学部2年生	着替え・排泄・食事・清潔・性差
小学部3年生	着替え・排泄・食事・清潔・性差・成長
小学部4年生	着替え・排泄・食事・清潔・プライベートゾーン
小学部5年生	着替え・排泄・食事・清潔・プライベートゾーン 距離感・気持ちの表出
小学部6年生	着替え・排泄・食事・清潔・射精(快楽) 生理・性別・SNS
中学部1年生	清潔・プライベートゾーン・男女の距離感 拒否の仕方(Yes or No)・性別
中学部2年生	排泄・清潔・プライベートゾーン・男女の距離感 気持ちの表出・言葉遣い・SNS・命
中学部3年生	排泄・清潔・プライベートゾーン・男女の距離感 拒否の仕方(Yes or No)・性別

小学部は、共通して「着替え」「排泄」「食事」「清潔」を、どの学年も挙げていた。小学部3年生から男女の性差や成長についての項目が加わっており、小学部5・6年生からは気持ちや身体の変化について、具体的な学びの必要性も挙げられた。中学部1年生からは、男女の距離感やプライベートゾーンが挙げられており、より身の安全に着目する傾向が伺えた。山田ら(2011)の調査でも、各学部とも「体の清潔」が高率であるが、学部が上がるにつれて「性的被害について」「性的加害について」の必要性の認識が高まってくることを報告しており、本校でも同様の傾向が見られた。

また、どの学部からも「単発にしないで、同じ時期でも良いので繰り返し学ぶことが必要」との声があがった。性教育を繰り返し学ぶ大切さは『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』で記されている(UNESCO, 2017)。特に知的障害者の性教育では認知的特性からより繰り返し行うことが必要であり、小学部低学年、高学年、中学部と系統性を持たせた、反復学習が求められている。来年度以降は、今年度精査した内容を授業実践に繋げ、本校の児童生徒に対するより良い性教育の授業実践や計画について検討していく。

<引用・参考文献>

- 児嶋芳郎. 知的障害児の性教育に関する研究の動向, 特殊教育学研究, 50(3), 313-321, 2012.
- 児嶋芳郎・細淵富夫. 知的障害特別支援学校における性教育実践の現状と課題—全国実態調査の結果より, 埼玉大学, 教育学部附属教育実践総合センター紀要, 10, 105-110, 2011.
- 児玉勇二. 性教育裁判—七生養護学校が残したもの, 岩波書店, 2009.
- UNESCO 編・浅井春夫・良香織・田代美江子・渡辺大輔 訳. 国際セクシュアリティ教育ガイダンス 教育・福祉・医療・保健現場で活かすために, 明石書店, 2017.
- 渡辺大輔, 包括的性教育とは何か, T-Navi Edu Vol.12, 8-11, 光文書院, 2022.
- 万馨翼・有間梨絵. 子どもの発達段階に応じたセクシュアリティ教育実践に向けた課題の検討—日本と中国における『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の影響に着目して—, 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター若手研究者育成プロジェクト採択者ワーキングペーパー, 4, 71-84, 2024.
- 山田晃生・水内豊和. 特別支援学校における性教育に対する意識と実態—国立大学法人の附属特別支援学校の教諭ならびに養護教諭を対象とした質問紙調査から—, 富山大学人間発達科学部紀要, 5(1), 49-64, 2010.

読書活動×SDGs (だれも取り残さない)

～楽しむ・知る・想像する・やってみる～

鳩山町立鳩山幼稚園

園長 岡部 玲子

1 はじめに

本園は昭和41年3月に県教育委員会から認可を受け、
 村立幼稚園として始まった。町の出生数の著しい減少
 の中、現在では町内唯一の幼稚園となった。今年度の
 園児数は16名のうち3歳児は11名である。

2 主題設定の理由

本園は今年度より本格的に3年保育も始まった。また、
 外国にルーツを持ち日本語がほとんど分からない
 子供や、個々の育ちや特性に合わせた支援が必要な子
 供など、公立幼稚園ならではの状況がある。このよう
 な現状があることを踏まえ、今年度「令和7年度子ども
 の読書活動優秀実践園 文部科学大臣表彰」を受けた
 実績もあり、全ての子供たちがそれぞれの“育ち”
 に合わせ、読書を楽しむ環境をつくっていきたくと考
 えた。様々な事情を抱えていても子供たちみんなが物
 語絵本や科学絵本などをそれぞれのペースで楽しめる
 ような手立てを構築していきたい。

また、本園では多くの栽培物を育て“食育”を推進
 したり伝統的な行事を大切にしたり、これらを保護者
 や地域と共に実践している。この「本物の体験」と読
 書活動とを結び付けていくことで、子供たちがさらに
 新しい世界を知り、想像する力や科学的な考え方が芽
 生えていくのではないかと考えている。

このような活動を通して幼児教育として出来る「持
 続可能で誰一人取り残さない」につなげていきたい。

3 具体的な取組

○みんなが楽しめる読書環境の整備

- ・初めての読書となる3歳児が楽しめる絵本の選定
- ・絵本を手に取りやすい時間や場の設定 読書コー
 ナーの整備
- ・日本語に興味を持てるよう
 な絵本の選定

○目的に合わせた絵本の選定

- ・行事や栽培活動に合わせた
 計画的な物語絵本や科学絵
 本の選定と読み聞かせ



3歳児の部屋に設置したミニ読書コーナー

令和7年度 栽培・食育計画 ……育てよう！食への興味 科学の芽 ……そして帰郷の心…
読書×ピジョっこみんなのファーム
 みんなが楽しめる読書環境を整えるために必要な読書の読み手

時期(予定)	読書活動(読書活動)	読書内容及び関連活動	関係絵本
4月～6月	ソラメ グリーンピース 収穫し付け	ソラメの収穫 収穫し付け	さつまいも おひさま おひさま おひさま
5月	夏野菜の定植・置き 水やり	トマト、ピーマン、ナス、キュウリ、カボチャ の定植・置き	おひさま おひさま
5月27日(火)	ソラメイ豆植え	親子でソラメイ豆植え	さつまいも おひさま
6月12日(水)	おひさま(豆)植え 夏野菜(ピーマン)	夏野菜の定植・置き おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
6月18日(火)	(朝)ジャガイモの収穫	親子でジャガイモ収穫 おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
8月7日(水)	<収穫>	畑と畑の収穫・おひさま (おひさま、ナス、キュウリ、カボチャ)の収穫	おひさま おひさま
8月22日(金)	<収穫>	畑と畑の収穫・おひさま (おひさま、ナス、キュウリ、カボチャ)の収穫	おひさま おひさま
9月1日(金)	(朝)ジャガイモの植え おひさま(豆)植え	親子でジャガイモ植え おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
9月15日(金)	おひさま(豆)植え おひさま(豆)植え	親子でおひさま(豆)植え おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
9月25日～10月5日	収穫祭、実食(おひさま)	親子で収穫祭、実食 おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
10月22日(火)	ソラメイ豆収穫	親子でソラメイ豆収穫 おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
10月30日(日)	ソラメイ豆・カボチャ の収穫	親子でソラメイ豆・カボチャ の収穫	おひさま おひさま
11月17日(日)	グリーンピースの収穫	親子でグリーンピースの収穫 おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
11月下旬	グリーンピースの収穫	親子でグリーンピースの収穫 おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
12月上旬	(朝)ジャガイモ おひさま(豆)植え	親子でジャガイモ おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
～下旬	おひさま(豆)植え	親子でおひさま(豆)植え おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
12月18日(水)	おひさま(豆)植え	親子でおひさま(豆)植え おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
1月14日(火)	おひさま(豆)植え	親子でおひさま(豆)植え おひさま(豆)植え	おひさま おひさま
2月中旬	(朝)ジャガイモ	親子でジャガイモ おひさま(豆)植え	おひさま おひさま

その他の栽培計画…一人一鉢(ミニトマト、パプリカなど)
 継続的な栽培・収穫時期など変更になる場合があります。(R7.11月下旬の状況)

・科学絵本を活動の導入で活用
 ・体験後、絵本と実物を比べてみたり、栽培活動の発展として活用したりする。
 ・収穫後は食育活動として子供たちみんなで調理して食す。
 ・収穫物は持ち帰り、家庭での食育(保護者への啓発)に生かす。



【かがくえほんコーナー】



・行事や栽培、製作の事前準備として自由に手に取れる絵本環境(おすすり本など)

身近な野菜や栽培物、草花、人の身体、動物や虫などの生き物、伝統行事、園活動の参考本など多種ある。

○絵本をもとにしたオリジナルの活動

- ・「お楽しみ発表会」での出し物 セリフ作りなど
- ・劇やオペレッタで使う背景や小物作りなどの取組



12月13日に向けての練習
 <子供たちによる発表会> 今年度は年長が4人と極端に少ない。例年行っている年長のみでの劇は難しいため、16人全員でオペレッタと劇を融合した出し物を行う。原作『おばけのがっこうへきてください』【テーマ】(原作さくともこ)
 *勇気を出して取り組むことで変わる。

○保護者、地域等との連携

- ・保護者と園をつなぐ『えほんノート』の作成



【えほんノート】
 手作りの絵本ノートの表紙に親子で絵を描き、読んだ絵本の感想を「ひとこと」欄に記入。それに対し、園長がコメントを返している。本園の特色の一つとなっている。

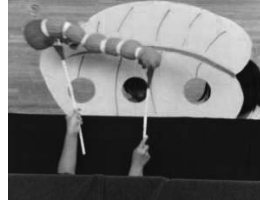
【全園児による図書館訪問】



・町立図書館との連携

11月6日
3歳児にとっては初めての図書館訪問。自分で本を選びカウンターで本を借りる経験。本園では全園児が町立図書館の図書貸出カードを持っている。また、図書館からは学期毎に絵本50冊の団体貸し出しを受けている。

- ・保護者及び保護者OBで構成された『ぼんぼこの会』や地域のサークル活動団体『ミラクルママゴン』による公演
- ・卒園生による公演（今年度） 【こどもボランティアによる公演】



8月6日 夏休み中の施設開放日
本園卒園生小学校1年生から4年生までの有志10名が、小さい子供たちを楽しませてあげたいと「はらべこあおむし」のパープサートを見せてくれた。

- ・地域の朗読団体による読み聞かせ
- ・地域施設との連携による事業…絵本に登場する食育関連の実践

4 取組を通しての成果と実際

○絵本の登場人物に思いを重ねたり、絵本を通して知らない世界に出会ったりすることで、少しずつ想像力が培われていると感じる。また、自分の興味のあることに対し、絵本を通して幼児なりの追究をしていく姿も見られた。

【担任による読み聞かせ】



思わずお話の中に飛び込む年少児

【興味につながる絵本の貸し出し】



担任に一生懸命恐竜について分かったことを説明する年少児
*「きょうりゅう」について興味を持ち、幼稚園の絵本の貸し出し日には、恐竜に関する図鑑や絵本を借り、さらに、その知識を多くの人に伝えたいという思い。

○飼育・栽培活動に合わせて科学絵本を用意することで、実際の生き物や栽培物と絵本との対比などから科学的な芽生えが生まれてきている。

【実体験を図鑑で検証】



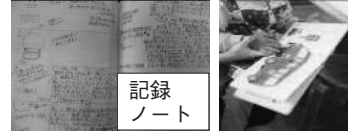
一人一人が観察図鑑を持って園庭の植物や虫を調べる年長児



ナミアゲハの蛹の羽化の様子を図鑑と見比べながら観察する年少児

○子供の日々の保育記録をとり、成長や変容を記録していくことで、幼児理解につながった。

【個々の育ちや特性に合わせた支援】



記録ノート

幼児の興味に合わせた絵本を教師が数冊選定し、気に入ったものを自分で選び、園や家庭での読書や読み聞かせにつなげる。

○外国にルーツを持ち、日本語が全く分からない幼児（年長）に、日本語を覚えてもらうための工夫やクラスでの関わり合いを通して、簡単な日常の言葉を覚えてきた。また、他の幼児にとっても仲間としての連帯感や多様性について意識が生まれた。

【お互いを知るための工夫例】

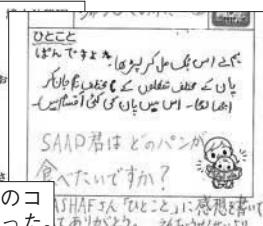


簡単な日常会話を日本語とウルドゥー語のカードを手作りし掲示。国旗を覚え、世界地図に貼る。など

【家での読み聞かせのお願いと「えほんノート」のコメント】

【お願い】
今日、絵本と『えほんノート』を持ち帰りました。
絵本は 易しい言葉で 書かれていますので SAAD 君のお兄さんやおめす。絵本を 彼に 読んでください。
彼の感想を『えほんノート』の「ひとこと」欄に書いてください。
次の木曜日に 絵本と『えほんノート』を 幼稚園に 持ってきてください。

翻訳ツールも活用 初めて家庭からのコメント(ウルドゥー語)が記載してあった。



○『えほんノート』のコメント欄の記載により子供のつぶやきや読後の様子から成長や変容の様子を知ることができた。

【えほんノート 保護者コメント例】

・最近気づいたのですが、国旗を見て国の名前を言っています。アジアやアフリカの国など私はよく知らない国もすらすら答えてびっくりしています。幼稚園の絵本『世界の国旗』で覚えたそうです。(年長児)
・「てつどう」を見ながら“Maxとき”(今は引退)を見つけて嬉しそうにしていました。「乗りがかったなあ」と言っていました。(年少児)

○園だよりやホームページを通して保護者や地域に発信をし、理解や協力ができた。



ホームページ二次元コード

5 考察

SDGsはエネルギー問題や気候変動問題だけではなく。貧困や飢餓、ジェンダーなど様々な達成すべきゴールがある。それらを身近なこととして捉えることは難しい。幼児期からの本物の体験とそれを検証する科学絵本や、知らない世界に触れる物語絵本などによって豊かな感性が生まれ「楽しむ・知る・想像する・やってみる」につながっていった。さらに、その過程で様々な立場の人と関わり、コミュニケーション力や視野が広がり、やがて他者の困難を自分事と考えられるような素地が育っていくのではないかと考えている。

子供たちの“育ち”にはさまざまな差がある。だからこそ、個に応じた手立てを構築していくことで、「だれも取り残さない」という理念に、幼児教育として出来ることに今後も取り組んでいきたい。

2 環境教育支援

小学校

- 1 自然との豊かな触れ合いを通して子どもたちの心をはぐくむための環境教育の推進
～花と緑と命のあふれる学校環境の実現～……………さいたま市立三室小学校……62
- 2 栽培・飼育等の自然体験活動等を通して、自然、人、ものに豊かにかかわりあえる児童の育成……………さいたま市立上里小学校……64
- 3 思いやりの心を持ち、生命や環境を大切にすることの育成
～教科による栽培活動やビオトープづくり等の体験活動を通して～……………上尾市立尾山台小学校……66
- 4 持続可能なバラ栽培プロジェクトⅢ
～実践体験型 PBL を実現する「小針北小バラまつり」と「ローズガーデン」を通して～ ……伊奈町立小針北小学校……68
- 5 児童の豊かな感性と情操を育てる環境教育……………川越市立中央小学校……70
- 6 地域と学校周辺の自然環境を活かし、体験活動を通じた環境教育の推進
～学校・家庭・地域の連携による、ふるさとを愛し進んで学ぶ児童の育成～……………所沢市立荒幡小学校……72
- 7 郷土愛を育む児童の育成
～地域学校協働本部や PTA との連携による教育活動の推進～ ……日高市立高麗小中学校（前期課程）……74
- 8 地域と連携した環境教育の推進
～農業体験活動を通して、自然と食を考える～……………入間市立狭山小学校……76
- 9 「花とあいさつ福岡小学校」の優しさと笑顔あふれる学校づくり ……ふじみ野市立福岡小学校……78
- 10 世界にはばたく人材が育つ SDGs の実現に向けた教育の在り方
～ESD を通じて育成する資質・能力を重視した授業改善～ ……川島町立つばさ小学校……80
- 11 郷土の豊かさを活用し、郷土を愛する児童の育成
～栽培活動を通して、環境学習・キャリア教育を学ぶ～……………秩父市立荒川西小学校……82
- 12 自然・地域・人とのふれあい体験、梨栽培活動の実践
～夢と笑顔と「ありがとう」があふれる長幡小学校を目指して～……………上里町立長幡小学校……84
- 13 体験活動を重視した環境教育の推進
～SDGs を意識した環境教育の実践～ ……越谷市立桜井南小学校……86

中学校

- 1 家庭・地域・学校が一体となった“未来の原風景”づくり
～令和の時代に即した“家庭・地域・学校が一体となった”新たな「形」への転換～……………入間市立上藤沢中学校……88
- 2 地域のシンボル「松山」の維持管理と利活用
～加須西中学校における緑化活動とともに～……………加須市立加須西中学校……90

高等学校

- 1 地球環境とエネルギー問題を考える
～探究活動の充実とともに～……………埼玉県立所沢北高等学校……92
- 2 さいたま市ヨーロッパ野菜と地産地消
～食材の味わいを活かす野菜栽培と調理に関する研究～……………埼玉県立杉戸農業高等学校……94

自然との豊かな触れ合いを通して 子どもたちの心をはぐくむための環境教育の推進 ～花と緑と命のあふれる学校環境の実現～

さいたま市立三室小学校

校長 三島 公夫

1 はじめに

本校は、さいたま市の南東部、見沼田んぼの広がる自然豊かな地域に位置しており、今年度、開校152年目を迎える歴史と伝統のある学校である。「地域と共に歩む学校」として、地域の方々の様々なご支援・ご協力を受けながら、現在、34学級、910名の児童が学んでいる。

学校教育目標は、「自ら学び 心豊かに たくましく生きる 児童の育成」である。令和6年度より、『喜んで登校、満足して下校』というキャッチフレーズを掲げ、子どもたちが「思い描く幸せ」の実現を目指し、教職員、保護者、児童の Well-being を実現する学校づくりに向け、「子ども」を主語とした教育活動の充実に取り組んでいる。

2 児童の実態について

本校の児童は、明るく素直で、与えられた課題や役割には熱心に取り組むことができる。その一方、自ら課題を見つけ、その解決に向けて取り組んだり、自分たちで創意工夫を生かして活動に取り組んだりするという点については、消極的な様子が見られる。

そこで、児童が、学習や学校生活の様々な場面で自ら「? (はてな)」を見つけ、これまで習得した知識・技能を活用しながら、その解決に取り組んでいくことができるように、学校課題研究を軸とした授業改善に取り組んできた。

また、ここ数年間、長期欠席児童の人数が多いことが、学校としての大きな課題となっている。長期欠席の理由については様々な複合的な要因が考えられるが、児童が安心して学ぶことができるように、落ち着いた教育環境を創出することが、課題解消に向けた対策の一つだと考える。

3 研究仮説について

本校では、保護者や地域の方々の協力もあり、一年を通して多くの木々や草花に触れることのできる恵ま

れた自然環境が整備されている。

しかし、その反面、児童の自然に対する関心は低い。その象徴とも言えるのが、校舎南側、校庭に面した敷地の一角に設けられたビオトープである。

このビオトープは、本校の開校120周年に際して、「心の園」として記念に設計されたものである。大きな池を囲むように岩石が配置されるとともに、頭上には藤棚も設置されており、季節ごとの自然の移り変わりを身近に感じることのできる場所である。しかし、年月の経過とともに手入れが不十分となり、せっかくの生きた教材を生かし切れていないのが実情である。中には、ビオトープの存在を認識していない児童も見られる。

そこで、「花と緑と命のあふれる学校環境の実現」をキーワードに、季節ごとの植栽活動と合わせて、児童とともに学校ビオトープの再生に向けた活動に取り組むことで、子どもたちの豊かな心をはぐくむことを目的とする研究に取り組むこととした。

4 研究計画

【1学期】

- ・学校ビオトープの現状を確認し、「ビオトープ再生」に向けたロードマップを作成する。
- ・ビオトープ周辺の環境整備に向けた準備を行う。
- ・校内の花壇の除草作業、植栽作業を行う。
- ・学校菜園及び畑への夏野菜の植栽を行う。地域の方を「畑の先生」として招き、児童が主体的に野菜の世話に取り組むことができるようにする。

【2学期】

- ・児童とともに、ビオトープ周辺の環境整備に取り組む。
- ・ビオトープ用水生生物の選定・購入を行う。
- ・校内の花壇の除草作業、水やり、土の入替、苗の入替などの活動を行う。
- ・学校菜園及び畑の作物の世話に取り組み、地域の「ふれあい祭り」において、畑での収穫物を日頃からお世話になっている地域の方へ頒布する。

【3学期】

- ・冬、春の花の植栽に向け、校内の花壇の除草や水やり、土の入替、苗の入替などの活動を行う。
- ・学校菜園や畑について、地域の方の協力を得ながら、次年度の植栽活動に向けた準備を行う。
- ・ビオトープの再生状況を確認し、今年度の取組の成果と課題を明らかにし、2年目の再生計画を立てる。

5 具体的な取組

(1) ビオトープ再生に向けての活動

① 栽培委員会の取組

- ・5月、栽培委員会の児童とともに、柵内にあるビオトープの様子を確認し、活動の目的と見通しを共有する。
- ・安全に作業ができる状況まで再生が進んだ場合、児童によるビオトープ周辺の除草作業、水の管理の手伝いなどを行う。

(今年度は、ビオトープ周辺の草が想定より多く、池の濁りもひどかったことと、猛暑による屋外での活動の制限が多かったため、児童による作業は見合わせた。)

- ・令和8年度に向けて、児童集会や放送等でビオトープの年度当初の状況と現在の状況を比較して全校に知らせることで、児童の環境への興味・関心を高める。

② 環境教育部の取組

- ・ビオトープに設置している柵内に大量に自生しているドクダミの除草、藤棚の整備を行う。同時に、池に住んでいる生物の状況を確認しながら、少しずつ池の水を抜いていく。
- ・池の水質を確認し、池の中への水生生物の導入について検討する。生き物が暮らしているようであれば、生態系を壊さないように慎重に検討する。
- ・自生しているドクダミの除草後、日当たり等も考慮しながら、周囲の環境を整備していく。



〈年度当初の様子〉



〈現在のビオトープの様子〉

(2) 季節にあわせた花壇の整備及び畑での植栽活動

① 環境教育部の取組

- ・児童や来校者が季節の移り変わりを感じることができるよう、用務員と協力し、学校内にある花壇に、季節に応じた花等の植栽活動を行う。

② 栽培委員会の取組

- ・教師の指導の下、花壇への季節ごとの花の植栽活動や水やり等の世話に取り組む。
- ・中庭の学校菜園への夏野菜の植栽活動や水やり等の世話に取り組む。



〈学校菜園のヨーロッパ野菜〉



〈学校園の大根〉

③ 特別支援学級の取組

- ・中庭に設置されている畑について、地域講師の方を「畑の先生」として招き、苗植えや収穫などの活動を体験する。
- ・担任とともに、畑の作物の日々の生長を確認し、草取りや水やりなどの世話に取り組む。
- ・収穫した作物を調理する活動を通して、収穫の喜びを味わうことができるようにする。



〈畑の先生との学習〉



〈世話の様子〉

6 研究の成果と課題

- ビオトープ再生に向けての取組や植栽活動を通して、児童の身近な環境への興味・関心が高まった。
- 教職員も校内の環境に目を向けることで、様々な教科等で豊かな自然環境を生かした学習活動が多くみられるようになった。
- ビオトープ再生に関しては、プロジェクト初年度のため、教師が活動の中心となる場面が多かった。再生までは時間がかかる見通しだが、次年度は児童と共に計画を立てて、取り組んでいきたい。

栽培・飼育等の自然体験活動等を通して、 自然、人、ものに豊かにかかわりあえる児童の育成

さいたま市立上里小学校

校長 藤田 敦

1 はじめに

本校は、岩槻区の東部に位置し、全校で355名14学級の学校である。東岩槻駅を中心に南北に細長い学区である。また、東側は工業団地へ向かう幹線道路が東西に走り、西側は、元荒川が南北に流れ幹線道路と河川に挟まれた学区でもある。そして、東岩槻駅まで区画整理された街並みが続くベッタタウンでもある。

また、昭和52年に開校し、来年度には、創立50周年を迎える。学校教育目標を「豊かな心を持ち 他のために行動できる子」とし、目指す学校像として、「児童が生き生きと学び、真の学力が身に付く学校」「あいさつがあふれ、児童や教職員が協力できる学校」「安心・安全で花と緑と潤いのある学校」の実現に向け、教職員や地域・保護者と協働しながら創意工夫のある教育活動に取り組んでいる。



上里小樹木マップ

2 研究主題設定の理由

児童の発達の段階に応じた、様々な自然体験活動を協働的に行うことで、自然環境への興味・関心を高め、自然愛護、生命尊重、思いやりの心情を養う。また、作物を収穫する経験を通し、自然への感謝、自然の尊さの気持ちをもてるようにしたい。

また、本校では、開校30周年にあわせて学校ビオトープを造成し、ホタルの栽培・飼育もおこなっている。豊かなビオトープ作りという自然体験活動を仲間と協働的に行うことで、自然環境への興味・関心を高め、環境保全活動の充実を図るとともに、自然愛護や自然への感謝の気持ちを育みたい。また、上里小で生

まれたホタルを卵から成虫へと育てる経験を通し、生命尊重の心情を養うことを目的とし、本主題を設定した。

3 実践の概要

(1) 環境委員会と放課後チャレンジスクールによる 中庭花壇への植栽活動

正門前の花壇を整備し、四季に合わせた花の栽培、世話、緑化に取り組み、緑いっぱい为学校づくりを推進している。今年度は、2期に分けて植栽活動を行った。5月には、暑さに強い日々草やペチュニア、サフィニアを栽培し、11月には、寒さに強い、パンジー、ビオラ、ストック、ノースポール等を栽培した。常時活動として、年間11回の委員会活動の時間、昼休みや業間休みを活用して水やりや雑草取りを行っている。



チャレンジスクール植栽活動の様子

(2) 学級園を利用した栽培と収穫の体験活動

生活科、理科、生活単元学習を活用して、収穫の報告会を行ったり、収穫したものを学習で使用したりしている。

今年度栽培した植物や野菜

- 【1年生】アサガオ（つるを使ったリース作り）
- 【2年生】ミニトマト、ピーマン、ししとう、オクラ、ナス
- 【3年生】ハウセンカ
キャベツ（モンシロチョウの観察）
- 【4年生】ヘチマ
- 【やまぶき学級】ミニトマト、ピーマン、ナス、かぶ、大根、にんにく、きゅうり、レタス



やまぶき学級園



アサガオのつるで作ったリース

(3) 上里小ホタルの住むビオトープ作り

上里小では、岩槻ホタルの会のスタッフの力を借りながら、環境委員の子どもたちを中心に約20年前からホタルの生育を行っている。現在、環境学習室には、約4000匹のホタルの幼虫がおり、産卵から、幼虫、蛹、成虫へと飼育を行っている。5月になると、ホタルの幼虫をビオトープに放流し、6月下旬には上里小「ホタルの夕べ」を開催し、学校関係者及び地域の方にホタルの鑑賞を楽しんでもらっている。



ホタルの幼虫の飼育セット



幼虫のえさのやり方



ホタル幼虫上陸飼育装置



ホタルの幼虫をビオトープへ放流

また、今年度は、老朽化してきたビオトープの改修工事も実施した。ビオトープを通して、学校、地域、保護者がつながり、今後も持続可能な豊かな環境保全作りに取り組んでいきたい。



ビオトープ改修後の様子

4 成果と課題

(成果)

- 児童一人ひとりが栽培や飼育などの自然体験活動を通して、自然への親しみや栽培の喜びを味わうことができ、豊かな感情と意欲を醸成することができた。
- 学校、家庭、地域が連携して環境保全への意識を高めることができた。

(課題)

- △中庭花壇の面積が大きいため、1年間、きれいな花を維持するためには、手間とコストが非常にかかる。持続可能な活動を維持するための組織づくりや予算設定が必要である。

思いやりの心を持ち、生命や環境を大切にすることの育成 ～教科による栽培活動やビオトープづくり等の体験活動を通して～

上尾市立尾山台小学校

校長 赤羽 洋 治

1 はじめに

上尾市立尾山台小学校は、今年開校59年目を迎え、児童数154名、8学級の学校である。上尾市の南東端に位置し、学校周辺には団地や住宅街が広がっている。以前は、近隣に森林や畑が存在していたが、最近では新しい住宅が建築されるなど、自然が少なくなっている。

本校の学校教育目標は、「確かな学力を身に付け、心豊かにたくましく生きる児童」であり、目指す児童像を「明るい子」「考える子」「たくましい子」として、日々の教育活動に取り組んでいる。

P T Aや学校応援団等の地域との協力体制が整っており、学校・家庭・地域が一体となって児童が成長していくための教育環境を整えられている。

2 研究主題設定の理由

本校周辺は、少しずつ住宅開発等が進み、森林や畑などの自然が少なくなっている。そのため、児童が家庭や地域の活動や遊びの中で、自然に触れ合い、体験しながら学習できる環境が乏しくなっている現状がある。

そこで、本校では、理科・生活科・総合的な学習の時間等の学習活動を充実させ、動植物を育てる体験を通して、生命や環境の大切さについて理解を深めさせてきた。

また、今日的な課題であるS G D sの目標やターゲットを視点に入れることで、持続可能でより良い社会を形成する児童の育成を目指し、研究主題を設定した。

『15 陸の豊かさを守ろう』

『15-1 「2020年までに国際的な協定

にしたがって、森林、湿地、山地、乾燥地など陸上の生態系と、内陸の淡水地域の生態系、および、それらがもたらす自然の恵みを、守り、回復させ、持続可能な形で利用できるようにする。』



3 研究の実践（具体的な取組など）

(1) 理科の活動

理科では、実際に自ら栽培することを通して、植物に対する愛着を持つとともに、「発芽→成長→開花→結実」という流れを観察・経験することで、生命の循環を知り、生命を尊重する心を育むことができた。

また、季節の変化が植物の成長に影響を与えることなど、自然環境への関心が高まった。



ヘチマの栽培



ホウセンカの栽培

(2) 生活科の活動

生活科では、種や苗から植物を育てることで、植物の日々の変化や成長を感じながら、親しみをもち世話をすることができた。また、世話をするに当たり、植物に必要な要素や環境を考えたり、収穫をして食べたりすることで、「食の循環」について学習し、食への関心と感謝の心を育むことができた。



アサガオの栽培



ドングリを使った遊具づくり



野菜の栽培



サツマイモの栽培

(3) 総合的な学習の時間の活動

総合的な学習の時間において、敷地内にある一区画で「ビオトープ」を構築する活動を行った。区画内には、「尾山台の池」と名付けた水場を作り、メダカや水草等を入れて水生生物が住むことができる環境を整えた。

また、その周辺には、昆虫などが生息できる草むらを作り、試行錯誤しながら動植物が生きやすい環境づくりを行った。

他の児童に活動を周知するために、区画内に生息する動植物についての張り紙をしたり、動植物の生態についてクイズを作り、答えてもらう機会を作ったりすることで、自然環境についての興味・関心を引き出し、知識を深めさせることができた。

<活動前>



<活動の様子>



<動植物に関する掲示>



4 研究の成果と課題 (○…成果、●…課題)

【成果】

- 植物を育てる活動を各教科の年間指導計画と結び付けて行うことで、年間を通して「思いやりの心を持ち、生命や環境を大切にする子供の育成」に取り組むことができた。
- 栽培・収穫体験や調理実習等を通して、植物を育てることの難しさ、収穫物への愛情、動植物の命をいただくありがたさ等、多くのことについて実体験を通して学ぶことができた。日々の給食や家庭での食事においても感謝の気持ちを持つことにつながり、食育指導の充実にもつながった。
- 総合的な学習の時間における「ビオトープづくり」では、児童自ら何が課題であるかを考え、その対策のためにはどのようなことを実施していく必要があるのかを、自分事として捉える実践を試行錯誤しながら行った。その結果、身近に生きている動植物の生態や生きやすい環境について学んだり、動植物が生きやすい環境にするためには、どのような生態系を構築したりすれば良いのかを実践を通して体験することができた。小さな生態系を学び、その考えを地球全体へとつなげていこうとする考え方を身に付けることができた。今日的な課題であるS G D sの視点からも、環境について考えることができた。

【課題】

- 各教科と連携しながら、栽培活動等に取り組むことは、児童の興味・関心を高める上で非常に効果的である。総合的な活動の時間と関連付けて行った「ビオトープづくり」は、継続した活動が求められるため、次年度への引継ぎや永続的な運営方法を考えていく必要がある。
- 思いやりの心を持ち、生命や環境を大切にする子供の育成をさらに充実させるために、地域の人材や保護者の活用は必至である。人材発掘や連携方法等を含め、連携が円滑になるようにすることが課題の一つである。

持続可能なバラ栽培プロジェクトⅢ

～実践体験型PBLを実現する「小針北小バラまつり」と「ローズガーデン」を通して～

伊奈町立小針北小学校

校長 宮澤好春

1 はじめに

本校は、平成18年に小針小学校から分離し、今年創立20年目を迎えた。児童数684名、25学級（特別支援学級3学級を含む）の中規模校である。現在児童数は減少傾向にあるが、ピーク時には児童数が1,300を超えていた。今年度の目指す学校像「豊かな学びで笑顔あふれ、地域とともにある小針北小～継承と発展、さらなる挑戦の20年目～」の下、子供をまん中に据え、子供・学校・家庭・地域がウェルビーイングを実感でき、その好循環をつくり出すコミュニティ・スクールとして、子供たちが通いたい学校、保護者が通わせたい学校、教職員が働きたい学校づくりを目指し、教育活動を展開している。

2 研究主題設定の理由

本校学区内に県内最大級のバラ園があり、春と秋のバラ祭りには多くの方が来園している。しかし、多くの児童は身近にあるバラや自然環境等への関心や親しみが薄かった。そこで、3年前に総合的な学習の時間の指導計画を見直し・改訂し、伊奈町の花であるバラをテーマに据え、持続可能なバラ栽培に取り組む実践体験型の探究的な学習活動を展開するPBL（Project Based Learning）に取り組み始めた。2023年に伊奈町役場から40鉢のバラを譲り受け、地域のバラマスターズさんの御指導の下、子供たちが主体的にバラ栽培に取り組み始めた。同年11月の学校公開日に「小針北小バラまつり」を開催し、保護者・地域の方へ取組をプレゼンテーションしたり、摘み取ったバラを商品化して販売をしたりする活動も始まった。バラの栽培活動に関わる体験を通して、身近な自然環境やSDGsへの関心を高めるとともに、まちづくりへ参画をしようとする態度の基礎を養うことを目的に、本研究主題を設定した。



3 実践内容

(1) 持続可能なバラ栽培活動

日々の水やりでは、自動水やり機複数台を稼働させ、プログラミングにより設定した時間や頻度で120鉢に灌水できるようにした。



その他、実行委員会裁

培チームの子供たちが農薬に頼らない栽培法として納豆菌や酵母菌等をヨーグルトメーカーで培養し、それらを週1回定期的に散布し病気予防に取り組んだ。また、バラマスターズさんに御指導いただきながら、児童と一緒に春と夏、冬に剪定作業を行っている。昨年度から継続して取り組んでいる活動として、校内除草作業で出た雑草と近隣の里山公園の落ち葉に、地域のJAや乗馬クラブから提供いただいた糠や馬糞を混ぜ、自家製堆肥づくりを行っている。この堆肥は、冬の土替えの時に活用したり、プランターで活用したりしている。これらの活動は、3年間で持続可能なバラ栽培活動に進化・深化しており、SDGsの目標に向けたアクションを起こすことにつながっている。

(2) 小針北小バラまつり

6年生の学習活動の成果を発表する場として、毎年11月の学校公開日に「小針北小バラまつり」を開催している。実行委員会広報



チームは、今年度の取組をまとめ、「月刊バラコニー」の発行をしたり、当日のプレゼンテーションを担当したりした。実行委員会栽培チームは、上記(1)に係る栽培活動の中心となって活躍してくれた。さらに、バラまつり開催に向けて4つのプロジェクトチーム（商品、設営、CM、情報）に分かれ、チームリーダーの下、主体的に活動していた。情報チームは、本PBLの活動の際し研究

助成をいただき、STEAM教育 (Science Technology Engineering Art Mathematics) 推進のために購入した3Dプリンターで植木鉢やサシエの枠等を製作した。

その他、バラまつり直前には、商品チームが春と秋に摘み取った花柄をドライフラワーにし、ハーバリウムやサシエ、ポップ等を中心に主体的に製作し、バラまつり



当日に販売活動を行った。CMチームはバラまつりを宣伝するCMやポスターづくりを担当した。参考までに、2025年のバラまつり当日には、1,000人を超える保護者・地域の方・卒業生が来校し、6年生が用意したプレゼンテーションを視聴したり、ゲームに参加したり、商品を購入したりしていた。

今年度の売上は18万円を超え、全て今後のバラ栽培活動に還元していく予定である。



(3) バラのバトンの引継ぎ

本実践は、2023年に伊奈町より40鉢のバラを提供していただいて始まった。初めての体験活動であったため、バラマスターズさんから御指導をいただいたことで栽培活動を継続することができている。2023年の小針北小バラまつりを開催するにあたり、伊奈町商工会会長さんからバラの商品づくりについて講義をいただき、初めてバラの商品を手作りすることができた。初年度の成果と課題がその年の6年生(現中2)から5年生へバラのバトンとして引継がれた。

2024年に伊奈町で「バラサミット」が開催され、全国から伊奈町に見えた関係者へ、本校のPBLの取組について実行委員の児童がプレゼンテーションを行った。また、この年から持続可能なバラ栽培を目指し、地域の支援をいただきながら雑草堆肥づくりを始めることができた。同年11月の「小針北小バラまつり」では800人の来場者があり、子供たちが主体的に活動をし、新しい商品開発も行い販売活動を行うことができた。2月に自作の雑草堆肥を活用して土替えを行った。2年目の成果と課題を含め、3月に6年生(現中1)から5年生へバラのバトンが引き継がれた。

2025年の活動は先述の通りであるが、今年度本校は

創立20周年を迎えることとなり、現在「20周年記念小針北小バラガーデン」を造園中である。その中心となっているのが実行委員会造園チームで、2月の



記念式典でのお披露目を目指して奮闘中である。それらも含め、3月に引継ぎ式を行い、現6年生から5年生へバラのバトンを引継ぐ予定である。

4 成果と課題 (○成果 ▲課題)

○1つ目のゴールである11月の「小針北小バラまつり」に、2つ目のゴールである3月の「5年生への引継ぎ」に向けて、児童の探究過程(課題の設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現)がスパイラル的に繰り返すPBLのプラットフォームを確立することができた。

○総合的な学習の時間を核に、地域のバラマスターズさん、生態系保護団体、JA、乗馬クラブ、伊奈町役場、商工会等と連携を図ることができ、STEAM教育やアントレプレナー教育、まちづくりへの参画等、教科横断的な広がりのある指導計画となり、子供たちに豊かな学びを保障することができた。

○保護者から「北小のバラが地域のシンボルとなり次の学年へと引き継がれていくことを願っている。そのために地域の一員として応援し協力したい。」等肯定的な感想を多くいただいた。

▲3年間実践を積み上げることができたが、主担当や管理職が異動してしまった時に、教職員間で本PBLが引継げる土壌としくみを構築する必要がある。

5 おわりに

今年度第35回全国花のまちづくりコンクールにおいて文部科学大臣賞を受賞することができた。「児童が地域資源を活かして解決策を考える『バラ栽培プロジェクト』の取組は、今までに例を見ない社会に開かれた画期的な活動として大変高く評価された。」との講評をいただいた。本PBLを通して、子供・学校・家庭・地域がウェルビーイングを実感し好循環が生まれ始めている。



児童の豊かな感性と情操を育てる環境教育

川越市立中央小学校

校長 福島 みどり

1 はじめに

本校は開校152年を迎えた、児童数480名の中規模校である。川越の街の拠点となる駅や商業施設、道路網等が発展している市の中心街に位置している。

学校教育目標「次代を担い たくましく生きる児童の育成」の具現化に向け、“ゆたかな子”「かしこく」、「なかよく」、「たくましく」を目指す児童像とし、「チーム中央小」～すべての教育活動は子どもたちのために～を合言葉に教職員、保護者、地域と連携し一丸となって日々の教育活動に取り組んでいる。

令和6・7年度に川越市教育委員会の委嘱を受け、研究主題を「一人一人の花を咲かせ、未来を創る児童の育成～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通して～」とし、国語科、算数科、体育科での学校課題研究にも取り組んでいる。

2 研究主題設定の理由

本校は商店街や住宅街にあり、自然が多い地域とはいえ、児童が日常的に自然や動物等に触れる機会は少ない。そのため、自然についての知識はあるが、実際に見たり、体感したりする経験が十分でない児童が多い実態がある。

そこで、本研究を通して、五感を使い自然に触れる経験を通して、豊かな感性と情操を育てる教育実践を行うこととした。

また、この実践を通して、SDGsの視点である環境について、限りある自然を大切にすること、守り育てることや使う責任など持続可能な社会の作り手として自覚し、知識について学ぶ機会としていく。

さらに、本校における自然に関する教育活動について、ふるさと学習をはじめ、各教科の単元間や学年間など縦横のつながりを意識した指導計画の見直しを行い、家庭・地域を巻き込んだSDGsに係る活動の周知と活動の更なる充実改善を図っていく。また、川越市エコチャレンジスクールに参加し、環境に対する意識を高めていきたい。

3 研究内容（具体的な取り組み）

（1）各学年の活動

① 1年生 季節さがしと動物とのふれあい

1000年以上の歴史があり重要文化財も多くある喜多院境内での季節を探る活動を行うことは身近な自然に触れる機会であり、自然に関わる学習の第一歩となっている。また、秋には埼玉県子ども動物自然公園で動物とふれあう活動を行っている。

② 1～3年生 朝顔やミニトマト、ナス等の栽培

植物の栽培や観察をとおして身の回りの植物に関心を持つようにしている。

③ 4年生 総合的な学習の時間の取組

ゴミに関する環境課題「1つの空き缶から」や食物の生産や消費に関する環境課題「食べ物の秘密を探ろう」など身近な環境問題を自分事としてとらえ、SDGsについて知り、環境への関心を持ち、日々の行動に生かせるようにする。

④ 5年生 林間学校での取組

自然と触れ合う体験を通し、人間にとって自然はどのような存在なのか、また、ネイチャー・トレッキングな



ど体験活動を通して自然について学んでいる。

この活動を通し、自然環境と生き物のつながりを理解し、私たちの生活と森の結びつきを考え、森を身近な存在として捉える視点を養っている。

⑤ 6年生 総合的な学習の時間の取組

「マイドリームプラン」の作成を通して現在の社会の現状と課題を認識し、今後自分たちが生きていく社会が、どのような環境であってほしいか、そのために何ができるのかについて考えさせている。

（2）委員会活動

① 飼育栽培委員会

・1年間を通した計画的な花壇植栽を行うことにより、

自ら自然に触れる経験を養うと共に、潤いのある学校環境づくりに寄与する。

- ・年間を通した委員会活動時の植栽、栽培、毎日のうさぎの世話を通して動植物を大切に育む心を育てる。

②環境美化委員会

- ・節電・節水の推進、ペットボトルキャップの回収等について、それらを行う意義、環境に与える影響などを児童朝会等で発表したり、ポスターを作成、掲示したりすることで全校児童の意識を高めている。
- ・校庭にある樹木を調べて樹木マップを作成・掲示する。また、樹木プレートを作成し樹木の名前や特徴を全校児童に示すことで自然を愛する心を育てる。



〈樹木プレート〉



〈樹木マップ〉

また、校歌に出てくる植物（桐の花）や学校のマスコット名の由来などについて紹介することで愛校心を育てている。



〈校内に咲く桐の花〉



〈中央小マスコット“ポロウ”〉

(3) 学校・家庭・地域との連携

PTA や地域関係者と共に行う環境美化活動（除草活動、側溝清掃、植栽活動等）を実施する。これにより学校の取組を地域に周知すると共に、地域に対しても SDGs に係る活動を発信していく。

①正門前花壇の整備

栽培委員会の児童中心に校門前の市民花壇の植栽活動を活動を行っている。花壇は登下校時に児童の目に入る場所にあり、



児童や来校者に潤いを与えている。

②側溝清掃

6月の土曜日に保護者と児童により運動場周りの側溝の清掃を行っている。梅雨の前に行うことで雨水の排水がスムーズに行われるようになる。



親子で行うことで親子のコミュニケーション、清掃後の達成感など味わう事ができた。

③除草作業

1学期に3回、2学期に3回、低学年、中学年、高学年のブロックに分かれ、朝の活動の時間に保護者と一緒に除草活動を行っている。雑草のないきれいな校庭をみて満足そうな表情がみられた。



④落ち葉掃き

秋から冬にかけて本校の通学路や校庭にケヤキやイチヨウの葉が大量に落ちる。保護者ボランティアやJRC委員会の奉仕活動の一環として通学路等にかかる落ち葉掃きを行っている。



4 成果と課題（○成果 ●課題）

- 身近にある花や樹木と触れ合うことで自然を大切にしようという意識が芽生えた。
- 児童や教職員が保護者、地域の方々と一緒に活動することで連携が深まり、児童に愛校心を育むことができた。
- SDGs への関心を深め、日々の生活や行動に活かすことができた。
- 季節ごとに植える花苗に係る費用が大きい。

5 おわりに

児童の豊かな心を育むために自然に触れる多様な経験をさせることが欠かせない。本校の地域の特性を生かしつつさらに多くの体験をさせることができるよう、今後も環境教育を継続・発展させ、次代を担いたくましく生きる児童を育てていきたい。

地域と学校周辺の自然環境を活かし、 体験活動を通じた環境教育の推進

～学校・家庭・地域の連携による、ふるさとを愛し進んで学ぶ児童の育成～

所沢市立荒幡小学校

校長 小林 雅行

1 はじめに

本校は、「荒幡に学校を」という地域の皆様の熱意と努力により昭和年57年に児童数720名で新設開校した。今年度44年目を迎え、現在通常学級12学級、特別支援学級2学級、333名の児童が学んでいる。

学校教育目標は「ふるさとを愛し、進んで学ぶ子かしくく（知）、なかよく（徳）、たくましく（体）」であり、目指す児童像は「主体的に学ぶ子、はい・ありがとう・ごめんねが素直にいえる子、粘り強く取り組める子」である。本年度は「教職員・保護者・地域が三位一体となり「調和」のとれた学校教育を推進する」ことを重点とし、日々教育活動にあたっている。

狭山丘陵の豊かな自然に囲まれた本校は、校地の北側にドレミの丘という見晴らしの良い草原の丘があり西側は雑木林に囲まれ、古くから富士山信仰の地として地域の方々に大切に守られてきた「荒幡富士」や、身近な自然とのふれあいを通して、自然の大切さや自然と人との関わりなどを考えるために整備された「生きものふれあいの里センター」がある。

地域は歴史ある荒幡地区と開校時に開発された松が丘地区の2地区からなり、地域の方は学校の活動に協力的で、登下校の見守りや読み聞かせなどのボランティア活動のほか、ディスコン体験や野菜の収穫体験などの交流もしていただいている。また荒幡富士清掃や夏祭り、運動会などの地域行事も多く、本校の児童も多く参加している。

本校ではそうした地域の特徴を踏まえ、「自然豊かな地域のよさ」を生かした体験活動を充実させたり、「持続可能な社会の一員」となる児童を育成したりすることを目的として、本研究主題を設定した。



【ディスコン体験】



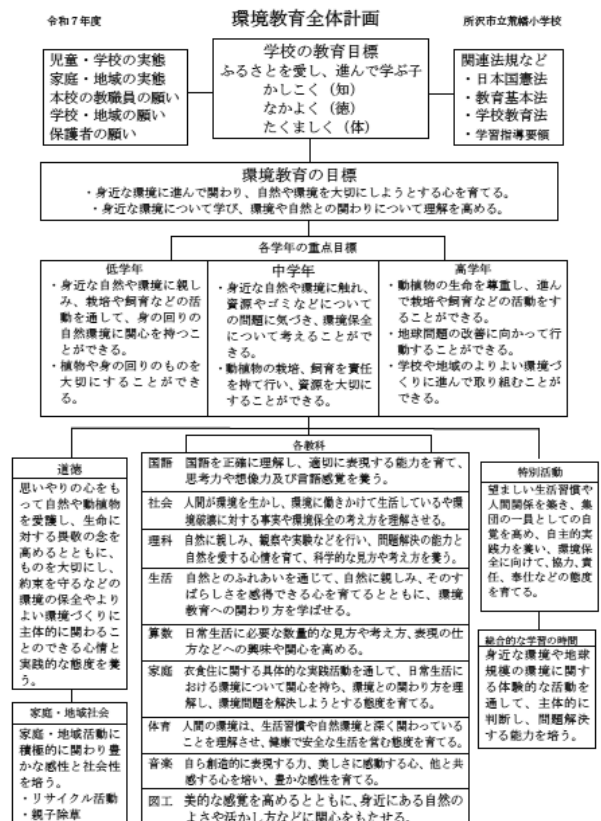
【荒幡富士清掃】

2 児童の実態について

全国・県学力・学習状況調査の正答率は、全国的に国や県、市の平均を下回っており、基礎的・基本的な内容の習熟や学力差への対応が課題となっている。一方で、学習方略や非認知能力では県や市の平均と同等もしくは平均を上回っている状況である。県学力・学習状況調査の質問紙の「今住んでいる県や市町村の歴史や自然に関心を持っていますか」という問いに関して、4～6年生の肯定的な回答率が県や市を上回っている。また、「授業で学んだことを、日常生活で生かせると感じたこと」という問いに関しては5、6年生の肯定的な回答率が県や市を上回る結果となっている。

以上のことから、基礎的・基本的な内容の習得を丁寧に行うとともに、生活科や総合的な学習等における横断的な活用を通して習熟を図りながら、生きた力として身につけていけるよう指導の工夫を行う必要がある。

3 環境教育全体計画について



4 研究仮設について

本研究では、各教科及び総合的な学習の時間の他、PTA や地域と連携した取り組みを通して、以下のような研究仮設を設定して実践に取り組んだ。

地域と学校周辺の自然環境を活かし、体験活動を通じた環境教育の推進することにより、

- ①自分の生活と関連させ、環境問題等の解決に向けて、主体的に考え、意欲的に活動する児童が育つであろう。
- ②地域の自然環境に関心をもち、地域の自然の素晴らしさとその保全活動の大切さを感じ、故郷を愛する児童が育つであろう。

5 具体的な取組

(1) いきものふれあいの里センターと連携した活動

【3年生総合】

「われら荒幡たんけんたい」

3年生の児童が定期的に訪問し、職員の指導支援の下、四季によって変化する虫や植物の様子を観察している。「森の虫探しビンゴ」など、児童が楽しく学ぶ手立てや、複数回観察ができることで、違いに気づき、季節ごとの特徴を児童自ら発見することができている。

【特別支援学級 生活単元】

特別支援学級の児童が所沢図書館吾妻分館といきものふれあいの里センターと連携した取組「森の図書館」に定期的に参加している。子供たちは自然の中でのんびりと読書をしたり、読み聞かせに参加したりすることで、心も安定し、自然の中で過ごすことの気持ちよさを 実感している。また、職員の方の案内ではっぱじゃんけんをしたり、敷地内に生えている桑の木の実を食べたり、自然の中に生息している生き物を観察したり、カブトムシの幼虫や蚕に触れたりしている。日常生活の中ではなかなか体験できない自然とのふれあい体験は、児童の情緒の安定や心の発達にもたいへん効果があると考えられる。はじめは虫に触れなかった子も、何回か訪問していく中で触れるようになったり、季節ごとの生き物の変化に気いたりする姿が見られている。

(2) 地域の自然環境との触れ合い活動

【低学年の生活科の学習】

低学年合同でドレミの丘に行き、生活科の春探しを行っている。子供たちは春の花や昆虫などいろいろなものを見つけ、友達に教えあっている。また虫を採集したり、花を摘んで小さな花束など作ったり、児童が思い思いに身近な自然を生かした活動を行っている。

身近にある豊かな環境を生かした本校ならではの体験学習であるとともに、1,2年生合同で行うことで、2年生が1年生に生き物探しを教えてあげたり、困っている1年生を助けてあげたりする場面も多く見られる。

【3年生 ヤゴレスキュー】

自然豊かな本校では、プールにトンボがたくさんやってきて卵を産む。5月のプール清掃をする前を見計らって、秋から春にかけて育ったヤゴを、3年生が捕まえてビオトープに放す取組を行っている。子供たちは体験を通して、水中で卵や幼虫の時期を過ごす特徴的なトンボの一生や命の循環を知るとともに、生命の大切さについても学ぶよい機会となっている。

(3) 栽培や収穫体験活動や全校を挙げての環境美化、リサイクル活動

本校ではサツマイモやトマト、ピーマンなどの栽培体験や地域農家の協力による収穫体験を低学年や特別支援学級を中心に行っている。また、全校で校地内の草むしりや落ち葉掃きなど、PTA や地域住民と合同で実施している。また、アルミ缶や牛乳パックのリサイクルなども児童を中心に年間を通して実施している。



【3年生の総合】



【特別支援学級の蚕の観察】

6 成果と課題

本校の児童は、様々な自然体験を重ねることで、地域の自然環境への関心が高まる傾向にある。埼玉県学力・学習状況調査児童質問紙の現6年生の回答「今住んでいる県や市町村の歴史や自然に関心をもっていませんか」「授業で学んだことを、日常の生活に生かせると感じたこと」の質問に対して4年生時では肯定的回答が66%と62.5%で、ともに県や市の平均を大きく下回っていた。しかし5年生で79.7%と84.4%で県や市の平均を上回り、6年生でも68.8%と81.3%と、やはり県や市の平均を上回る結果となっている。

今後は、豊かな自然環境をより教科横断的、探究的な学びに生かすことで非認知能力のさらなる育成、ひいては児童の学力向上、生きる力の向上につなげていきたい。また学校応援団や地域住民の高齢化に対応するため、保護者との連携をより一層充実させる仕組みを構築することで、持続可能な取組としていきたい。

郷土愛を育む児童の育成

～地域学校協働本部やPTAとの連携による教育活動の推進～

日高市立高麗小中学校（前期課程）

校長 利根川 典 正

1 はじめに

本校は、高麗小学校と高麗中学校を統合し、義務教育学校である日高市立高麗小中学校として令和7年4月に開校した。

本校を取り巻く環境は、曼珠沙華の開花時期には多くの観光客が訪れることで有名な巾着田、女性登山家・田部井淳子さんが度々登られた日高市のシンボル・日和田山、高麗神社をはじめとする1300年の歴史と文化に富んだ高麗の里、教育に高い関心を寄せる地域社会と恵まれた環境の中で特色ある教育を行ってきた。

本地区のめざす15歳像は、「よく学び 心豊かにたくましい高麗っ子」であり、学校教育目標は「立志・友愛・創造」とし、めざす学校像「やる時はやる！ミラクル高麗 奇跡を起こせ！～子供のよさや取り柄を伸ばす笑顔あふれる学校～」のもと、日々の教育活動にあたっている。

また前年度まで高麗小、高麗中はコミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育を推進するとともに、地域学校協働本部やPTAとの連携による教育活動を実践してきた。本校の教育活動に対し、地域の方やPTAは非常に協力的であり、活動も盛んである。

義務教育学校として新たな教育が開始され、その特色を十分に発揮するための方策として、地域学校協働本部やPTAとの連携による教育活動を一層推進させることが肝要と捉えている。それにより、人や自然とのかかわりや体験を通して、郷土愛を育む児童の育成につながると考え、研究に取り組むこととした。

2 児童の実態について

全国学習・学習状況調査では、平均正答率は下回っている。県学力・学習状況調査では学年により平均正答率を上回る学年もあるが、全体的には学力の格差が大きくなりつつある。そのため、基礎・基本の定着を大切にしながらも児童主体の授業づくりを進めている。

一方、不登校の児童は少ないものの、集団での生活に適応できない児童はいる。しかし、同級生とのかかわりは難しいものの、教師や地域の方とのかかわりや自然体験などの体験活動は取り組めることも多い。

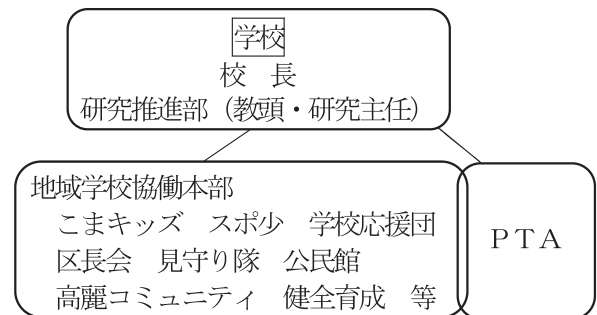
このような児童の実態を踏まえ、本研究の推進は、本校児童の課題解決の糸口になるとともに郷土愛を育み豊かな自然や生物を大切にしようとする態度と心情を一層育成したいと考え、研究題目を設定した。

3 研究の仮説について

本研究では、教育活動全体を研究対象とし、以下のような研究仮説を設定して実践に取り組んだ。

- ☆豊かな自然を生かした教育活動を行うことで、郷土に対する愛着と自然を守ろうとする態度と心情が育成されるであろう。
- ☆義務教育学校の特色と生かし、9か年の環境教育をより横断的な指導計画とすることで、郷土愛を育む児童の育成となるであろう。

4 研究組織について



5 具体的な取組

取組実践に際しては、地域学校協働本部やPTAに相談・調整し、活動を進めた。

①地域の方々との教育活動

(1) 野菜づくり（全学年）

農業経験豊かな地域の方を講師に迎え、様々な野菜を栽培・収穫している。その多くの野菜を1月の芋煮会に使用し、全校児童で味わうだけでなく、人への感謝や収穫の喜びを味わう機会となった。

1・2年生 サツマイモ 3年 白菜

4年 サトイモ 5・6年 長ネギ

(2) 茶もみ体験（3年生）

本校校舎前にある講師所有の茶畑より茶摘み、茶

もみをし、喫茶する体験を実施している。本活動を通じて、季節を感じ、旬のものを味わう貴重な体験となった。

(3) 巾着田たんけん（1・4年生・年2回）

地域の方を講師に迎え、巾着田で虫・花の観察を行っている。季節によって観察できる虫・花が変わるため、身の回りの自然の豊かさを実感しつつ、自然や生命を大切しようとする心情を醸成した。

(4) 生け花体験（5年生）

地域の方を講師に迎え、実施している。活動を通して草花の名前や特色を知り、植物への興味・関心を持つ機会となった。

(5) 高麗川の河川清掃（6年生※9年生も含む）

高麗中が50年以上に渡って続けていた活動を今年度も継承して取り組んだ。環境保全の観点で学ぶとともに郷土を大切にしようとする心の醸成となった。

(6) 芋煮会（全学年※後期課程も含む）

高麗小が長年大切にしてきた行事である。前述「(1) 野菜作り」で育てた野菜を使用して芋煮を作り、味わう活動となった。



いもほり体験（1・2年）



巾着田たんけん（4年）

②PTAとの教育活動

(1) 秋さがし（2年生）

ふるさと科（生活科）において、保護者とともに本校校庭や巾着田にある植物や虫、魚を観察した。春にも本校校庭で同様の活動をしており、季節の違いだけでなく、生物の生息の違いにも気づく機会となった。

(2) 花いっぱい運動（6年生）

花壇に季節の花を植えようと企画されている。12月は6年生、2月は8年生（中学2年生）と花を植え、学校環境に彩りを添え、児童生徒が花の世話をした。

(3) 日和田山清掃（6年生）

11月に予定していたが、近隣でクマの目撃情報等があり、中止とした。

(4) 日高ツーデーウォーク

（全学年※後期課程も含む）

日高市が11月に主催する「日高ツーデーウォーク」に全校で参加した。保護者も参加し、高麗地区のコースを主に歩き、豊かな自然を満喫した。

③外部組織等との教育活動

(1) 日高都市ガス・社員による環境教育（4年）

「環境とエネルギー」をテーマに日高都市ガスの社員が講師となり、児童たちが地球温暖化によって起きている問題や脱炭素社会の実現に向けた取組などについて理解を深めた。

(2) ウグイの放流（3年生）

日高市産業振興課・県西部漁業協同組合の協力のもと、11月に実施した。この活動を通じて、ウグイの生態等を学び、生命尊重の心情を醸成した。

(3) メダカの授業（5年生）

理科の単元「受けつがれる生命・メダカのたんじょう」において、外部指導者（校長経験者）による授業を実施した。実際の受精卵を顕微鏡で観察したり、孵化したばかりのメダカを観察したりと貴重な体験となった。



日高都市ガスによる環境教育（4年）



ウグイの放流（3年）

④その他

(1) クリスマス会（地域学校協働本部主催）

教育課程外であり、地域学校協働本部主催の公民館事業の一環であるが、多くの児童が参加している。高麗地区で採集した木の実等を使用したクリスマスリースを作製し、季節を味わうとともに豊かな自然を実感できる機会となっている。また同校の生徒による吹奏楽部の演奏も披露した。

6 成果と課題（○成果 ●課題）

○地域学校協働本部やPTAとの連携により、地域にある教育的資源（人材や自然環境）を効果的に生かすことで児童の郷土愛を育成できた。

○児童の郷土愛の育成だけでなく、環境教育や身の回りの動植物への興味関心が高まった。

●義務教育学校の特性を生かし、後期課程（中学生）とともに活動できる取組を一層増やすことで本事業のさらに推進していきたい。

地域と連携した環境教育の推進

～農業体験活動を通して、自然と食を考える～

入間市立狭山小学校

校長 田 島 浩

1 はじめに

本校は、入間市の南部に位置し、昭和33年に創立され、本年度、67年目を迎える学校である。入間市博物館に隣接した立地であり、地域の北側には入間市の特産である狭山茶の茶畑が広がっている。学区は工業地帯であり、国道16号や圏央道も近くを通る立地で、現在14学級、336名の児童が学んでいる。

学校教育目標は、「進んで学ぶ子（知）心の豊かな子（徳）明るく元気な子（体）」であり、目指す学校像を「誰からも信頼される、明るく元気な学校」として日々の教育活動を推進している。

2 主題設定の理由

狭山小学校ではこれまでも、毎年夏野菜を栽培し、収穫した野菜による調理実習や、米・大豆から味噌を作る体験、お茶についての体験などの学習を重ねてきた。地域の方や保護者にも協力していただきながら続けている活動も多い。この地域の特色を生かしながら、子供たちが食を通して自然について考えることができるようにしたい。内容の見直しも行いつつ、今後も継続していきながら学習をさらに深めて、食を通して自然を考えていく。

3 具体的な取り組み

各学年で、生活科や総合的な学習の時間に、地域の方から無償で貸していただいている学校農園や学校敷地内にある田畑を利用し、様々な食物を育てて収穫する活動をしている。敷地内の田んぼはブルーシートの上に土を入れてつくっている。計画では各学年で調理実習も企画していたが、感染症対策や食物アレルギー対応、地域の方のご都合が合わないなどの理由から、今年度は実施していない。しかし、それぞれの学年で調べ学習を取り入れたり、まとめや発表を工夫したりして、子供たちに「自然と食」について考えさせた。

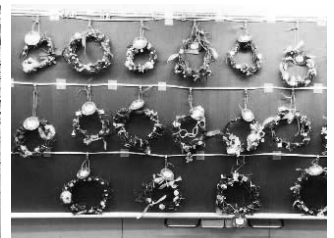
(1) サツマイモの栽培【1年生】

1年生は、学校農園を利用して「さつまいも」を栽

培した。サツマイモの苗は地域の方から無償で分けてもらっている。自分たちで育てたサツマイモを収穫したときは、みんな大喜びであった。サツマイモの蔓は円くして乾燥させ、クリスマスに向けたリース作りに活用した。食べない蔓の部分を使うことで、捨ててしまうようなものでも活用することができることを体験した。収穫の喜びや楽しく作る体験から、自然について考えるための素地を培うことができた。



サツマイモの苗植え



蔓で作ったリース

(2) ポップコーンの栽培【2年生】

2年生は、学校農園で「ポップコーン」の栽培を行った。種の形や成長する過程を観察しながら作物が大きくなっていく喜びを感じていた。収穫後は、入間ガスさんの出張授業でポップコーン作りを行ってもらった。実際にポップコーンの実がおいしい食べ物に変わる様子を知り、食への興味をさらに広げていった。



ポップコーンの観察



粒取り

(3) 「お茶博士になろう」【3年生】

3年生は、社会科の学習と兼ね合わせながら「狭山茶」について学習をしている。学区内にある「友野園」さんのご協力で、この土地でどうして多くのお茶が栽培されているかについて詳しく説明してもらったとともに、お茶の栽培や農機具について、販売するまでなど、貴重なお話をたくさんしてもらったり見せてもらったりすることができた。実際に見聞きすることで、農家

の方の思いや苦勞を知ることができた。そのあとも興味を持ったことについて調べ学習を行い、自分の調べた内容をパンフレットにまとめ、発表した。



友野園さんの話



発表の様子

(4)「野菜博士になろう」【4年生】

4年生では、夏野菜について調べ、自分で選んだ野菜を学校農園で栽培・収穫する活動を行った。どんどん実のなる野菜に収穫する喜びを感じることができた。また、収穫時期が少し遅れると、大きく育ちすぎてしまったり、熟しすぎてしまったりして、収穫の難しさも体験することができた。収穫後は家庭に持ち帰り、その野菜を調理してくるようにした。さらに、育てた野菜について調べ学習を進め、タブレットを活用しながら学習のまとめを発表させた。



野菜の収穫



発表会

(5)味噌づくり【5年生】

5年生は、米と大豆を栽培し、収穫した作物を使って味噌づくりを行っている。地域にある「加藤ファーム」の加藤さんに毎年ご協力いただきながら活動をしている。大豆の植え方や成長の様子、収穫時期や脱穀の仕方など、様々な場面で説明・助言をもらうことができている。3学期には収穫した米を麴菌と混ぜて米麴をつくり、大豆は大きな鍋で煮た後に米麴と混ぜて味噌玉をつくりながら樽に入れていく。それを1年間発酵させていくことで味噌をつくっている。6年生の3学期には、自分たちのつくった味噌を持ち帰り、家庭で食することができる。5年生は社会科とも関連させながら、作物をつくる大変さや農家の方の苦勞や工夫についても深く知ることができた。また、加藤さんからは「麴菌」についても説明があり、知識を広げることができた。2年間かけてつくる味噌づくりは子供た

ちにとって、とても貴重な体験となっている。



大豆の種まき



田植え



米の脱穀



味噌づくり

(6)大空農園の取り組み【特別支援学級】

特別支援学級の「大空学級」では、学校敷地内にある「大空農園」を使って、児童が野菜を栽培・収穫する活動を行っている。苗には名前をつけ、大事に育てる意識を持たせ、水やりや草取りなど責任を持って育てた。収穫した野菜は休み時間を使って職員を対象に販売も行った。みんなで育てた小松菜は給食にも使われ、全校のみんなに食べてもらうことができた。



野菜の苗を植える



給食調理員さんへ

4 成果と課題

- 作物を育てるという貴重な体験を通して、環境について考えるきっかけとなった。
- 地域の方と共に子供たちを育てていくことができる。
- 食という身近なことから環境へとつなげていくことができる。
- 地域や保護者の方に支えられていることを実感し、自分の住む地域を大切にしようという心情を育めた。
- 作物を育てる上で、環境はとても重要であることを実感させることができた。
- SDGsの視点を取り入れた学習の計画
- 食物アレルギーへの対応も踏まえた計画の見直し
- ボランティアの方の高齢化
- 学校農園の縮小に伴う計画の変更

「花とあいさつ福岡小学校」の優しさと笑顔あふれる学校づくり

ふじみ野市立福岡小学校

校長 鈴木 孝 雄

1 はじめに

本校は今年度、開校148年を迎えた歴史と伝統のある学校である。特別支援学級を合わせ19学級、585名の児童数である。

東武東上線福岡駅から徒歩20分程歩いた昔からの住宅地と新興住宅地とが入り混じった地域である。

子供たちは、比較的落ち着いた学校生活を送り、生活のきまりを守ろうと努力する児童が多い。

本校の保護者は本校の教育に関心を持ち、様々な活動に対して学校応援団を活用しながら協力していただける方々が多い。

目指す学校像「優しさと笑顔あふれる学校」の実現のためコミュニティスクール（地域協働学校）を推進しながら学校・家庭・地域が相互に連携し合って教育活動の充実を図っている。

2 主題設定の理由

本校では「花とあいさつ福岡小学校」が学校の合言葉になっている。その合言葉通り穏やかに学校生活を送る子供たちが多い。また、日本一のあいさつ学校を目指すことで自然とあいさつできる雰囲気が醸成されつつある。さらに、花ボランティアさんの協力が欠かせない学校である。花ボランティアさんが数多く来校していただき花であふれる学校にしてくれようと活動してくれている。

そこで、子供たちには「花とあいさつ福岡小学校」がなぜ合言葉になっているのか。あいさつの良さをも一度実感させることと当たり前のようにある色とりどりの花も当たり前ではなくたくさんの地域の方の力のおかげであることを感じられるようにしていきたい。

そして、自分たちももっと花であふれる学校、あいさつあふれる学校づくりに取り組んでいきたいと思えるような児童を育成するために本研究題目を設定した。



3 本校の取組

本校の「花とあいさつ 福岡小学校」は保護者、地域の方や花ボランティアさんが多くの協力をしてくれることで子供たちだけでなく保護者や地域の方々の自慢にもなっている。また、日頃よりあいさつの大切さについて道徳教育の充実を図っている。

(1) 人権の花運動

花を協力し合って育てることを通して、協力や感謝することの大切さを実感をもって感じると共に生命の尊さも感じ取りながら人権尊重の思いを豊かにできるように人権の花運動を実施している。

花ボランティアさんの協力の元、5年生たちがパンジーを植えた。

(2) 生活科授業の充実

① さつまいもの栽培

2年生では、毎年度学校の畑を使い、さつまいもを育てている。地域の方に畑を耕運機で耕していただいた後花ボランティアさんの協力の元さつまいもの苗を植えた。秋の収穫の際にも花ボランティアさんの協力の元、いも掘りをし野菜を育てる体験を通して達成感を味わうことができた。



② みかん狩りの実施

本校にはたくさんの植物がある。その中でも毎年よく実っているみかんの木がある。今年度は2年生がさつまいも掘りと同時にみかん狩りを行った。



はさみを入れてみかんを狩るのは初めての子供ばかりで緊張しながらも楽しそうに行うことができた。

(3) 特別支援学級野菜づくり

地域の方の力を借りて畑を耕運機で耕していただき、子供たちが野菜づくりを行っている。種まき、水やり、除草、収穫とすべての工程を体験し、収穫した作物で

調理も行っている。夏の暑い日の除草も真剣に行い、きゅうりやなすなどたくさんの野菜を収穫し野菜づくりの大変さと楽しさを学ぶことができた。収穫した作物を使ってのカレー作りでは野菜を無駄にしないで真剣に作り、残さず食べることで食のありがたみを強く実感していた。

(4) 委員会活動における花壇整備

本校では、今年度新たに4か所の花壇が設置された。栽培委員会の児童が担当することになった。



すぐに草が生えてしまい花壇の草取から整備を行った。委員会の時間にどんな植物を植えると花いっぱいになるか話し合いを重ねてから花を植えることができた。登下校時には花がちゃんと育っているのか何度も確認する子供たちの姿から温かな心が育っていると感じている。

(5) 親子除草

9月には、親子除草を実施した。親子で会話しながら夏休み中に生えてしまった花壇や校庭の草を汗いっばいになりながらとった。何十袋も集まった草の量に「これでまた学校がきれいになった。」と満足そうにする子が多かった。子供たちの作業が終わっても保護者の方には引き続き作業いただくことができた。



(6) 花ボランティアさんの取組

保護者の方々が毎週火曜日に本校に集まり、花のある学校を充実させるため様々な花いっぱい運動をくりひろげてくださっている。花ボランティアさんのアイデアで本校の2か所の花壇はいつも色とりどりの花で溢れている。季節ごとに以下の特別コーナーを作成していただいている。

- ・ 4月「入学おめでとう」
- ・ 5～6月「先生紹介」
- ・ 9～10月「ハロウィン」
- ・ 11～12月「クリスマス」
- ・ 2～3月「卒業おめでとう」

このように年間を通して子供たちや来校していただく方々にも潤いのある環境を与えてくださっている。

子供たちも次はどんなコーナーになるのか、今年はどうなコーナーになるのかなど楽しみにしている。



(6) 日本一のあいさつを目指して

学校朝会の校長講話で日本一のあいさつを目指すことを子供たちと目標にし、各学年・各クラス共にあいさつの大切さについて道徳教育を充実させてきた。また、児童会の児童が中心となってあいさつ運動にも取り組み、あいさつすることがあたりまえのようになりつつある。



4 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 活動を通して、児童全員が様々な花に触れ合うことにより環境に対する興味や関心が生まれた。また、あいさつすることのよさを感じ取ることで「花とあいさつ 福岡小学校」を誇りにしようとする意識が芽生えてきた。
- 栽培活動を通して子供たち同士、子供たちと保護者や地域の方との触れ合いが増えて挨拶し合える関係づくりにもつながった。
- 花ボランティアさんをはじめ様々なボランティアさんが学校に来ることにより開かれた学校づくりの一助となった。また、常に学校に人がいることで学校の安全確保にもつながった。
- これらの活動が人が変わっても持続できるよう教育課程の工夫だけでなく誰が担当しても活動できるよう共通理解をさらに図れるようにする必要がある。

5 おわりに

本校は令和9年度に開校150周年を迎える。これまで取り組んできた様々な取り組みを継承し、さらに発展していけるよう取組のよさを共有し思い切って新しい取組も実践していけるようにしていきたい。子供たちが「花とあいさつ 福岡小学校」を誇りにし保護者や地域の方といきいきと関わられるよう今後もすべての教育活動の充実を図っていけるように職員一丸となって全力を尽くしていきたい。

世界にはばたく人財が育つSDGsの実現に向けた教育の在り方 ～ ESDを通して育成する資質・能力を重視した授業改善～

川島町立つばさ小学校

校長 佐藤 香織

1 はじめに

本校は、旧つばさ南小学校、旧つばさ北小学校が統合し、令和7年度、新たに川島中学校の敷地内に新設された、施設一体型小中一貫教育校である。

川島町は、令和5年度より「SDGsの実現に向けた教育推進事業」の指定を受け、旧つばさ南小・旧つばさ北小・川島中がモデル校として、本事業の趣旨に基づき研究に取り組んできた。様々な課題解決に向け、自ら考え、主体的に行動を起こす力の育成と、実践事例の開発・普及を目指してきた。

今年度は、過去2年間の研究を引き継ぎつつ、SDGsの目標「4 質の高い教育をみんなに」「11 住み続けられるまちづくりを」「15 陸の豊かさを守ろう」の実現に向けて研究を進めてきた。目指す児童像「自ら学び、心豊かに、たくましく生きる川島っ子の育成」のもと、各教科や総合的な学習の時間を中心に、SDGsの視点やESDを通して育成する7つの資質・能力の視点を意識した学習活動を展開してきた。地域の方々や企業・団体等関係機関との連携を通して、子供たちは自分たちの学びが社会につながっていることを実感し、よりよい未来を創るために自分たちには何ができるのかを真剣に考える姿が見られるようになっている。

2 児童の実態について

統合1年目ということで、年度当初は新しい仲間との出会いや、小中一貫教育校という大きな環境の変化に、戸惑う様子が予想された。しかし、高学年が率先して「みんなでよい学校を創ろう」とリードする姿勢が見られ、児童は自然と、新しい環境のなかでのびのびと活動するようになっていった。

児童は日頃から、川島町の豊かな自然や田畑を身近に感じられる環境のなかで生活している。さらに3、4年生の総合的な学習の時間に、町内の三ツ又沼ビオトープや荒川太郎右衛門地区自然再生地での現地活動を行うことで、その豊かな自然が町の「自慢」であり、守っていくための活動が必要であることを実感している。そういったことから、目標15は大変身近な内容

であり、まさに自分事として考え、実行する姿が見られることが特徴的である。

3 研究仮説について

研究の副題や、統合校となり、新たな地域人材の活用と学校環境の整備が必要となった現状から設定した。

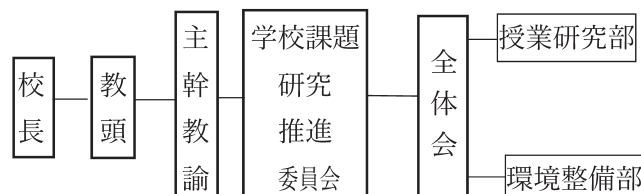
【仮説1】

ESDを通して育成する資質・能力を重視した授業改善を行うことで、持続可能な社会の創り手となる児童を育成することができるであろう。

【仮説2】

地域資源、人材を活用したり、学校環境を整備したりすることで、身近な諸課題に触れ、自分事としてとらえて、主体的に行動に移せる児童を育成することができるであろう。

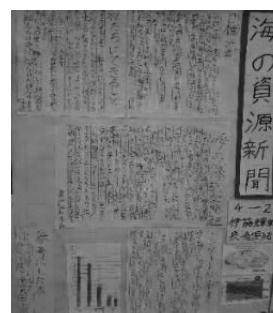
4 研究組織について



5 具体的な取組

(1) 授業研究部の取組

- ① SDGsとESDで重視する能力・態度を意識した教科横断的学習の推進
- ② SDGsに関するナレッジ・ギャップを埋める取組
- ③ 授業に使用している掲示物等、その他の取組



【4年生・国語】
調べたことを新聞にまとめよう



【5年生・家庭科】
SDGsできるよ！宣言

(2) 環境整備部の取組

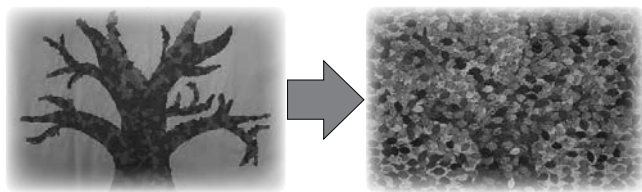
① ESD カレンダーの作成

総合的な学習の時間や生活科等、児童の主体的な活動を生かすことのできる学習を中心にしながら、ESDに関連のある単元を配列した。それぞれの単元が「ESDを通して育成する7つの能力や態度（①批判的に考える力②未来像を予測して計画を立てる力③多面的・総合的に考える力④コミュニケーションを行う力⑤他者と協力する態度⑥つながりを尊重する態度⑦進んで参加する態度）」のどれに関連するかを色分けして表にした。

② ESD アンケート

③ SDGsの木とSDGsミッション

SDGs17の目標一つ一つについて、児童が実践できるミッションを提示する。実践できた児童は、該当する目標と同じ色の画用紙で作られた葉っぱに学年と氏名を記入し、SDGsの木に貼ることで、児童が継続的に、楽しくSDGsの実践に取り組めるようにした。



(3) 授業発表

① 2年生・道徳 主題名 生きものにとくらすためには 教材名 「ごめんね、みなみ」



みなみの死の原因が人間の行いにあることを知り、身近な動植物について考える活動を通して、自分の何気ない行動が動植物に大きな影響を与える

ことに気づき、動植物のためにできることを考え、大切にしていこうとする心情を育てることをねらいとした。

② 4年生・総合的な学習の時間

単元名「川島の自然を知ろう！守ろう！」

～チームウイング☆荒川の自然を守ろう大作戦～



川島町を巡る「荒川」の歴史や生態、荒川に関わる人々の思いや願いについて探究的に活動することを通して、SDGsの「15 陸の豊かさを守

ろう」の観点から、自然に囲まれた荒川や自然を保全することのよさに気づき、体験活動での学びを生かして課題解決に取り組むとともに、地域への愛着や自然を大切にすることを育て、よりよい地域社会をつくるために行動しようとする態度を養うことを目標とした。

③ 5年生・特別活動 学級活動（1）ア

学級や学校における生活上の諸課題の解決
議題「5の1地域プロジェクトをしよう」



今までの地域との関わりから抱いた感謝の気持ちから、児童は高学年として、友達と協力して学校や地域のために活躍していきたいという意識が

高まった。児童の「自分たちが生活している場所を、もっと過ごしやすい場所に変えていきたい」という思いから議題が選定された。この活動をきっかけに、仲間と協力し、自分たちの力で普段使っている場所をよりよい場所にし、大切にしていこうとする児童を育てていきたいと考えた。

6 成果と課題（○成果 ●課題）

- 掲示物等の環境整備を行い、全学年でスタートブックを活用することを通して、児童が日常的にSDGsに触れ、意識を高めることができ、統合後のナレッジギャップを埋めることができた。
- ESDカレンダーを作成し、それをもとに授業に臨むことで、他教科との関連性と、育てる資質・能力を意識した授業を展開し、充実させることができた。
- 「SDGsの木」の取組を行い、目標を達成するためのミッションを提示することで、「自分にもできる」「続けていこう」「こんなこともできる」と、SDGsをより身近に感じさせ、実践意欲を維持することができた。
- 校外学習等で見学をするなかで、SDGsに関する掲示があると児童が真っ先に気づき、興味・関心をもつ姿が自然と見られるようになった。
- ESDを意識した授業展開については、7つの資質・能力の汎用性が広いため、どの力を伸ばすか焦点化する必要がある。また、その教科や単元がもつ特性やねらい、テーマ（SDGs）と関連付ける方法も十分考慮して計画する必要がある。
- アンケート結果を分析し、7つの資質・能力について、児童の変容を効果的に見取る方法を検討したい。

郷土の豊かさを活用し、郷土を愛する児童の育成 ～栽培活動を通して、環境学習・キャリア教育を学ぶ～

秩父市立荒川西小学校

校長 浅見 兆 仁

1 はじめに

本校は、明治6年に開校し、令和5年度に開校150周年を迎えた歴史ある学校である。児童数は31名と小規模校である。秩父市の最西端に位置し、校庭からは標高1,426mの熊倉山を望み、近くに荒川も流れる自然環境に恵まれた埼玉一校区が広い学校である。

しかし、豊かな自然環境ゆえに野生動物による被害も多い。校内には、広い学校農園と学級園があり、保護者や地域、関係機関と連携した自然体験活動や栽培活動に力を入れている。

2 研究主題設定の理由

本校では、郷土の豊かさを生かした栽培活動に力を入れている。昨年度の栽培活動、野菜の販売活動を発展させ、より地域との連携を図る活動を取り入れていく。また、野菜の販売活動を通してキャリア教育を実践していく。そして、栽培・販売活動を通じて、子どもたちの元気な声を地域に届け、郷土を愛する児童を育てていきたいと考え、本主題を設定した。

3 研究実践の内容

(1) 西小まつりでのカレー作り体験（6月）

ア 全校でのカレー作りに向けて、ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、ニンニク、カボチャの栽培を行った。これらの野菜は、収穫するまでに時間がかかるものであり、前年度中に、種まきや苗植えを行った。



その後は、草むしりを飼育委員が中心となり全校に呼びかけ月1回のペースで行った。

そして、6月上旬に野菜の収穫を行った。タマネギは、低学年が抜くには大変で、高学年が面倒を見ながら、収穫を行うことができた。



イ 収穫した野菜を使ったカレー作りを全校集会で行った。当日は、縦わり班で役割分担を決め、一人一人が責任感を持って、調理することができた。また、保護者の方にも協力をいただき、火の管理などを行ってもらった。できたカレーは、体育館で全員で食べることができた。

ウ 児童と保護者との会話では、「自分たちの育てた野菜は格別に美味しい。」「草むしりは大変だったけど、美味しい野菜ができて良かった。」などの感想を聞くことができた。



(2) 西小まつりでの野菜の販売体験（6月）

ア カレー作りの後に、体育館で野菜の販売を行った。販売方法は、児童会を中心に決め、ジャガイモ（4種類）・ニンジンは詰め放題1袋100円、タマネギ、ニンニクは1個100円とした。お店番は、お金を受け取る役、袋を渡す役、野菜を整理する役、困っている人に声をかける役など、全て児童が行った。

イ 野菜の販売体験では、保護者の方の他、地域の方にも購入してもらった。野菜の販売では、23,100円売り上げることができた。

ウ 児童の感想の中に、「自分たちが育てた野菜を、

お客さんが嬉しそうに買ってくれてとても嬉しかった。」「野菜を育てたり収穫したりするのは大変だったけど、販売体験ができて良かった。」などの感想を聞くことができた。



(3) 地元の百貨店での野菜販売 (7月)

ア 環境・給食委員会と児童会を中心に、地元の百貨店での野菜販売を二日間行った。販売方法は、児童がもう一度、ジャガイモ・ニンジンの詰め放題を行いたいということで、販売に向けて、チラシやポップの作成を行った。

イ 学校での野菜の販売と違い、知らない方が多い中、児童は「荒川西小学校で収穫した野菜、おいしいよ」と、大きな声で接客を行っていた。接客になれてくると、買いに来てくれたお客さんと笑顔で話すことができていた。二日間で11,232円を売り上げることができた。また、売り上げの一部は、百貨店の収益になることなどを学ぶことができた。

ウ 「初めての場所での販売はすごく緊張したけど、完売できて嬉しかった。」「今度は、違う野菜を育て販売したい。」という感想を聞くことができた。



(4) 地元の神明社での野菜販売 (11月)

ア 昨年度、野菜の販売をさせていただいた学区内にある神明社の新嘗祭において野菜の販売ができることになり、環境・給食委員会を中心にどんな野菜を販売するか話し合いを行い、11月が収穫時期であるダイコンやニンジン、サツマイモを育てることになった。



イ 夏休み明けに種を蒔いたダイコンやニンジン、苗植えを行ったサツマイモは、環境・給食委員会を中心に、ロング昼休みに除草作業を行った。そして、11月中旬、収穫作業を全校で行った。縦わり班で協力しながら、収穫を行うことができた。



ウ 11月の神明社の野菜販売では、全校児童の約半数の16名が参加。6年生を中心に、児童が自ら役割分担を行い、野菜の販売を行うことができた。児童によっては、お客が少なくなってきた時、野菜を持ち、境内を歩き回るなど工夫し、販売を楽しんでいた。野菜の販売では、26,800円売り上げることができた。

エ 児童の感想の中に、「いつも登下校を見守りしてくれている方が、野菜を買いに来てくれて嬉しかった。」などの感想を聞くことができた。



4 成果と課題

(1) 郷土の豊かさを生かした栽培活動として、苗植えや除草作業、水やり、収穫等の活動を通して、勤労の精神や協働する態度、達成感や感謝の気持ちが育ってきている。また、自分たちで育てた野菜をどのようにすれば売ることができるかなど考えさせることにより、自主性やキャリア教育の機会とすることができた。これらを通じて、郷土「ちちぶ」のよさを学び、大切にしようとする郷土愛が育まれてきている。

(2) 今後は、育まれた郷土愛をどのように育てていくかが課題である。過疎化が進む郷土「ちちぶ」が発展していくために、主体的に関わる意欲や態度を育成していきたい。そのために、児童自ら地域への感謝の気持ちを具現化できる教育計画を全職員で知恵を出し合い、再構築していくことが重要である。

自然・地域・人とのふれあい体験、梨栽培活動の実践 ～夢と笑顔と「ありがとう」があふれる長幡小学校を目指して～

上里町立長幡小学校

校長 敷地 昌明

1 はじめに

本校は、明治6年(1873年)大御堂村吉祥院に楠川小学校と称し設置され、昭和46年11月3日町制施行に伴い、上里町立長幡小学校となり、現在に至る



「歴史と伝統のある学校」である。今年で152年目を迎え、本校の学校教育目標「進んで学ぶ子 思いやりのある子 元気な子」の実現を目指し、公教育の使命と責任を自覚し、「未来を創る子供たち」を育むとともに、児童・保護者・地域に愛され、期待に応える教育活動を推進している。また、保護者の皆様、地域の皆様と連携を図り、特色ある教育活動を推進し、開かれた信頼ある学校づくりを行っている。そうした教育活動が認められ、令和3年2月「地域学校協働活動」推進に係る文部科学大臣表彰を受賞した。

また、本校の位置する上里町は、埼玉県最北端に位置し、烏川、神流川の2大河川を境にした群馬県と隣接しており、「梨」栽培農家が多く県内でも有数の美味しい梨の産地である。本校ではその地域の特色を活かした「梨の栽培学習」を、地域の方々に御指導を受け、全校で取り組んでおり、今年で26年目である。その一端を紹介する。

2 研究主題設定理由

農村部でありながらも核家族が増える中で、子供たちの地域への意識・関心は乏しく、また人との関わりも減少してきている。そうしたことも一因と思われる、相手を思いやるのが苦手な児童が見えるようになってきた。そこで地域の特産物である「梨栽培」をとおして、栽培農家の方や活動のお手伝いをしてくれる学校ボランティアの方とふれあい、また自然のすばらしさと厳しさにふれあうことで、支え合うことの素晴らしさを実感し、一人一人が大切にしたいことに気付き、これからの生活に生かそうとする態度を育てることができると考え、本研究主題を設定した。

3 研究仮説

豊かな食生活を送ることができるには、生産者の苦労があってこそである。自ら体験することで「ありがとう」を実感し、また収穫の喜びや食すことの喜びを味わうことで研究主題にせまることができるであろう。

4 研究内容(具体的な取組)

(1) 活動の過程

4月(花粉つけ)…品種の違う梨の花粉を採取し受粉させる。(年によって時季がずれ込むことがあり、春季休業中に受粉期を迎えた場合には、学校ボランティアにお願いする。その時は、梨畑に模造の花を用意して、実際の体験と同じ活動を実施する。)

5月(摘果)…大きくて甘い梨を育てるため、残す実を選別し、その他の実を摘み取る。成長を始めた実をなぜ摘み取ってしまうのかなど、梨農家の質問に答えながら、その意味を知ったあとで自分の手で摘み取る作業を行う。

9月(収穫)…梨の収穫を行い、全児童が一人2個ずつ自宅に持ち帰り、家族で味わう。その後、保護者から梨農家の方へのお礼のメッセージをまとめ渡す。(今年は9月8日 513個収穫)



1月(剪定)…伸びてしまった枝の剪定を行い、次年度の栽培の準備をする。

2月(作文作成)…梨栽培でお世話になった方々へ児童一人一人お礼の作文を書く。

3月(感謝の会)…梨栽培でお世話になった方々へお礼をする。(作文を渡す。)

(2) 関連する活動

※3年生の総合的な学習の時間に、他市の小学校と梨栽培活動を中心にオンラインで情報交換を実施する。また、収穫した梨を実際に届け味わってもらう。



※4年生の「郷土を描く美術展」の作品テーマに地元
の自然を描く課題を位置づけ、収穫前の梨畑に行き、
実った梨（梨の木）を観察して思いのままを絵に描く。

※5年生の総合的な学習の時間に、栽培農家さんを招いて、一年間の栽培過程や様子について話していただき、まとめ発表会を開催する。

※年2回、学校応援団連絡会議を実施し、情報交換を行い、取組の改善点等を話し合う。

※学校ボランティアの方々には、それぞれの栽培過程で必要に応じて支援をお願いします。

※空き教室を地域連携室として開放し、その一部に「梨コーナー」を常設する。栽培過程や梨に関する資料を掲示して、多数の方に見てもらおう場とする。そこには摘果作業で取り除いた実際の梨の実を展示するなどして、児童にも広め、定着を図る場としている。



(3) 成果の指標

○収穫した梨は、収穫数に応じて児童全員が持ち帰る。

各保護者には児童が持ち帰る梨と一緒に梨栽培についての概要を知らせるお便りとメッセージカードを配布する。保護者から梨農家の方へお礼のコメントをメッセージカードに書いていただく。こうした梨栽培を通して、保護者においても地域への理解が進む。

【保護者からのメッセージ】（一部紹介）

- ・上里町の名産物である梨を地域と学校で連携して育てたり収穫したりして、児童にとってもとても良い経験になるし食育にもとても良い影響を与えると感じました。御協力ありがとうございました。
- ・収穫を楽しみ、農業を知る。食の根本に興味を持ってもらう大切な機会だと思いました。また、本人も「ママが喜ぶから楽しかった」と言っていました。今後もこのような体験が続くといいなと思います。ありがとうございました。
- ・私が小学生だった頃からの活動で、私自身すごく楽しみにしていた行事でもあります。親子の共通な話題でうれしく思います。

○一年間の取組を経て、3月に「感謝の会」を実施する。2月に児童は感謝の作文を書きまでの活動を振り返った。努力の継続と、様々な人の協力のおかげで期待する結果を得ることができたことを実感できた。

5 成果と課題（○成果 ●課題）

○地域の特産物である梨の栽培から、「ふるさとの味」である梨の存在や梨畑の風景に愛情を持つことができた。

○季節ごとに見られる梨畑の様子の変化に気付いたり、梨栽培に携わる地域の人々の努力に気付いたりして、感謝の心を育むことができた。

○気候により毎年同じ量の収穫が見込めないことを感じ取り、環境の変化に関心を持つことができた。

●年に4回（4月5月9月1月）の活動だけで、収穫できると思いがちである。その間の作業の大変さを知る機会がやや少ない。

6 おわりに

梨栽培活動も今年で26年を終えた。長年ボランティアとして学校の教育活動に御協力いただいている梨農家の方々には教職員をはじめ、保護者からも感謝の声を多くいただいている。さらに見直しを重ね、継続して活動できるようにしたい。

体験活動を重視した環境教育の推進

～SDGsを意識した環境教育の実践～

越谷市立桜井南小学校

校長 佐々木 清

1 はじめに

本校は、昭和56年4月に開校し、45年目を迎える児童数525人の中規模校である。学校教育目標を「考える子 やさしい子 元気な子」とし、目指す学校像「子供ファースト ～自ら努力し、自分を高め、人の役に立つ子供育成～」の実現に向け、教職員や地域、保護者と協働しながら「かがやけ南っ子」を合言葉に教育活動を進めている。

学校は、越谷市の北部に位置し、住宅密集地域にある。複数の幹線道路が学区内を横切っている。近隣は、大型店舗や伝統工芸品の工場や工房も多い地域であるが、多くの緑に恵まれた校地をもち、学校園やビオトープも充実しており、様々な学習活動で活用している状況である。

2 研究主題設定の理由

本校では、主に社会科、理科、生活科、家庭科、保健、特別活動の授業の中で環境教育を位置づけており、体験活動を重視した取組を行っている。例えば、社会科では、ごみの処理の仕組みや公害問題、環境を意識した産業の在り方等について、理科では水の循環等の学習をしている。

本校には、ビオトープが設置されており、校地内に林もあり、オナガドリやカモなどもとんできていて、住宅街の中のオアシスになっている。しかし、現状の取組では、身近な地域の環境や環境へのかかわり方について考えさせる取組には至っていない。

そこで、教科の学習や特別活動における取組を工夫し、児童が身近な環境に意欲的にかかわり、問題を見だし、考え、判断し、よりよい環境づくりや環境保全に配慮した望ましい行動がとれる態度を育成するため、本研究主題を設定した。

3 実践内容

(1) 環境緑化と2つの委員会活動

本校では、環境緑化について、児童による2つの委員会が活動している。園芸委員会は、学校環境の整備を主な目的として活動しており、花壇やプランター、

学年園の整備等を行っている。ビオトープ委員会は、自然環境への興味・関心の高揚、自然環境の保護を主な目的として活動しており、ビオトープの整備やビオトープの植物や生物についての調査・広報等を行っている。

2つの委員会活動及び各学年の活動、学校応援団の活動、学校管理としての整備によって、児童がよりよい学びを得られるように創意工夫を行っている。



<園芸委員会の活動>

- ・花壇やプランターの整備、花苗の植え付け
- ・花壇等の水やり、学校園の草むしり

<ビオトープ委員会の活動>

- ・ビオトープの環境整備、ゴミ拾い
- ・ビオトープの観察、全校放送による報告

(2) 保護者・地域との連携

学校応援団「南っ子サポーター」の皆さんによる除草活動、ゴミ拾い、落ち葉掃きを年間8回程度、実施している。保護者・地域の方・教職員で校地内外の学習環境の整備を行っており、身近な環境に対する児童の関心・意欲の高揚につながっている。

また、桜井地区青少年健全育成協議会と協働し、「チューリップの球根植え」を行っている。児童も地域の方も色鮮やかに咲く春先のチューリップを楽しみにしている。



＜学校応援団による除草作業・落ち葉掃き＞



＜青少年健全育成協議会とのチューリップ球根植え＞

(3) 各学年の教科における取組

生活科や理科の学習の中で植物の栽培・観察を重視することで学習面の他、生命尊重・自然愛護の気持ちを育成し、心豊かな学校生活を送ることができるよう工夫した。

- 1年…アサガオの観察（生活科）
- 2年…夏野菜、秋野菜の栽培・観察（生活科）
- 3年…ホウセンカ、ヒマワリの観察（理科）
- 4年…ヘチマの観察（理科）
- 5年…インゲンマメ、ヘチマの観察（理科）
- 6年…ジャガイモ、ホウセンカの実験（理科）



＜ヘチマ棚の整備＞



＜ジャガイモの葉の観察＞

(4) 生物多様化子ども調査

4年生の総合的な学習の時間では、「ビオトープギルド」の方をお招きして、生物多様性子ども調査を実施した。ビオトープの観察池にいるヤゴの種類を観察することで身近な環境について知り、環境保全の大切さを学ぶことができた。



(5) 生命の尊重と食育指導

2年生と特別支援学級では、野菜を栽培することで生命尊重・自然愛護の気持ちを育成するとともに食の喜び、作物への感謝を味わわせる活動を行った。また、自分が選んだ野菜のお世話をとおして、責任感の醸成、自己有用感の高揚を図っている。

5・6年生の家庭科の調理実習では、地産地消について学習し、輸送エネルギーの削減等、環境にやさしい取組であること。学校給食にも地産地消が取り入れられていることを学んでいる。調理実習では、教員が埼玉県産のホウレンソウとジャガイモを用意し、実際に調理して食すことで実感と伴う学習を行った。



＜サツマイモの収穫＞



＜地産地消クッキング＞

(6) 教員の研究・研修

年度当初の環境教育部会で、学年園の使い方や植える植物・作物、使用箇所のローテーション等について話し合い、計画的・効果的に使用できるようにした。

また、生活科の「虫探し」や総合的な学習の時間で行う「生物多様性子ども調査」の学習前には、学年の教員でビオトープの状況を確認し、体験活動をとおして、環境教育推進プランの各教科の目標が達成できるよう事前打ち合わせを行った。

4 成果と課題

(1) 成果

- 様々な体験活動をとおして、児童の生命尊重・自然愛護の気持ちを育成することができた。
- 児童が、身近な環境に意欲的にかかわり、思考判断する中で、よりよい環境づくりや環境保全に配慮する態度を育成することができた。

(2) 課題

- より効果的な体験活動を取り入れるため、新たな外部人材の発掘が必要である。
- 植物の栽培方法、ビオトープの在り方等の専門知識を教員間で継承していく必要がある。

家庭・地域・学校が一体となった“未来の原風景”づくり

～令和の時代に即した“家庭・地域・学校が一体となった” 新たな「形」への転換～

入間市立上藤沢中学校

校長 齋藤 寿一

1 はじめに

本校は、入間市の中で唯一、茶畑を2か所管理し（合計約1600m²）、全校茶摘み体験を行っている。その歴史は古く、今年度で36年目を数える。

まず平成元年に、地場産業の狭山茶と関連させて、千利休が唱えた「和敬清寂」を生活の指針（校訓）として設定した。

翌平成2年に、学家連携（学校と家庭が連携して子供の教育にあたる）として「芳友会」を設立。「芳友会」が主体となって、親子で実施する全校茶摘み体験を実施したことから本格的に「茶摘み体験」が始まった。立ち上げ当初は生徒の増加とともに、茶畑の管理も学校のみで行うことができていたが、時代とともに「芳友会」もメンバーが減少し、ほぼ消滅したような形になってしまった。さらに、昨今の生徒の減少及びコロナウイルス感染症の流行により、学校だけの管理が非常に厳しくなった。

そこで、今年度に再度、「学家連携」に「地域の力」を加えた組織『茶～MO』を立ち上げた。

2 主題を進めるうえで

まず、「働き方改革推進に伴う教員の負担軽減」、「休日等の部活動の活動時間の制限」等、学校の今日的流れを鑑み、1か所は地主さんに返還し、1か所のみ本校で管理し、特定の学年のみ茶摘みを行う等、本校の茶摘み体験に係る諸活動（主に管理面）の形態変更を検討・模索していた。

上記と並行しながら、検討事項に関して地域の方々にも相談したところ、「学校の負担を軽減した上で、子供たちが地域の産業に触れる機会を何とか残せないものか」という声が多く寄せられ、本校の茶摘み体験に向け、地域の方々が生徒に各方面に働き掛けを行っていただいた。

その結果、現在は製茶及び茶詰め作業でお世話になっている製茶工場様のご厚意により、製茶・茶詰め作業に加え、返還を考えていた茶畑の管理にもご協力いただけることになった。これにより、従来と比べ学校側の大幅な負担減が実現される見通しになった。

また、事業推進に係る諸経費に関しても、組織委員長様のご尽力により地区自治会や各校PTAから援助をいただけるようになり、より充実した活動が実現した。

3 計画

	年間活動計画
4月	・製茶工場様 消毒（23日） ・上藤沢中学校PTA 除草作業（19日）
5月	・上藤沢中学校 茶摘み体験（7日） ・藤沢南小学校 茶摘み体験（23日） ・藤沢東小学校 茶摘み体験（28日） ・地域ボランティア様 除草作業（2日） ・藤沢東小学校PTA 除草作業（16日）
6月	・製茶工場様 茶葉刈り（28日） ・製茶工場様 除草剤噴霧（28日） ・製茶工場様 虫よけ（28日） ・地域ボランティア様 除草作業（2日）
7月	・上藤沢中学校 茶詰め作業（15日） ・上藤沢中学校全生徒 除草作業（4日） ・藤沢東小学校PTA 除草作業（15日） ・藤沢南小学校PTA 除草作業（26日）
8月	・製茶工場様 虫よけ、茶葉刈り ・上藤沢中学校PTA 除草作業（9日） ・地域ボランティア様 除草作業（23日）
9月	・上藤沢中学校PTA 除草作業（6日） ・地域ボランティア様 除草作業（26日）

	・製茶工場様 茶葉刈り
10月	・上藤沢中学校PTA 除草作業（4日） ・藤沢東小学校PTA 除草作業（17日）
11月	・上藤沢中学校全生徒 除草作業（28日）
12月	・上藤沢中学校全生徒 除草作業（23日）
1月	・藤沢東小学校PTA 除草作業（15日）
2月	・藤沢南小学校PTA 除草作業（26日） ・茶～MO運営委員会
3月	・藤沢南小学校児童 除草作業（中旬） ・藤沢東小学校児童 除草作業（中旬）

4 内容

<茶～MOポスター>

近隣のスーパーやコンビニ、金融機関、地区センター、自治会掲示板等に掲示し活動をアピールした。

上藤沢中学校区茶園管理組織
愛称「茶～MO(チャーモ)」
茶…茶園 M…management(管理) O…organization(組織)

活動スローガン「家庭・地域・学校が一体となった 未来の歴史をづくり」

■「茶～MO」組織図

アドバイザー兼バイパス茶園管理統括
清水園製茶工場 さん

- ◆茶園管理主体に切り掛かる
- ◆バイパス茶園の管理方法
- ◆労務・茶葉の作業・上場買入支援

結核資料長兼ボランティア統括
菅野 博久 さん

- ◆組織全体の運営・調整
- ◆ボランティア等の統括(告知・調整)
- ◆藤沢市各団体の連絡調整

入間市教育委員会
(指導・参事)

- ◆事務局との連絡調整

上藤沢中学校(校内主担当:教頭)

- ◆組織の事務局(総務・会計)
- ◆年度計画立案・調整等
- ◆組織の資金管理・運用
- ◆茶之ダラント夏茶園管理責任
- ◆小中里PTAとの連絡・調整

家ランティア班
(常任代表者少年連立委員長)

- ◆行事に基づいた除草時

藤沢南小学校(校内主担当:教頭)

- ◆単Pとの連絡・調整(除草等)

藤沢東小学校(校内主担当:教頭)

- ◆単Pとの連絡・調整(除草等)

■「茶～MO」令和7年度 主要年間活動予定

【4月以降】茶園の除草・葉取り(ボランティア、各小中学校PTA 10月まで月2～3回程度)

【5月】上藤沢中学校茶摘み(上旬)、藤沢南小・藤沢東小学校茶摘み(中・下旬)

【5月以降】製茶作業(清水園)

【6～8月】茶葉刈り、茶葉虫等対策噴霧、茶葉間或除草剤噴霧(清水園 随時)

【7月】茶摘みの作業(上藤沢中学生会・清水園)、児童・生徒にお茶配布

【7, 11月】上藤沢中全校除草作業

【9, 10月】上藤沢中PTA合同除草作業

【2月】お礼の会(上藤沢中)

【3月】児童による除草作業(藤沢南小、藤沢東小)





後援 藤沢中央区長会、上藤沢中学校区小中学校PTA

<除草作業>



5 成果と今後の課題

<成果>

各組織(地域・小中PTA)が定期的に活動を行ってくださることで、学校単独での茶園管理作業は年2、3回程度となった。

この結果、「働き方改革推進に伴う教員の負担軽減」、「休日等の部活動の活動時間の制限」をクリアすることができ、全校茶摘み体験の存続が可能となった。来年度に向け、今後この方向で計画を進めていきたい。



<課題>

窓口である学校の管理職(教頭)は、学校、保護者、地域との連携や、立案、計画、案内、調整とまだまだ活動内容は多岐にわたる。

今後、コーディネーターとして組織委員長様との連携をさらに密とし、マニュアル等の指針を作成することができれば、SDGsとなり未来へつながっていくであろう。



地域のシンボル「松山」の維持管理と利活用

～加須西中学校における緑化活動とともに～

加須市立加須西中学校

校長 藤 間 隆 子

1 はじめに

本校は加須市の西部に位置し、国道125号、国道122号に囲まれている交通至便な地域にあり、礼羽地区を中心に地域開発が進んでいる。反面、自然や田園風景が多く残されている学区である。全校生徒は323名（R7.5.1現在）、通常学級10、特別支援学級（あかまつ学級）3の小規模校である。R7で開校70周年を迎え、学校行事等を充実させている。

学校教育目標は「○本気で学ぶ生徒 ○友達を尊重し仲良くする生徒 ○自ら心身を鍛える生徒」、目指す学校像として「生徒 保護者 職員 地域の誇りとなる学校」を掲げ、日々の教育活動に取り組んでいる。

近年では歯科保健指導で実績を残しており、R4～R7にかけて埼玉県学校歯科保健コンクールで最優秀賞等に出選された。特にR5では全日本歯科保健優良校として文部科学大臣賞を受賞した。

2 赤松林について

本校敷地内には、面積約4800㎡（校地面積の約14%）の学校林として、アカマツを主体とする赤松林がある。親しみを込めて「松山」と呼ばれ、本校校歌にも歌われている。この松山は、およそ7000年前に地域に吹き下ろす「赤城おろし」と呼ばれる季節風によって、利根川の河畔に砂が吹き寄せられてできたと考えられている「志多見砂丘」上に形成されている。かつてはこの地域一帯に見られた砂丘と赤松林であったが、宅地開発等によって姿を消しており、今ではこの松山のほか数カ所で見られるにとどまっている。

松山は地域のシンボルとして親しまれているとともに、加須西中学校の緑化推進の源となっており、S41とH21の両年に全日本学校緑化コンクール特選を受賞し、日本一と認定された。また、H26には天然記念物として埼玉県指定文化財に指定された。



松山（校地外からの様子）



松山（校地内からの様子）

3 松山をはじめとする校地内植生の維持管理

（1）生徒の取組

生徒の活動として通常の清掃における除草や落ち葉掃きのほか、生徒会が主体となって「9・30（草ゼロ）の日」を制定し、雑草の生長が早い時期の月の9日・30日をボランティアで除草する日として活動している。また、松山を望む職員室前の花壇を「松山に負けない立派な花壇にする」とし、環境安全委員やあかまつ学級の生徒を中心に、定期的に季節の花々の植え替えを行っている。学校で購入する植物のほか、地域の方から加須西中をきれいにしてほしいという願いでハボタンをいただくこともあり、学校における環境の維持管理に協力していただいている。



生徒による落ち葉掃き



「9・30の日」の除草



地域の方に頂いたハボタンを植えるあかまつ学級の生徒



（2）保護者、地域の取組

保護者と教職員による取組として、PTAの厚生委員会が主体となり、定期的に除草・剪定作業を行っている。毎回多くの保護者が来校し、学校や生徒たちのために汗を流している。また、R7は市の予算配当により、シルバー人材センターの職員による松山の下草刈りや自走式草刈り機の貸し出し等の支援が可能となった。学校関係者の大きな負担軽減となっている。



PTA 除草で来校した方々



PTA 除草の様子

(3) 教職員の取組

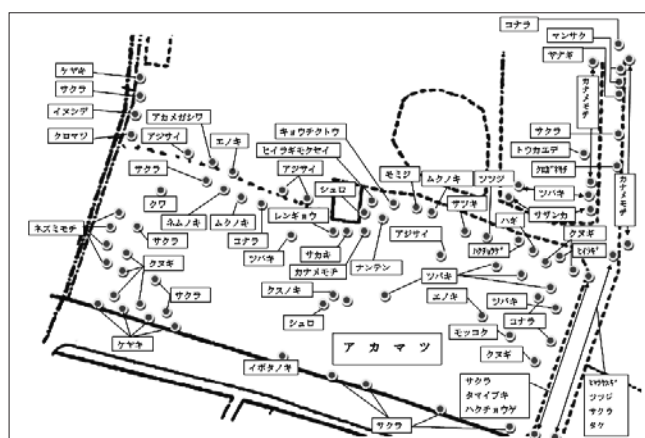
松山や校地内の植生について、生徒ボランティアが製作した木製のネームプレートを教職員によって取り付け付けた。木製のため、自然と土に還るようになっており、サステイナブルな取組となった。また、樹木マップを作成し、生徒に親しみを持たせるだけでなく赤松林内の植生についての維持管理に役立っている。



ネームプレート制作



ネームプレート取り付け

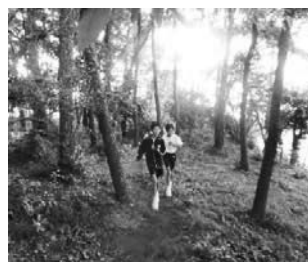


作成した樹木マップ

4 松山の活用

(1) 生徒の活用

毎年1年生の理科の授業で校内の草本植物の植生について調べているが、本校では松山内の植生について重点的に調べ、特徴的なアカマツの様子について直接触れながら知ることができている。同様に、裸子植物の学習においては実際のマツカサを手にとることができ、1～3年目までのマツカサの変化について理解を深めている。また、本校の陸上競技部の活動において、中長距離選手のトレーニングの一環として松山の中をトレイルランニングコースとしており、不整地における走破能力の向上に一役買っている。その他、生徒会を中心に加須西中のシンボル赤松林のキャラクターをつくらうという活動を行い、生徒からの案を基にした「まっつん」というキャラクターを作成した。R7に地域から協力を得て大きなぬいぐるみとして立体化することができた。生徒だけでなく保護者、地域の方々にも好評で、体育祭や校内音楽会などの学校行事においてもマスコットキャラクターとして親しまれている。



松山内ランニングコース



西中キャラクター「まっつん」

(2) 地域での活用

毎年、加須西中学校区の保・幼・小中一貫教育事業の一環として、校区内の小学生が松山の見学・松ぼっくり拾い等を行っている。来校する小学生はどの児童も赤松林の広さに驚き、走り回ったり、たくさん松ぼっくりを拾って友達同士で自慢しあったりしている様子がうかがえる。また、近隣市町の生涯学習課主催の市民大学講座の一環としても毎年一般の方が見学に訪れ、地政学的に川と砂丘の成り立ちについて指導者から説明を受けている。



松山を見学する学区内小学校の児童たち



5 成果と課題

(1) 成果

- ①生徒が率先して松山の維持管理等、学校の緑化活動に参加することによって、愛校心を育むとともに、地域に対する郷土愛を醸成することができた。
- ②教職員・保護者だけでなく、地域の方々が松山の維持管理や活用に参加することで、様々な立場の方々を「つなぐ」ことができ、小規模ではあるが地域のコミュニティを構築することができた。

(2) 課題

松山を含む広い校地における植生の維持管理は、マンパワー、予算、時間の使用が膨大であるため、今後、継続的に行っていくにあたり、生徒数減少に伴う教職員数、保護者数の減少に対する対応策が必要となり、協力が可能な地域人材・組織の発掘が必須である。

地球環境とエネルギー問題を考える

～探究活動の充実とともに～

埼玉県立所沢北高等学校

校長 木村 郁文

1. はじめに

本校は、日本の航空発祥の地、所沢飛行場跡地の北端にある。昭和49年に全日制普通科の高校として創立され、今年度52年目を迎えた。開校以来、「叡智育成・自主自律」の教育理念のもと、高い志をもった社会に貢献する人材を育成するため、「文武両道」を掲げて発展してきた。平成28年（2016年）に理数科を開設し、今春には第10期生を迎えることとなった。また、昨年度から国の次世代人材育成事業のひとつである「スーパーサイエンスハイスクール」に指定された。

本校では、実験・実習・体験を重視し、フィールドワークを含む行事や課題研究を通して、科学的・数学的な見方・考え方を身に付けるとともに、試行錯誤を繰り返しながら課題を解決していく力、探究力を育成している。

2. 研究テーマについて

現在世界を取り巻く気候危機は、環境問題に留まらず、気候変動が引き起こす様々な現象が政治や経済、人間の在り方生き方に関わる大きな社会問題に波及している。この気候危機に対して、所沢市や日本、そして世界各国が一丸となって取り組むカーボンニュートラル社会の実現は喫緊の課題となっている。学校教育においても、科学的知識の習得にとどまらず、生徒自らが課題を発見し解決策を探究する姿勢が求められている。

本校では、「地域環境とエネルギー問題」をテーマに、地域と協働した探究活動を展開してきた。本報告では、教育活動の概要と、カーボンニュートラル社会の実現に向けた具体的な取り組み、そしてその成果と課題についてまとめる。

3. 具体的な取り組み

(1) 理数科

1学年（令和7年度）に履修する「理数探究基礎」及び「SSコラボレーション」における学びを生かし、2・3学年の「理数探究」計3単位において課題研究の充実を図っている。また、2学年の「理数探究（2単位）」において、課題研究を質的・量的に発展させる。

学科	理数科		位置付け
1学年	理数探究基礎（1単位）	SSコラボレーション（1単位）	課題研究に向けた基礎・基本の習得
2学年	理数探究（2単位）		課題研究の実践・発表
3学年	理数探究（1単位）		課題研究の見直し・改善・発展

○リレー・コラボ

一つのテーマについて複数の教科等の切り口（見方・考え方）による授業をリレーでつなぐ教科等横断型授業を開発し、実践している。

教科	授業内容
第一走者 出前授業 【所沢市役所】	・「ゼロカーボンシティ宣言」について ・「マチごとゼロカーボン市民会議」の施策提案を受けて
第二走者 【地理・歴史】	・所沢市の歴史と環境問題 ・所沢市の地政学
第三走者 【化学】	・地球温暖化の仕組みについて ・温室効果ガス（GHG）について
第四走者 【生物】	・気候変動問題が所沢市の生態系に与える影響について ・気候変動問題が所沢市の食や農に与える影響について
第五走者 【数学】	・方程式と恒等式について ・茅恒等式の基本と応用について
第六走者 講義・WS 【大学・大学院】	・カーボンニュートラルに向けてどのようなアクションが必要か ・茅恒等式からのアプローチ
第七走者 【公民】	・気候正義「Climate Justice」とは何か ・カーボンニュートラルと社会・経済・まちづくりの姿について
第八走者 【物理】	・エネルギーフローから考えるカーボンニュートラル ・ところざわ未来電力と再生エネルギー施設について
第九走者 【家庭】	・カーボンニュートラルに向けた住居 ・カーボンニュートラルによる食の変化
第十走者 【英語】	・COP26「グラスゴー宣言」英文和訳・読解
第十一走者 講義・WS 【研究課題・NPO等】	・2050年カーボンニュートラル社会を拓く ・現状分析・課題と今後の取組について

○ユニット・コラボ

2つの教科等（理数系×その他）教員のチーム・ティーチングによる教科等融合型授業を開発し、実践している。

教科の組み合わせ	主題（教材）
物理×音楽	「和音はなぜ気持ち良いのか」
物理×体育	「物理の知識が走りを変える」
化学×英語	「アルカリ金属とアルカリ土類金属」
化学×家庭	「天然繊維と化学繊維」
生物×英語	「DNAの抽出実験」
生物×保健×地歴	「新型コロナウイルス感染症と感染症の歴史」
生物×公民	「感染症と経済学」
地学×地歴	「プレートから見る日本と世界の地理」
数学×地歴	「55年体制の成立」
数学×体育	「組体操のピラミッドを科学する」

(2) 普通科

STEM型探究活動を研究・開発し、普通科における学校設定科目「SS探究I」において実践する。外部（例：東京大学生産技術研究所次世代オフィス）による助言も参考にし、本校独自の探究的な学習活動へと改善し、実施している。

SS探究Iでは、データサイエンスの手法を学習し、STEMの視点から課題設定を行い、SS探究II、IIIでは、STEMを踏まえた探究活動を実践している。

学年	普通科	希望者
		SS探究I (1単位)
2学年	SS探究II (1単位)	SS探究II (1単位)
		SS課題研究 (1単位)
3学年	SS探究III (1単位)	SS探究III (1単位)
		科学技術・理数系コンテスト等への出席

(3) 大学・研究機関、所沢市等の行政、企業やNPO・NGO等と連携・協働した取組

本校がこれまでに構築してきた大学・研究機関等との連携に加え、カーボンニュートラルを研究する施設との共同実験等を行い、課題研究や探究的な学習を深める取組みを行った。

対象	取組の概要
1学年 全生徒	カーボンニュートラル・セミナー (大学・研究機関、所沢市、NGO等の専門家による講義・協働学習)
理数科 1学年	臨海実習 (観音崎自然博物館及び周辺海岸、城ヶ崎西部海岸周辺)
理数科 1学年	筑波研究学園都市見学実習 (JAXA・NIMS・筑波大学等)
理数科 2学年	科学プレゼンテーション実習 (日本科学未来館)
全校 生徒	SSH講演会 (専門家による講義・年2回)
希望者 全生徒	海外環境先進国研修 (シンガポール・1週間程度予定)



(4) 世界的な課題に取り組む資質能力の育成に係る取組

昨年度、世界的な共通の課題であるカーボンニュートラルに向けた海外での取組を実体験することで、ローカルとグローバルな視点を併せ持ち、より大きな課題に挑戦できる資質・能力を育むために、カーボンニュートラル先進国の1つであるデンマークに訪問先として海外研修を実施した。

再生エネルギーの開発で有名なロラン等での研修を実施した。今年度は、シンガポールで実施する予定である。



4 成果と課題

成果

「リレー・コラボ」については、各教科の特性を生かしながら、カーボンニュートラル・セミナーに帰結させる指導計画を構築し、効果的に実践できた。「ユニット・コラボ」については、多様な授業を実施し、生徒の関心を喚起しながら、文理融合、また文理不可分の学びを提供した。

生徒の探究力の向上を目指した様々な取り組みによって、基本となる指導計画が立案できた。研究目的プレゼン、研究課程報告会など、成果主義でなく生徒の試行錯誤を成長に結びつける方策の検討ができた。



探究サイクルである「①課題の設定、②情報の収集③分析・整理④まとめ・表現」を単元として学習することによって、生徒に探究のプロセスを意識させることができた。そして、課題解決のために探究活動を実施する過程で、自己の在り方に気づき、自己調整する力を育成できた。

外部との交流も増え、様々な考え方や価値観に触れることができ、「一つの答えに縛られない柔軟な思考」を身に付けることができた。

気候危機の切迫した状況を理解し、今どんなアクションが有効なのか理解することができた。さらに、自分たちが暮らし、学んでいる所沢市におけるカーボンニュートラル社会に向けた取組を理解することができた。

そして、カーボンニュートラル社会の実現に向けて、2030年、2050年の社会の中心的な担い手である自分たちが、将来に向けてどんなチャレンジを始めればよいか考えるきっかけとなり、自らの在り方生き方について考えることができた。

課題

カーボンニュートラル・セミナーでは、「知る」ことが中心となってしまった。自分たちに置き換えて考える時間をもう少し取れるとよかった。実際、アンケートでも、あまり理解できなかったという生徒が12%、カーボンニュートラル社会の実現のために自分のやるべきことが見つからなかったと回答した生徒は22%いた。

物価高やプログラム費用の高騰に伴い、海外の派遣先については再検討する必要がある。

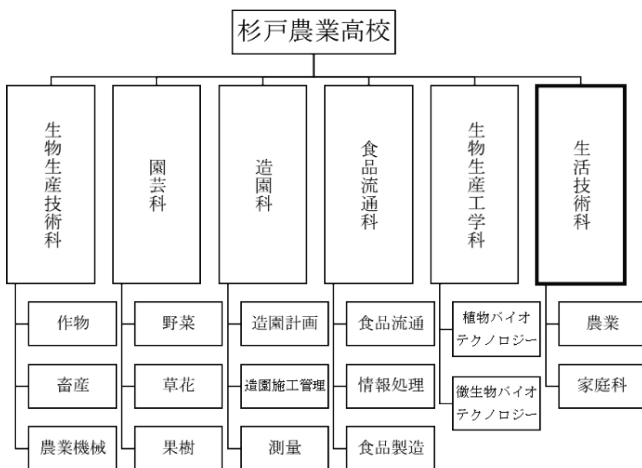
さいたま市ヨーロッパ野菜と地産地消 ～食材の味わいを活かす野菜栽培と調理に関する研究～

埼玉県立杉戸農業高等学校

校長 田口 剛

1 はじめに

本校は大正10年（1921年）、地域農業の振興と生活文化の向上を目的に創立された。創立以来100年以上にわたり、校訓「理想・誠実・勤労」のもと、農業教育を基盤に実践的な学びを重視し、地域社会に貢献できる人材育成を進めている。現在は生物生産技術科、園芸科、造園科、食品流通科、生物生産工学科、生活技術科の6学科を設置し、農業生産から加工、販売、生活技術、環境保全まで幅広い分野を学べる特色ある教育を展開している。杉戸町をはじめ近隣地域のイベントや環境保全活動に積極的に参加するほか、農家や企業との連携による商品開発や共同研究を行い、実践力を養っている。地域とともに歩んできた本校は、持続可能な社会の実現に向けた教育を推進し、今後も地域に根ざした専門教育をさらに充実させ、社会に役立つ人材育成に努めていく。



2 生活技術科の概要

本学科は、農業科目及び家庭科目2つの専門科目があり、「農業・家庭に関する基礎的な知識と技術を習得させ、その実践的な能力・態度を育て、ヒューマンサービスに関する分野において地域社会に貢献し、活躍できる人間性豊かな産業人を養成する」ということを学科目標に掲げ、教育活動を行っている。

3 生徒の実態と研究仮説について

本学科の生徒は、食すこと、実習を行うことが好きな生徒が多い一方で、作物の生長過程や実習の意義・目的についてはまだまだ想像力に欠けている生徒が多い。

本学科の3年次に履修する「課題研究」では野菜・果樹専攻に分かれ、栽培から調理まで各生徒が自分に合った研究テーマを見つけ取り組み、実践的・体験的な学習活動を行っている。

その中で、近年の夏の酷暑など、環境変化への対応が問題になっている。野菜の特性を理解した上で、栽培品目に合わせた日々の適切な栽培管理を行うことが大切になってくる。また、食材の食感、甘み・酸味、加熱をした際の特徴などを活かす調理方法なども重要であると考えられることから、事前段階として本学科の2年生を対象に本研究題目を設定した。

また、ヨーロッパ野菜などの馴染みのない食材にも興味を持って栽培・調理に取り組んでほしいので、地産地消にも力を入れているさいたまヨーロッパ野菜研究会にご指導をお願いした。

4 実践内容

以下3点に重点を置き、本事業を実施した。

(1) 栽培技術の習得、収穫物の調理実践

2年次の「生物活用」にて1学期に夏野菜（エダマメ、トウモロコシ）、2学期に冬野菜（ハクサイ、ダイコン、ブロッコリー）の栽培を行った。夏野菜はどちらも旬が短く、時には放課後等も活用し、作物の生長に合わせて適期に適した管理を行うことが大切であるということを実体験した。生徒は「作物をより良い品質にするための栽培管理や気候や病害虫対策など自然環境の中で育てていくことの難しさを学んだ」と話していた。

収穫したものは各自持ち帰り、大根の葉のふりかけなどを作り、旬の食材を調理する喜びを感じていた。

また、「果樹」の授業では、杉戸町で栽培が盛んなナシやブドウなどの栽培方法を学び、地域の特産品への愛着が育まれたことと思う。



(2) 事前アンケート調査

講義を依頼するにあたり、生徒にアンケートを行い、栽培に関する意識や、ヨーロッパ野菜に対する認知度を調査した。その結果、全員が地産地消については理解をしているが、ヨーロッパ野菜は「紫色の野菜」「寒い地域でも育つ野菜」と答える生徒もいたが、全く馴染みのない生徒が大半であった。

(3) 講演および実技指導

1月にさいたまヨーロッパ野菜研究会事務局の福田裕子氏による講義と実技指導を行った。



「当初は高温多湿に弱いヨーロッパ野菜は日本の多湿な環境になじめなかった。そこでトキタ種苗（種苗会社）と日本の気候にも合うように品種改良を行った。」という話を聞き、気候に合わせて栽培管理や品種選びの工夫をしなければならないということを理解したようだった。

また、「地産地消」とはよく聞くが、地元食材というだけで購入してくれる消費者は多くはない。ヨーロッパ野菜は珍しく、付加価値になるという話を受けて、生徒は感心している様子であった。

実際に、生徒たちは生食でヨーロッパ野菜を試食し、その苦みやクセを実感した後、油を加えて苦みをマイルドにする手法や、少量の水で蒸し焼きにすることで野菜そのものの甘さを引き出す手法を教わり、自分たちで調理を行った。

例えば、「ラディッキオ」は大きく切り、オリーブオイルを加えて芯ごとフライパンでじっくり焼き粉チーズを合わせた。

講演後の生徒の感想には「初めてヨーロッパ野菜を食べた。苦みがあったが、蒸し焼きにしたら食べやすくなった。」との声や「ズッキーニを育ててみたいが、育てるコツはあるか。」といった質問が飛び交い、栽培と調理方法の模索・研究への意欲が高まった。



5 成果と課題

【成果】

- ビーツやズッキーニなどのヨーロッパ野菜に興味を持つ生徒が出てきた。
- 「作物の生育環境に合わせて丁寧に管理しようと思った。」という生徒が出てきた。
- 生産地域を意識して野菜や果物を購入しようという意識が高まった。
- 知らない野菜や作物について友人と話をするきっかけとなり、クラス全体で作物に対する意識が向上した。

【課題】

- 今後、日々の天候や土壌水分などの環境変化と、作物の特徴に合わせて毎日コツコツと栽培管理を行っていけるよう意識付けを行っていきたい。

【今後の見通し】

- 希望の専攻と作物を決定し、その作物について多面的に調べ、栽培を行っていく。
- 未知の題材に対しても、自ら果敢に挑戦し、意義や過程などを自身で根気強く深掘りし、諦めずに挑戦してくれる生徒になることを願う。

3 国際理解教育支援

小学校

- 1 外国籍児童の日本語習得と日本文化への理解促進
～日本語指導教室の環境整備を通して～……………川口市立芝樋ノ爪小学校……98
- 2 豊かな国際性を育む 国際理解教育
～体験活動を基本とした児童の真の国際性の涵養～……………越谷市立花田小学校… 100

高等学校

- 1 世界で活躍する国際人の育成を目指して
～姉妹校交流を通じた国際理解教育の推進～……………埼玉県立大宮高等学校… 102
- 2 外国にルーツのある生徒の進級・卒業や進路実現に向けた総合的施策に関する研究……………埼玉県立羽生高等学校… 104
- 3 英語劇における表現力の向上を目指す
～言葉と言葉によらない方法で、相手に意思を伝えるために～……………埼玉県立越谷南高等学校… 106

特別支援学校

- 1 異文化に触れ、伝え合う楽しさを感じる授業実践
～特別支援学校における AET の授業「AET の国を旅しよう」を通して～……………富士見市立富士見特別支援学校… 108

外国籍児童の日本語習得と日本文化への理解促進

～日本語指導教室の環境整備を通して～

川口市立芝樋ノ爪小学校

校長 吉田 栄

1 はじめに

本校は昭和44年に川口市立芝西小学校より分離し川口市西部芝地区に開校し、令和7年度に開校57年目を迎えた学校である。JR蕨駅に近く、閑静な住宅街の落ち着いた環境の中にあり、16学級（通常学級11学級、特別支援学級5学級）の児童266名が学んでいる。学校教育目標を「心豊かな子 進んで学ぶ子（知）・思いやりのある子（徳）・たくましい子（体）」、目指す学校像を「児童の自尊感情を高める学校」とし、教職員が一丸となって教育活動を進めている。小規模のよさを生かしながら、特別支援学級との交流教育や、保護者や地域（学校応援団）と連携した体験活動を通して豊かな心を育てている。

2 児童の実態及び研究主題設定の理由

本校では外国籍児童が年々増加しており、全児童の20%を超える。日本での生活経験がなく編入してきた児童や、日本での生活経験はあるが家庭では日本語を使う習慣がない児童がほとんどである。このような児童は、学校生活や学習に必要な日本語を習得していることは少なく、学校生活や学習に困難を抱えている。

日本語の習得や日本の文化について理解を深めるには、日本語や日本の文化に関する多くの資料を児童の目に触れさせることが不可欠である。そこで、日本語指導教室の環境を整備することで、外国籍児童の日本語習得と日本文化への理解促進を実現するために本研究題目を設定した。

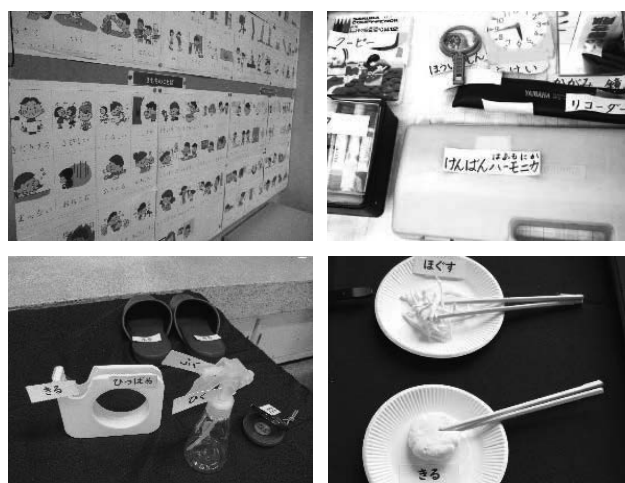
3 実践の内容

日本語指導教室の環境整備に加えて、今年度実践した内容を紹介する。

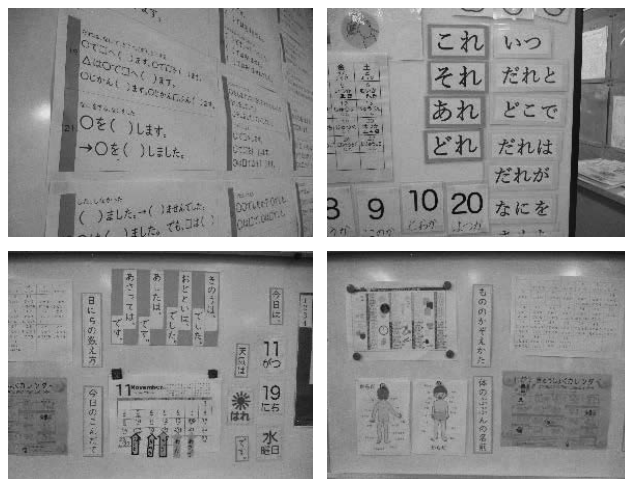
(1) 日本語習得のための環境整備

学習者が安心して日本語を学べるよう、教室内の環境整備に努めている。視覚的に理解しやすい教材や掲

示物を活用し、語彙や文法の定着を図っている。また、児童の日本語習得レベルに応じた教材の整備や、個別の学習スタイルに対応できる柔軟な指導体制を整えている。さらに、学習者同士が積極的に交流できる雰囲気づくりを心がけ、言語を使う機会を自然に増やす工夫をしている。



〈文法を知る掲示〉



〈語彙を増やす掲示〉

(2) 日本文化への理解促進のための環境整備

日本語の学習とあわせて、日本文化への理解を深めることも大切にしている。教室には季節の飾りや伝統的な道具などを取り入れ、学習者が日本の文化や風習に触れられるよう工夫している。また、年中行事や

地域のイベントに関連した活動を通じて、実際の文化体験の機会を提供している。こうした環境を整えることで、言語だけでなく文化的背景への理解も深まり、より豊かな学びにつながっている。



(3) 母国に誇りをもてる環境整備

学習者が自らの母国に誇りを持ち、互いの文化を尊重し合える環境づくりを大切にしている。教室では、学習者の母国に関する情報や写真、伝統的な衣装や食文化などを紹介するスペースを設け、母国の文化を共有できる機会を提供している。



(4) 学習プリントの作成

児童の日本語能力や学習の進度に応じた、理解しやすく実用的な学習プリントの作成に取り組んでいる。語彙や文法、読解、作文など、さまざまな分野に対応したプリントを用意し、繰り返し学習や定着を図るための工夫をしている。また、イラストや図を取り入れることで視覚的な理解を促し、楽しく学べる内容となるよう心がけている。必要に応じて個別対応のプリントも作成し、児童一人ひとりの学びを支援している。

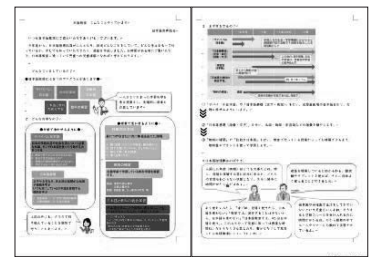
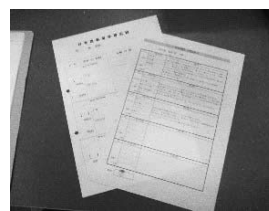
(5) 学校全体での情報共有

児童への支援をより効果的に行うために、積極的に学校全体で情報共有している。日本語指導担当者、学級担任、教科担当、養護教諭など、関係する教員との

連携し、児童の学習状況や生活面での課題、支援の方針について共通理解を深めている。また、校内研修やケース会議などの機会を活用し、多様な視点から支援の在り方を検討することで、全校的な支援体制の充実を目指している。

(6) 学級担任との連携

児童が学校生活でも安心して取り組めるよう、学級担任との連携を大切にしている。定期的に情報交換し、児童の学習状況や生活面での様子を共有することで、支援の一貫性を保ち、より効果的な指導につなげている。また、必要に応じて授業内容や配慮事項について相談し、学級全体の中で児童が無理なく参加できるよう調整している。こうした連携を通じて、児童の成長を学校全体で支える体制づくりを進めている。



4 成果と課題

これまでの取組により、児童が安心して学べる環境が整い、日本語能力の向上や学級への適応が見られるようになった。また、日本文化への理解も深まり、異文化へ関心をもつ児童が増えている。

一方で、児童の言語習得にかかる時間や日本の文化を理解する態度の育成には個人差があり、より柔軟な支援体制や教材の工夫が求められている。教職員間の情報共有のさらなる強化や、指導者の専門性向上も今後の課題である。また、特別支援教育が必要と思われる外国籍児童への指導が困難な状況がある。

5 今後の見通し

今後も児童一人ひとりの学びと成長を支えるため、環境整備と指導体制の充実を継続する。多様な文化背景をもつ児童が互いに理解し合い、共に学び合える学校づくりを目指し、教職員間の連携を深めながら、より効果的な支援を展開する。

豊かな国際性を育む 国際理解教育

～体験活動を基本とした児童の真の国際性の涵養～

越谷市立花田小学校

校長 藤井 裕

1 はじめに

本校は、越谷市のほぼ中央に位置し、昭和60年代の都市化の波に伴い、急激に人口が増加した地区である。学校規模拡大の解消を図るために、近隣小学校から分離し、平成2年度市内29番目の小学校として開校した。学校は、整然と整備された区画整理地内にあり、学区には日本庭園の「花田苑」、日本文化伝承の館「こしがや能楽堂」などの文化的な施設と新方川や桜並木などの景観に恵まれている。

学校教育目標は、「心豊かにたくましく生きる児童の育成」であり、めざす学校像を「元気・笑顔・希望あふれる学校」とし、日々の教育活動にあたっている。

2 主題設定の理由

日本の伝統文化を体験するとともに、外国の小中高生とのかかわりを通して、豊かな国際感覚を身につけ、お互いの人権を尊重する心情を養うことをねらいとして、研究題目を設定した。

3 具体的な取り組み

(1) キャンベルタウン交流会

令和7年10月6日(月)

2校時 全校集会(体育館)



キャンベルタウンの生徒によるパフォーマンス
→歌やおどりなどオーストラリアの文化をパフォーマンス

ンスとして紹介

花田小の児童による歌の披露
→6年生「ハートのアンテナ」
全校児童「WISH」



3校時 6年生「総合的な学習の時間」

国際理解をテーマに日本に来る外国人の興味や関心の高いことを調べ、ワークショップやプレゼンテーションを児童が主体となって準備して交流した。

- ① オープニングセレモニー
- ② ワークショップ
折り紙やけん玉など伝統的な遊び
- ③ エンディングセレモニー



4校時 5年生「外国語」

- ① キャンベルタウン生徒による自己紹介
- ② 花田小の児童の自己紹介

→4年生での既習事項である「What ○○○ do you like?」を用いてお互いの好きなものを small Talk のような形で進めた。



この交流会を通してオーストラリアの文化を知るだけでなく、これまで外国語の学習で学んできた英語の表現などを用いて積極的にコミュニケーションを取り合うことができた。また、日本の文化についても、活動を通して伝え合うことや、お互いの文化のちがいを理解することができた。

(2) JICA 派遣教員との国際交流

本校では、令和5年10月から令和7年9月まで JICA（国際協力機構）の現職派遣として、カリブ海に浮かぶ島国「セントルシア」に派遣された教員がいる。そこで、教室とセントルシアをオンラインでつなぎ、特別授業を行った。現地の様子に始まり、歴史や生活の仕方、派遣教諭がどのような仕事をしているのか等、学ぶことができた。13時間の時差やインターネットの接続環境等、困難な面もあったが、当該教諭と事前の打ち合わせを丁寧に行ったことで、児童にとって学びの大きい交流となった。なお、令和7年度10月から当該教諭は本校に復帰している。



(3) 伝統文化体験活動

「はじめに」でも述べた通り、本学区内には「花田苑」「能楽堂」があり、伝統文化を体験する環境に非常に恵まれている。そこで、総合的な学習の時間を活用し、5年生では能楽堂で能体験、6年生では花田苑で茶道体験を行っている。それぞれの体験活動は、地域在住の方に講師をお願いしている。

能体験では、全5時間の体験活動を通し、能の文化や歴史に触れつつ、最後の時間には、全員が白足袋を履いて能舞台に立ち能を舞った。茶道体験では、事前授業として、茶道の文化や歴史、茶道に使用する道具、基本的な作法を学んだ。体験日には、回遊式日本庭園を眺めながら本格的な茶室で抹茶をいただき、児童にとって大変貴重な機会となった。



4 おわりに

異文化に触れるだけでなく、自国の伝統文化を体験し、学ぶことで他国の文化を尊重しようとする思いが国際感覚の豊かな児童を育むと考える。今後も豊かな体験活動を通して児童が真の国際性を養えるよう取り組んでいく。

世界で活躍する国際人の育成を目指して

～姉妹校交流を通じた国際理解教育の推進～

埼玉県立大宮高等学校

校長 松 中 直 司

1 本校の姉妹校交流

(1) 交流の概要について

平成8年の本校創立70周年を機に、ドイツ共和国ブランデンブルク州コトブス市にある Ludwig-Leichhardt-Gymnasium (ルドヴィッヒ・ライヒハート・ギムナジウム) と姉妹提携を結び、西暦奇数年は本校生徒15名のドイツへの派遣、西暦偶数年度はドイツ生15名の日本への受け入れを行っている(令和2・3年度は新型コロナの影響でオンラインでの交流を実施)。姉妹校提携から約30年が経つが、毎年交互にお互いの学校を訪問して、交流を深めている。

(2) 姉妹校について

1975年に創立され、1991年に「ギムナジウム」(ドイツ中等教育制度の一つ、主として大学進学希望者が就学する)として再開校された。生徒数は約840名であり大半の生徒が大学に進学している。外国語は11歳の5年次から英語が必修であり、その後、日本語・フランス語・ラテン語などの第二外国語を選択履修となる。本校との交流事業に参加している生徒の多くは第二言語として日本語を選択しており、日本語や日本文化に対して強い関心を持っている。

(3) 本プログラムの特徴

互いの第二言語である英語を用いて2週間のほとんどをホームステイで過ごす交流プログラムであり、原則派遣と翌年もしくは前年の受入で1セットとなる。学校間独自の相互交流であるため派遣時は参加生徒をよく知る本校職員が引率可能である、受入時はプログラム参加生徒だけでなく全校生徒への還元が可能となる、2年連続での交流となるため派遣と受入を同じペアで行うことが可能である、参加者同士の情報交換がしやすい、などの様々な利点があげられる。

2 今年度(派遣)実践内容

第二次世界大戦で爆撃を受けたドレスデンや戦後に東西に分断されていたベルリンを訪問することでドイ

ツの歴史や文化を学び、平和の尊さを考える素地を養うことができた。歴史的な事実として耳にはしていても、その場所を訪れ、実体験を聞き、当時の街の様子に思いを馳せることで感じられることが多くあった。また異文化理解を深めることで、多角的な視点も身につけることができた。現地の職員やガイドの方の話に真剣に耳を傾け、積極的に質問をする生徒の様子からも、充実した学びを得られている様子が伺えた。

そして何より、英語で交流をすることを通じて、他者との関係の築き方や在り方を学ぶことができた。たとえ言語や文化が異なっていようとも、第二言語である英語を用い、目を合わせて意思を伝え合えば、よい関係性を築くことができることを、派遣事業に参加した生徒たちは身をもって感じたようであった。互いを尊重し交流を深める経験はこの短期間で生徒たちを大きく成長させてくれ、これからの国際社会を生きる生徒たちにとって非常に貴重な経験となった。

参加生徒からは「この二週間のドイツでの生活を通して、たくさんの人と出会い、英語力を高め、ドイツの文化に直接触れることができたと思います。初めての海外で緊張しかなかったけれど、一日一日が新たな発見であふれていました。」「この二週間、日本とは全く異なる文化や慣習に触れて毎日が新鮮だったし、初めてのことが多かったので新しい知識を得ることができました。外国の文化を知ることで改めて日本の良さも発見できたので、この事業に参加して本当に良かったと思いました。そして、大学でもたくさんの国に留学してまた異文化に触れたいです。」「ドイツにこの先ずっと大事にしたい友達ができ、自分のものの見方や考え方が変わって、世界が広がったと思いました。とりあえずやってみるという気持ちは自分を成長させ、想像もしないような出会いや時間をもたらしてくれると思いました。」などの感想があげられており、非常に有意義な経験であったといえる。

【令和7年度派遣日程】

月日	行程等	宿泊
9月 8日(月)	7:10 羽田空港国際線ターミナル集合	ホームステイ
	9:30 羽田発 (LH715便)	
	⇒ミュンヘン16:30着 ⇒ 20:00発(LH1960便)	
	⇒21:15 ベルリン着 バスで学校へ	
	23:30 学校着、ホストと合流	
9月 9日(火)	AM 朝食会、日本語授業参加 PM コト布斯 歴史・文化研修(市内教会、市庁舎など)	ホームステイ
9月10日(水)	AM バスでドレスデンへ PM ドレスデン 文化研修(パノメーターなど)	ドレスデン ホテル泊
9月11日(木)	終日 ドレスデン 歴史研修(プロテスタント教会など)	ドレスデン ホテル泊
9月12日(金)	AM ドレスデン 地理・自然研修(ザクセンスイスなど)	ホームステイ
	PM バスでコト布斯へ	
9月13日(土)	ホストファミリーとの1日	ホームステイ
9月14日(日)	ホストファミリーとの1日	ホームステイ
9月15日(月)	終日 学校(プレゼン、授業体験)	ホームステイ
9月16日(火)	終日 コト布斯 自然研修(シュプレーバルトなど)	ホームステイ
9月17日(水)	終日 コト布斯 自然・歴史研修 (プラニッツァー公園など)	ホームステイ
9月18日(木)	AM ホストと自由時間 PM 学校でお別れパーティー	ホームステイ
9月19日(金)	AM ポツダム 歴史研修(サンサーシー宮殿など)	ベルリン ホテル泊
	PM ベルリン 文化研修(ブランデンブルグ門など)	
9月20日(土)	11:05 ベルリン発 (LH183便)	機内泊
	⇒12:15 フランクフルト着	
	⇒14:00 フランクフルト発 (LH716便)	
9月21日(日)	9:30 羽田着	
	11:45 羽田空港にて解散	



姉妹校にて、派遣生徒とホストのドイツ生徒

3 昨年度(受入)実践内容

受入時は国際交流委員会が主催する文化祭企画への参加やドイツ生による英語でのプレゼンテーションを通して事業参加生徒だけでなく全校生徒に国際交流の機会を還元することができた。また、参加生徒は二週間英語を用いてのコミュニケーションを通して、国籍や文化的背景が異なる人々との交流において大切なことについて考えたり、自国の文化について見直したりする機会を持つことができた。

受入に参加した生徒からは「今回の受入で、国や文化がお互い違う中で、いかにお互いが思いやって行動できるかが他の文化の人とコミュニケーションをとる上ですごく大切になってくるのだということがよく分かりました。やはり文化が違う相手を理解する事は難しいことかもしれませんが、お互いが思いやりを持って行動すれば自然と分かり合えるようになるという事が今

回発見できてすごく自分の考え方を考える大きなきっかけとなりました。これからは色々な人と関わっていく中で相手への思いやりを忘れずに生きていきたいと思います。」などの感想が見られた。

【令和6年度受入日程】

月日	曜	事業概要
8月30日	金	18:55 成田着 → 学校にてホストファミリーと合流
8月31日	土	AM オープニングにて全校生徒に挨拶 歓迎式 @やまぼうし会館2階
		PM 文化祭参加
9月1日	日	文化祭参加
9月2日	月	AM 校外研修(さいたま市ツアー)
		PM ドイツ生によるプレゼン
9月3日	火	宿泊研修(日光)
9月4日	水	宿泊研修(日光)
9月5日	木	ドイツ生によるプレゼン 部活動体験
9月6日	金	校外研修(鎌倉)
9月7日	土	ホストファミリーとの週末 DAY1
9月8日	日	ホストファミリーとの週末 DAY2
9月9日	月	授業体験、ドイツ語講座、 吹奏楽部音楽部コンサート
9月10日	火	校外研修(舞浜)
9月11日	水	校外歴史・文化研修 (川越、丸木美術館)
9月12日	木	ホストファミリーとの1日 DAY3
		学校にてお別れパーティー → 22:30 成田発



大宮高校にて、令和6年度お別れパーティー

4 成果と課題

交流に参加した15名の生徒は派遣先での体験を通して国際的な視野で物事を思考・表現する力を身につけることができ、その経験を報告会や英語の授業などで他の生徒にも波及させ、国際理解への意識向上に繋げることができている。

物価高騰による派遣費用の高額化や教員の入れ替わりによる業務の引継ぎなど様々な課題はあるが、これからの国際社会で活躍できる国際的な人材を育成するためにも、引き続き本事業の質の向上に努めたい。

外国にルーツのある生徒の進級・卒業や 進路実現に向けた総合的施策に関する研究

埼玉県立羽生高等学校

校長 新井昌也

1. 研究題目の設定理由

埼玉県立高校における外国人生徒及び帰国生徒の数は、平成29年度から約2倍となり、各学校における外国にルーツのある生徒数も増え続けている。そのような状況を受け、国は日本語教育の推進に関する法律を施行し、令和4年度末には学校教育法施行規則が改正され、高校段階における日本語支援として、学校設定教科・科目「日本語」の設置や「特別的教育課程」の設置が可能となった。

本校には日本以外の9ヵ国、約40名の外国籍の生徒が在籍し、その数は全校生徒の約2割となっており、県内で最も外国籍の生徒が多い学校の一つである。日本語支援が必要な生徒が多く在籍しており、進級・卒業や進路実現に向けての各種支援が急務であり、関係各所と連携しながら学校全体をあげて取り組む必要がある。

2. 研究実践・取組内容

(1) 校内日本語教室の設置（年間実施）

日本語支援が必要な生徒が授業以外で日本語を学べる機会を増やすため、校内での日本語教室を設置している。運営は管理職や担当者を中心に、各年次教諭と本校に配置されている日本語支援員が連携して行っている。

毎週火曜日と木曜日の午後4時から5時までの1時間、日本語教室を開き、希望する外国ルーツの生徒は参加できるようにしている。日本語の教材を用意し、日本語支援員から体系だった日本語指導を受けられるようにしている。また、2名の日本語支援員がレベル別の指導を行えるように工夫することで、生徒の日本語レベルに応じた指導を可能にしている。

今年度は14名の生徒が校内日本語教室に参加し、個別の日本語指導を受けるとともに、年次を超えた生徒間の交流の場ともなっている。

(2) オンライン日本語教室の受講（年間実施）

県教委が主催しているオンラインによる日本語補習「オンライン日本語教室」を受講している。生徒が安心して、また継続して「オンライン日本語教室」を受講できるように、本校担当者や日本語支援員が生徒のサポートを行った。また、他校の日本語指導が必要な生徒とオンライン上でつながることで、学校を超えた交流にもつながった。

今年度のオンライン日本語教室は、毎週水曜日の午後4時半から5時10分まで実施され、13名の生徒が受講登録をして、オンライン日本語教室を受講することができた。



(3) 学校設定科目「トライ国語（初級）」の設置（年間実施）

上記(1)(2)の取組みは、教育課程表には位置づけられておらず、あくまで「補習」という扱いになるため、各生徒の進級や卒業に係る単位としては認められない。

そこで本校では、日本語支援が必要な生徒を対象として、学校設定科目「トライ国語（初級）」を設置している。「トライ国語（初級）」を通して、高校の授業を受ける前段階の日本語支援を実施し、生活言語はもちろんのこと、高校の授業を受けるための学習言語についても学べる機会を提供している。

授業は、国語科教員と日本語支援員のチームティーチングで実施し、日本語支援員による指導を国

語科教員がサポートすることで、きめ細かな指導を可能とするとともに、日本語指導に関する国語科教員の指導力向上にも役立てている。今年度は9名の生徒が受講し、生徒たちの日本語能力も向上した。

(4) 通訳による総合的支援（三者面談等で実施）

本校には9ヵ国にわたる生徒がいるため、埼玉県教育委員会や埼玉県国際交流協会と連携し、各言語の通訳を派遣していただくことで、より効果的に面談を実施できるようにした。生活面や学習面での不安などについて、生徒や保護者から正確に聞き取るとともに、学校として対応できるようにした。特に今年度は、県教委の国際交流員（ポルトガル語通訳）を何度も派遣いただき、1年次生徒の三者面談に立ち会っていただくことができた。

(5) ポケトークの活用（年間実施）

生徒も教員もポケトークや通訳アプリ等を利用することで、日々のコミュニケーションが円滑に進むようにした。日常的なコミュニケーションを通して、生徒との人間関係を構築するとともに、生徒が抱える問題などに気づけるようにしている。

(6) ポケトーク for スクールの導入（年間実施）

※7月より試験導入、10月より本格導入



ポケトーク株式会社と連携して、「ポケトーク for スクール」というサービスのトライアル実施を7月に開始した。「ポケトーク for スクール」は、教員が日本語で話した内容が、各生徒たちのタブレット上で彼らの母語にすぐに翻訳されるというものである。

教員がマイクを着用して普通に授業するだけで、生徒たちは自分たちのそれぞれの母語で、教員の指示や話の内容を確認することができる。実際に使用してい

る生徒からも「今までよりも授業の内容や進み方がよく分かる」といった感想もあり、10月からポケトーク for スクールを本格導入した。

生徒たちの学習意欲が向上し、更に学習の成果も高まることを期待している。

3. 成果と課題

日本語指導に係る（1）（2）（3）の取組みについては、特に、学校設定科目「トライ国語（初級）」で授業として日本語を学べることで、明らかに生徒たちの日本語学習に対するモチベーションを高めている。また、授業で系統立てて日本語を学ぶことができることで、その他での日本語学習や教科学習での学びの質の向上につながっている。

通訳・翻訳に係る（4）（5）の取組みについては、やはり生徒の母語を利用してあげることで、コミュニケーションにおける生徒側の安心感が高まる。そして、保護者にとっても、慣れない日本語ではなく、正確に母語で説明してくれる通訳者がいることで、不安が解消されるとともに、学校が伝えたいことについても不満なく理解してくれるようになっている。

そして今回特に注目したのが、（6）の「ポケトーク for スクール」である。各教科の教員が話すことを、生徒ひとり一台端末を利用して、それぞれの生徒の母語で翻訳してくれるというのは画期的であった。特に本校のように、国籍や母語の違う生徒が多くいる教室では、「ポケトーク for スクール」は、それぞれの生徒の横にそれぞれの言語の通訳者がいるような感覚に近い。教員にとっても、授業中の生徒理解を確認する負担が大きく削減されたことは大きい。

本校の課題は、日本語の学校設定科目が1科目しか設定されていないため、卒業まで継続した体系的な日本語指導を受けることができないことである。他校の例なども参考に、日本語の学校設定科目を更に設置できるように研究・検討していきたい。

最後に、本取組みを埼玉県全体へ波及させていくためにも、今後は県教委と更に連携を深め、県教委が実施する日本語支援員配置校連絡協議会等を利用し、本校の研究成果を他校へ発信し、県全体への普及を図っていきたいと考えている。

英語劇における表現力の向上を目指す

～言葉と言葉によらない方法で、相手に意思を伝えるために～

埼玉県立越谷南高等学校

校長 相原 博 和

1 外国語科について

本校は埼玉県内で外国語科を設置する県立高校7校のうちの一つである。普通科に加え、各学年1クラスが外国語科である。外国語科では、第2外国語を開講している他、英語科専門科目の中で、スピーチ・暗唱・プレゼン・ディベート（アカデミックスタイル・パラメンタリースタイル）・多読・オンライン英会話・英語劇などの幅広く特徴的な活動を行っている。

外国語科生徒は当然ながら英語が得意であり、海外に目を向けている生徒が多数いる。活発で授業中の反応も良く、発表等の活動を得意とする生徒が比較的多いが、中には人前で話すことに慣れておらず苦手意識を持つ生徒も少なくない。

2 英語劇について

英語劇はクラス全体40名で一つの演目を演じ、最終的に普通科の生徒たちに対して校内で発表するものである。

まずは授業者が演目を選ぶのだが、英文学上の優れた戯曲や小説に触れさせたいとの思いがあり、その中から今の日本の高校生が演じ楽しめるものを選出する。導入としてその作品をリーダーで読み作品を味わい、その後劇で演じる。英語のセリフを覚えるだけでなく、大きな声で活舌よく感情をこめてセリフを言い、演技をする。この活動は英語力が伸びるだけでなく、人前で話すことは恥ずかしいという羞恥心を克服し、表現力・協調性・自己肯定感など様々な資質を高める大変有用な活動である。授業者としての苦勞は、授業内の活動なので評価をしなければならない関係上、クラス全員に何らかの役割とセリフを与える台本を作成しなければならないという点である。また、劇なんてやりたくない、恥ずかしいという生徒も一定数いるので、いかにその生徒たちの気持ちを高め、殻を破らせるか、ということも難点の一つである。

英語については、まずは英語のセリフの意味を理解し暗記する。その後、観客になる普通科の生徒たちが理解できるように大きな声ではっきり、ゆっくり、正

確な発音でセリフを届けさせるために、教員が個々に演者の発声・発音の指導を行う。そして表現力を用いシーンの状況や人物の心情をセリフの抑揚や体の動き、顔の表情で表現する。

3 今回の研究テーマと成果

上述したとおり、英語劇を指導する上での難点の一つは、生徒がいかに羞恥心を乗り越えるかということである。これができないと舞台上でただ棒立ちになり、縮こまった小さな声でぼそぼそ何かを喋って去っていくという事態になり、観客は何が起こっているのか理解できずに劇が成立しない。

そこで羞恥心を克服し、観客がストーリーや登場人物の心情を理解し楽しめる劇を作るため、生徒の表現力を向上させたいと考え上記の研究題目を設定した。

表1 クラスで劇をすると聞いたとき、どのように思いましたか。一番近いものを選んでください。

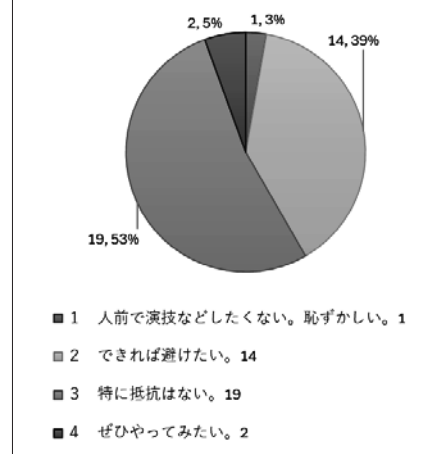


表1は劇を始める前の意識調査の結果であるが、実に42%の生徒が「人前で演技をしたくない」「できれば避けたい」と回答している。

方策は次のとおりである。授業にプロのミュージカル俳優を講師として招き、演技についての講義やアドバイスを聞き講師自身の演技や歌唱を鑑賞する。さらに発声やジェスチャー、舞台上での動きなどの基本事項をはじめ、ロールプレイで表現の仕方などを学ぶ

ワークショップを実施する。アンケートで実施前後の意識の変化を計る。

ワークショップの詳細な内容は次のとおりである。

講師：後藤光葵氏

(サンカラーズ所属 ミュージカル俳優)

- 生徒による講師紹介・講師自己紹介・Q & A
- 『アニー』の台本を使った演技アドバイス
- ミニコンサート

- (1) “Tomorrow” (『アニー』より英語歌唱)
- (2) 「美女と野獣」(『美女と野獣』より)
- (3) 「フレンドライクミー」(『アラジン』より)

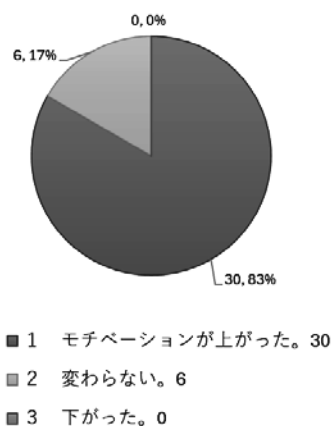
- 発声 (基礎的な発声)
- ウォーミングアップ「言葉のキャッチボール」
- シアターゲーム 3種
 - (1) 「拍手回し」〈協調性、コミュニケーション、チームビルディング〉
 - (2) 「Count 5」〈想像力、自発性、身体運動、感情表現〉
 - (3) 「ここはどこ？」〈想像力、身体表現、イメージの共有、コミュニケーション、観察力〉

生徒たちはとても生き生きとした表情で楽しそうにワークショップに参加した。生徒の感想のいくつかを挙げる。

- 今回の公演でプロの方の演技力の高さに圧倒されました。特に、歌の息づかい、感情の込め方、ビブラートがすごいと思いました。演技ゲームの際は、様々な表現が求められたので実践をするうちに表現する事が楽しくなり、みんなで演技の中で協力することで団結力も深まりました。私たちもプロに負けられないような演技を英語劇でしたいです。
- シアターゲームをしたことで、人前で演じるのが恥ずかしいという気持ちが少し軽くなり、これからの演技に取り入れられそうだなと思った。また、表情がとても大切だと思った。今日学んだ顔のストレッチなどもしていきたい。
- 実際の台本のコピーなども見せてくださって、より具体的でわかりやすいアドバイスをしてくださったので、とても演技に対してのやる気が高くなりました。また、歌が本当にすごくて、発声のしかたや声の大きさに感動しました。6限でのアクティビティでは、最初は恥ずかしかったりしたけど途中から楽しくなってきた、みんなの演技をみたり自分で伝え

たりするのが楽しいなと思うようになりました。暑さのレベルを表現したり、ジェスチャーだけでどんなシチュエーションなのかを伝えることは難しかったけど、班で協力しながらできたので楽しかったし、これからの英語劇に対してのモチベーションがとても高まりました。今日教えてもらったことを意識してこれからの練習に臨んでいきたいと思いました。

表2 プロの俳優による演劇ワークショップを受けました。授業で劇が始まった当初とモチベーションは変わりましたか。



上記表2によると、83%の生徒が「モチベーションが上がった」と回答した。生徒の意識は大いに変わり、ワークショップ開催の目標は達成されたと言えるだろう。



【寒さの段階を演技で表現】



【グループで「ある場所」を表現】

授業に英語劇を取り入れることの効用は様々にあるが、なかでも十分な声量で丁度良い速さで相手に分かるように言葉を届けることはコミュニケーションの最も基本的な態度であることを体感することができる。今後も英語劇を通して、いろいろな場面で自分を豊かに表現できるようになること、また英語力を高められるようになることを期待する。

異文化に触れ、伝え合う楽しさを感じる授業実践

～特別支援学校における AET の授業「AET の国を旅しよう」を通して～

富士見市立富士見特別支援学校

校長 齊藤 七実

1. はじめに

本校は50周年を迎え、半世紀にわたって、富士見市、ふじみ野市に住む知的障がいがある児童・生徒たちの教育を担ってきた。近隣には小学校、中学校、高等学校が並び、交流も行われている。

学校教育目標は「児童生徒の可能性を最大限に伸ばし、自ら生きる力を養い、社会的に自立できる心豊かな人間を育成する」であり、目指す生徒像は「なかよく げんきに がんばる」とし、日々の教育活動にあたっている。

2. 児童・生徒の実態、学校の特徴について

今年度の本校児童・生徒は小学部34人、中学部23人、高等部34人 計91人が毎日それぞれの課題に向かい学んでいる。各学年人数に応じて1～2クラスで編成され、[国語、数学、美術、音楽、総合的な学習の時間等に加え、日常生活の指導、自立活動、作業学習等がある。]学級単位での学習することが基本ではあるが、教科領域によっては学部全体でグループを編成し、学ぶ授業もある。給食は自校式で、アレルギー等の配慮に加え、嚥下等の課題等、それぞれの特性に応じて配慮された食事が提供されている。また、2名のコーディネーターを中心に、地域の特別支援関係の相談を引き受け、窓口となっている。今年度より、コーディネーターが市内中学校に出向き、出前授業「みんなちがってみんないい」を行い、地域の障がい者理解教育に一役買っている。

3. 国際理解教育について

富士見市は AET を市の職員として採用しており、長年継続して、市内の小中学校に勤務している。特別支援学校においては、7年前より、年2～3回英語学習を行っていたが、近年徐々に回数を増やしてきた。市内の小中学校をよく知る AET は、それぞれの学校の特別支援学級でも授業を行うこともあり、障がいのある児童・生徒たちへの理解も深い。昨年度より、市内の全 AET による「国際理解教育特別授業」を中学部で始めることとなった。

本校中学部において、英語は教科の枠組みとしては設けてはいないが、特別活動の一環として行われている。英語の学習では、「慣れ親しむ」にポイントを置いて、英語での簡単なやり取りや読み書きに加え、AET の出身国の文化、シーズンごとの特徴をとらえた授業を進めてきた。英語の習得より、AET とのコ

ミュニケーションをとることや相手を理解することをめざしている。表出言語のない生徒たちも多くいるため、ジェスチャー、手話、言語等を使用して「通じ合うこと」ことが大切だと考える。海外に関する学習をする機会も少ないため、グローバルな視点を養うことは大切である。また、障がいの程度、言語理解の差などは様々ではあるが、「学習の機会を与えること」「共に学ぶこと」は誰にも重要であると考えます。

4. 特性のある生徒たちのための授業の組み立て

昨年度からの「国際理解教育」では、市内全員の AET を承知し、授業を展開している。今年度はアメリカ1名、イギリス1名、スイス1名、コロンビア1名、モルドバ1名、フィリピン3名 計8名、6か国の AET に授業をしてもらった。

(1) 授業実施までの道のり

AET との授業の打ち合わせはオンラインで行った。あらかじめ本校勤務の AET と授業内容を作成した。オンラインの準備には、AET の所属校にもご協力をいただき、行うことができた。

(2) 授業内容について

「AET の国を旅しよう！」をテーマに、本校中学部の教室を AET それぞれの出身国に見立ててパスポートを持参して6か国を回る海外旅行を行う展開にした。各国を訪れる際はまずパスポートを見せる。入国審査ではそれぞれの生徒の答えやすい形で名前などの質問が行われ、パスポートにサインと国のシールをもらい、入国する。AET はそれぞれの特徴を活かして、国の紹介(位置、言語、観光スポット、食べ物、有名なものや人など)を行い、ゲームや歌などで訪れた旅行者である生徒たちを楽しませた。それぞれが生徒たちのために工夫を凝らした授業であった。昨年度、学級閉鎖で参加できなかった今年度の3年生にとっては初めての学習だったことに加え、本校生徒の特性として、同じ内容の繰り返しが、安心と活動のしやすさとなるため、AET には昨年度とほぼ同じ内容をお願いした。ただし、発達の高い生徒もいるため、加えて、今年度は「各国の学校の様子」を組み込んでもらった。それらの生徒たちは、日本の学校と比較をし、(小学校の特別支援学級からの生徒や、支援籍学習で中学校に学習に行く生徒もいるので、通常の学校の様子を理解している生徒もいる)「部活動はあまりやらないんだね。」「給食はなくて、カフェテリアで食べるんだって。いいな。」などの感想を述べていた。

(3) 当日の授業スケジュール

	生徒	AET
9:00	スクールバス到着	打ち合わせと 授業準備
9:35	朝運動	
9:50~		授業①
10:10~		授業②
10:30~		授業③
10:50~		10分休憩
11:00		授業④
11:20~		授業⑤
11:40~		授業⑥
12:00~		昼食
13:00		昼休み
13:25~		しっぽとり大会と終わりの会
14:15		終了

(4) 授業のようす

アメリカでの「Hokky Pokky」のダンスやフィリピンの竹を使ったバンブーダンスなどは昨年度に引き続き大人気で、多くの生徒が期待を持って取り組むことができた。また、コロンビアでは民族衣装を身にまとったAETが、



アンデスに住む動物の紹介をし、動物好きの生徒が喜んで答えていた。モルドバは、教員にもあまりなじみがない国だったが、どこに位置するのか、どんな国なのかを英語の単語と日本語を混ぜながらわかりやすく説明してくれた。本物の通貨・コインを見たり、日本のゴム跳びに似た遊びを教わり、楽しいひとときを過ごした。スイスに入国すると、美しい風景の写真が飾られ、AETが持参したカウベルをみんなで鳴らし、初めての音を興味津々で聞いていた。



イギリスのAETは本校に年8回ほど来校しているので、生徒たちにとっても馴染みで、作り上げられた教室の雰囲気にも居心地の良さを感じている様子だった。

出国するときは、各国にお土産としてそれぞれの国のお菓子が用意されていて、生徒はその国の通貨を使って買い物を楽しんだ。カラフルな通貨もあり、生徒たちは今までに目にしたことのない通貨に驚きながら、

「ハウマッチ?」「いくらですか」と質問をし、充実した様子であった。午後は体育館でAETと一緒に、しっぽとりゲームを楽しんだ。AETも本気になって生徒たちと走り回り、さらに笑顔であふれる時間となった。終わりの会では、AETから、それぞれの言語でのメッセージを聞き、中学部代表生徒が感謝の言葉を述べると、AETより、缶バッチのプレゼントが渡された。この缶バッチのデザインは本校50周年記念に誕生したゆるキャラ「ひまりん」を題材に、AETが各国の国旗を加えて作成してくれたものである。今では中学部生徒みんなの登下校バックに飾られている。

5. 今後の見通しと課題

2年続けて実施してきたこの「国際理解教育特別授業」は、新しい場面に慣れることが困難な特性や、一度の学習で習得することが苦手な特性をもつ生徒たちが多くいる本校において、定着しつつある行事となっている。さらに、今年は飛び入りで小学部の生徒たちも授業に参加する場面があり、来年を楽しみにしている。これらを鑑み、今後も継続していきたいと考えている。

課題としては日程の調整である。市内のAETすべてのスケジュールをあわせて授業を行うことに関して、最初は調整することが困難でもあったが、中学校の学校総合体育大会等、市内全中学校が共通して授業のない日を選び、来校してもらっている。今後、行事日程等が変化する場合もあると思われるが、年に一度のこの活動を理解していただき、継続していきたいと考えている。(文責 教諭 朝妻朱美)



4 キャリア教育支援

小学校

- 1 発達障害・情緒障害通級指導教室におけるキャリア教育
～自己の個性を理解し自分らしく生きるために～……………さいたま市立大戸小学校… 112
- 2 地域の宝物を活用したキャリア教育の展開
～価値ある大人モデルの提示と南河原小文化カリキュラムの活用～……………行田市立南河原小学校… 114
- 3 生き生きと輝き、伸びゆく児童の育成を目指したキャリア教育の推進
～校種間をつなぎ、基礎的・汎用的能力を育むキャリア教育の推進～……………蓮田市立平野小学校… 116

中学校

- 1 グローバル社会で活躍できる人材の育成
～自ら考え、生徒が失敗を恐れず、挑戦し続けられる場の設定～……………さいたま市立白幡中学校… 118
- 2 将来を見据え、主体的に学ぶ生徒の育成
～未来につなげる個別最適・協働的な学びの実現～……………三郷市立前川中学校… 120

高等学校

- 1 地域のイベントや福祉施設でのちんどんパフォーマンス公演を通して、地域社会に貢献できる人材の育成に努める
～地域の力を借りた生徒育成の協力体制を図る～……………埼玉県立幸手桜高等学校… 122

発達障害・情緒障害通級指導教室におけるキャリア教育

～自己の個性を理解し自分らしく生きるために～

さいたま市立大戸小学校

校長 吉岡 貴和

1 はじめに

開校153周年の本校は、通常の学級17クラス、支援学級1クラス、通級指導教室1クラスの452名の児童が学ぶ中規模学校であり、地域と共に歩む歴史ある学校である。令和8年度夏に完成予定の工事により、校舎は新しく、明るく、きれいになりつつある。本校の学校教育目標である「かしこく やさしく たくましく」を実現するために、様々な教育活動の中で、職員は笑顔で教育実践を展開している。また、チャレンジスクールをはじめ、防犯パトロール、育成会行事、おやじの会など、地域の方々に深く関わっていただいている学校である。

2 研究主題設定理由

文部科学省調査（2022）によれば、通級による指導を受けている児童生徒数は平成24年度に比べ2.5倍に増えていた。多様なニーズに応える為にも、発達障害・情緒障害通級指導教室での指導充実や環境整備、担当教諭の高い専門性が求められてきているのが分かる。

本校の通級指導教室では、自校の子どもだけではなく、地域の子どもの自立を目指し、主訴となる困難の改善・克服について一人ひとりの状況に応じた指導を行っている。この研究を通して、自他の個性を大切にできる児童の育成や、将来自分らしく生きる力の土台づくりを意識したキャリア教育を実践したいと考えている。また、さいたま市では、通級指導教室におけるキャリア教育の実践報告がされていないことから、通級指導教室の更なる発展や「Sola るーむ」確立のためにも、この研究題目を設定した。

3 研究計画

【1学期】

- 児童のアセスメント実施（4月）
- 授業実践 学校ヨガ（5月～）
- さいたま市通級指導教室担当者会での実践発表
～場面緘黙の指導について～（7月）

【2学期】

- 市研究大会「合理的配慮について」（11月）
会場：さいたま市立大戸小学校
- さいたま市通級指導教室担当者会での研究発表
～言語発達「ナラティブ」について～（12月）
- 中間のまとめ・調整
- 「Sola るーむ」環境整備（4月～12月）

【3学期】

- PTA や外部への発信（毎学期末・学校HP）
- 活動成果報告書作成

4 研究内容（具体的な取組）

（1）自立活動 ～学校ヨガの実践～

「学校ヨガ」とは、子どもの自己調整力や心身のバランスを育むことをねらいとしている。大戸小の自立活動の授業では、ヨガの深い呼吸を通じて自律神経を整え、不安や緊張を和らげるとともに、ポーズや呼吸に意識を向けることでメタ認知やマインドフルネスを高めることを目指し、半年間の実践を行った。指導内容では、照明や音楽などを児童が選択し、自分にとって快適な環境を自分で整える機会を多く設定し、子どもが能動的に活動できる環境を設定するなど工夫を行った。また、教師は評価的な声かけを避け、感覚や気づきに焦点を当てた支援を行った。



どれを
選ぼうかな。
今日はこれに
しよう！



息をすって、遠く
にながく吐くよ。
その調子。自分の
呼吸に意識を向け
ましょう。

(2) 市内教育研究会研修大会

さいたま市教育研究会において、埼玉大学教授 名越斉子先生をお招きし、「『必要かつ適当な合理的配慮の提供』～通級を利用する児童生徒の自己形成を見据えて～」の講義及び協議を行った。

講義の中では、合理的配慮の法的根拠、大学入試場面における具体的な配慮内容、更には、障害のある人が自分の意思決定や生活の向上、社会参加を目的として、必要な支援や配慮を周囲に理解してもらうための力「セルフアドボカシー」の重要性を学ぶことができた。

協議では、学校で必要な配慮を受けながら育つことは、将来の就労場面で必要な配慮を、自分で伝えられる力につながるという意見が出された。



(3) 通級指導教室担当者会における研修会

現在、さいたま市の発達障害・情緒障害通級指導教室は、令和7年度41校に設置されている。多様な子どものニーズに対応する為にも、通級担当者には専門的な知識と実践的な指導力が求められている。そこで、通級担当者会としては、専門性の向上を目的とした研修会を、年7回計画し実践した。

今年度の研修は、大テーマを「言語発達の道筋」とし、目白大学助教授、後藤多可志先生の文献をもとに、4つのブロックを「会話」「ナラティブ」「語用」「文字言語」に分け、1年かけて研修と発表をおこなった。

研修では、それぞれが文献や論文を読み、ミニレポートしたものを共有したり、テーマに関わる事例を出し合ったりした。



(4) 校内教育支援センター「Sola るーむ」整備

「Sola るーむ」は、すべての児童生徒が安心して教育を受けられる環境を確保するという基本理念に基づき、当該児童生徒の社会的自立を目指して、各学校に設置された校内教育支援センターのことである。子ども自身が、①自分が居てもいいと思えて安心できる場、②自分のペースで学習できる場、③支援者や利用者同士で協働作業をしたり、遊んだりできる場、の3つの機能を意識して教室整備をおこなった。



5 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 「学校ヨガ」の実践では、児童が自身の状態を客観視できるようになったほか、呼吸法が日常における感情コントロールに役立っているという成果が報告された。
- 自立活動の指導では、自己理解を深めるとともに、他者とのつながりを構築する力を育むことができた。これは、児童のアイデンティティの確立や教師側にとっての児童理解につながった。
- キャリア教育につながる研修を、校内だけではなく市内全体で取り組むことができた。
- 自立活動の中で、キャリア教育を意識した実践が少ないため、今後も各教室での実践を積み重ねて研究していく必要がある。
- 今年度の取組を、持続可能な取組にしていくためにも、通級指導教室研修計画に組み込み、誰でも実践できるような内容を構築していくことが必要である。
- 教員がキャリア教育への理解を深め、スキルアップできる体制づくりが必要である。

6 おわりに

効果的な取組を一層研究し、今後も、子どもが「自己の個性を理解し自分らしく生きる力」を育てる教育を実践していきたい。

地域の宝物を活用したキャリア教育の展開

～価値ある大人モデルの提示と南河原小文化カリキュラムの活用～

行田市立南河原小学校

校長 向井隆盛

1 はじめに

本校が立地する南河原・北河原地区は、市北端、南は星川、北は利根川に面した水田地帯である。

土地の歴史は古く、南河原地区は、平家物語の巻ノ九「生田森の合戦」に登場する河原高直・盛直兄弟を輩出した地である。学校の西方に位置する観福寺には、この二人を供養したといわれる板碑があり、国指定記念物の史跡となっている。また、国内では北海道・九州、本州では埼玉県東部だけで見られる希少な植物「キタミソウ」の自生地でもある。南河原の南部、馬見塚地区の星川に群生し、初冬から早春にかけ白い花を咲かせる。馬見塚地区では、伝統のささら獅子舞も継承されており、市指定民俗文化財となっている。北河原地区には、全国唯一の馬の背に旗竿を指した馬型埴輪や筒袖を着た人物の埴輪が出土した酒巻古墳群があり、大陸とのつながりが深い地域であったことがうかがわれる。当地の産業としては、スリッパの生産、水田稲作農業を中心に新たな商品作物も生産し、多岐にわたって様々な産業が行われている。本研究では、これらの地域の誇る文化財や産業を教育資源として捉え、児童が地域に誇りをもち、将来への明るい展望を抱けるキャリア教育を推進している。



【スリッパづくりで活躍する人々】【ささら獅子舞を受け継ぐ人々】

2 研究主題設定理由

本校は、行田市の教育理念である「温故創生」のもと、地域の歴史、文化、産業を受け継ぎ、次世代へと持続・発展させていく児童の育成を、地域から負託されており、その責務は重大であるといえる。

行田市の進める「ふるさと学習」の理念を掲げ、「南河原小文化カリキュラム」を定め、文化教育に力をいれることは、将来、地域の未来を担う児童を育てるために最適であると考えます。

本校では、これまでに、稲作、在来青大豆、在家・馬見塚のささら獅子舞、酒巻の古墳群、スリッパ、段ボール、などの産業を生かした体験的な学習をすすめてきた。これらの教育活動を一層発展させ、子供たちに、「大人になるのも楽しい」と、将来への明るい展望をもたせたいと考え、研究主題を設定した。

3 研究仮説

地域の文化財や産業の継承・発展に尽力する大人の姿を見せることで、児童は地域に誇りをもち、将来への明るい展望を抱けるようになると思われる。

4 研究内容（具体的な取組）

「南河原小文化カリキュラム」

	1学期				2学期				3学期		
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語											
生活											
社会											
理科											
図画工作											
総合的な学習の時間											
その他											

本校では、地域の文化財や産業等の学校教育への積極活用を進めている。本研究では、これらの教育資源と教育課程をしっかりと結び付け、教育効果を最大限に引き出すことを目的として「南河原小文化カリキュラム」を作成した。

縦軸に教科領域を配置し、横軸を時間軸として、学校全体の取組が一目でわかる形式となっている。他学年との内容のつながりや、教科間の連携について、全職員が共通理解を図る上で役立っている。

このカリキュラムは、毎年更新し、地域の実情等を反映させている。地域の変化に即応し、常に教育の新鮮さを保てるよう努力している。

(1) 文化を継承・発展させ地域で活躍する人々

①地域に受け継がれる「ささら獅子舞」に関わる人々
伝統の獅子舞を受け継ぐ保存会の方々にお出でいただき、獅子舞体験を実施している。

本校は、昨年度より県の伝統芸能サポーターとして、保存会との協力関係を築き、協働の基盤を整備してきた。



【獅子舞の体験】

②在来青大豆の栽培から地域の活性化に取り組む人々
地域の方に御指導いただきながら、在来種の青大豆の栽培を体験している。収穫した枝豆は、全校児童が家庭に持ち帰り、地域の恵を味わった。

大豆は、豆腐や郷土食のゼリーフライに加工し、学年の教育内容に合わせて活用している。



【枝豆の収穫】

(2) 産業を興し地域で活躍する人々

①新しい産業に挑戦する人々

総合的な学習の時間に、児童が、マンゴー生産やシイタケ栽培などの新しい産業に取り組んでいる方々の元を訪れ、工夫や努力について話を聞いたり、施設を見学したりする学習活動を行っている。特に、世界に向けて商品を出荷している話を聞くときには、児童の目が輝いているのを感じる。



【マンゴー栽培の見学】

②伝統のスリッパ生産で世界に挑戦する人々

地域で生産が盛んなスリッパを通して、地域の発展に尽力している人々から、地域の伝統産業についての思いや願いを聞いたり、工場を見学したりする学習を行っている。

活動が複数学年、複数の教科に渡るため、学習の全体がわかるよう、A4一枚に学習計画を示した。



【南河原のスリッパ】



【学びのデザイン】

(3) 地域の自然を生かしたふるさと学習



【校庭のガイドブック】



【すずかけやおや】

地域の魅力である、自然を生かして、様々な学習活動に取り組んでいる。校庭の植栽のガイドブックを作成したり、授業参観で八百屋を開き、畑で栽培した野菜を販売したりと活動は多岐にわたる。その際、地域の方々から、教員に助言をいただいたり、児童との活動を支援してもらったりした。地域の人々との交流の場を意図的に設けることで、児童は地域への愛着をもてるようになる。

(4) パネル展示「地域の宝物」

地域の宝物である文化や産業、それを支える人々の写真パネルを作成し、児童、保護者、地域の方々から一番よく見える玄関付近に展示した。



【「地域の宝物」のパネル展示】

学校を訪れる様々な人と、このパネルをもとに話をする事ができる貴重な場所となっている。

5 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 児童は、地域の魅力を発見しながら、楽しく学習に取り組み、地域への愛着をもつことができた。
- 地域で活躍している大人の姿に触れ、「自分も、将来、こんな大人になりたい」という思いをもつことができた。
- 現在の自分にもできることを探し、行動に移すことで社会参画の経験を積む機会を増やしたい。

6 おわりに

本校は、行田市の義務教育学校設置に向けた再編計画により、数年後には、近隣校とともに義務教育学校として新たなスタートに立つ。その時、自らの生まれ育った地域に誇りと愛着をもち、他の地域の児童と積極的に手を携えて、行田市の未来を担える子供たちであって欲しいという願いをもち続け、本研究を一層推進していく。

学校生活や学習方法についてのビジョンを書き込むなど自身を見つめ直す機会とした。また、中学生の吹奏楽部との交流の場も設定し、小学校での鼓笛隊の演奏練習の意識高揚につながった。



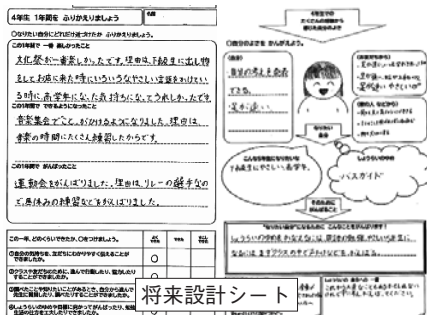
他に小学生同士でも、様々な異学年交流学習を行った。国語科において3年生が1年生にお勧めの本の読み聞かせ会を計画したり、6年生が国語「みんなと楽しく過ごすために」の学習で「1年生との交流会」を実践したりしてきた。「総合的な学習の時間」では、5年生が林間学校で学んだことを6年生に発表した。

「学級活動(3)」としては、逆に4年生が5年生に林間学校も含めて高学年に向けた心構えや準備についての質問交流学習を実施し、「なりたい自分になるために」をテーマに、キャリア・パスポートから学んだことをまとめ合った。

他にも、4年生が「学級活動(1)」で文化祭を企画し、1～3年生を招待して楽しむ様子も見られた。

(2) 「キャリア・パスポート」の効果的な活用

蓮田市では年度末の記録として、「将来設計シート」を新たに加え、各学年の実態に応じて、成長を振り返る場面を計画的に設けている。自身の資質・能力がより発揮できるよう、目標達成に向けた取組を見直し、よりよい自分の成長につなげるべく、行事の節目や異学年交流などの機会に活用場面を増やすなど工夫した。



(3) キャリア教育に係る年間指導計画の整理

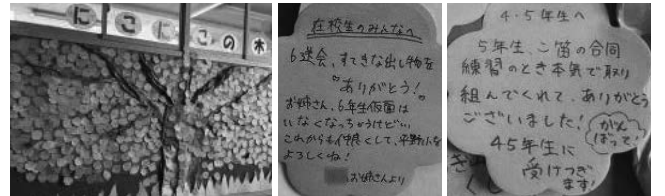
目指す児童像の具体の姿に到達できるようにするために、各教科・領域等の単元を整理し、一覧を作成し

た。年度ごとに教材や効果的な取組を加筆し、アップデートを重ねてきた。

		自分らしさを出す		伸ばせる努力をする	
		人々大いに喜ぶ	自分理解・自己表現力	課題別能力	キャリア・プランニング能力
1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36
37	38	39	40	41	42
43	44	45	46	47	48
49	50	51	52	53	54
55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66
67	68	69	70	71	72
73	74	75	76	77	78
79	80	81	82	83	84
85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96
97	98	99	100	101	102
103	104	105	106	107	108
109	110	111	112	113	114
115	116	117	118	119	120
121	122	123	124	125	126
127	128	129	130	131	132
133	134	135	136	137	138
139	140	141	142	143	144
145	146	147	148	149	150
151	152	153	154	155	156
157	158	159	160	161	162
163	164	165	166	167	168
169	170	171	172	173	174
175	176	177	178	179	180
181	182	183	184	185	186
187	188	189	190	191	192
193	194	195	196	197	198
199	200	201	202	203	204
205	206	207	208	209	210
211	212	213	214	215	216
217	218	219	220	221	222
223	224	225	226	227	228
229	230	231	232	233	234
235	236	237	238	239	240
241	242	243	244	245	246
247	248	249	250	251	252
253	254	255	256	257	258
259	260	261	262	263	264
265	266	267	268	269	270
271	272	273	274	275	276
277	278	279	280	281	282
283	284	285	286	287	288
289	290	291	292	293	294
295	296	297	298	299	300

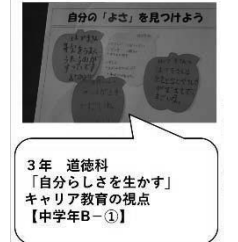
(4) 肯定的な集団形成のための環境整備

自己肯定感の高揚を図るための「にこにこの木」や各学級の成長の軌跡を追った「Step by Step」の設置など、児童を中心に据えた環境整備に努めた。



4 成果と今後の展開について

○4年間にわたって実践をしながら、「キャリア教育に係る年間指導計画」の修正・見直しを行ってきたことで、学級活動以外の教科・領域の中での「キャリア教育」についての意識づけができた。

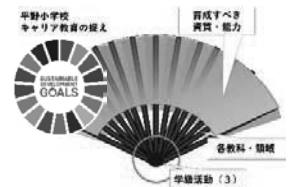


○全学年単学級の本校の特色を生かした異学年交流の活動を計画に基づいて実践することができ、発達段階 に応じ、他学年との関わり方を学ぶ機会を積極的に設けることができた。

全国学調質問紙	本校(肯定的な回答)
夢や目標を持っていますか。	◎約90% (全国:約82%)
学んだことを次の学習や実生活に結び付けて考えたり生かしたりすることができていますか。	◎約93% (全国:約83%)
地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。	▲約73% (全国:約81%)

○キャリア・パスポートの活用を、学級活動をはじめとした各教科等の学習の中で取り入れ、児童自らが、過去の自分を振り返りながら自己決定をする学習活動を行うことができた。

●地域や社会をよくするためにという意識に課題が見られるため、今後はキャリア教育を扇の要とし、SDGsの取組と連動させ、自身と地域との関わりについても考えながら、未来のよりよい平野地区を発信していけるような地域の活性化につながる探究的な学びの実現を模索していきたい。



グローバル社会で活躍できる人材の育成

～自ら考え、生徒が失敗を恐れず、挑戦し続けられる場の設定～

さいたま市立白幡中学校

校長 小倉 弘 一

1 はじめに

本校では、令和6年度から総合的な学習の時間およびキャリア教育のグランドデザインの構築と実践に取り組んでいる。キャリア教育は、主に特別活動を中心として学校教育全体を通して行われるが、教科として授業があるわけではないため、計画的・系統的・発展的な指導が行えていないという現状があった。そのような現状を踏まえ、計画的・系統的・発展的な指導が行えるように3年間のキャリア教育のカリキュラムを構築し、実践を通じて、生徒の資質・能力の育成を図ろうとする研究に取り組むことにした。

2 研究主題設定理由

「1. はじめに」に加えて、変化の激しい社会の中で、グローバル社会の中で活躍するためには、自分自身を知り、他者を知り、社会を知ることが何よりも大切である。そのためには、絶えず自ら考え続け、挑戦する気持ちを育てるためには、その機会（場・環境）をどれだけ教師側が設定することが何よりも大切だと考えている。

また、本校の生徒は、基礎学力が高く、テストの点数を高い傾向にある。一方で、学んだことを実生活に生かそうとする考え方や、自ら進んで何かをしようとする意欲は希薄であるというのが、これまで各種の学力調査等の数値での結果だけでなく、教職員が日常生活で生徒と接する中でも多く見受けられてきた。その現状も踏まえて、副題を設定した。

3 研究仮説

本研究では、3年間を通じて、計画的・系統的・発展的にキャリア教育のカリキュラムを作成し、以下のような研究仮説を設定して実践に取り組んだ。

研究仮説1

3年間を通じた、計画的・系統的・発展的なキャリア教育のカリキュラムを実施することで、自分のこれからのキャリアについての視野が広がり、多様な考え方を生かす生徒が増えるのではないかと。

研究仮説2

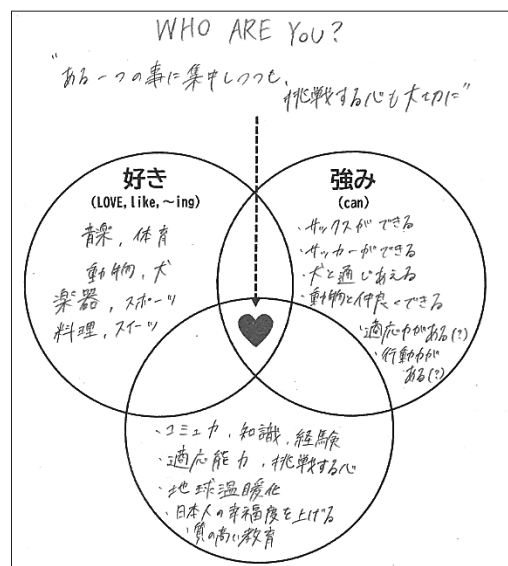
キャリア教育を「進学指導（短期的）」と「進路指導（長期的）」に明確に分けて位置づけ、それぞれに合った指導を行うことで、生徒自身が短期的な視点と長期的な視点を踏まえたバランスの取れたキャリア形成・選択のためにより影響を与えるのではないかと。

4 研究内容（具体的な取組）

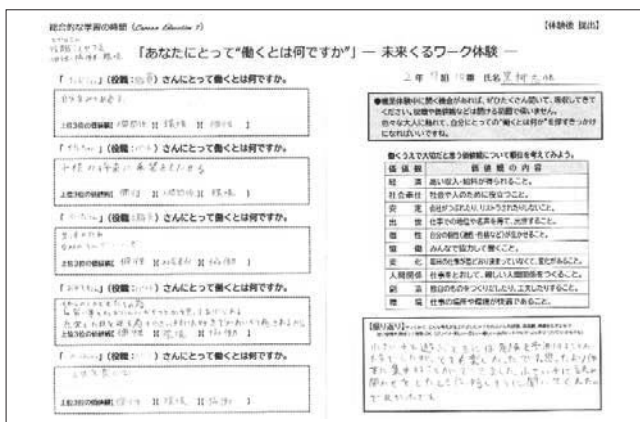
(1) 1年生「自分とは何か」

1学年では、第1ステップとして「自分とは何か」をメインにしたカリキュラムを作成した。「自分の好きと嫌い」「自分の得意と苦手」「自分の強みと弱み」「社会から求められていること」を他者と対話をしながら、最後にはこれまでの学びをベン図に整理しながら自己理解を深めていった。また多様な人材・価値観に触れる機会を増やし、地域の外部人材や保護者人材を活用した授業を実施した。例えば、自己認識を広げる中で、自分の感情をコントロールすることは非常に重要である。アンガーマネジメント協会から講師を呼び、「怒りとは何か」「怒りとどのように付き合っていけばよいか」「自分と他者にはどんな認識の違いがあるか」など、ゲームを通して実感し、自分の思考の癖や他者への働きかけを学んだ。

(2) 2年生「働くとは何か」



2 学年では、第 2 ステップとして「働くとは何か」をテーマにした。1 年生の「自分とは何か」ではベン図の 3 つ目である「世界（社会）から求められていること」についてはまだ分からない、実感が湧いていないということを認識しながら、実際に実社会での職業体験を通して、学び取っていくという計画的・系統的・発展的なカリキュラムを作成した。働くことに対する現時点の価値観から出発し、その価値観は身近なごく限られた他者やメディアなどから生み出されたものであることを知るところからスタートした。「働くこと」に対する価値観は人それぞれであり、実際に職業体験をする職場の方にインタビューすることで、働くことに対する価値観を広げ、変容する機会や場を設定した。



また、本校の卒業生（現在28歳）を複数人招待して、「卒業生と語る会」を実施した。実際に社会で働き始めて、5年ほど経っているため、自分のキャリアに対する考え方の変容や中学時代に考えていたことなどを踏まえながら、在校生と質疑などを通して、同じ環境で育ってきた先輩から、自分のキャリア選択を考える上でのヒントを得られた生徒が多く見受けられた。

(3) 3 年生「自分のこれから（進路）とは何か」

3 学年では、第 3 ステップとして「自分のこれから（進路）とは何か」をテーマにした。「進学」と「進路」は似ているようで違うことを認識することから出発した。「進学指導」では、高校の先生を招いて進学説明会を実施した。3 年生の夏休みに入る前の 7 月に行うことで、目の前の進学に対する知識や意欲を高めつつ、高校進学はあくまで手段や目標であり、「進路」である人生の目的・目指すための通過点でしかないことを明確にした。また、今年度から校長による特別授業を 3 年生全クラスで実施した。授業を通して「自分探し」のためのヒントを得ながら、受験のための校長面接ではなく、「自己理解と自己 PR」を目的とした校長面

談を 3 年生の全生徒で実施した。校長面談と連動して図書室では、図書館司書による「キャリアに関する本」の特別展示が行われ、3 年間のキャリア教育の集大成であると同時に、カリキュラム以外の活動も有機的に結び付き、学校教育全体を通して、キャリア教育を進めることができた。

(4) キャリア教育に関する講演会

本年度は、教職員に向けて、法政大学キャリアデザイン学部の児美川教授を招聘し「学校の日常に溶け込むキャリア教育」というテーマで講演を実施した。これまでのキャリア教育の目的の変遷、現在の状況、本来のキャリア教育の本質を、学術的な知見と専門家からご助言をいただき、キャリア教育を特別なもの、行事的なものにするのではなく、「いかに日常生活に溶け込ませていくのか」が重要であることをご教授いただいた。

これまでの定義（教育行政）	
キャリア教育の定義 1.0	にわか仕立て、継ぎ足し
中央教育審議会「今後の初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」（1999）	
「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」	
キャリア教育の定義 2.0	専門的知見
キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」（2004）	
「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」	
キャリア教育の定義 2.0+α	ミスマッチを落とす
キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」（2004）	
「キャリア教育とは何かを端的に言えば、児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育である」	

引用元：児美川教授の発表スライドの一部抜粋

5 成果と課題（○成果 ●課題）

- 教職員が計画的に指導を行うことができた。
- 生徒自身が自己のキャリアについて、柔軟な考え方や他者からのアドバイスに耳を傾ける姿勢が見られた。
- 外部講師等の専門家と連携することで、信頼性の高い情報を基に効果的な指導を行うことができた。
- 他の教科指導や教育課程との連携をより図っていくとさらに深まっていく。
- カリキュラムは完成しつつあるが、時数が限られているため、他の教育活動との内容と時間の精選を行う必要が出てきた。

6 おわりに

キャリア教育は、中学校段階で終わりを迎えるものではなく、生涯にわたって続くものである。生徒が「生涯にわたって生きて働く知識や見方・考え方とは何か」を常に考えながら、試行錯誤していく必要がある。

将来を見据え、主体的に学ぶ生徒の育成

～未来につなげる個別最適・協働的な学びの実現～

三郷市立前川中学校

校長 中三川 真 弓

1 はじめに

本校では、学校教育目標「自学・親愛・鍛錬」の実現に向け、「生きる力」を「食べていく力」と捉え、キャリア教育を教科横断的に展開する教育活動を推進している。

小学校高学年～中学校段階は、自分を否定したり他人と比べることを考え始めたりする時期であり、それゆえ少しの失敗で自暴自棄に陥る生徒も少なくない。そのため、「夢をもっている」とは「何になりたいかを決めている」ということだけではないことを丁寧に教え、「将来どんな場所でどんな自分でありたいか」が大切であるという視点をもたせ、なりたい自分に向かう「今の自分」を丁寧に見つめさせている。

特に力を入れているのは、今と将来を結び付ける具体の学び（進路学習）である。予測不可能といわれる不安定な時代にあっても、明るい未来を信じずして教育は成り立たない。生徒には、自身の明るい将来を想像できるような機会を存分に与えたい。

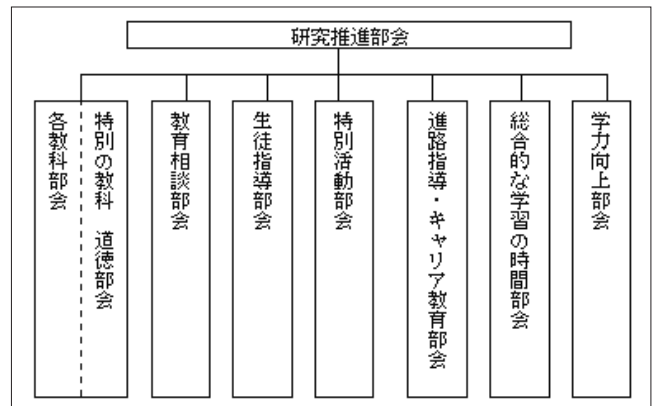
失敗しないように大人が先手を打つのではなく、失敗した時には生徒自身に悩ませ、考えさせ、納得解を見出させて苦境を乗り越えられるよう“しかける”、それを教師と保護者が一緒に支える、そうしたキャリア教育を目指している。

2 生徒の実態

学力に関しては、埼玉県学力・学習状況調査において上位25%及び50%のグループでほとんど学力の伸びが見られなかったという大きな課題を抱える。

一方で、質問調査からは、平均と比して自己肯定感が高い傾向にあることや、教員に対する信頼が高いこと等、学校生活に概ね満足している生徒が多いことがわかっている。これは、不登校の状況にある生徒が令和5年度：22件→令和6年度：15件→令和7年度：10件（12月1日現在）と年を経るごとに減少している実態にも表れている。そうした強みを生かして弱みを克服すべく方策こそが、本校の推進するキャリア教育である。それが生徒たちの「学力向上」と「将来の幸せ」の支えとなることを信じている。

3 研究組織



4 研究仮説

先を見据えて計画を立て、実践する力を身につければ、目標に向けてのモチベーションが高まり、主体的に授業や家庭学習に励むことができると考えた。

5 具体的な取組

(1) フォーサイト手帳（手帳型生活ノート）の導入

- ①目標設定から行動計画、振り返りまでを書き込むことで、PDCAサイクルを回す力を養う。
- ②週や日の目標から逆算して、やるべきことを具体的に書き込むことで計画的に物事を進める習慣を身に付けさせる。家庭学習の内容については、その日に学んだ単元を復習する手段としてスタディサプリ（併せて本年度導入のオンライン学習サービス）の活用を推奨している。
- ③振り返りで努力の成果を客観的に把握させる。
- ④やるべきこと・やりたいことを具体的に記入し、時間を管理する意識と実行力を向上させる。

7 下校 ↓	15	Good!	15
16	16		16
17 歴史ワーク	17	帰宅	17
18 数ワーク	18		18 ご飯食べ行く
19 ご飯	19	ご飯	19
20 お風呂	20	風呂	20
21 地理ワーク	21	スマホア理	21
22 国ワーク	22	スマホア理	22
23 ねる	23		23
24	24		24

(2) 各学年の「進路学習」の取組例

① 1 学年「キャリアラボ・職業調べ」

「自己理解・他者理解」をテーマにした学習である。今回は「キャリアラボ（能力と性格の2つの側面を測定）」による結果を教材とした。

第1時 16タイプ診断を用いて、自分や他者の性格について考える。

第2時 将来について、診断結果を参考にしながら考えを広げる。イメージマップを活用し、グループで話し合う。

第3時 診断結果をもとに自己分析を行う。

第4時 自己分析をもとに、今後の中学校生活について考える。



第5時 興味のある職業についてその仕事内容や自分の考えをまとめ、発表資料を作成する。

第6時 職業調べ発表会を行う。

② 2 学年「自分を知って、仕事を知る」

職業適性を知るだけでなく「自分の興味」と結び付けた。仕事とは収入を得ることのみならず、やりがいを伴ってよりよく生きるための大切な営みであることを捉えさせるようにした。

第1時 VRTカードを用いて自身の職業適性を知り、自分と他者の特性の違いに触れる。

第2時 自分の興味の先にある職業を見渡す。



12月 「みらいの描き方講座～ジブンを知る・深める（おおぞら高等学校講演事業）」を職場体験学習に係る一連のまとめとする。

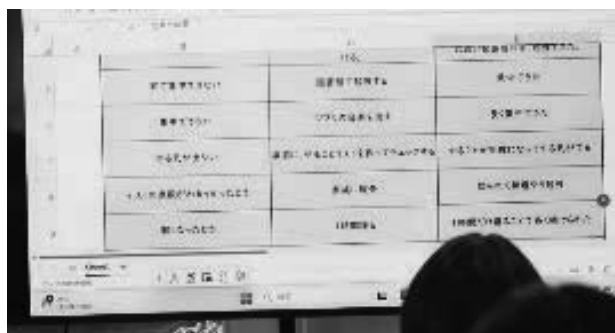
③ 3 学年「学習方法改善計画」

計画は、立てた通りに進めることよりも、変更や調整が必要なものであることに焦点をあてた。受験への不安を「よりよい方法で学習する意欲」に変えた生徒も多かった。

第1時 学習に関する悩みを共有し、解決策を考える（ピア・カウンセリング）。

第2時 フォーサイト手帳に記入した自分の1週間の学習予定を見て、取組状況を検証する。

第3時 計画と実践に係る自身の課題を明らかにし中間テストの学習計画を作成する。



第4時 改善した学習計画をもとに中間テストに向けた取組と成果を振り返る。

6 成果と課題

「将来を見据え」というテーマを捉えた進路学習の実践により、生徒の抱く夢や希望を膨らませ、健全な将来観を育てることができていると実感している。こうした進路学習に臨む生徒たちの表情は明るく輝き、そして凛々しい。そうした表情に出会えたことから、取組の成果を得たと捉えている。

課題は、こうした成果を「自立」に昇華させることである。進路学習の実践を経て生徒たちの将来を見通したとき、本校のキャリア教育においては、教科横断的な展開にやや不足の感がある。カリキュラム・マネジメントより、「フォーサイト手帳×スタディサプリ」の活用や、将来を見据える活動を全教科・領域等の年間指導計画に明確に位置づけ、学力向上策と結び付けていく。本校生徒の強みをもって弱みを打ち消す取組を継続する。

地域のイベントや福祉施設でのちんどんパフォーマンス公演を通して、 地域社会に貢献できる人材の育成に努める ～地域の力を借りた生徒育成の協力体制を図る～

埼玉県立幸手桜高等学校

校長 矢 島 誠

1 はじめに

(1) 実施団体名

幸手桜高等学校演劇部

参加人数 部員14名

(2) ボランティア活動について

本校では、卒業後の進路が進学・就職など多岐にわたっており、その多彩な進路実現を目指して、「心身共に健全にして国家及び社会に有為なる人材を育成する」ことが、教育目標となっている。そこで、その目標を具現化するためボランティア公演を行い、人間性や社会性の育成を活動の狙いと定め、平成18年度より、その活動を始めている。

活動当初は施設において、劇「鶴の恩返し」を公演し、里山のイメージや、囲炉裏の部屋などを再現する舞台設定に、多くの高齢者からの感謝の言葉をいただいた。その後「もっと多くの高齢者に昔を懐かしんでもらいたい」という考えから、ちんどんパフォーマンスとしての舞台公演（平成19年度から）を行っている。

活動の1年目は年間で数回程度の依頼であったが、その後マスコミにも取り上げられるようになり、コロナ禍以前は年間57回を数えるほどに成長した。

令和に入りコロナ禍の影響で活動がほぼできない状態が続いていたが、令和5年度から少しずつ地域イベントが再開し、令和6年度からは施設公演（福祉施設等）も再開している。

2 令和7年度活動内容

活動日		主催	内容
4月	29日	加須市	騎西藤祭り
5月	25日	国際保健医療大学	文化祭

6月	21日	幸手権現堂	あじさい祭り
8月	5日	ヒューマンサポート幸手南	施設公演
	6日	フローラ幸手	施設公演
	13日	行田市	納涼祭
	17日	白岡おおり	施設公演
	24日	杉戸市	杉戸納涼ゆかた祭り
	24日	杉の里	施設納涼祭
	24日	杉戸フレッシュタウン	杉戸フレッシュタウン中央公園
31日	白岡ずいせん長寿村	納涼祭	

活動日		主催	内容
8月	31日	白岡あおい	施設納涼祭
9月	15日	みどりの森	施設公演
10月	5日	幸手市権現堂管理事務所	曼殊沙華祭り
	18日	幸手市東武団地	東武団地祭り
	26日	幸手市	幸手市市民祭り
11月	2日	幸手市	福祉まつり
	2日	幸手市	幸手市文化祭
	2日	平野の里あやめ寮	あやめ祭り
	14日	特養ホーム幸手の里	施設公演
12月	13日	メディカルフローラ久喜	施設公演
	21日	しらさぎ苑	施設公演
1月		愛の家グループホーム久喜	施設公演
		デイサービスコア	施設公演

3 公演内容及び注意事項

(1) 地域イベントの公演

会場入りには大きな声を出し、挨拶をする
各イベント時間に合わせて、数回ちどんパフォーマンスを実施し、どんな時でも笑顔を忘れない
場合によっては時間を決めないライブ的なパフォーマンスを実施する

(2) 施設公演

会場入りには元気な挨拶を心掛ける
施設利用者とのふれあいを心掛け、その日の出会いを大切にする
公演は施設利用者の体調を気遣い、30～40分程度とし、疲れていても笑顔を忘れない

4 成果と課題

平成18年度から始めた演劇部のボランティア活動であるが、今では多くの施設や幼稚園、そして地域のイベントなどで公演活動をしている。コロナ禍以前においては、年間50公演以上実施することができるようになり、その活動内容も広く一般に知られる存在となった。公演活動の目的を「ふれあい」や「コミュニケーション」などといった人間的な育成と「規律」や「礼儀・作法」など、社会人としてのマナーの育成の2つとし、最近では生徒間で「ボランティア活動の意義」が確実に伝わり、公演の事前打ち合わせや公演後の反省会を通して、高齢者や園児、地域の方々との接し方や社会的マナー等について、今後の検討課題と解決策などを生徒間で話し合うことができるようになった。このことから、人間的にも確実に成長していることが実感できる。コロナ禍の影響で、4年間公演活動が縮小されたが、令和5年度から地域イベントや施設公演が再開され、公演依頼の数も増加している。また、令和元年に幸手市から「しあわせ応援大使」を拜命し、現在も活動の中心と位置付けており、今後も幸手市と協力しながら地域のPR活動を積極的に進めている。

<平成18年初代口上>



令和7年8月31日に、純粋なボランティア公演の開催が累計500回となり、数字の重みと共に、今まで活動してきた歴代の部員のありがたさを実感している。
(センター踊り(口上)は初代から始まり、現在12代目である)

5 おわりに

19年にわたる長期の活動は、今振り返ればここまで続くとは思わなかった。幸手商業に着任し、演劇部の顧問として「実は部活の活動として演劇以外にやりたいことがあるんだけど、どうだろうか？」の一言と、部員の「なんですか？なんでも言ってください」の言葉で始まった活動は、部員と顧問の熱い思いと行動力で成り立っている。

<令和7年12代目口上>



ボランティア活動は、単発的に終わるものではなく、長期にわたって活動することが、生徒の成長と地域の連携をより深めることができると確信している。これまでの活動で培った体験を踏まえ、生徒がさらに成長するよう、今後もボランティア活動の実践に全力で取り組む。

5 防災教育支援

小学校

- 1 「知る・備える・守る」令和の体験型防災教育プログラムの導入と防災施設設備の充実 ……蕨市立西小学校… 126
- 2 児童・保護者・地域・職員が「安心・安全」と思える防災教育……毛呂山町立毛呂山小学校… 128
- 3 地域とともに育む防災の力
～自他の命を守る判断力と行動力の育成～……白岡市立白岡東小学校… 130
- 4 防災の意識を高める防災教育
～水害の危険が大きい学校における、命を守り抜く態度の育成～……越谷市立新方小学校… 132

中学校

- 1 生徒主体の防災教育
～地域と連携、地域に還元できる取組を目指して～……さいたま市立原山中学校… 134
- 2 学校・家庭・地域で連携しての防災への取組
～安心・安全な学校づくりの推進～……川口市立里中学校… 136

高等学校

- 1 地域防災
～防災とPTA 私たちにできること～ ……埼玉県立大宮武蔵野高等学校… 138

「知る・備える・守る」 令和の体験型防災教育プログラムの導入と防災施設設備の充実

蕨市立西小学校

校長 近藤 大志

1 はじめに

本校は、昭和27年に創立し、今年で77周年を迎えた。そして、学級数20（特別支援2学級含む）、全校児童数480名の中規模校である。教育目標に「よく考え工夫する子 仲よく助け合う子 明るく強い子」を掲げ、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の育成に教職員が一丸となって取り組んでいる。

また、「放課後子ども教室」やPTAサポーター制度により、保護者や地域の方々の支援をいただきながら、地域とともに歩む教育活動を推進している。

2 主題設定の理由

本校では、これまでも児童や教職員への避難訓練等を通じた防災教育を実施してきた。昨今、自然災害の大規模化や退避・待機指示が出される事件（人災）が起こる中、訓練方法の刷新や災害規模を想定した最新の防災教育計画の必要感が増している。災害時に身を守るためには、時代に合った防災の知識を身に付け、適切に対応できる力を育成することが重要である。また、学校は地域の指定緊急避難場所となっているため、乳児から後期高齢者、障がい者まで幅広い層の地域住民を受け入れられる施設設備の充実も求められている。以上のことから、本主題を設定した。

3 研究計画（2カ年計画）

（1）研究の柱

- ①防災教育計画（令和版）の作成
- ②施設設備の充実

（2）1年目（本年度）

- 1学期 ⇒既存の施設・設備や備品の確認点検
避難訓練実施後の課題発見と改善案作成
引き渡し訓練実施後の課題発見と改善案作成
教職員研修の実施
- 夏季休業中⇒地域住民との防災訓練

2学期 ⇒最新の防災訓練内容に関する
情報収集

防災教育に関する授業実践

蕨市の「総合防災演習」に参加

3学期 ⇒防災教育計画の作成（次年度検証のため、暫定版）

2年目の具体的な計画立案

4 研究のあゆみ（1年目）

（1）施設設備点検と改善

①体育館⇄校舎通路



水害時に体育館から校舎への垂直避難経路である。 ▲滑りやすく、転倒の危険性

▲階段にスロープがなく、車いすや障がい者の移動が困難



すのこを撤去し、有孔の滑り止めマットを敷設した。階段には、取り外しが容易な簡易式スロープを設置する。

②窓やドアのガラス（避難経路安全確保）

▲割れたガラス破片による二次被害

⇒ 透明アクリル板への置き換え

※1 避難経路である教室ドアのガラスを優先的に交換する。

※2 コロナ禍対応で未使用だったアクリル板を再利用し、予算削減

③その他（点検の観点一覧）

- 落下・転倒物対策
- 各特別教室の危険物管理
- ブロック塀・フェンス
- 屋根・雨どい
- 倒木・落枝の危険 等、多岐に渡る。

(2) 地震避難訓練計画の改善

「その場で最適な行動を判断できる力」の育成

= 自力避難、自力安全確保

(▲課題 ⇒対応)

▲放送設備やその他通信手段が使用不可能

⇒各階の廊下に「伝達員」の役割分担。

トランシーバーの設置。

校庭への誘導開始は、屋外に設置した防災ホイッスル吹鳴が合図。

避難開始タイミングは、担任の判断。(即時安全行動の徹底、判断基準の校内研修実施)。

▲教師がいないときに地震発生した場合

⇒廊下・トイレ・階段での訓練

校庭で遊んでいる時の訓練

▲机下避難が形骸化

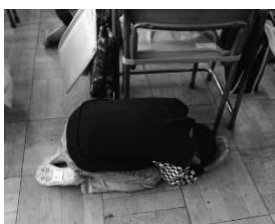
⇒教室の「安全地帯マップ」作成

危険箇所と安全箇所の確認

児童自身が“場面ごとに最適行動を判断する力”が鍵。

(3) 体験型防災教育授業

①命を守る授業



「だんごむし」のポーズ



「さる」のポーズ

②紙食器づくり（コップ型・箱型）

③消火器使用訓練（水消火器）



④毛布を使用した担架体験

(4) 地域住民との防災訓練



市の防災士を招聘し、学校（小中連携型）と地域住民との防災訓練を実施。役割分担、初期対応について協議と対応事項を確認した。

5 まとめ

これまでも災害対応訓練は、どの学校でも実施してきた。しかし、実際に災害に遭った地域の実態から、防災訓練だけでなく、防災教育そのものを見直す動きが全国的に広がってきている。本校でも、これまでの訓練や施設設備を点検し、防災教育計画を再構築することが課題であった。その課題解決を試みているこの研究の第一歩は、教職員や児童の防災意識を高め、必要感を感じさせることである。そのために、知識だけでなく実感を伴わせる「体験型」を重要視した。

1年目を取り組んでいる中で、教育課程として訓練や防災教育授業を実施できるプログラム作りは着実に進められている。しかし、施設設備の改善は、学校だけで実施することは相当厳しい状況である。本校で実施したこの研究を基に、行政への働きかけを継続して行うことが課題である。

次年度に向けて、「地震・火災・水害」等、各種別を実施した実践について、「どの災害でも共通する行動」や「災害種別に必要な行動」に分類し、系統立てたプログラムにまとめていきたい。

児童・保護者・地域・職員が「安心・安全」と思える防災教育

毛呂山町立毛呂山小学校

校長 小野塚 祐 一

1 はじめに

本校は、毛呂山尋常高等小学校を前身とする歴史と伝統ある小学校である。毛呂山町のほぼ中央にある臥竜山（がりゅうざん）のふもとに位置し、自然環境にも社会環境にも恵まれた地域にある学校である。毎年4・5月には、保護者・地域の皆様のご協力をいただき、校庭に鯉のぼりを上げている。子供たちは、明るく素直で、前向きである。教職員が一丸となって、「みんなが笑顔の毛呂山小」を目指し、教育活動を進めているところである。

なお、本校は、令和元年5月に毛呂山中学校区学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールの取組を始めた。令和3年11月には小中一貫教育連絡橋「もろっ子橋」の開通式を行い、本校の校地に隣接している毛呂山町立毛呂山中学校との連携を深めている。地域とともにある学校として、本の読み聞かせやすすくタイム（体育的活動）、田植え・稲刈りをはじめ、保護者・地域の方々にたくさんのご協力をいただきながら、学校教育目標「明るく 強く 正しく」に向け、さまざまな教育活動に取り組んでいる。

2 研究題目の設定理由

毛呂山町では、各中学校区の特性を生かしながら、町内全小・中学校で小中一貫教育を実施している。また、小中一貫教育の更なる充実と、児童生徒のより良い教育環境を整備するために、毛呂山中学校区では、施設隣接型小中一貫校を、川角中学校では、施設一体型小中一貫校を開校することを予定している。

本校では、学校再編に向けた各計画の見直しが始まっている。そこで、防災教育についても本校だけで計画するのではなく、小中や、地域との連携を含めた活動を取り入れた計画を実践していく必要がある。そこで、本校が「誰にとっても安心・安全な学校であること」と「学校・保護者・地域が一つになって行う防災教育を行うこと」が重要であると考え、本研究主題を設定した。

3 具体的な取組

(1) 効果的な訓練の実施

① 巨大地震を想定した避難訓練



地震発生時の基本的な行動を理解し身に付ける

② 不審者侵入を想定した避難訓練



教室にバリケードをつくり、身を守る

(2) 外部機関と連携した取組

① 交通安全教室（西入間警察署・交通指導員との連携）

<1・2年生：安全な歩行>





安全な歩行の仕方 信号のある交差点の渡り方



中学生が教室までお迎えに来て一緒に下校

< 3～6年生：安全な自転車乗り >



正しい自転車の乗り方（一時停止、交差点など）

② 教職員研修（西入間広域消防組合による救急救命講習会）



心肺蘇生法、AEDの使い方

(3) 小中連携（小中一斉下校）



(4) 危機管理マニュアルの見直しと共有



(5) 校内環境整備

安全点検（毎月1回の定期点検）、修繕箇所報告

項目	点検内容	点検結果	担当者	実施日
1. 廊下	床の清掃、ゴミの回収			
2. 廊下	壁紙の剥がれ、破損			
3. 廊下	照明器具の点検			
4. 廊下	換気扇の点検			
5. 廊下	ドアの点検			
6. 廊下	階段の点検			
7. 廊下	エレベーターの点検			
8. 廊下	非常階段の点検			
9. 廊下	非常出口の点検			
10. 廊下	非常用照明の点検			
11. 廊下	非常用消火器の点検			
12. 廊下	非常用避難経路の点検			
13. 廊下	非常用避難経路の点検			
14. 廊下	非常用避難経路の点検			
15. 廊下	非常用避難経路の点検			
16. 廊下	非常用避難経路の点検			
17. 廊下	非常用避難経路の点検			
18. 廊下	非常用避難経路の点検			
19. 廊下	非常用避難経路の点検			
20. 廊下	非常用避難経路の点検			

項目	点検内容	点検結果	担当者	実施日
1. 廊下	床の清掃、ゴミの回収			
2. 廊下	壁紙の剥がれ、破損			
3. 廊下	照明器具の点検			
4. 廊下	換気扇の点検			
5. 廊下	ドアの点検			
6. 廊下	階段の点検			
7. 廊下	エレベーターの点検			
8. 廊下	非常階段の点検			
9. 廊下	非常出口の点検			
10. 廊下	非常用照明の点検			
11. 廊下	非常用消火器の点検			
12. 廊下	非常用避難経路の点検			
13. 廊下	非常用避難経路の点検			
14. 廊下	非常用避難経路の点検			
15. 廊下	非常用避難経路の点検			
16. 廊下	非常用避難経路の点検			
17. 廊下	非常用避難経路の点検			
18. 廊下	非常用避難経路の点検			
19. 廊下	非常用避難経路の点検			
20. 廊下	非常用避難経路の点検			

4 成果と課題

(1) 成果

安心・安全な学校づくりを推進するために、教職員が共通理解・共通行動を図ることを徹底するとともに、常に最悪を想定しながら対応することを心掛けることで、教職員の危機管理意識を高めることができた。また、計画の段階では議論しながらより良い防災教育について考えることができた。

(2) 課題

災害・事故対応については、児童に「自分ごと」として捉えさせることが重要である。「自分ごと」としてしっかり行動することができるよう、指導を工夫するとともに、地域や関係機関等と連携を強めていく。

地域とともに育む防災の力

～自他の命を守る判断力と行動力の育成～

白岡市立白岡東小学校

校長 青木 春乃

1 はじめに

本校は、JR 新白岡駅の東約650メートルに位置し、駅を利用して東京方面へ通勤・通学する人々のベッドタウンとして発展している地域にある。また、圏央道白岡菖蒲インターチェンジへのアクセスも良好で、広域的な交通利便性に恵まれている。

本校は、白岡町で6番目の小学校として平成7年4月1日に開校し、児童数562名でスタートした。平成24年10月1日の市制施行に伴い、校名を「白岡市立白岡東小学校」と改め、令和7年度で開校31年目を迎える。現在の児童数は484名である。

学校教育目標に「思いやりのある子」「進んで学ぶ子」「たくましい子」を掲げ、その実現に向けて、目指す学校像を「学びをつなげる、人がつながる学校」とし、日々の教育活動を推進している。

2 研究の目的

本校では、災害時に自他の命を守るために必要な判断力と行動力を育成することを目指している。そのために、日常生活の中で防災を意識し、危険を予測して行動できる児童を育てるとともに、地域と連携した実践的な防災教育を推進し、「共に助け合う心」を育むことを重視している。さらに、各種訓練の実施後にはふり返りの時間を設け、「やらされる訓練」から「自ら考え行動する防災教育」へと転換を図っている。

3 児童の実態

全国学力・学習状況調査の質問紙では、「課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の項目で約8割が肯定的に回答している一方、「人が困っているときに進んで助けていますか」の項目では県平均を9ポイント下回っている。また、校内での観察や担任からの聞き取りでは、危険を察知する力や避難行動の見通しに大きな個人差があることが分かった。指示があれば素早く動ける児童が多い反面、状況判断や友達への声掛けには迷う場面が見られる。特に低学年では危険を具体的に想像しにくく、「言われたこと」だけを形式的に行動する傾向がある。また、高学年でも場面によっては判断が遅れたり周囲への配慮が十分でなかったりする姿が見られる。こうした実態

から、判断力に加えて他者を思いやり支援する態度を育てるようにする。

4 年間計画

月	主な内容	関連機関等
4月	地震・引き渡し訓練	PTA・保護者
5月	通学路点検、交通安全教室（1・4年）	PTA・学校運営協議会・見守り隊・警察等
6月	教職員救命講習	消防署指導
8月	不審者対応訓練	警察
9月	地震・火災避難訓練	
10月	竜巻避難訓練	
12月	安全標語月間（募集・掲示・発信）	家庭・地域
1月	6年生消火訓練	消防署・学校運営協議会
2月	避難訓練（煙体験）	消防署
通年	安全点検・改善・共有	教職員全体

5 具体的な取組

（1）年間を通じた避難訓練

地震・火災・出火・竜巻など多様な災害を想定して訓練を実施した。各学期の訓練後には児童自身によるふり返りを行い、避難経路や行動の



課題を整理した。特に「どんな時に、どんな判断をすればよいか」を考える時間を設け、形式的な訓練から主体的な学びへと転換を図った。



10月には竜巻避難訓練を行い、気象警報発令時の行動を確認した。校舎内で安全な場所を選択し、机や壁際での身の守り方を体験的に学んだ。

(2) 地域と行う通学路点検

5月にPTA、子ども見守り隊、学校運営協議会と協力して通学路点検を実施した。歩道の狭い箇所や見通しの悪い交差点などを重点的に確認した。危険箇所は写真付きで記録し、学校運営協議会で共有するとともに、市や教育委員会へ報告した。また、児童自身も登校時に安全意識をもつようになり、通学班での声かけが増えた。



(3) 教職員救命講習

消防署の署員を招き、教職員を対象に救命講習を実施した。心肺蘇生法、AEDの使用など、一次救命処置の実技を中心に学習した。実際にマネキンを用いて胸骨圧迫やAEDパッド装着を体験するとともに、救急車到着までの一連の流れを確認した。

参加した職員からは、「緊張感をもって練習することで、非常時の判断力が鍛えられた」「実際の場面で自分が動けるイメージがついた」といった声が上がリ、命を守る教育の責任を改めて自覚する機会となった。



(4) 職員による不審者対応訓練

教職員を対象に、不審者が校内に侵入したという想定で訓練を実施。職員全体で、通報・児童避難・防衛・確保の流れを確認した。さらに、校舎内での立ち回り方、警察到着までの連携、校外への情報発信の流れなども実践した。話し合いの中で、「緊張感の中でも冷静に行動する難しさ」や「チームで連携する重要性」が共有された。

この取組を通して、職員の危機判断力と即応力が確実に向上し、「児童の安全を最優先に行動する意識」がより明確になった。



(5) 安全標語月間(12月)

県の交通事故防止運動の期間に合わせて、家庭から安全標語を募集した。多くの作品が応募され、交通安全に対する意識の高さが伝わってきた。応募された作品を学校だよりに掲載したり、校内に掲示したりと、普段から標語を目にする機会を増やすことで安全意識の啓発に繋がった。



(6) 消火訓練(1月)

学校運営協議会の協力の下、6年生が消火器の操作を体験した。消火器を初めて使う児童が多く、慣れない中にも緊張感をもって活動に取り組んだ。消火体験を通じて責任感と自信を高め、「緊急の時は、自分も誰かを助けられるようになりたい。」との感想が聞かれた。



6 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 児童が訓練後に自ら行動を振り返り、次に生かす意識をもつようになった。
- PTA・見守り隊・警察・消防との連携が強化され、地域と一体となった防災教育が定着した。
- 教職員の救命・危機対応力が向上し、非常時に迅速で的確な判断ができる体制が整った。
- 防災教育が「特別な行事」から「日常の学び」へと発展している。
- 地域協力が特定の方に偏る傾向があり、より広い参加を促す仕組みが必要である。
- 中・低学年にも発達段階に応じた防災活動を展開し、全校的な防災意識の定着を図りたい。
- 防災教育を学級経営や授業と結びつけ、児童の「行動化」へとつなげていく工夫よりが求められる。

防災の意識を高める防災教育

～水害の危険が大きい学校における、命を守り抜く態度の育成～

越谷市立新方小学校

校長 菅野 敦子

1 研究題目の設定理由

本校の学区は、大落古利根川と新方川に挟まれた地区であり、過去に何度も大きな水害に見舞われている地域である。

国や県のレベルの話としても、中川・綾瀬川流域では、令和5年6月の大雨（台風第2号）により甚大な浸水被害が発生し受けて、早期に浸水被害の軽減を図るため、「中川・綾瀬川緊急流域治水プロジェクト」をとりまとめ、さまざまな取組を進めている。このプロジェクトの一環として、新方川流域において、埼玉県では新方川の洪水調節を目的とした新規調節池の整備を予定している。また、越谷市では内水被害軽減を目的とした新規雨水貯留施設の整備を予定している。浸水被害対策を効果的・効率的に進めるため、県の新規調節池整備と市の新規雨水貯留施設整備を共同で実施することが検討されている。

公助の面では、対策が進んできているが、実際災害が起きた時には、自分の命を守り抜くためには自助、共助が最も大切になる。毎日川沿いを歩いて登下校をしている児童にとって、水害は身近なものである。防災について、市や学校行事で取り組んでいるもの以外にも、総合的な学習の時間等を検討し、特色ある防災教育を設定し、防災を意識を高め、命を守りぬく態度を育成することが本校児童には必要不可欠と考え、研究題目を設定した。

2 研究実践・取組内容

(1) 越谷市の取組

越谷市独自の取組として「越谷市学校防災の日」を実施している。学校において震災等が発生した際、児童生徒の安全を確保するとともに、安全かつ円滑に保護者に引き渡すもしくは帰宅させることを目的としている。そのため、児童生徒の防災意識を高揚させるとともに、災害時における小中連携体制を構築している。

また、自助・共助の視点から、中学生が小学生の引き取り代理人となれることを想定し実施している。毎年1学期中に「越



中学生による引き取り

谷市学校防災の日」を設定し、市内一斉小中合同の避難訓練、引渡し訓練を実施している。

(令和7年度は5月2日実施)

(2) 学校行事（避難訓練）

「各災害の危険を理解させ、進んで約束を守り、安全に行動できる態度・能力・習慣を養う」ことや「児童一人ひとりが自分の置かれた状況で危険を避ける判断をし、安全に避難場所まで移動する」ことを目標として避難訓練を行っている。通常・ショート・関係機関連携・保護者参加と、規模や時間帯を変えて避難訓練を行い、命を守り抜く態度の育成に取り組んでいる。

〈令和7年度の実績例〉

- ・地震及び火災避難訓練
- ・地震避難訓練及び引き渡し訓練
- ・竜巻避難訓練
- ・シェイクアウト訓練
- ・不審者対応避難訓練



竜巻避難訓練

(3) 総合的な学習の時間

過年度より、3年生と6年生の総合的な学習において、防災教育をテーマの一つとして設定し、取組を行っている。

〈実践例〉

ア 河川氾濫に備えよう

- ・大吉調節池（学区）、大相模調節地（越谷市）など、河川整備事業により水害の被害が減っていることを知る。
- ・河川事業には、県の予算だけでなく、国からの補助金も使われていることを知る。
- ・新方小学校周辺、越谷市周辺の河川の一と名称を調べる。
- ・利根川が氾濫した場合の最大浸水深をハザードマップを活用して調べる。
- ・マイタイムラインを作成する。
- ・グループでの伝え合いを通して、よりよいタイムラインを作成する。
- ・修学旅行等で自分たちだけで活動をしている際に被災した時、最善を尽くし、率先避難者となれるような心構えができるよう意識の醸成を図る。

イ 災害時、災害後に役立つ物を調べよう

- ・大きな被害を出した自然災害について知る。（東日本大震災。能登半島地震など）
- ・大きな災害が発生したとき、避難所へ避難する必要がある出てくることを知る。
- ・自宅から徒歩で近くの避難所へ避難する場合、避難所へ持って行きたい物を思いつく限り考え、交流し合う。
- ・班ごとに、持って行きたい物を紹介する。
- ・各班が発表した表の中から、持って行く物を9つ選ばせ、個人でダイヤモンドランキングにまとめる。
- ・どのようなランキングになったか、班で話し合う。その際、どのような理由で順位付けをしたのか、理由も説明する。
- ・防災についての参考資料等の調べ学習を通して、家に置いておくといよい防災グッズ10個を紹介し、それぞれのグッズがどのように役に立つのかを調べる。
- ・【おうちのそなえチェックシート】を宿題として持ち帰らせ、家庭で用意してある物や足りない物を確認させると同時に、家庭を巻き込んで防災意識を高める。

ウ 関係機関との連携

- ・避難訓練及び地震体験（地震対策）【越谷市消防署】
- ・中川、綾瀬川等流域の河川整備事業について（風水害対策）【総合治水事務所：県政出前講座】
- ・地震に強い家を作ろう（地震対策）【建設安全課：県政出前講座】



地震体験



地震に強い家を作ろう

3 成果と課題

成果としては、計画的、継続的な避難訓練によって、多様な災害に対応した避難行動が適切にとることができるようになっていたことが挙げられる。また、総合的な学習の時間での学びを通して、児童の防災意識の高まりが家庭へも影響し、PTAからも防災に特化した取り組み（防災フェスタのような催し物）を土曜公開授業終了後の時間を活用してPTA主催で行ってみたいという意見が出されている。このような、学校の取組が家庭、地域に広がっていることも大きな成果であると考えられる。

課題としては、防災教育については3年生と6年生の総合的な学習の時間が中心となるが、調べたこと、体験したことの発表会を全校規模で複数回行ったたり、活動における成果物（安全マップ）を下学年の廊下等に掲示したりすることで、各学年が防災の意識を高めていくことが考えられる。同時に、学年が上がると自助・共助について考える必要があるということや1年生の時点から意識できるように、全校集会で計画的に講話を入れるなど検討する必要がある。

また、家庭や地域を巻き込んでの取組についてもさらに発展させることで、児童の意識をより高めることができると考える。

生徒主体の防災教育

～地域と連携、地域に還元できる取組を目指して～

さいたま市立原山中学校

校長 遠藤 敏恵

1 はじめに

本校は1947年（昭和22年）に浦和市立調宮（つきのみや）中学校として開校し、1949年（昭和24年）に現在の土地に移り、浦和市立原山中学校と改称した。

学校教育目標は、「抱け 輝け 抱け」であり、「夢や希望を持つ生徒・思いやりの気持ちを持つ生徒」「自分のよさを伸ばす生徒・心身ともに健康な生徒」「可能性を信じ挑戦する生徒・広い視野を持ち行動する生徒」の育成に取り組んでいる。

学校経営方針のひとつには「家庭・地域と一体になった学校」を掲げ、本年度の重点・努力点として安全教育の推進を挙げている。

2 生徒の実態

2011年の東日本大震災から14年が経ち、今年度入学した新一年生は震災後に生まれた世代である。2、3年生も生まれてはいたものの、震災の記憶はない。一方で、社会科等の授業や総合の時間の発表を通して2024年の能登半島地震等、自然災害には強い関心を持っていることがわかる。そのことを踏まえ、防災教育を充実させることで、生徒の防災意識をより一層高め、生徒が積極的に防災へ取り組む姿勢を育てることを目指す。

3 地域との関わり

本校は伝統ある学校で、地域から暖かく見守られ、支えられている学校である。生徒もそのことを肌で感

じており、自分たちから地域に貢献したいという気持ちを強く持っている。地域から学校への支援に加え、学校からの地域への貢献をより活性化にすることで、原山中学校の教育活動をさらに充実させることができると考える。

その一環として、生徒の自発的な地域ボランティアや地域行事、地域の避難所設営訓練への参加意欲の醸成に取り組んでいる。地域住民と協働する場に積極的に参加することで、生徒は地域に貢献する喜びや責任感を実感し、地域社会を支える一員としての自覚をはぐくんでいる。

4 具体的な取り組み

生徒の実態と地域との関わりを踏まえ、生徒自身が主体的に防災に取り組む姿勢をはぐくむため、以下の実践を進めている。

（1）地域住民との共助訓練

- ・地域と中学生の関係性を強化し、災害時に備える取組である。
- ・本校学区は戸建ての家が多く、地域には昔から住んでいる高齢者も多い。
- ・地域の方と生徒で、住居の周辺の地形確認・避難所となる原山中までの動線・家庭の防災対策等、防災について情報交換等を行う。
- ・地域の方とやり取りすることで生徒の防災意識を高める。

地域の方と生徒と一緒に活動・情報交換を行うことで、生徒の防災意識と有事の際には地域と助け合う意識を高めることにつながっている。



(2) 避難所設営訓練への参加

- ・本校生徒が、実際に本校が避難所となる際に行政担当者、地域の方と一緒に学校施設をどのように使用するかを確認する。
- ・防災知識の情報交換を行う。
- ・実際に避難所になった場合を想定し、「このような事態になったらどう行動するか」を地域の方と一緒に考える。
- ・災害用貯水槽、防災倉庫等、学校敷地内にはあるが普段は見る事ができない設備を行政担当者と一緒に確認する。



(3) まちづくりをテーマとした総合的な学習の時間 (Steams Time)

- ・1年生 理想のまちづくり～自らが関わる地域を知り、SDGsの視点を組み込んだまちを創造する～

さいたま市が「住みたい街ランキング」上位に位置する状況や理由、魅力を探り、自らが生活する地域のよさや魅力を再発見する。また、自らが関わる地域の現状や課題を見つけ出し、SDGsの視点を組み込んだ、よりよいまちを創り上げるために必要な提案を行う。

- ・2年生 コンセプトメイキング～理想のまち実現に向けて、「わたし」が掲げるコンセプト～

1年生で探究した内容を発展させるためにコンセプトメイキングの技法を学び、自らが提案する理想のまちを創り上げる意図を明確にできるようにする。

- ・3年生 わたしたちは未来の地球に何ができるか～卒業論文の執筆～

これまでの活動を通して、修学旅行の行先が取り組むまちづくりについて学び、その地域のよさや課題に気づき、自らが生活する地域との関わりや活用できる要素を発見し、誰にとっても住みよい地域環境実現のためにできることを考えるとともに、自分たちが未来の地球に何ができるのかを考える。

学校・家庭・地域で連携しての防災への取組

～安心・安全な学校づくりの推進～

川口市立里中学校

校長 小野 毅

1. はじめに

本校は、昭和53年に開校し、本年度で48年を迎える。通常学級14学級、特別支援学級2学級、全校生徒484名の中規模校である。

「真剣に学ぶ生徒、人間性豊かな生徒、心と体を鍛える生徒」を学校教育目標に掲げ、生徒一人ひとりを大切にし、知・徳・体の調和のとれた生徒を育成し絆を深める学校づくりを目指している。

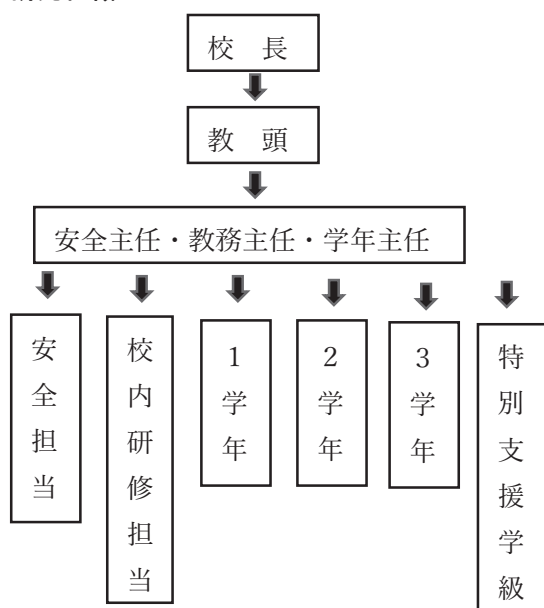
また、本校学区は埼玉高速鉄道が開通し、新しい住宅も多く、急速に発展している地域である。そのため、この土地に慣れていない人も多く、有事の際の地域の結びつきが課題である。

2. 研究主題設定の理由

地震・台風などの自然災害が増えており、有事の際に、適切な対応をとれるかが重要になっている。

また、本学区は新しく引越してきた家庭も多く、地域・学校・家庭が連携して取り組んでいくことが必要である。また、有事の際に、中学生の力を地域に生かすことが今後重要であると考え、より現実的で有効な防災教育の必要があることから、研究主題を設定した。

3. 研究組織



4. 研究内容

ア 避難訓練

避難訓練では、①地震→火事、②シェイクアウト訓練、③不審者対応、を実施している。火災場所を変えたり、災害が起こる時間を授業中（担任・授業担当）・休み時間・清掃中等と変えることによりその都度、設定を変え確認している。

イ 教職員に対しての「さすまた研修」

教職員の校内研修で、スクールサポーター（警察OB）を講師に招き、「さすまた研修」を実施した。どのようにさすまたを使用すると有効に使用できるのかなど実演をまじえながら、講義をいただいた。

ウ 小中合同引き渡し訓練

学区の小学校と本校の3校で、小中連携した合同引き渡し訓練を実施した。小学校と合同で実施することにより、より実践的に行うことができています。



実際の引き取り訓練の様子

エ 不審者対応訓練

不審者が侵入したこと想定し、訓練を実施した。当日は、教職員の不審者対応と、教室への不審者侵入を防ぐためのバリケード作りを実際に行い、身の守り方を学ぶことができた。



実際の引き取りの様子

オ 地域商業施設の避難訓練への参加

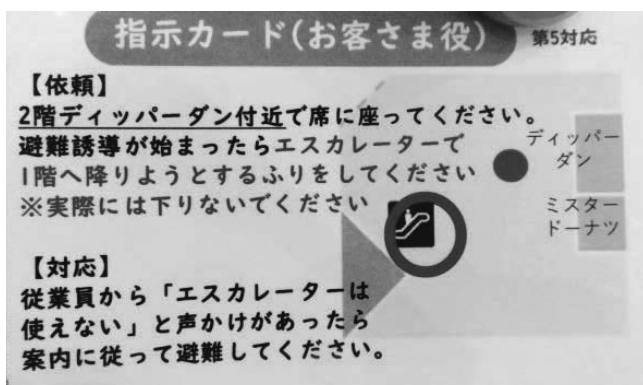
近隣の商業施設の避難訓練に、本校の生徒が一般客役で参加した。当日は、それぞれに役割カードが配付され、そこに書かれている役割を演じながら、避難をした。一般企業の避難訓練に参加することで、学校以外で有事の際の対応の仕方を学ぶことができた。また、訓練後には消防署の方による、消火器訓練、煙体験を実施した。この体験を通して、防災に対する意識が高まった。



役割カードを使っでの避難訓練の様子



訓練後の煙体験・消火器体験の様子



お客さま役の指示カード

カ 役割カードを利用した訓練の実施

「オ 地域商業施設の避難訓練への参加」の時の「役割カード」からヒントを得て、教職員避難訓練時に教職員役割カードを避難訓練実施直前に配付し、役割を演じながら訓練を行った。災害はいつ起こるかわからないため、教職員も全員が、どの役割でも行えるようになることが必要なため、特に重要な役割について「役割カード」を使用した。また、この役割カードの内容は、事前の校内研修で確認し、全員がこの役割を行えるように研修を行った。

キ 小中合同での避難所開設研修の実施

学区の小学校2校と本校の3校で、避難所開設研修を実施した。市の危機管理課の方をお招きし、避難時の対応についてご講義をいただくとともに、実際に避難所開設時のテント、トイレ、仮設照明などの設営を行った。



避難所開設研修の様子
(トイレ・仮設照明、
テントの設営)

5. 成果と課題

(成果)

- 地域の商業施設のイオンの避難訓練に参加することにより、地域での防災をリードするという意識が高まった。
 - 「役割カード」を使用した訓練を行うことで、有事の際には、その時に在校している教員で臨機応変に役割を決めて避難誘導を行うことを確認できた。また、全教職員がどの役割も行えるように研修し、教員の意識が高まった。
 - 学校だけではなく、地域の企業や保護者、近隣小学校と連携しながら研修、訓練を行うことで、地域・家庭とともに防災について考えることができた。
 - 小中研修会で防災課を招聘し、実践的な研修を行う中で、避難所開設に関して実践力の向上が図られた。
- (課題)
- 地域と連携し、防災教育を行う事で、中学生が地域の力であることを意識させ、防災意識をさらに向上させる必要がある。
 - 不審者対応に関して、教職員側のさらなる研修と、より実践的な訓練の必要がある。

地域防災

～防災とPTA 私たちにできること～

埼玉県立大宮武蔵野高等学校

校長 河 森 明 子

1 はじめに

本校は昭和51年に創立し、今年50周年を迎えた全日制普通科の県立高校です。地域に根ざし支えられ今があり、「地域が誇れる学校」を目指しています。

1、2年生は少人数学級編制、数学と英語で習熟度別少人数授業を行い、わかりやすい授業を展開しています。また、放課後の基礎補習、進学補習などにより、個に応じた学力伸長を図り、教育内容が充実しています。平成18年度から一新された制服は、県内でも人気のデザインとして親しまれています。

部活動は関東・全国大会に出場する部もあり、現在Jリーグで活躍している選手もいます。特別活動では「西区ふれあい祭り」「馬宮ふれあいコンサート」など地域との交流を通し、真の社会性を身に付けています。

平成20年度より大宮北特別支援学校さいたま西分校が併設され、ノーマライゼーション（共生共育）の理念に基づく教育を推進し、思いやりのある生徒が育っています。卒業後の進路先が多岐に渡るため、一人ひとりの進路希望に応じた多様な選択科目を用意しています。文理にとらわれず、一人ひとりの興味・関心、進路希望に応じた多様な選択科目を履修し、よりきめ細やかな進路指導、進路実現を目指しています。

2 PTA組織と活動計画

本部はPTA会長、副会長3名、4つの専門部会の部長4名、役員15名より構成されています。また、会計2名、監事2名、幹事2名を常任理事として組織されています。さらに4つ専門部会を設置し、以下に示す内容を担当しています。

【総務部】 会員相互の研修・親睦を図るための事項、研修会の企画運営、会議の準備・会務の補佐、ドリンク・卒業祝品の手配、その他

【広報部】 学校と家庭との連絡に関する事項、PTA広報誌の企画発行

【厚生部】 会員の福利厚生に関する事項、スポーツ大会等・親睦行事の企画運営

【指導部】 教育向上の為の調査研究、学校行事への協力に関する事項、進路ガイダンスへの保護者参加の補

助、受付

【PTA主体の年間活動計画】

- 4月 入学式入会式、PTA・後援会会計監査、厚生部（美化活動）
- 5月 総会・歓送迎会、マラソン大会スポーツドリンク配布、厚生部（美化活動）、指導部（挨拶運動、進路指導ガイダンス参加と協力）
- 7月 広報部「PTAだより」発行①
- 9月 文化祭参加、厚生部（文化祭協力）
- 10月 総務部（防災講習会）、厚生部（スポーツ・レクリエーション）
- 11月 厚生部（美化活動）、指導部（進路指導ガイダンス）、マラソン大会補助
- 2月 総務部（卒業祝品手配）、指導部（進路指導ガイダンス）
- 3月 厚生部（美化活動）、広報部「PTAだより」発行②、卒業式送別会

今年度7月に行われた創立50周年記念事業を機会に、生徒会・PTA・分校・地域と密に連携し、合同事業を企画し、楽しみながら活動しています。

3 具体的な取組

（1）西区避難所開設訓練

毎年6月に本校にて、避難所開設訓練が行われます。生徒会、運動部、大宮北特別支援学校さいたま西分校、そして近隣の自治会、さいたま西区役所と合同で開催されています。写真①は、感染症対策をした生徒達が受付をしており、検温などを行いました。

（2）避難所となる体育館の区画整理

近年、自然災害など起こり体育館などが避難所となるケースが有りますが問題となるのが、各家庭のプライベート区間があまり無く、ストレスにより体調不良になってしまうケースなどが多く見られることです。写真②は、ダンボールで仕切りを設けることで、プライベート空間を作ることが可能です。また、交流の場や受付時の待機場所としてふれあい広場を活用します。乳幼児室や病気の方、高齢者の居場所となる空間も想定し、場所を区切り、使いやすさを確認しました。



【写真①】災害時受付の様子



【写真②】プライベート空間確保の様子

（3）自治会の高齢化支援

各自治会で共通の問題点となっているのが、高齢化だと考えられます。今回の開設訓練に参加していただきましたのは、本校生徒を除くと、ほぼご高齢の方達でした。避難所開設は各自治会が行いますが、災害時用備蓄（食料、飲料、毛布）や上記のダンボールなど、重量物が多く倉庫に備蓄されております。その運搬を行うとなると大変な重労働となります。

今回は、本校からも生徒達が訓練に参加していたので、大いに力を発揮出来ました。学校の授業中や土日の部活動時に災害が発生した場合は、近隣の自治会と協力し避難所が開設されれば、生徒達の一時避難所としても学校を利用でき、生徒の力を頼り、近隣住民の皆さまも安心して利用できるかと期待しています。

（4）高校生災害ボランティア育成講習会

7月に埼玉県防災学習センターにて、高校生災害ボランティア育成講習会が行われます。本校からは毎年、インターアクト部の生徒達が参加しています。夏休み中でしたが、埼玉県の多くの高校が参加をしており、写真③は、各部（時間によりローテーション）に分かれた一部です。



【写真③】ボランティア育成の様子



【写真④】災害時避難所想定の様子

（5）避難所運営実習 HUG（ハグ）

実際に災害があったと想定し、学校の校庭や体育館・校舎内などを利用した、配置や人々の要望・ボランティアや物資の受け入れなど様々な状況をリーダーの指示の下、検討していく実習です。

写真④は、時間の余裕もなく、次から次へと問題を出されるので、生徒達は必死になって話し合い、解決できるよう実習に取り組んでいました。

（6）自衛隊によるライフハック実習

実習で体験することにより、災害時に役立つ色々な事を肌で感じ学ぶ事が出来ました。写真⑤は、自分の服や毛布を利用した担架の作り方です。これだけで、女の子4人でも大人1人を簡単に運ぶことが出来ました。写真に写っているマスコットキャラクターは、自衛隊のマスコットキャラクターで、サイボン3兄弟（りく・うみ・そら）の1人です。



【写真⑤】簡易担架作成の様子 【写真⑥】防災緊急連絡カード

（7）PTA主催研修会

令和6年は「防災セミナー」を実施しました。福島県から語り部さんをお招きして「複合災害から命を守る行動について」というテーマでご講義いただき、後半は非常食の試食実習を行いました。令和7年はさいたま赤十字病院高度救命救急センターによる講演会を実施し、「大規模災害時の医療救護と地域住民の連携について」最新の情報を盛り込み、大変貴重なお話をいただきました。近隣の自治会もお誘いし、質問も多く飛び交い、災害対策に向け有意義な研修会となりました。

（8）『防災緊急連絡カード』作成・配布 写真⑥

災害時の連絡方法をどうするか、避難場所は何処にするのかなど、各家庭内で話し合いをするきっかけをPTAで発信していく事も大事と考え、親子で万が一の対応を決めておけるよう『緊急連絡先カード』を作成しました。12月の防火防災訓練時に1人3枚配布し、家庭での意識づけができました。毎年1年生に配布することにし、3年間携帯できる丈夫なカードです。

4 終わりに

学校とPTA、地域が協力し、防災意識を高く持ち、連携会議や訓練を継続的に行うことの重要性を痛感しました。生徒である子供達が学校在校時（授業や部活等）に災害に見舞われた場合、助け合うのは近隣住民であり、自分たちが出来る限りの事をする必要があるのです。「誰もが被災者」の心を持って、困っている人達へ手が貸せる存在となれるよう、知識や経験を積み一人でも多くの人へ共に生きる方法を伝える事です。そのために、今後も活動を続けていきます。

6 ICT 活用教育支援

小学校

- 1 自ら考え、自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成
～学ぶ楽しさ・分かる喜びを味わわせ、自己調整力を高める ICT の活用～ ……さいたま市立徳力小学校… 142
- 2 社会で生き抜く非認知能力の育成
～感情を揺さぶる仕掛け（ギミック）を共有するプラットフォームの構築～ ……戸田市立戸田南小学校… 144
- 3 課題解決に向かって友達と学び合い、認め合う児童の育成
～ ICT 等を活用した PBL 型体験学習を通して～ ……鴻巣市立吹上小学校… 146
- 4 Chromebook を日常に落とし込むために
～ネットをよりよく学習に生かせる児童の育成～ ……川越市立泉小学校… 148
- 5 論理的思考力を伸ばす授業の展開
～ ICT の活用と非認知能力の定量化評価～ ……所沢市立西富小学校… 150
- 6 ICT を活用した主体的・対話的な学びの推進
～つながる学び、広がる可能性、ICT で築く自信と未来～ ……加須市立騎西小学校… 152
- 7 学力向上に資する ICT 機器の効果的な活用についての研究
～「深い学び」を支える学習ツールとしての活用法～ ……春日部市立小淵小学校… 154

中学校

- 1 情報技術を用いた授業実践研究
～データ活用の視点から～ ……東松山市立東中学校… 156
- 2 「多様な学び」に対応する学習の実現
～渋沢 spirit in ふかやスクールとともに～ ……深谷市立岡部中学校… 158
- 3 リーディング DX スクール事業指定校として、より効果的な ICT の活用方法等の研究
～生徒の個別最適な学びの推進と ICT の活用を工夫して、教職員の働き方改革につなげる～ ……幸手市立西中学校… 160

自ら考え、自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成 ～学ぶ楽しさ・分かる喜びを味わわせ、自己調整力を高める ICT の活用～

さいたま市立徳力小学校

校長 白石 徳一郎

1 はじめに

本校は、今年度で開校49年目を迎える。緑あふれる自然に恵まれた環境で、四季折々の変化を五感で楽しむことが本校の特色である。

学校教育目標は「やさしく思いやりのある子（徳）よく考えて進んで学ぶ子（知）ねばり強く元気な子（体）笑顔であいさつのできる子（コミュニケーション）」で、全校児童163名で教職員と共に「チームトクリキ」として目標の具現化を目指している。特別支援学級が3学級なのを除けば全ての学年が単学級である、その為、人間関係の深まりが大きく、学習状況調査等の生活習慣等に係る調査では、学びに向かう意欲や人間関係の素地が整っていると見える。

2 研究主題設定理由

全国学力学習状況調査やさいたま市学習状況調査の結果から、基礎学力の定着を図る必要がある。学習への意欲も高い水準ながら、ばらつきがある。一昨年度よりスタートしたICTを切り口にした学校課題研修により、タブレット端末を活用し、個別最適な学習展開をすることで、主体的に取り組もうとする態度の改善に効果が見られている。そこで、様々な教科において、さらにICTの効果的な活用を通して「学ぶ楽しさ・わかる喜び」を味わわせていく。そして、自らが学びを選択できるよう自己調整力を高めていく。昨年度までは、話をしっかりと聞くことに主眼を置き指導を重ねてきた。本年度は、自分の考えを表現できる児童を育成することが基礎学力向上につながっていくと捉え研究の視点として具体的手立てを講じている。

3 活動組織

研究推進委員会を核とし、教職員を【環境整備チーム】と【授業研究チーム】の2つのチームに分け、目指す児童像に迫る。他、教職員のITリテラシーや家庭・地域との連携も研究の軸にいれ「チームトクリキ」で研究に臨んでいる。

4 研究内容（具体的な取組）

（1）児童のITリテラシー向上策と授業における効果的なICT活用

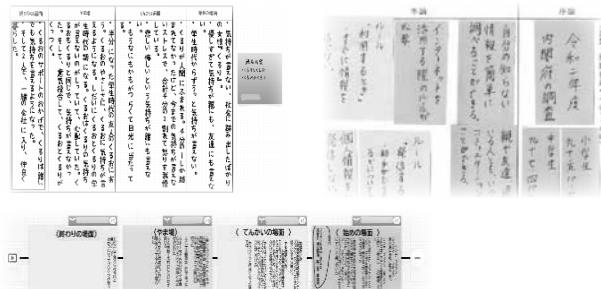
①学年別情報活用フローチャート

スモールステップの視点による情報活用能力の育成を図るため、各学年でどのくらいスキルを身に付けたいか、体系表を作成し、児童がいつでも確認できるようにしている。



②自立した学習者の育成

学びの中にICTを手立てとして講じる際、複数のツールを用意し、児童が選択をする。また、学び方についても選択する機会もあり、個やグループで学ぶか、教員が付き添って学ぶかの選択もある。



③スクールダッシュボードでの振り返り



児童自身が順を追って学習の達成度や課題点をいつでも確認できるスクールダッシュボードを活用し、学びの履歴を残している。

（2）教職員のITリテラシー育成研修

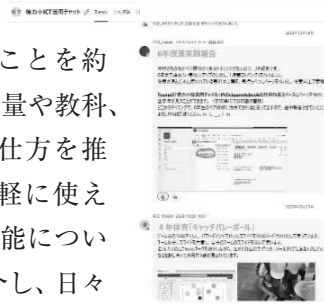
①夏季研修シンガIIGA研修

教職員が今何を学びたいかを事前にFormsで回答し、校内の学び方改革推進リーダーとICT支援員と共にスキル向上のため校内研修を行った。

②ICT取組紹介チャット

日々の取組を気軽にチャットできるコーナーをMicrosoft teams上に立ち上げ、共有をしている。

持続可能な取組をすることを約束に形式等を設けずに、量や教科、内容等も様々な紹介の仕方を推奨している。また、気軽に使える Web 上のアプリや機能についてもこのチャットで紹介し、日々の授業改善に生かしている。



(3) 教育環境の整備

①児童机の天板を拡張

教科書やノートとともにタブレットを文房具として使用するには、従来の児童机天板の広さでは少し窮屈である。天板を拡張するキットを3年生以上の全ての児童数購入し、天板をおよそ3割拡張した。これによりタブレットの落下事故も格段に減少した。



②特別教室への ICT 機器整備

本市は、全ての教室への天吊りタイプのプロジェクター、黒板へのマグネットスクリーンが配備されている。本校では独自に理科室や音楽室、また少人数指導室など通常多く使用される教室へのプロジェクターとスクリーンの整備を行っている。



③学びへの興味・関心を高める掲示物の共有

研究チーム【環境整備チーム】では、児童が学びの興味・関心を高められるために様々な掲示物を作成し掲示をしている。例えば教室の「話し方聞き方名人」「名人」や図書室の「先生紹介趣味コーナー」「おすすめ本」など学校で共通した指導ができるようにしている。



(4) 家庭・地域との連携

①校務のデジタル化

欠席連絡ツールを、MicrosoftForms で、お便り配信や日々の様子報告を CMS の Web ページで行っている。

ペーパーレスを図ることにより保護者からも便利になったと声が上がっており、学校としても児童に目をかけられる時間が増している。



②タブレットのやくそく

児童がタブレットを使用する際の約束を配布し家庭でも確認できるようにしている。文房具として使用する前提での学校と家庭が共通して助言できる資料となっている。



③ゆるやかにつながるボランティア

スクールソーシャルネットワークの一環で、子ども達の学びの習慣化を図るため、地域の方々よりボランティアを募り学びに力添えをいただいている。

5 成果と課題 (○成果 ●課題)

○ICT の日常使用・積極的活用が広がり、より児童主体の活動へとつながった。

○タブレット型端末を日常的に持ち帰り、アプリ等を活用した家庭学習が充実した。

○昨年度の学校評価と比較し、学習への意欲・ICT 活用意識が高まった。

○教員の授業力を評価する「学びの指標」の結果で ICT を積極的かつ効果的に活用している数値が向上した。

○家庭と協力しながら ICT の有用性について確認できた。

●ICT 活用体系表が校内独自より市統一のものになる。どの教科で何のツールやスキルが必要になるか改めて検討していく必要がある。

●ICT の利活用のできる教職員の力の差が現れてきている。全ての教職員が同質の活用ができるようにしていきたい。

6 おわりに

自己調整力を高め、ICT を利活用することは、学習者の主体的な学びを促進し、情報の収集・整理・発信に関する能力の向上に寄与するものであると考える。特に、タブレットや様々なアプリケーションを学習者主体で活用することにより、個別最適な学習環境の構築が可能となり、協働的な学びの場面においても効果的であることが実践により明らかになった。また、教員にとっても指導の効率化や教材の多様化が図れる点で有益であると考えられる。今後は、ICT の利点を最大限に活かすとともに、リテラシーやセキュリティへの配慮を十分に行いながら、持続可能な教育の実現に向けて、さらなる工夫と改善をしていきたい。

社会で生き抜く非認知能力の育成

～感情を揺さぶる仕掛け（ギミック）を共有するプラットフォームの構築～

戸田市立戸田南小学校

校長 本木 千穂

1 はじめに

本校は、JR 戸田公園駅に近く、マンションが多い住宅地内にあり、児童数750名を超え、学級数29学級（通常学級25、特別支援学級4）の、開校58年目を迎えた学校である。

予測困難な未来社会を生き抜く子供たちにとって、数値化できる学力（認知能力）に加え、意欲や協調性、忍耐力といった「非認知能力」の重要性がますます高まっていることは言うまでもない。しかし、その育成方法は未だ確立されているとは言い難く、現場の教員にとっても手探りの状態が続いているのが現状である。本校では、この課題に対し、「感情を揺さぶる仕掛け（以下ギミック）」を授業に組み込むというアプローチで挑んできた。

2 研究主題設定理由

本校は令和5年度より戸田市教育委員会の委嘱を受け、「社会で生き抜く非認知能力の育成」をテーマに3カ年計画で研究を進めている。初年度の定義づけ、次年度のPBLとの統合と、年々その内容を深化させてきた。その過程で、「授業の属人化」と「評価の曖昧さ」という壁に直面した。優れた実践（ギミック）が個人の知見に留まり、組織全体に広がらないこと、そして目に見えない力の変容を捉えきれないことである。多忙な現場において、全教員が質の高い実践を行うには、個々のギミックを蓄積・共有し、誰もが活用できる「プラットフォーム」が不可欠である。ICTを活用してこの基盤を構築し、子供たちの「感情を揺さぶる授業」を組織的に展開することで、確かな非認

知能力を育むべく、本主題を設定した。

3 研究仮説

【仮説】

授業に児童の感情を揺さぶる「ギミック」を意図的に配置し、その事例をクラウド上のプラットフォーム「Edu COMPASS」で共有する仕組みを構築すれば、教員の授業改善が促進されるであろう。その結果、児童は自身の感情の動きや非認知能力の発揮を自覚（メタ認知）し、主体的に「意欲」や「協調性」を高めていくことができるであろう。

検証にあたっては、①組織的な推進体制、②ICTによる可視化と共有、③客観データ（AiGROW等）に基づく指導の3点を重視した。

4 研究内容（具体的な取組）

（1）推進体制と定義の明確化

全校体制で研究を進めるため、「非認知能力研究部（ギミックカー）」「環境整備部（デザイナー）」「PBL推進部（エクスプローラー）」「調査・記録部（アナライザー）」等の専門部会を設置した。また、育成すべき能力を「意欲」「協調性」と焦点化し、具体的な行動指標「非認知能力みとレンズ（図1）」を作成して評価の視点を統一した。

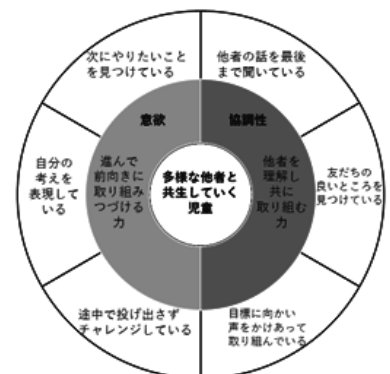


図1 非認知能力みとレンズ

(2) 「ギミックブラッシュアップシート」の活用

日本非認知能力協会会長の中山芳一氏の指導のもと、非認知能力（意欲・協調性）を発揮させるギミックを取り入れた授業改善に着手し、授業単位の指導計画書「ギミックブラッシュアップシート（図2）」を活用した。また、対面で実践を共有する場として、ブラッシュアップタイムを設定した。

ギミックブラッシュアップシート(本時)		授業番号	OO OO
教科	体育	学年など	6年
単元	ソフトボール		
本時の目標	6人に渡って、ゲームしよう。(第1時、2時)		
	導入:ギミック① (0分～15分頃)	展開:ギミック② (15分頃～35分頃)	まとめ:ギミック③ (35分頃～45分頃)
意欲・協調性	意欲・協調性 (途中で投げた球をキャッチしている)	意欲・協調性 (途中で投げた球をキャッチしている)	意欲・協調性 ()
学びの場面	3人1組 誰かが投球によってボールが落ちた瞬間に、キャッチャーの子も同時にボールをキャッチする。ボールをキャッチした子は、ボールを投げた子にボールを返す。	3人1組 誰かが投球によってボールが落ちた瞬間に、キャッチャーの子も同時にボールをキャッチする。ボールをキャッチした子は、ボールを投げた子にボールを返す。	
対面での実践	口遊み・口遊み活動	口遊み・口遊み活動	口遊み・口遊み活動
振り返り	高橋君を取ったために、運よく投げたように思っています。	自分もボールをキャッチして打つことができました。	終了

図2 ギミックブラッシュアップシート

(3) 振り返りと自己調整学習

指標を子供向けの言葉「南っ子パワー（図3）」に変換し、振り返りに活用した。また、タブレットで授業中の感情起伏を記録する「感情曲線」を導入。児童は自分の感情の癖をメタ認知し、教員はギミックの有効性を検証するデータとして活用した。



図3 南っ子パワー

(4) プラットフォーム「Edu COMPASS」の構築

株式会社 Shinonome との連携により、実践知を共有するシステム「Edu COMPASS（図4）」を開発した。教員は実践したギミックを「意欲系」「協調性系」等で分類・タグ付けしてクラウドに蓄積する。さらに、文科省が紹介する事例集等へのリンクも蓄積した。これにより、必要な時に効果的なギミックを検索・参照可能とした。さらに、IGS 株式会社の評価ツール「AiGROW」のデータと連動し、クラスの実態に応じたギミックを推奨する機能の実装も進めている。



図4 Edu COMPASS

5 成果と課題

【成果】

ギミックブラッシュアップシートの活用により、若手からベテランまで実践の言語化と共有が進み、組織的な授業改善が進んだ。児童の変容としては、低学年のアンケートで「協調性」に関する肯定的回答が目標値（85%）を超え、昨年度より大きく向上した。高学年の AiGROW（図5）測定では、「受容性」「共感・傾聴力」に加え、課題であった「寛容」のスコアも上昇傾向にある。何より、教員が「子供の感情の動き」に着目した授業づくりへと意識を変革させたことが最大の成果である。



図5 AiGROW結果（4年生の場合）

【課題】

一方で、AiGROW の結果から「粘り強さ（グリット）」や「リーダーシップ」の伸び悩みが見られる。受容性の高さに対し、困難に立ち向かう強さや集団を牽引する力をどう育むか、より強度の高いギミックの開発が必要である。また、「Edu COMPASS」への蓄積・活用を日常業務に定着させるための運用の工夫も今後の課題である。

6 おわりに

「社会で生き抜く非認知能力」は、一朝一夕に育つものではない。しかし、私たち教員が意図を持って種をまき（ギミック）、水をやる（承認・振り返り）ことで、子供たちは確実にその芽を伸ばしていく。本研究で構築したプラットフォームは、単なるデータベースではなく、教員同士の情熱と知恵をつなぐ架け橋である。これからも「手のひらサイズ」の小さな工夫を積み重ね、子供たちの未来を切り拓く力を育てていきたい。

課題解決に向かって友達と学び合い、認め合う児童の育成

～ ICT 等を活用した PBL 型体験学習を通して～

鴻巣市立吹上小学校

校長 野本 昌宏

1 はじめに

本校は、明治22年に創設され、今年度で136年を迎える伝統校である。建て替えた校舎と鉄筋校舎が一体となった教育環境で、学校教育目標「夢いっぱい 輝く瞳 光る汗」のもと、現在22学級、573名の児童が学んでいる。保護者や地域住民の「我が母校」という意識が強く、協力を惜しまない地域性がある。学校応援団（学校支援隊）の協力も活発で、多くの方の支援を受け、各学年において効果的な教育活動が展開されている。

知・徳・体の調和のとれた児童の育成を図るため、児童一人一人の個性や能力に応じた指導を工夫するとともに、体験的学習、異年齢集団での活動（吹っ子タイム）、体力向上等に取り組んでいる。特に ICT 等を活用した授業「吹上小テーマ学習（FTL）」（学習者用端末・指導者用端末・STEAM Lab 教室「コスモスペース」の活用）を実践し、学ぶ喜び・楽しさを実感させ、充実した学校生活の実現に向けて日々取り組んでいる。

本校では、令和5・6年度の2年間にわたり、鴻巣市教育委員会並びに鴻巣市教育研究会の研究委嘱を受け、『進んで考え、豊かに表現することができる児童の育成～ ICT を活用した多様な学びを通して～』を研究主題として、全教職員で研究に取り組んできた。今年度も上記のテーマのもと、研究に取り組むことにした。

※「吹上小テーマ学習（FTL）」とは？

吹上小学校では、PBL 型授業をベースとし、児童が単元を貫くプロジェクトテーマに向かって学習する授業形態を FTL（吹上小テーマ学習）として定め、実践を行っている。系統的な学習にはないプロジェクト型の学習のメリットを重視し、児童の学びの主体性や学びを調整する力を高めることをねらいとしている。

2 「児童の実態」と「教員の育成」について

VUCA とも呼ばれる将来の予測が大変困難な現代において、多様な子供たちが誰一人取り残されることなく、個別最適化された学びを享受し、未来に向け、その学びを加速していけるよう、学校教育には不断の変革が求められている。

本校の児童は、自分で考えたり、表現したりする力に課題がある。一方で、学習者用端末を使っての学習については非常に意欲的である。そこで、PBL 型学習を推進する教職員を育成しつつ、学習者用端末を活用し、進んで考え、豊かに表現できる児童の育成を目指していきたい。

3 研究視点について

本研究では、以下の視点を積極的に推し進めながら、後々児童が社会で活用できる効果的なスキルの獲得をできるように、本研究視点を設定した。

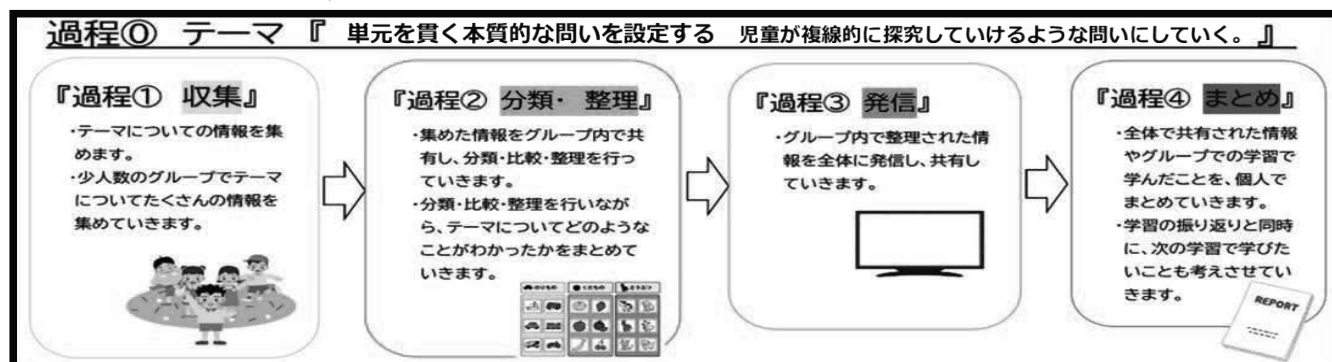
★研究視点★

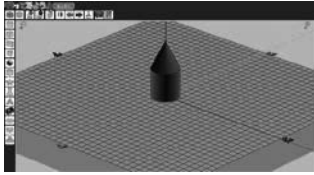
「ICT 機器を活用して、児童同士で協力しながら PBL 型学習の課題解決に向かう力を育成する」

4 具体的な取組

(1) 3D モデリングソフトの授業での活用

3D モデリングソフト「作ってみよう！」は、楽しみながら 3D スキルの基本概念が身につく教育ソフトウェアである。3D スキルをもつ教育者は限られているが、「作ってみよう！」は自分の意思で学び、STEAM の 5 分野（Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（ものづくり）、Art（芸術）、Mathematics（数学））を跨いで深い理解を与えることができる教育用ツールである。この 3D モデリングソフトには、WEB 版があり、児童用端末に有償の専用アプリをインストールすることなく、無償で手軽に利用できるメリットがある。





このソフトは、小学校低学年から「遊び感覚」で「3Dスキルの基本概念」を自然と身につけさせることができる。3Dモデルは、図形に関する情報（形、大きさ、姿勢等）をXYZ軸に基づいた数値とパラメータで表現するので、一見難解なようだが、練習問題が簡単なものからスキルレベル別に用意されており、一人一人が最適なレベルで学習する事ができるようになっている。

実験的に低学年の児童に取り組ませたところ、指導を行ったのは一時間のみで、その後は、休み時間や生活科の学習の時間を活用し、個人のレベルに応じてゲーム感覚で積極的に取り組み始めた。間違い部分を丁寧に教えてくれる採点機能が付いていることから、端末を自宅持ち帰って自主的に学ぶ姿勢が見られている。



2学期に入ってから、オリジナルで制作したプリントデータを活用して印刷を行う児童が出てきた。5学年では、3～4人グループで制作したいもの（SL機関車や忍城など）について、試行錯誤を繰り返す姿が見られた。うまく印刷できないこともあったが、その失敗から新しい気づきを得てチャレンジしてゆく姿勢もあり、まさに「学び合い、認め合う児童」の育成に繋がったと感じた。今後も、ものづくりの楽しさを感じさせ、かつ「手軽に失敗が体験できる」ことを大切にしていきたい。

(2) 3Dプリンタの新規導入研修（教職員向け）

（株）内田洋行・（株）ビープロジャパン・（株）アパロテクノロジーに御協力いただき、夏季休業中に「新型3Dプリンタ」を設置した。本校では、以前から3Dプリンタが設置されていたが、全ての児童に対して活用を促すような学びに結び付けられずにいた。その一因として、3Dモデリングソフト搭載PCを使用しなければモデリングができないことで、学べる児童数が限定されてしまうことがあった。しかし、(1)で前述したように、WEB版のモデリングソフトが活用可能になったことで、今まで以上に積極的に児童に学びを広げる環境を準備することができた。

そこで、新規3Dプリンタ導入に合わせて、2学期開始後に「教職員向け実践研修」を実施した。ここでは、教職員一人一人の校務用パソコンを使って、WEB版モデリングソフトを体験し、オリジナルの名札ステッカーを制作させた。ものづくりの楽しさを児

童に味わわせるには、まず「教職員が楽しんで制作すること」が重要である。その意味で、この研修では前のめりになってFTL（吹上小テーマ学習）を実践する教職員の姿が見られた。



冬季休業中には、教職員向けの応用研修を企画している。そこでは、より複雑な図形を制作する為のポイント整理や印刷時の注意点などを共有する予定である。



(3) 「3Dプリンタ活用マニュアル」の作成

今年度、研修で実践してきたことを情報教育主任中心に「3Dプリンタ活用マニュアル」としてまとめる作業を進めている。

5 成果と課題（◎成果 ●課題）

【成果】

- ◎学年を問わず、3Dスキルの基本概念と考え方・捉え方、そして「楽しかった記憶」を育てることができている。未来の「ものづくり」の中心的な技術に触れておくことは、将来、あらゆる分野で活躍できる可能性を秘めており、次年度以降の更なる学びにつなげていく体制が整いつつある。
- ◎新しい学びの形を模索する貴重な研修時間を共有することで、教職員一人一人が「他者と協働する新しい学び」を楽しみながら追求する姿勢をもち続けることができた。

【課題】

- 3Dモデリングソフトの年間指導計画への位置づけ
3Dモデリングソフト「作ってみよう!」の活用を進める学習として、次年度以降は、3年生以上は「総合的な学習の時間」、1・2年生は「生活科」に位置づけができるよう指導計画の見直しを進めている。FTL（吹上小テーマ学習）を柱に『どんなものを3Dプリンタで制作することを目指すのか?』を、学年の発達段階を踏まえてテーマを定めていきたい。
- 3Dプリンタを活用するノウハウの継承
“STEAM Lab 教室「コスモスペース」”や“3Dプリンタ”に関しては、他校に導入されているものではない為、毎年、教職員向けに活用研修を実施することが重要である。全ての児童に平等な学習の機会を提供する為にも、FTL（吹上小テーマ学習）と合わせて、全教職員で高い意識をもって「学び続ける教職員づくり」を継続していきたい。

Chromebook を日常に落とし込むために ～ネットをよりよく学習に生かせる児童の育成～

川越市立泉小学校

校長 小林 克 則

1 はじめに

本校は、開校151周年を迎えた歴史ある学校である。田畑が広がり環境に恵まれた地域で、通常級18学級、特別支援学級6学級、児童550名が学んでいる。

本校では、令和元年度からの文部科学省のGIGAスクール構想の導入、運用開始にあたり、Society5.0時代を生きる全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びを実現するためChromebookの利用を進めている。児童も教職員も、ネットリテラシーの定着をはかり、Chromebookを日常に落とし込むことで、多様な学習ができる環境を整えたり情報活用能力を養ったりするために本研究に取り組むこととした。

2 児童の実態について

本校では、Chromebookの持ち帰りを実施して4年になる。授業でも令和3年度より2年間、校内研究で「ICTを活用した授業」を行ったことで、Chromebookの活用機会は増えている。そのため、高学年はタイピングやアプリの操作などはスムーズにできる児童が多い。しかし、ICT活用能力も個人差が大きく、タイピングや基礎的な操作に時間がかかる児童も存在する。また現代では、SNSを使った犯罪や事件が度重なって問題になっている。本校でもChromebookを使った問題が年間を通して数件起きている。ネットリテラシーの定着は必要不可欠であり、自律したネットの使い方も指導をしていかなければならない。

3 研究仮説について

「情報端末を扱う操作技能・思考力・学びに向かう力を育てれば、児童の情報活用能力が育ち、ネットを日常的によりよく学習に生かすことができるであろう。」

4 研究組織について

校長－教頭－情報教育部主任

－①ホワイトリスト部②リテラシー部③ドリル部

5 具体的な取組

(1) 確実な端末操作能力【ホワイトリスト部】

無限にある学習コンテンツから、何をどのように児童に体験させるか（あるいは解禁するか）を学校全体で共有することで、どの学年でもどの担任でも、安心して学習できるコンテンツをリスト化した。過度にゲームに偏らないこと・企業利益に寄与しないこと・個人情報保護の観点から作成した。

《ホワイトリストリンク集》

3	科目	サイト名	
4	タイピング類	キーボー島アドベンチャー	https://kb-kentei.net/main
5		プレイグラムタイピング	https://typing.pl
6		ポケモンプログラミングスタートキット	https://www.pokemon-foundation.or.jp/
7		スクールタイピング	https://seipsg.n
8			
9	タイピング類	Viscuit（ビスケット）	https://www.viscuit.net/
10		ビスケット活用例交換サイト	https://scrapbox.jp/viscuit
11		Viscuit（ビスケット）で遊びながら学ぶ	https://tkby.github.io/viscuit_github.io
12		Viscuit（実践事例）	https://ap-labo.com/exam/soft/viscuit
13		Hour of Code	https://hourofcode.com/
		プログラ	https://proouru.jp/
備考			
		低学年は「体験ツアー」の「トレーニングする」から体験がオススメ	
		※要申込。ブラウザ上で動くので、Chromebookで使用可能。	
		1年生からできる学校向けタイピング練習ツール。大文字と小文字を切り替え可能。	
		自分の描いた絵を「メガネ」という部品に入れ、絵を動かしたり変えたりするプログラムを作成する	
		授業や授業外での活用事例	
		B分類・学習指導要領に例示されていないが、学習指導要領に示	

- ・教科、タイピング、プログラミング、リテラシーなど、多様なリンクがある。
- ・使用感がコメントされており、どの教員にとっても選びやすい。高学年は児童にも一部公開している。

(2) ネットと上手につきあう能力【リテラシー部】

児童は学校だけでなく、放課後遊びも含めてネットに囲まれた生活をしている。「先生や親が怒るから」「ネットは危険だから絶対使わない」など低位の考えではなく、「安全にほどよく利用する（デジタルシチズンシップ）」ための考え方や価値観を、どの学年でもどの担任でも、確実に学習できる動画と発問をリスト化した。期末などの節目に、視聴＆話し合いをすることで、学校全体が同一歩調でリテラシーについて学ぶ観点から作成した。

《デジタルシチズンシップリンク集》

		デジタルシチズンシップ教育	
	1学期	2学期	内容
1・2年生	https://www.stear	https://www.st	クロームブックを正しくつかうために大切なことはなんだろうか
3・4年生	https://www.stear	https://www.st	相手にうまく伝えるためにはどうしたらよいか
5・6年生	https://www.stear	https://www.st	相手にうまく伝えるためにはどうしたらよいか

- ・実施期間を1週間ほど設ける。0.5時間でできるので、朝の自学時間にも実施することができる。
- ・テーマ＝発問も設定されているので、誰でも指導することができる。
- ・話し合いをすることで、自分の意見をもつだけでなく、他者の意見を聞いて自分の考えを広げたり深めたりすることができる。



↑総合の時間だけでなく、係活動や学級レクでも、スライドやアンケートなどを活用している。クラス内外に周知するときも Google classroom で行っている。ふさわしい内容・場面などは話し合っている。

(3) ネットを学習に生かす能力【ドリル部】

児童が自ら、隙間時間に個別最適な学びに向かえるよう、本校ではデジタルドリルを全学年に導入している。その環境づくり（ログイン・ID保管・トラブルシューティング）を一元化することで、どの学年もどの担任も安定したドリル活用ができるようにした。

(4) 教職員の意識向上【情報教育部】

(1)(2)(3)を全職員で作成・協議・周知・活用するにあたり、「なぜこのコンテンツは良いのか」「なぜこのコンテンツは心配なのか」「新たに申し込むのは、学校で確認すべき」「どのリテラシー動画を優先すべきか」など、教職員同士で議論することで、教職員自身のリテラシー意識の向上につながった。

特に、本市では「川越市立学校における盗撮防止ガイドライン」策定を受け、本校での捉え方を議論したが、教職員が(2)リテラシー(シチズンシップ)に基いて考え議論することができた。本研究が児童だけでなく、教職員にも効果があった。

6 成果と課題

(1) 成果

ホワイトリストを作成・周知することで、児童が自ら選んで学習に活用することができた。タイピング技能を筆頭に、児童の技能向上につながった。

また、ネットリテラシー学習を実施することで、児童同士で「これはいいの？」など議論することができた。この流れを受け、児童会で「泉小のchromebookの使い方」を話し合い、児童集会で全児童に発信することができた。

更に、デジタルドリルを積極的に活用することで、学習が苦手な児童もゲーム感覚で学びに向かうことができた。

(2) 課題

児童一人一人のデジタルシチズンシップを確実に向上させていくため、引き続きの研究と授業実践を重ね、検証を行う必要がある。

論理的思考力を伸ばす授業の展開

～ ICT の活用と非認知能力の定量化評価～

所沢市立西富小学校

校長 櫻井昇一

1 はじめに

本校は所沢市の北東部に位置し、本年度創立150周年を迎えた、通常学級13学級、特別支援学級2学級、全校417名の中規模校である。学校教育目標「進んで学ぶ子 思いやりのある子 たくましい子」のもと、「誰ひとりとして取り残されない学校づくり・授業づくり・職場づくり」を推進している。

2 研究主題設定の理由

本校の児童は、論理的思考力を課題としている。国や県の各種学力調査のうち、「論理的に考えたり、書いたりしたりする設問」において、児童の正答率が平均を下回っていた。また質問紙調査からも、「論理的に考えることや書くことを苦手としている」児童が多くいることがわかった。その一方で、児童も教員も、ICT 機器を活用した授業の形態に慣れており、毎年プログラミング教育の研修を行うなど、プログラミング教育への関心も高い。以上の実態を踏まえ、本研究においては、プログラミング教育やICT 機器の効果的な利活用を通して、児童の論理的思考力を伸ばすことを目指している。また、児童の見えない学力（非認知能力）と教育活動の教育効果を定量化する評価ツール「Ai GROW」を活用し、児童の論理的思考力・判断力・表現力などの資質・能力の適切かつ公平な評価を実施することも試みた。

3 具体的な取り組み

(1) プログラミングの学習を生かして論理的思考力を伸ばす

iJapan（株）様に協力をしていただき、第5学年を対象に「プログラミング出前授業」を実施した。講師からは「html や css といったプログラミング言語について」や「スモールステップで順序立ててプログラ

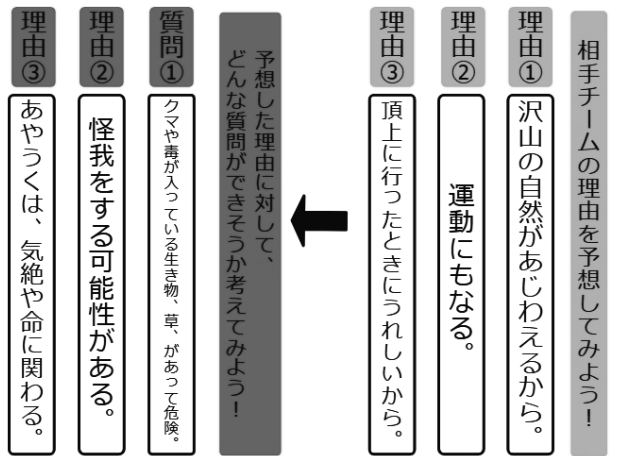
ムすることの必要性」等を、アクティビティを通して教えていただいた後、実際にプログラミング言語を用いた Web ページ作りに取り組んだ。総合的な学習の時間では、iJapan（株）が開発したアプリ教材「BSD for school」を活用し、単元「西富小の150周年をプログラミングで盛り上げよう」というテーマで、学習を進めた。本校の150周年に合わせて、6年生がオリジナルグッズ販売や学校かくれんぼ等のイベントを企画しており、その宣伝のためのポスター作りをプログラミングで行う、という趣旨のもと、学習に取り組んだ。児童は「正確に指示を出さないと、思っていた通りの作品ができない」や「プログラミングでは、『何となく』ではなくて『正しく』表現しないといけないことがわかった」と振り返っており、論理的に考えたり表現したりすることの大切さに気付いていた。



(2) ICT を活用した国語授業で論理的思考力を伸ばす

国語の「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の単元を中心に、スクールタクトを使用して学習を進めた。ICT を使用して学習を進めることのメリットは2つあった。1つ目は、論理的な思考や表現の過程の型を誰にでも教えられるということである。ワークシートに沿って学習を進めることで、どの児童もスモールステップで、論理的な思考過程を学ぶことができた。2つ目は、容易に推敲や修正ができるようになったことである。単元の中盤で、児童同士で考えを発表し合う場面を設けた。その中で、「ここでこの考えを言った

方が、説得力が増すよ」「先に結論を説明した方がわかりやすいと思う」等の会話をしている児童がみられた。それをもとに、児童がweb上ですぐに原稿を修正し、より論理的な表現を追究していた。



給食のマナーを改めるには、どうすればよいだろうか。

現状と問題点	解決方法	理由や根拠
今は、どうなっているか、何が問題なのか。	具体的に、どのようなことをしたらよいか。	なぜ、それがよいと思うか。
給食の準備が遅い。喋っている人が多い。給食の量が違う。配膳の仕方。給食当番がまだ配膳しているのにみんなが並んでいる。	給食当番と配膳を手伝う。静かに自分の準備を進める。注意して配膳をする。	みんなが静かに給食当番と配膳を手伝った方が早く給食を配れるからです。注意して配膳をすれば、ほぼ均等に給食を配れるからです。

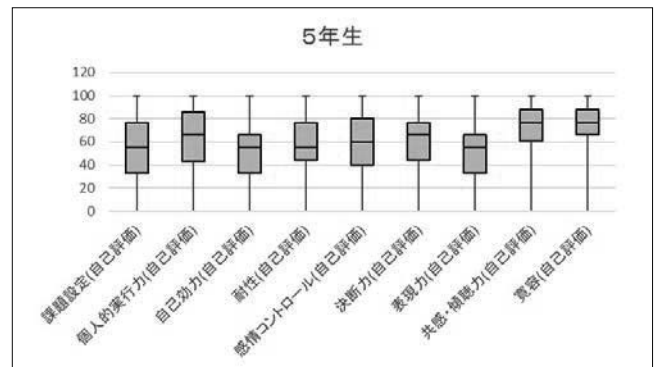
(3) Ai GROW を活用した実態把握

Ai GROW とは、児童の見えない学力（非認知能力）と教育活動の教育効果を定量化する評価ツールである。今年度は、Ai GROW を活用し、児童の論理的思考力・判断力・表現力などの資質・能力の適切かつ公平な評価をすることで、児童の実態を把握することとした。

調査したコンピテンシーは、①課題設定、②個人的実行力、③自己効力、④耐性、⑤感情コントロール、⑥決断力、⑦表現力、⑧共感・傾聴力、⑨寛容の9項目である。これらの9項目は、本校の教育目標である「進んで学ぶ子」「思いやりのある子」「たくましい子」の育成に欠かせない要素である。

1学期（令和7年6月）に4年生以上の各学級で調

査をし、結果を分析した。下図は、第5学年の結果である。



第4学年と第6学年にも共通していたが、自己効力や表現力の項目が全体的に低い傾向にある。このことから、自己効力感（特に学業的自己効力感）や表現力を高めることで、本校の課題でもある論理的思考力の向上を図ることができると考えた。

4 成果と課題（○成果 ●課題）

- プログラミング言語を使用して作品作りに取り組んだことで、他教科でも論理的に思考する児童の様子がみられるようになった。外国語の「ペアで道案内をし合う活動」や家庭科の「ミシン縫いの手順について記述するテスト」においても、順序立てて説明する力が育っていた。
- スクールタクトでスモールステップを工夫したワークシートを作成したことで、学年で教材を共有し、論理的思考力を伸ばす取り組みを行うことができた。一度使用した教材をテンプレートとして、他学年で複製して使ってもらったり、自学年の別単元で使用したりした。単元が変わっても同じテンプレートを使用して学習を進めたため、児童が学習過程をスムーズに理解して、自力で学習を進めることができた。
- プログラミングの学習は総合的な学習の単位の中で進めていたが、各教科等の学習においても「BSD for school」を活用して、「年表アプリづくり」や「クイズアプリづくり」に挑戦させていきたい。
- Ai GROW の調査を継続し、結果比較するとともに、今後の指導の仕方を研究していきたい。

ICTを活用した主体的・対話的な学びの推進

～つながる学び、広がる可能性、ICTで築く自信と未来～

加須市立騎西小学校

校長 増田 貴光

1 研究題目設定の理由

情報化や技術革新、グローバル化や価値の多様化などが顕著な現在、こどもたちが社会に出る十数年後の未来を予測するのは困難な時代と言われている。その中で、新しい時代を生きるこどもたちに学校教育で行うべきは、主体的に判断し、自ら課題解決を目指そうとする意欲や他者と協働しながら新たな価値を生み出していける力を育成していくことである。

そこで本校では、目指す児童像の一つとして「自分のよさを知り自信をもって活動できる児童」を、目指す教師像の一つとして「総意と創意で課題に対応できる教職員」を設定し、児童も職員も主体的・対話的な学びをとらえて未来に生きる資質・能力の育成を図っているところである。本研究では、ICTを有効に活用することで児童に学びの表出を促し、自己肯定感を高め、自信を深めさせて、主体的・対話的な学びの中で自己実現を図れるよう本主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 研究の仮説

児童が日々変容する社会の中で変化に対応し、課題意識をもって問題解決にあたる資質を身に付けるための学びのアプローチの第一歩目は、学習への意欲や自らの行動に対する自信などに基づく主体性である。ICTを効果的に活用することで、児童が自らの学びを表出し、学習調整を行いながら成長を実感できる機会や他者との思考の交流や協働を通して自己実現を図れる機会を意図的に設定でき、児童がより主体的・対話的な学びの中で資質・能力を伸ばせるのではないかと考え実践を進めた。

(2) 研究内容

本校では、昨年度を含めてICT活用と児童の主体的・対話的な学びの推進を目指してきた。ICT活用の視点として、児童の自己肯定感および主体性の向上を重点とした取組を実践した。

(3) 検証方法

本校の全児童を対象に、令和6年度5月から令和7年度7月までの学習に関するアンケート結果のうち、

①自己肯定感、②学習における自己の考えの表出、③協働的な学びの実施、④社会貢献意識の推移をとらえ仮説検証をした。

3 研究実践

(1) 情報活用能力体系表に対する共通理解

ICTの活用といっても、その領域は広範囲にわたる。義務教育から高等教育にあたる段階においては、児童生徒が身に付ける情報活用に係る能力も同様に多岐にわたる。そこで、文部科学省が示す「情報活用能力の体系表」のステップ1～3の段階を各学年ブロックで身に付けたい情報活用能力として教職員間で共通理解し、その中でも児童の主体性や協働的な学びに係る能力を重点化し、各年度当初に情報教育主任から全体へ周知させて指導の体系化を図った。

分類	1・2年	3・4年	5・6年	
A 児童及び教職員の学びの場における主体的・対話的な学びの推進	a	1. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	1. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	1. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	b	2. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	2. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	2. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	c	3. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	3. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	3. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	d	4. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	4. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	4. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	e	5. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	5. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	5. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	f	6. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	6. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	6. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	g	7. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	7. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	7. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	h	8. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	8. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	8. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	i	9. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	9. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	9. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	j	10. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	10. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	10. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
B 児童及び教職員の学びの場における主体的・対話的な学びの推進	a	1. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	1. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	1. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	b	2. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	2. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	2. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	c	3. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	3. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	3. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	d	4. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	4. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	4. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	e	5. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	5. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	5. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	f	6. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	6. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	6. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	g	7. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	7. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	7. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	h	8. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	8. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	8. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	i	9. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	9. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	9. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	j	10. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	10. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	10. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
C 児童及び教職員の学びの場における主体的・対話的な学びの推進	a	1. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	1. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	1. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	b	2. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	2. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	2. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	c	3. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	3. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	3. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	d	4. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	4. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	4. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	e	5. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	5. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	5. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	f	6. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	6. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	6. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	g	7. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	7. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	7. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	h	8. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	8. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	8. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	i	9. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	9. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	9. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲
	j	10. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	10. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲	10. 自ら課題を設定し、自ら課題解決を目指す意欲

情報活用能力体系表（赤枠内は育成の重点項目）

(2) ICT専門員の活用

本市では、月に二度、指導補助等のためにICT専門員が各校に配置されている。夏季休業中などの長期

休業の際には、ICTに係る教職員の操作技能の向上や活用事例の体験等を目的とした研修の指導者として活用した。



ICT専門員を指導者とした研修

(3) 市教育委員会訪問に係る授業公開

ICTの効率的な活用方法の検討をねらいとした授業研究会を各学期に一度設定するとともに、市教育委員会ICT担当指導主事に指導を依頼し教職員の指導力育成を図った。授業参観や研究協議での活用方法の深まりから、他の研究授業における協議においてもICT活用のメリットが検討され、令和7年度よりICTを用いた研究協議会を導入するに至った。

(4) 研究協議におけるICTの活用

本年度から、本市で使用している学習支援ソフトを用いた授業研究会における研究協議を実施している。意見の共有化やカテゴリー分け、写真や動画などによる授業場面に基づいた協議など、話題の基盤を揃えることで、教職経験の差などに左右されない深い研究協議を進めることができている。



学習支援ソフトを用いた研究協議

(5) 学習参観、学校運営協議会等における保護者、地域からの意見の集約

学習参観および学校運営協議会などの地域公開の授業において、年1回、ICTを用いた授業公開の機会としている。保護者には学校評価で、運営協議会や学校応援団には参観後の意見交換会等でご意見を聴取するなどして、授業改善に生かすとともに保護者や地域に根ざした教育の推進を図ることができている。

【学校運営協議会・学校応援団の意見から】

- 低学年のうちからタブレットを使って学習しているのには驚いた。
- 体育の授業でもタブレットを活用することを知った。マット運動での自身の様子を動画撮影していたが、自分のめあてを意識できる方法だと思った。
- 高学年になるとタブレットで詳細に調べるだけでなく、タブレットを通して互いのもつ情報を交流するなど、多様な活用ができているのがよい。

4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

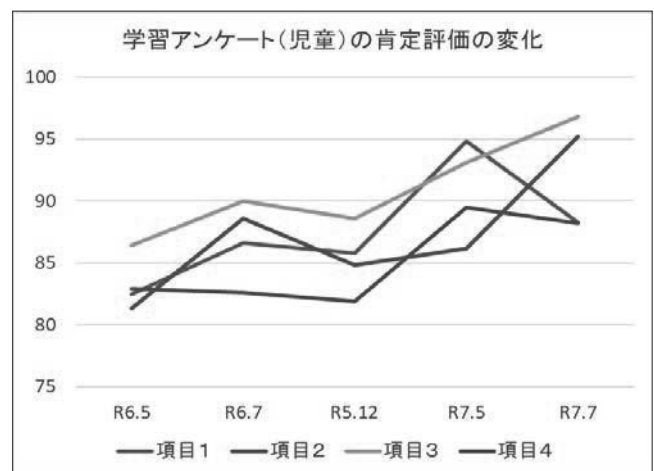
本校の全児童を対象にした学習に関するアンケート結果のうち、児童の自己肯定感や主体性に関わる以下の質問項目の推移を示す。(R6.5～R7.7)

項目1：私にはよいところがある。

項目2：授業では、自分の考えを発表（発信）したり書いたりしている。

項目3：授業では、話し合いを通して考えを深めようとしている。

項目4：地域や社会をよくするために、何をすべきか考えることがある。



※1～4の4点法で、3および4の回答を肯定評価とした。

2年間にわたる継続的な実践の中で、部分的に低下している項目はあるものの、全体を通して児童の意識が向上している様子が見られる。このデータが示すように、各教職員の学習指導の在り方も、「自分の考えをもつ」、「考えを共有（交流）する」、「考えを再検討する」という場面が多くなり、それと並行してICTを使用する場面も増えてきている。今後も継続的に児童の姿をとらえながら実践を深めていきたい。



(2) 今後の課題

児童の情意面の変化や非認知能力的な資質の向上が実際の学力や汎用的な能力の育成にどの程度影響を及ぼしているのか、また、その相関についても明らかになったわけではない。今後も長期的な視点で研究を続けながら、児童の変容を確実にとらえてよりよい指導実践を積み重ね、未来に生きる力を児童の中に確実に育てていける学校経営を進めていきたい。

学力向上に資する ICT 機器の効果的な活用についての研究

～「深い学び」を支える学習ツールとしての活用法～

春日部市立小淵小学校

校長 矢野 渡

1 はじめに

今年度46年目を迎える本校は、春日部市の北部に位置し、広々とした田畑に囲まれ、四季折々の美しい風景を見せる豊かな自然の中にある。校内には、自然観察園「トトロの森」を有し、県の木であるケヤキを始め、市の木である桐、花である藤など、様々な木々が生い茂っている。このような環境の中、学校教育目標「自主自律の精神にとんだ人間性豊かなたくましい児童の育成」の達成のため、「知恵いっぱい・やさしさいっぱい・元気いっぱい」の『いっぱい運動』に取り組みながら、こどもたちが毎日、「笑顔いっぱいでも過ごすことができる学校」の実現を目指している。

開校2年目から取り組んでいる「はだしの教育」は、今年が45年目となり、我が校の大きな特色とともに長く伝わる伝統となっている。また、トトロの森への「ホタルの放流」や、全校児童で取り組んでいる「トトロ俳句」も本校の特色ある活動である。

2 研究主題設定理由

昨年度より、全国学力・学習状況調査と埼玉県学力・学習状況調査がCBT化され、一人一台端末活用の重要度が増している。そこで、児童の端末操作の技能習得はもちろんのこと、学力向上を担保する効果的な活用方法を教員が身に付けなければならない段階にある。本校では、タブレットを「文房具」の一つとして扱い、協働的で個別最適な学びの充実を視座にした研究に取り組むこととした。

3 研究仮説

ICT機器の効果的な活用は、児童の主体的な学びを促進し、学習意欲の向上や理解の深化につながると考えられる。そのためには、まず、児童のICT活用に関する実態を的確に把握し、個々の習熟度に応じた指導を行う必要がある。また、教職員がICT機器を授業の目的に応じて適切に選択・活用できる指導力を身に付けることで、ICTを効果的に授業設計へ組み込むことができるようになる。

さらに、ICT機器を活用した授業実践を継続的にを行い、成功事例を校内で蓄積・共有することで、学習の質を高める指導方法が確立されると考えられる。同時に、児童が安心してICTを活用できるよう、情報モラル教育を充実させ、適切な使い方を身に付けさせることが重要である。これらを支えるために、教職員を対象としたICT活用研修会を体系的・継続的に実施することで、学校全体のICT活用能力が向上すると予想される。

以上のことから、児童の実態把握、教職員の指導力向上、授業実践の充実、情報モラルの確立、研修体制の整備が相互に作用させることで、ICT機器の効果的な活用が進み、児童の学力・学習意欲の向上につながると考える。

4 研究内容（具体的な取組）

(1) 児童の実態と教職員の指導力・スキルの把握

ICT活用を確実に推進するために、まず児童と教職員の操作スキルを把握した。児童については、基本操作（入力・提出・検索など）を中心に調査し、学年差や個別差を把握した。教職員については、授業でのICT活用状況や活用する教科を確認し、研修内容や支援体制の改善に生かした。

(2) ICT機器を活用した授業の実践

授業実践の充実を視座に、学校課題研修における手立てにも取り入れ、積極的なICT機器の活用に取り組んだ。

①全体指導での活用

大型モニターによる導入の工夫、児童の意見の共有、学習の見通しをもたせる場面でICTを効果的に用いた。

②児童による個別活用の充実

個別の調べ学習、ドリルパークによる個別進度学習、写真や動画を生かした観察や記録、オクリンクプラスを用いたまとめや発表など、学習者用端末の特性を生かした。

③授業研究会での活用

各学年1授業を実施し、授業計画の中でICT活

用を位置づけた。授業後はワークショップ型の協議により効果の検証を行い、改善点や成功事例を共有した。

④外部との連携

ICT サポーターと連携して授業準備や機器操作の支援を得ることで、教員の負担軽減と活用の促進を図った。

(3) 情報モラル教育の充実

ICT 活用の前提として、情報を適切に扱う力の育成に努めた。個人情報や著作権、インターネット利用時の注意点などについて系統的に指導し、SNSトラブルの予防や情報発信の責任について理解を深めた。また、専門家を招いた特別授業を実施し、実例に基づいた学習を複数回実施した。

(4) ICT 活用研修会への参加

市・県レベルの ICT 研修会に積極的に担当教員が参加し、先進校の事例や新たな活用方法を学んだ。そこで得た知見を校内に持ち帰り、授業改善や校内研修へ還元した。

(5) 校内研修会の実施

校内研修では、教職員の ICT 活用指導力向上を目指し、次の内容に重点を置いた。

①学習用アプリの活用法（協働ツール、振り返りツールなど）の研修

②タブレットや提示装置の基本操作・トラブル対応の習熟

③ ICT 機器を授業に組み込む際のデザインの工夫

これらにより、教職員のスキルの平準化と授業における ICT 活用の継続的な向上を図ることができた。

(6) 今年度のまとめと振り返り

年度末には、児童の学習意欲の変容、授業における ICT 活用の頻度・質の向上、教職員のスキルアップ等について調査し、成果と課題を整理する。本研究を通して、ICT が児童の学びを支える有効なツールとなり得ることや教職員の指導力向上と負担軽減に作用することを期待している。



【情報モラル教室】

【考えの共有】

5 成果と課題（○成果 ●課題）

○ICT 活用が授業改善に寄与し、児童の学習意欲が向上した。

○児童の ICT 操作スキルが向上し、学習活動が円滑に進むようになった。

○授業研究会やワークショップ型協議により、成果と課題の共有に効果があった。

○成功事例や課題を共有することで、授業デザインに ICT を組み込む意識が高まった。

○ICT サポーターとの連携が ICT 活用を後押しした。

○情報モラル教育の充実により、児童の適切な情報利用の意識が高まった。

●教職員の ICT 活用指導力に個人差が見られ、実践の均質化が課題である。

●ICT 活用が授業計画の中で目的化してしまう場面が一部に見られた。

●ネットトラブルの未然防止のためには、年間を通じた継続的な情報モラル指導が必要である。

●ICT 活用が定着した教科とそうでない教科の差が見られ、より体系的な整理が必要である。

6 おわりに

本研究では、ICT 機器を「深い学び」を支える学習ツールとして位置付け、児童の学力向上につながる効果的な活用方法を検討してきた。児童の操作スキルの向上、教職員の指導力の伸長、授業改善の具体化など、一定の成果を得ることができた。一方で、教職員間の活用格差や児童のスキル差、情報モラル指導の体系化など、解決すべき課題も明らかになった。

ICT の活用には、学習者の思考の深まりや協働的な学びを支える重要な役割も担っている。今回の研究で得られた成果や課題を踏まえ、次年度以降も、ICT が「なくてはならない学習環境（文房具の一つ）」として根付くよう、授業改善を継続していきたい。また、校内外の研修や実践交流を通して教職員の指導力をさらに高め、児童一人一人が学びに主体的に向かう学校づくりを目指していく。



【授業時の机上】



【思考を整理する】

情報技術を用いた授業実践研究

～データ活用の視点から～

東松山市立東中学校

校長 細野 敦

1 はじめに

本校は東松山市の東側に位置し、隣の吉見町との境がすぐ近くという場所にある。校区内には県営住宅や市営住宅が多く立ち並び、外国籍の家庭も多い地域である。

本校では教育理念を、「学校はみんながしあわせになるところ」、教育目標を、「共に 学び 伸ばし 想像し、創造する 生徒」とし、教育活動にあたっている。

本校でも、他の学校と同様に一人一台の学習用端末が配付され、ICTを用いた授業実践が行われ始めて数年が経つ。利便性や効率化という側面では、その効果があるのではないかと感じている。しかし、学校現場では生徒の学習活動においてICTを活用することが、より高い学習効果を生むといった実感を持った成果はまだないといえる。そこで、現在あるICT機器や学習用端末、情報技術を用いて、教科横断的な視点から授業を設定することで、より教科や学習内容の充実を図れるのではないかと考え、上記の研究主題を設定した。

2 生徒の実態

本校の生徒の実態として、学力面では全体的に課題がある。埼玉県学力学習状況調査や全国学力学習状況調査の結果においては、全国や県の平均を下回っている。また、地域の特徴として外国籍の生徒が多く、家庭的に生活が困窮している家庭も少なくない状況である。

しかし、生徒は明るく、とても素直な生徒が多い。部活や行事に対しては、熱心に取り組め主体的な活動ができる。学習面でも主体的に学べる事が望まれる状況である。

3 研究仮説について

目指す生徒像として、「他教科との関連を意識し、学習を広げたり深めたりすることができる生徒」とした。

教科横断的な視点を持つということは、教科と教科のつながりや関連性を意識できることと捉える。例えば、社会科の学習において用いるグラフや表、統計などの様々な資料は、数学の要素や理科の要素、技術の要素などが含まれている。通常生徒は、この教科の関連を意識せず、それぞれの「個々の学び」として捉えているのではないかと考える。そこで、活用できる範囲の情報技術と、教科間のつながりを意識させることによって、教科間の横のつながりが意識でき、より学習の内容を深めることができるのではないかと考え、以下のような仮説を設定した。

仮説

データの活用を視点とした探究的な学びにより、他教科との関連を意識し、学習を広げたり深めたりすることができるであろう

4 具体的な取り組み

(1) 教育課程の整理

- ①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列する。
- ②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。
- ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用する。

(2) AI、ICT を用いた授業の実践

- ① AI を用いたデータの活用を目的とした研究授業を検討し、実践する。技術科の学習内容をもとに、数学や理科などとの教科間のつながりを捉えさせる。
- ② AI を用いて、データを整理、分析することで予測を立てることができ、データ活用のよさや、各教科の学習内容の必要性に気づかせる。

5 授業実践例

検証授業を行う際に今年度は「技術科」と「総合的な学習の時間」を中心に、実践計画を以下の通り設定した。

- ① AI とデータを用いた授業案の検討
いくつかの教科の視点から指導案を作成
- ② 教科横断的な学びのある授業実践
研究授業 各学年 1 回実施 指導者招聘
- ③ 教職員・生徒へのアンケート調査
年度初めと年度末に実施し、変容について考察する。

(1) 実践事例「技術科」

C エネルギー変換の技術

本時のテーマ

データ同士の関係性を効率良く分析し、異なった発電方法同士の関係性や予測の技術について考える。

学習課題

どのようにデータ同士の関係性や予測の技術について、考えればいだろうか？

本時の目標

- 目的に応じて、データを取得、加工、整理・分析し、AI を用いて自動的に処理を行うことで高度な分析手法を用いながら、関係性を考える。(思考力、表現力、判断力等)
- 生活や社会において、利用者や専門的な立場から、主体的に情報通信技術を活用しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

(2) 本時の展開

- ①過去の気象データと過去の発電需給データ（1 週間分）を見ながら、課題に取り組む。
 - 気温と発電量の関係性を実際に算出する。
 - 上記の時、気温が25℃の場合、1 時間の発電量を予測する。
- ②過去の気象データ、と過去の発電需給データ（8 年間分）を AI に学習させ、課題に取り組む。
 - AI を活用して、気温を予測する。
 - AI を活用して、発電量を算出する。
 - ※降水量と湿度は一定の値を提示する。
 - AI の仕組みを理解する。



- ③ AI を活用することについて確認する。
 - AI を使うことでどんなことができるようになるか考える。
 - 今後 AI をどのように活用できそうか考える。
- ④情報通信技術を活用したエネルギー変換の技術について、これまでのまとめを行い、生活や社会における情報通信技術の活用について利用者や専門的な立場から考える。

6 成果と課題

今年度初めて AI を用いた授業実践を行った。この授業により、AI を用いたより効果的な授業の在り方について今後更に検討していく必要があると感じた。データの活用という視点においては、教科や場面により今後積極的に AI を使用していく必要があると考える。

「多様な学び」に対応する学習の実現 ～渋沢 spirit in ふかやスクールとともに～

深谷市立岡部中学校

校長 新井 宏

1 はじめに

本校は、渋沢栄一翁生誕の地である深谷市の西部に位置する、旧岡部町を学区とする中学校である。学区には岡部・榛沢・本郷・岡部西の4つの小学校があり、市立「おかべ幼稚園」を加えた5校1園で、岡部地区幼小中連絡協議会（通称：コスモス学園）を構成し、地域で一体感をもった教育活動に取り組んでいる。

本市では、GIGA スクール構想に基づく ICT 機器の整備が充実している。

現在、「渋沢 Spilit in ふかや GIGA スクール」による取組が全市をあげて行われており本校でも同研究を継続的にすすめながら、これまでの経験をふまえ、新しい教育課題に積極的に対応することに取り組んでいる。また、様々な学びのスタイルへ個別の支援の充実に向け、取り組むこととした。

2 研究主題設定理由

本校では4年前から、デジタル教科書の活用について研究を継続してきた。生徒も教職員も1人1台のデジタル端末を使うことが定着した。今後は効果的な活用方法をさらに深め、新しい指導方法について研究することが求められている。

そこで、本年度は、デジタル教材による指導方法の工夫と改善を図りながら、従来の指導方法を組み合わせ、それぞれのメリット・デメリットを明らかにし、指導の個別最適化を目指すことを目標として研究課題を設定したものである。



(1人1台端末の活用)



(ハイブリット学習)

3 研究内容（具体的な取組）

(1) タブレット端末を活用した学習の提案

【各教科部でタブレットを活用した授業】

- ①各家庭における家庭学習時としての活用
- ②すべての授業に対応するリモート学習

※アプローチャーム（校内支援センター）へ来室する生徒への授業配信に活用。

(2) 生活・学習環境づくり

【情報モラル教育としての正しい利用と管理】

- ①3分前学習の徹底

（学習規律の徹底として、徒会本部、学級委員会、生徒指導部と連携した啓発過活動）

- ②「自主」「自立」目指したある学校生活
（生徒が自己管理するタブレット）

- ③タブレット使用時のルール作り

（休み時間や校内使用時、家庭での使用時）

- ④オンライン集会等での活用

コロナ化を経て、校内 Teams、リモート中継などのマニュアル化が図れた。



(使用マニュアル)



(リモート配信の様子)

(3) 経年変化の分析

【生徒実態把握、アンケートの効率化】

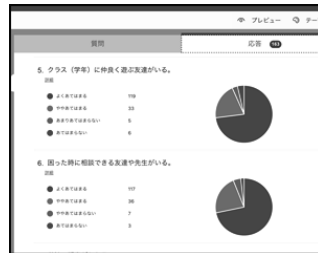
- ①各種調査の分析（埼玉県学力学習状況調査、全国学力学習状況調査、NRT）
- ②アンケート実施の年間計画作成、集計、分析
- ③様々なデータから生活環境や習慣の分析

④変化があった生徒の追跡調査

⑤校内アンケートを Forms によるデジタル化



(QRコードの読み取り)



(アンケート結果)

4 成果と課題 (○成果 ●課題)

○生徒による授業評価

授業がよくわかる90.8%、学校が楽しい92.1%

※ICTを活用した活用率が高い授業ほど、「授業がよくわかる」と答えた生徒が多い。

※学校研究課題として「わかる授業」をすすめた際に、ICTの効果的に活用している授業実践についての情報共有をした。



(英語の授業の様子)



(社会科の課題提示)

○ポートフォリオによって、生徒個々の学習過程や学力がより明確になった。

※個の作業が増え「どこができないのか」や「どこまでできているのか」が見える化できた。

●個別の成果物等の発表や、比較する際にコミュニケーションの苦手な生徒は難しかった。

○資料等がタブレットにデータとして集中しているので、注意力が散漫になりがちな生徒にとっては、自分のペースで作業に取り組むことができ、学習効率が向上した。



(レポート作成の様子)



(写生会で活用)

○生徒も各教科において、様々な効果的な活用方法が確立されてきた。小学校から使っていることもあり、差往査にも慣れて上手に活用している。

●一方で、慣れにより、使用ルールを逸脱する生徒もあり、今後の課題となった。

○学校緑化コンクール全国特選(文部科学大臣賞)を受賞した。その際に整備した岡部学校における環境緑化活動を通して、地域を大切に、持続可能な社会づくりに貢献することができる「ひと」の育成に継続して取り組んでいる。



(現在もICTを活用した緑化活動を継続中)

5 おわりに

本研究のねらいは、今後の学校教育のスタンダードとなるGIGAスクール構想によるデジタル端末を用いた学習・指導のあり方について、多様化する生徒の学びに個別に対応する方法を研究しようとするものである。

ICT機器を活用した学習は当初、コロナ禍の厳しい状況の中での「オンライン授業」を中心とした活用を想定していたが、予想に反して、日常の授業の中での活用が進み、その結果、当初のねらいどおり、生徒の学びに変化が生まれ、今後の実践につながる成果を得ることができた。

とりわけ、ワンドライブによる「資料配布」「学びの共有」「デジタルポートフォリオ」の活用は生徒の学びを大きく変える力を持つとともに、指導の個別最適化、学びのカスタマイズ化の推進力となることが期待され、これからの時代の授業スタイルを変える可能性を有することがわかった。

一方で、タブレットやICTのもつ特性が多様な生徒に与える影響については、さらなる研究が必要である。今後はそうした課題への対応を進め、多様な学びに対応するICT活用をさらに推進していきたい。

リーディング DX スクール事業指定校として、 より効果的な ICT の活用方法等の研究 ～生徒の個別最適な学びの推進と ICT の活用を工夫して、 教職員の働き方改革につなげる～

幸手市立西中学校

校長 島 方 勝 弘

1. はじめに

本校、幸手市立西中学校は、生徒数553名、全16クラス（通常学級14、特別支援学級2）を擁する学校である。昨年度より、文部科学省のリーディング DX スクール事業および生成 AI パイロット校としての指定を受け、学校全体の研究主題である「主体的・対話的で深い学びの充実」を達成するための先進的な取組を推進している。この主題の実現に向けた中核的な手段として、ICT の積極的な活用、とりわけ生成 AI の可能性を探る実践研究に注力してきた。

生徒の学習活動を豊かにする「教育利用」と、教職員の業務を効率化する「校務利用」という「二刀流」のアプローチを通じて得られた知見を共有し、今後の教育実践に資することを目指している。

2. 研究の概要

（1）教育利用：生徒の学びの深化

生徒一人ひとりの「主体的・対話的で深い学び」をより一層深化させるため、生成 AI を学習ツールとして活用する具体的な方法と、その教育的効果を探る。

（2）校務利用：教職員の働き方改革

教職員の各種業務における生成 AI の活用を通じて業務負担を軽減し、それによって生まれた時間を生徒と直接向き合うための質の高い活動に充当することを目指し、その効率化の度合いを検証する。

本校はこれら2つの目的を両輪とし、教育の質の向上と教職員のウェルビーイング向上を同時に追求する「教育利用と校務利用の二刀流」というアプローチを推進した。

さらに、幸手市の ICT 教育専門員による定期的な学校訪問を通じて、教職員および生徒を対象とした生成 AI 講座（プロンプトトレーニング、画像生成など）を実施し、



情報活用能力の育成を図った。この専門的なサポートが、教職員と生徒が自信を持って新しい技術を活用する土台を築いた。

3. 生成 AI の具体的な実践

（1）教育利用における実践

【国語科】

① 批評文のたたき台作成：批評文作成において、まず生徒が自身の考えで文章を作成した後、その文章を基に生成 AI に修正案を出力させた。生徒は AI が生成した文章を単なる「正解」とするのではなく、思考を深めるための「たたき台」として活用し、そこからさらに推敲を重ねることで、自分らしい独自の表現を追求する活動へと繋げた。

② 人物像の具現化と作文支援：物語から読み取った登場人物のイメージを言語化する際の補助や、作文の添削、より豊かな表現を探すための例文作成など、多岐にわたる場面で思考のパートナーとして活用された。

【技術科】

① 単元テストの CBT 化：単元テストをコンピュータベースドテスト（CBT）形式で実施した。これにより、記述問題を含めた採点業務の一部を AI で自動化・効率化し、教員の評価業務の負担軽減を目指す取組を行った。

【総合的な学習の時間】

① AI リテラシー教育：ICT 教育専門員による講座を通じて、生成 AI を効果的に活用するためのプロンプト（指示・命令）の工夫など、実践的なスキルを学んだ。

② 情報収集とファクトチェック：調べ学習において、生成 AI を情報収集のツールの一つとして活用した。同時に、AI が生成する情報には誤りが含まれる可能性があることを前提とし、情報の発信者、発信時期、



内容の妥当性などを複数の情報源と比較・検討する「ファクトチェック」の重要性を徹底して指導した。

(2) 校務利用における実践

① **議事録作成**：会議の録音データから AI を用いて議事録の草案を作成することで、手作業による文字起こしの時間を約90%削減することに成功した。これにより、従来は記録に専念していた教員が会議の議論そのものに集中できるという質的な効果も生まれた。

② **会議資料・週案の作成**：各種会議資料の原案作成や、教員の週ごとの指導計画（週案）のデジタル管理に AI を活用し、資料作成や計画立案にかかる準備時間の短縮を図った。

③ **その他の校務効率化**：学校便りの記事作成、クラウドサービスを活用した資料共有、部活動の指導計画のデジタル化など、日常的な校務の多岐にわたる場面で AI を活用し、業務全体の効率化を推進した。

(3) 地域・保護者・小学校との連携の実践

昨年度、市内行幸小学校と合同で「ICT サロン」の場を設け、保護者や地域住民の方々に生成 AI をはじめとする ICT 活用の実践を体験していただく機会を創出した。これにより、教育活動への理解を深め、より強固な協力関係を築いた。



4. 成果と課題

(1) 主な成果

① **校務の大幅な効率化と教員の働き方改革**：文書作成や情報整理といった定型的な業務が大幅に効率化された。これは単なる時間短縮に留まらず、教員の業務負担感を軽減し、生徒との対話や教材研究といった、より本質的な教育活動に注力するための時間を創出するという大きな価値を生み出した。この時間的・精神的な余裕は、個々の生徒の学習進捗に応じた個別最適化された指導計画の策定や、本校の研究主題である「対話的な学び」を促進するための新たな授業設計を生み出すことが期待される。

② **生徒の学習活動における新たな可能性**：生徒からのアンケートでは、生成 AI の活用に対して多くの肯定的な意見が多かった。これらのフィードバックは、生成 AI が学習の新たなパートナーとなり得る可能性

を示唆していると感じている。

生成 AI が個別の疑問に即応することで生徒の学習における自律性を高め、探究活動を深化させる一助となったことが伺える。特に、生徒が単に生成 AI の利便性を認識するだけでなく、その技術的な限界もあることを理解し、プロンプトの工夫といった改善策を主体的に考察する姿勢が見られたことは、本研究における大きな成果であった。

(2) 明らかになった課題

① **ICT 活用率の格差**：学校評価アンケートの結果、教職員の約3割が ICT を「活用していない」と回答しており、教員間での活用スキルや意識に差があることが明らかとなった。全教職員への普及とスキルの底上げが急務である。

② **実践事例の共有不足**：個々の教員による優れた実践事例が、組織全体で十分に共有され、横展開される仕組みが未だ確立されていない。

③ **ファクトチェック能力の不足**：生成 AI が提示する情報を鵜呑みにしてしまう傾向が見られた。情報の真偽を批判的に吟味し、複数の情報源を基に判断するファクトチェックの習慣化を、情報リテラシー教育の中核として徹底する必要がある。これには、活動の前後で生成 AI の特性と限界を指導する「事前事後指導」の徹底が不可欠である。

④ **タイピング技能の習熟度**：タブレット端末を思考のツールとして円滑に活用するための基礎となる、正確かつ迅速なタイピング技能の向上が求められる。

⑤ **利用ルールの明確化**：生徒が安全かつ効果的に AI を利用できるよう、校内における利用制限やガイドラインを、技術の進展や生徒の実態に合わせて継続的に見直していく必要がある。

5. まとめと今後の展望

本校の取組は、まだ道半ばである。しかし、生成 AI という新しい技術がもたらす無限の可能性を最大限に引き出し、それを教育の質の向上に繋げていくことは、私たちの責務であると確信している。今後も各教科および総合的な学習の時間のカリキュラムに体系的に組み込み、情報社会を生き抜くための実践的な能力を育成し、試行錯誤を重ねながら、未来社会を主体的に拓く生徒たちの育成に、全校体制で邁進していく所存である。

令和7年度 教育研究助成事業（学校対象）募集要項

1	令和7年度	学校課題研究助成事業	164
2	令和7年度	環境教育支援事業	166
3	令和7年度	国際理解教育支援事業	167
4	令和7年度	キャリア教育支援事業	168
5	令和7年度	防災教育支援事業	169
6	令和7年度	ICT活用教育支援事業	170

令和7年度 学校課題研究助成事業

1 主 催

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部（以下「当支部」という。）

2 趣 旨

本県の学校における教育実践を奨励するために、教育上有意義な研究・実践に取り組んでいる学校を対象に、申請に基づき審査・選考の上、助成金を贈呈します。

本事業は、教育の充実・発展に意欲的に取り組まれる学校を積極的に支援して、学校教育の振興に寄与することを目的とします。

3 申請要件

2の趣旨に沿って、研究・実践を行っている埼玉県内の小・中・高・特別支援学校等を対象とします。

なお、「学校課題研究助成事業」の他に、「環境教育支援事業」・「国際理解教育支援事業」・「キャリア教育支援事業」・「防災教育支援事業」・「ICT活用支援事業」から1つ申請することが可能です。（1学校につき、2事業申請が可能。）ただし、2事業申請する場合、下記の点にご注意ください。

- ・2事業共に、同じ研究テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・別内容でお申込みください。（例：学校課題研究助成事業と環境教育支援事業を同じ研究テーマ・内容で申請は不可。）
- ・1事業に2つの研究テーマ・内容で申請はできません。（例：学校課題研究助成事業に2つの研究テーマで申請は不可）

※令和6年度に「学校課題研究助成事業」で助成を受けた学校も申請可能です。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

※助成の対象にならないものは下記のとおりです。

- ①営利目的又は営利につながる可能性の大きいもの②他の機関からの委託によるもの③既に終了しているもの

4 申請手続

別紙「助成申請書」に、「活動計画書」（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P.21参照）を添付して提出してください。「助成金の使途」について、具体的な内容を申請していただきます。

振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。PTAや後援会、個人名の口座は不可とします。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部HPに様式を掲載しておりますので、ダウンロードして作成ください。記入例（P.18～P.19）を参考に作成ください。

（様式ダウンロード先 URL：<https://www.kyoko.or.jp/business/research.html>）

5 申請期間 令和7年4月4日（金）～ 令和7年5月30日（金）17:00まで（厳守）

※消印有効ではありません。必着です。

6 提出方法 郵送・宅配便の配送業者による提出 ※当支部への持参は受付不可

（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。締切日の週に発送する際は、普通郵便では届かない場合がありますので、速達や日時指定サービス等のご利用をお勧めします。）

7 提出先・お問い合わせ先

〒330-0063 さいたま市浦和区高砂3-12-24

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部 教育研究助成係

TEL：048-822-7554

8 審査・選考及び助成

（1）提出された「助成申請書」及び「活動計画書」により、当支部の教育振興事業選考委員会が6月下旬に審査・選考を行います。選考後、当支部幹事会の議を経て支部長が対象校を決定します。

（2）選考基準

「令和7年度 教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（P.22）を基に審査・選考します。

- (3) 審査・選考の上、10万円を10校程度、6万円を40校程度、4万円を100校程度、3万円を850校程度、計1000校程度に研究助成金を9月下旬に助成します。
- (4) 助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が7月中旬から決定通知書をお届けします。
- (5) 助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いします。

9 助成を受けた学校の義務（報告）

- (1) 助成を受けた学校は、研究・実践活動の成果を、「活動成果報告書」（所定様式）に研究・実践活動の集録等の資料を添えてご報告いただきます。その際、「助成金の使途」についても具体的に報告をお願いします。「活動成果報告書」は、当支部 HP に様式を掲載しておりますので、ダウンロードして作成ください。記入例（P.20）を参考に作成ください。
- (2) 提出期日 令和8年2月27日（金）17:00まで ※当支部必着（厳守）
※「活動成果報告書」の提出が無い場合には、令和8年度のすべての教育研究助成事業に申請できないことがあります。
- (3) 提出方法 郵送・宅配便の配送業者による提出 ※当支部への持参は受付不可
- (4) 提出された「活動計画書」、「活動成果報告書」等は、当支部が公表できるものとします。

10 その他

- (1) 個人情報の取扱いについて
 - ①助成申請書等に記入された個人情報は、選考及び選考結果の通知のために使用します。
 - ②助成が決定した場合は、助成申請書に記入された助成対象団体の団体名、助成対象テーマ及び助成金額や贈呈式等の模様を、ホームページ、広報紙等で公表することがあります。
- (2) 助成の対象とならない経費について
 - ①講師への手土産、内部講師への謝金、スタッフの人件費等
ただし、外部講師への謝金は支出可とします。
 - ②教師専用として利用するパソコン、プリンター、タブレット端末等汎用性のある機器の購入
ただし、助成額の範囲内で、教育研究活動の教材・教具に使用される場合に限り、汎用性のある機器等（パソコン、プリンター、タブレット端末等）は支出可とします。
 - ③懇親会時の飲食費等
ただし、研究活動に直接関わる昼食時の飲食費並びに少額の物品購入費や消耗品費（用紙代や文房具等）は、必要最小限度として認めます。
 - ④研究活動と直接関わりのない旅費・交通費
ただし、外部講師の交通費や当該学校（団体）の研究活動と直接関わる場合の旅費・交通費は支出可とします（全国大会への参加旅費も支出可）。
 - ⑤研究活動との関連が希薄な講習会費・会議室使用料・物品購入費等
- (3) 領収書の保管のお願い
助成金を使用する際は、必ず領収書を取り、学校で1年間保管してください。
（領収書は学校名で取得してください。領収書の日付は令和7年度内とし、その翌年度末まで保管してください。）
- (4) その他注意事項
 - ①提出された書類等は返却しません。
 - ②助成申請書等の内容について、面談や問い合わせを行うことがあります。
 - ③万一、故意の虚偽記載や研究倫理上の問題等が認められた場合は、当該申請は無効とし、以降の申請は受け付けられません。
 - ④選考結果の情報及び採否の理由についての問い合わせには回答しません。
 - ⑤助成が決定した事業については、研究活動の進捗を確認することがあります。
 - ⑥助成後、対象外費用を使用した場合や、提出書類（助成申請書や助成後に提出する成果報告書等）に不備・不正等があった場合は、助成金を返金していただくことがあります。
 - ⑦各学校等において、論文等により助成事業の成果を発表する場合には、当支部から助成を受けて行った研究の成果であることを、次の（例）のように記載していただくようお願いします。
（例）「本研究にあたり、公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部から令和7年度教育研究助成事業の助成金の贈呈を受けました。」

令和7年度 環境教育支援事業

1 主 催

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部（以下「当支部」という。）

2 趣 旨

今日、地球温暖化に伴う気候変動や、人々の活動によって生じる大気汚染・海洋汚染などの環境問題に直面しています。このことを踏まえ、学校教育においても持続可能な開発のための教育（ESD）が多くの学校で行われ、具体的な取組が見られるようになってきています。

そこで、SDGsの視点なども生かしながら、環境教育や自然体験活動等に関する研究・実践活動を、継続的かつ積極的に行っており、その活動が今後の教育の充実・発展に特に期待できる学校を支援し、更なる教育の振興に寄与することを目的とします。

3 申請要件

2の趣旨に沿って、環境教育に関する研究・実践を行っている学校を対象とします。

なお、「環境教育支援事業」の他に、「学校課題研究助成事業」・「国際理解教育支援事業」・「キャリア教育支援事業」・「防災教育支援事業」・「ICT活用支援事業」から1つ申請することが可能です。（1学校につき、2事業申請が可能。）ただし、2事業申請する場合、下記の点にご注意ください。

・2事業共に、同じ研究テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・別内容でお申込みください。（例：環境教育支援事業と学校課題研究助成事業を同じ研究テーマ・内容で申請は不可。）

・1事業に2つの研究テーマ・内容で申請はできません。（例：環境教育支援事業に2つの研究テーマで申請は不可）

※令和6年度に「環境教育支援事業」で助成を受けた学校も申請可能です。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

※助成の対象にならないものは下記のとおりです。

①営利目的又は営利につながる可能性の大きいもの②他の機関からの委託によるもの③既に終了しているもの

4 申請手続

別紙「助成申請書」に、「活動計画書」（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P.21参照）を添付して提出してください。「助成金の使途」について、具体的な内容を申請していただきます。振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。PTAや後援会、個人名の口座は不可とします。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部HPに様式を掲載しておりますので、ダウンロードして作成ください。記入例（P.18～P.19）を参考に作成ください。

（様式ダウンロード先 URL：<https://www.kyoko.or.jp/business/research.html>）

5 申請期間

令和7年4月4日（金）～ 令和7年5月30日（金）17:00まで（厳守）
※消印有効ではありません。必着です。

6 提出方法

郵送・宅配便の配送業者による提出 ※当支部への持参は受付不可
（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。締切日の週に発送する際は、普通郵便では届かない場合がありますので、速達や日時指定サービス等のご利用をお勧めします。）

7 提出先・お問い合わせ先

〒330-0063 さいたま市浦和区高砂3-12-24
公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部 教育研究助成係
TEL：048-822-7554

8 審査・選考及び助成

（1）提出された「助成申請書」及び「活動計画書」により、当支部の教育振興事業選考委員会が6月下旬に審査・選考を行います。選考後、当支部幹事会の議を経て支部長が対象校を決定します。

（2）選考基準

「令和7年度 教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（P.22）を基に審査・選考します。

（3）審査・選考の上、10万円を5校程度、6万円を20校程度、4万円を60校程度、3万円を365校程度、計450校程度に研究助成金を9月下旬に助成します。

（4）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が7月中旬から決定通知書をお届けします。

（5）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いします。

「9 助成を受けた学校の義務（報告）」～「10 その他」については「学校課題研究助成事業」に同じ

令和7年度 国際理解教育支援事業

1 主 催

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部（以下「当支部」という。）

2 趣 旨

今日、経済・社会・文化など様々な分野でグローバル化が進んでいます。相互理解・交流を図り、「多文化共生の理念」を育んでいくことは重要な課題の一つとなっています。

今後、学校教育においては、国際社会の中で日本人としての自覚を持ち、児童生徒が主体的に生きていく上で必要な資質や能力を育成するための国際理解教育の必要性が高まっています。

そこで、国際交流・国際理解教育の推進に関して、その研究・実践が児童生徒の異文化理解、コミュニケーション能力の育成、グローバル人材の育成などに成果を上げている学校を支援し、国際理解教育の更なる振興に寄与することを目的とします。

3 申請要件

2の趣旨に沿って、国際理解教育に関する研究・実践している学校を対象とします。

なお、「国際理解教育支援事業」の他に、「学校課題研究助成事業」・「環境教育支援事業」・「キャリア教育支援事業」・「防災教育支援事業」・「ICT活用支援事業」から1つ申請することが可能です。（1学校につき、2事業申請が可能。）ただし、2事業申請する場合、下記の点にご注意ください。

・2事業共に、同じ研究テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・別内容でお申込みください。（例：国際理解教育支援事業と学校課題研究助成事業を同じ研究テーマ・内容で申請は不可。）

・1事業に2つの研究テーマ・内容で申請はできません。（例：国際理解教育支援事業に2つの研究テーマで申請は不可）

※令和6年度に「国際理解教育支援事業」で助成を受けた学校も申請可能です。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

※助成の対象にならないものは下記のとおりです。

①営利目的又は営利につながる可能性の大きいもの②他の機関からの委託によるもの③既に終了しているもの

4 申請手続

別紙「助成申請書」に、「活動計画書」（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P.21参照）を添付して提出してください。「助成金の使途」について、具体的な内容を申請していただきます。振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。PTAや後援会、個人名の口座は不可とします。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部HPに様式を掲載しておりますので、ダウンロードして作成ください。記入例（P.18～P.19）を参考に作成ください。

（様式ダウンロード先 URL：<https://www.kyoko.or.jp/business/research.html>）

5 申請期間

令和7年4月4日（金）～ 令和7年5月30日（金）17:00まで（厳守）

※消印有効ではありません。必着です。

6 提出方法

郵送・宅配便の配送業者による提出 ※当支部への持参は受付不可

（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。締切日の週に発送する際は、普通郵便では届かない場合がありますので、速達や日時指定サービス等のご利用をお勧めします。）

7 提出先・お問い合わせ先

〒330-0063 さいたま市浦和区高砂3-12-24

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部 教育研究助成係

TEL：048-822-7554

8 審査・選考及び助成

（1）提出された「助成申請書」及び「活動計画書」により、当支部の教育振興事業選考委員会が6月下旬に審査・選考を行います。選考後、当支部幹事会の議を経て支部長が対象校を決定します。

（2）選考基準

「令和7年度 教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（P.22）を基に審査・選考します。

（3）審査・選考の上、10万円を1校程度、6万円を5校程度、4万円を10校程度、3万円を55校程度、計70校程度に研究助成金を9月下旬に助成します。

（4）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が7月中旬から決定通知書をお届けします。

（5）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いいたします。

「9 助成を受けた学校の義務（報告）」～「10 その他」については「学校課題研究助成事業」に同じ

令和7年度 キャリア教育支援事業

1 主 催

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部（以下「当支部」という。）

2 趣 旨

近年、子どもたちの育つ社会環境の変化に加え、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等を背景として、若者は働くことへの不安を抱えたまま社会に出ることで、就業への適応に難しさを感じているといわれています。

そこで、児童生徒が意欲を持って日々の学校生活に取り組み、自己肯定感を高めるとともに、主体的に進路を選択・決定できる能力やしっかりとした勤労観、職業観を身に付け、社会的・職業的に自立していくことができるよう、キャリア教育の推進に積極的に取り組んでいる学校を支援することを目的とします。

3 申請要件

2の趣旨に沿って、キャリア教育に関する研究・実践している学校を対象とします。

なお、「キャリア教育支援事業」の他に、「学校課題研究助成事業」・「環境教育支援事業」・「国際理解教育支援事業」・「防災教育支援事業」・「ICT活用支援事業」から1つ申請することが可能です。（1学校につき、2事業申請が可能。）ただし、2事業申請する場合、下記の点にご注意ください。

・2事業共に、同じ研究テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・別内容でお申込みください。（例：キャリア教育支援事業と学校課題研究助成事業を同じ研究テーマ・内容で申請は不可。）

・1事業に2つの研究テーマ・内容で申請はできません。（例：キャリア教育支援事業に2つの研究テーマで申請は不可）

※令和6年度に「キャリア教育支援事業」で助成を受けた学校も申請可能です。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

※助成の対象にならないものは下記のとおりです。

①営利目的又は営利につながる可能性の大きいもの②他の機関からの委託によるもの③既に終了しているもの

4 申請手続

別紙「助成申請書」に、「活動計画書」（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P.21参照）を添付して提出してください。「助成金の使途」について、具体的な内容を申請していただきます。振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。PTAや後援会、個人名の口座は不可とします。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部HPに様式を掲載しておりますので、ダウンロードして作成ください。記入例（P.18～P.19）を参考に作成ください。

（様式ダウンロード先 URL：<https://www.kyoko.or.jp/business/research.html>）

5 申請期間

令和7年4月4日（金）～ 令和7年5月30日（金）17:00まで（厳守）

※消印有効ではありません。必着です。

6 提出方法

郵送・宅配便の配送業者による提出 ※当支部への持参は受付不可

（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。締切日の週に発送する際は、普通郵便では届かない場合がありますので、速達や日時指定サービス等のご利用をお勧めします。）

7 提出先・お問い合わせ先

〒330-0063 さいたま市浦和区高砂3-12-24

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部 教育研究助成係

TEL：048-822-7554

8 審査・選考及び助成

（1）提出された「助成申請書」及び「活動計画書」により、当支部の教育振興事業選考委員会が6月下旬に審査・選考を行います。選考後、当支部幹事会の議を経て支部長が対象校を決定します。

（2）選考基準

「令和7年度 教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（P.22）を基に審査・選考します。

（3）審査・選考の上、10万円を1校程度、6万円を5校程度、4万円を15校程度、3万円を110校程度、計130校程度に研究助成金を9月下旬に助成します。

（4）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が7月中旬から決定通知書をお届けします。

（5）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いいたします。

「9 助成を受けた学校の義務（報告）」～「10 その他」については「学校課題研究助成事業」に同じ

令和7年度 防災教育支援事業

1 主 催

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部（以下「当支部」という。）

2 趣 旨

東日本大震災や熊本地震を経て、令和6年1月には能登半島地震、9月には能登半島豪雨も発生し、改めて防災について真剣に考えなければならない時代を迎えています。また、遠くない将来には首都直下型地震、南海トラフ地震などの大規模災害の発生も予測されています。さらに、気候変動等の影響により、台風や豪雨災害などの気象災害の頻発化・激甚化が見られるようになってきています。

今日、学校教育においては、自らの命は自らが守る意識や知識、災害時に率先して避難し、余力があれば周囲の人を助ける主体的な態度を身に付けることは極めて重要であり、防災教育の一層の充実を図る必要があります。

そこで、家庭や地域、関係機関等と連携して、実践的な防災教育の推進に積極的に取り組んでいる学校を支援することを目的とします。

3 申請要件

2の趣旨に沿って、防災教育に関する研究・実践を行っている学校を対象とします。

なお、「防災教育支援事業」の他に、「学校課題研究助成事業」・「環境教育支援事業」・「国際理解教育支援事業」・「キャリア教育支援事業」・「ICT活用支援事業」から1つ申請することが可能です。（1学校につき、2事業申請が可能。）ただし、2事業申請する場合、下記の点にご注意ください。

・2事業共に、同じ研究テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・別内容でお申込みください。

（例：防災教育支援事業と学校課題研究助成事業を同じ研究テーマ・内容で申請は不可。）

・1事業に2つの研究テーマ・内容で申請はできません。（例：防災教育支援事業に2つの研究テーマで申請は不可）

※令和6年度に「防災教育支援事業」で助成を受けた学校も申請可能です。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

※助成の対象にならないものは下記のとおりです。

①営利目的又は営利につながる可能性の大きいもの②他の機関からの委託によるもの③既に終了しているもの

4 申請手続

別紙「助成申請書」に、「活動計画書」（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P.21参照）を添付して提出してください。「助成金の使途」について、具体的な内容を申請していただきます。振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。PTAや後援会、個人名の口座は不可とします。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部HPに様式を掲載しておりますので、ダウンロードして作成ください。記入例（P.18～P.19）を参考に作成ください。

（様式ダウンロード先 URL：<https://www.kyoko.or.jp/business/research.html>）

5 申請期間

令和7年4月4日（金）～ 令和7年5月30日（金）17:00まで（厳守）

※消印有効ではありません。必着です。

6 提出方法

郵送・宅配便の配送業者による提出 ※当支部への持参は受付不可

（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。締切日の週に発送する際は、普通郵便では届かない場合がありますので、速達や日時指定サービス等のご利用をお勧めします。）

7 提出先・お問い合わせ先

〒330-0063 さいたま市浦和区高砂3-12-24

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部 教育研究助成係

TEL：048-822-7554

8 審査・選考及び助成

（1）提出された「助成申請書」及び「活動計画書」により、当支部の教育振興事業選考委員会が6月下旬に審査・選考を行います。選考後、当支部幹事会の議を経て支部長が対象校を決定します。

（2）選考基準

「令和7年度 教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（P.22）を基に審査・選考します。

（3）審査・選考の上、10万円を1校程度、6万円を5校程度、4万円を15校程度、3万円を110校程度、計130校程度に研究助成金を9月下旬に助成します。

（4）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が7月中旬から決定通知書をお届けします。

（5）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いいたします。

「9 助成を受けた学校の義務（報告）」～「10 その他」については「学校課題研究助成事業」に同じ

令和7年度 ICT 活用教育支援事業

1 主 催

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部（以下「当支部」という。）

2 趣 旨

今日、人工知能（AI）等の技術が教育や学びの在り方に革新をもたらすことが考えられます。

日常生活でICT（情報通信技術）を利用することが当たり前になっている子どもたちは、情報を主体的に選択・活用する力や、正しい情報を判断する力を身に付けることが重要となっています。

そこで、ICT活用教育に関する研究・実践活動に積極的に取り組んでおり、その活動が、今後の教育の充実・発展に向け期待できる学校を支援し、更なる教育の振興に寄与することを目的とします。

3 申請要件

2の趣旨に沿って、ICT活用教育に関する研究・実践を行っている学校を対象とします。

なお、「ICT活用支援事業」の他に、「学校課題研究助成事業」・「環境教育支援事業」・「国際理解教育支援事業」・「キャリア教育支援事業」・「防災教育支援事業」から1つ申請することが可能です。（1学校につき、2事業申請が可能。）ただし、2事業申請する場合、下記の点にご注意ください。

・2事業共に、同じ研究テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・別内容でお申込みください。

（例：ICT活用教育支援事業と学校課題研究助成事業を同じ研究テーマ・内容で申請は不可。）

・1事業に2つの研究テーマ・内容で申請はできません。（例：ICT活用教育支援事業に2つの研究テーマで申請は不可）

※令和6年度に「ICT活用教育支援事業」で助成を受けた学校も申請可能です。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

※助成の対象にならないものは下記のとおりです。

①営利目的又は営利につながる可能性の大きいもの②他の機関からの委託によるもの③既に終了しているもの

4 申請手続

別紙「助成申請書」に、「活動計画書」（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P.21参照）を添付して提出してください。「助成金の使途」について、具体的な内容を申請していただきます。振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。PTAや後援会、個人名の口座は不可とします。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部HPに様式を掲載しておりますので、ダウンロードして作成ください。記入例（P.18～P.19）を参考に作成ください。

（様式ダウンロード先 URL：<https://www.kyoko.or.jp/business/research.html>）

5 申請期間

令和7年4月4日（金）～ 令和7年5月30日（金）17:00まで（厳守）

※消印有効ではありません。必着です。

6 提出方法

郵送・宅配便の配送業者による提出 ※当支部への持参は受付不可

（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。締切日の週に発送する際は、普通郵便では届かない場合がありますので、速達や日時指定サービス等のご利用をお勧めします。）

7 提出先・お問い合わせ先

〒330-0063 さいたま市浦和区高砂3-12-24

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部 教育研究助成係

TEL：048-822-7554

8 審査・選考及び助成

（1）提出された「助成申請書」及び「活動計画書」により、当支部の教育振興事業選考委員会が6月下旬に審査・選考を行います。選考後、当支部幹事会の議を経て支部長が対象校を決定します。

（2）選考基準

「令和7年度 教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（P.22）を基に審査・選考します。

（3）審査・選考の上、10万円を5校程度、6万円を15校程度、4万円を40校程度、3万円を270校程度、計330校程度に研究助成金を9月下旬に助成します。

（4）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が7月中旬から決定通知書をお届けします。

（5）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いします。

「9 助成を受けた学校の義務（報告）」～「10 その他」については「学校課題研究助成事業」に同じ

後記

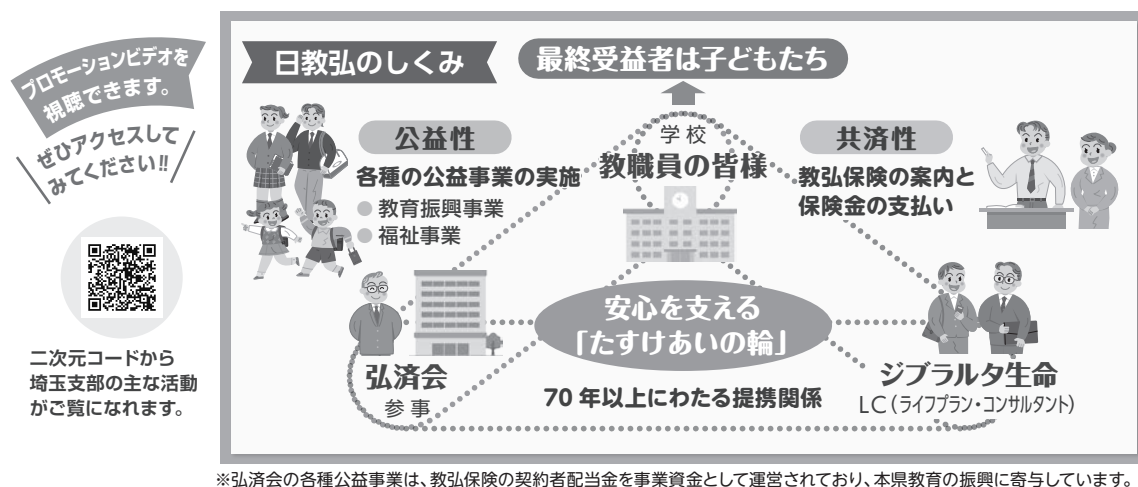
埼玉県内の各学校は、教育活動の充実に向け日々努力を傾注され、多くの成果を上げています。

当支部は、永年にわたり学校の教育実践活動を側面から支援するために、教育研究助成事業の充実・拡充に努めてまいりました。近年の取組としては、平成27年度に、創立60周年記念事業として「ICT活用教育支援事業」を新設し、平成28年度には「自然体験活動支援事業」を「環境教育支援事業」に統合しました。また、平成29年度からは、学校における優れた教育実践を共有することをねらいとして「『学び合い・高め合い』支援事業」を新設、令和4年度からは、この「『学び合い・高め合い』支援事業」を学校研究助成事業に再編・統合し「学校課題研究助成事業」として、教育研究助成事業全体を6つの支援事業にまとめ、一層の充実を図ってきました。

令和7年度も本県教育の振興への寄与を目的として、優れた研究・実践を行う73校の成果報告をまとめ、「研究・実践成果報告集14」として刊行いたします。

刊行にあたり、日々の教育実践でご多用の中、ご報告をまとめていただきました各学校の皆様へ深く感謝申し上げます。

- ※ 紙幅の都合上、各校の報告で使われている教育プログラム等の名称・略称については、特に解説を設けてありません。また、引用されている図表が鮮明でないことがあります。ご容赦いただきますようお願いいたします。



研究・実践成果報告集14

令和8年3月1日発行

編集・発行
公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部
さいたま市浦和区高砂3-12-24
電話 048-822-7551(代)

印刷 関東図書株式会社